大学生の友人関係における親密化過程と大学生活の適応感に関する研究

－大学４年間における追跡的研究と回想的調査面接による検討－

渡辺　舞

北星学園大学大学院社会福祉学研究科

博士学位論文

目次

第１章　青年期の友人関係における親密化過程研究の理論的背景

第１節　本章の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２節　青年期の友人関係の特徴に関する先行研究・・・・・1
(1)　青年期の友人関係全般に関する研究・・・・・・・・・・・1
(1)-1　青年期に友人関係の重要性と機能
(1)-2　友人関係への期待とサポート
(1)-3　青年期の友人関係における発達的変化と性差
(1)-4　青年期の友人関係における同性友人関係と異性友人関係
(2)　青年期の同性友人関係の特徴に関する研究・・・・・・・・6
(2)-1　複数で構成される友人関係
(2)-2　友人関係での親密性
(2)-3　友人関係における感情
(2)-4　友人関係における活動・行動面
(2)-5　友人関係における関係認知
(2)-6　現代青年の友人関係の特徴
(2)-7　大学入学後の新友人と旧友人における友人関係
第３節　青年期の友人関係における親密化過程に関する先行研究・・・・14
(1)　友人関係の親密化過程に関する先行研究・・・・・・・・14
(1)-1　段階理論における親密化過程研究
(1)-2　関係性の初期分化における親密化過程研究
(2)　親密化過程に影響を及ぼす要因・・・・・・・・・・・・・17
(3)　友人関係研究及び親密化過程研究における研究手法・・・19
第４節　友人関係が大学適応感に及ぼす影響に関する先行研究・・・・21
(1)　大学入学への移行と適応感に関する研究・・・・・・・・21
(1)-1　大学生活と適応感に関する視点
(1)-2　大学入学への移行で生じる変化
(2)　大学適応感に関する研究・・・・・・・・・・・・・・・・24
(2)-1　適応及び適応感に関する概念
(2)-2　大学適応感の測定
(2)-3　大学適応感に関する性差
(3)　友人関係が大学適応感に及ぼす影響・・・・・・・・・・26
第５節　本章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

第 2 章　本論文の目的・構成

第 1 節　問題の所在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第 2 節　本論文の目的と構成・・・・・・・・・・・・・・・・・33
(1)　本論文の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
(2)　本論文の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

第 3 章　研究 1　大学生の新旧友人関係に関する追跡的研究

第 1 節　研究 1 の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第 2 節　新友人と旧友人における友人関係の追跡的検討・・・39
(1)　目的と仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
(2)　方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
　(2)-1　調査協力者
　(2)-2　調査時期
　(2)-3　質問紙の内容
(3)　結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
　(3)-1　親密度得点の算出と「対人感情」「関係認知」「対人行動」の因子構造の検討
　(3)-2　新友人と旧友人に対する親密度、および「対人感情」「二者関係認知」「対人行動」の各評定平均値の推移
　(3)-3　新友人と旧友人に対する親密度、および「対人感情」「二者関係認知」「対人行動」の潜在曲線モデルによる検討
(4)　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
　(4)-1　対人感情・関係認知・対人行動の因子構造と性差
　(4)-2　親密度・対人感情・関係認知・対人行動の新旧友人関係の推移
　(4)-3　親密度・対人感情・関係認知・対人行動の新旧友人関係の推移と影響関係の検討
　(4)-4　仮説の検証
第 3 節　友人関係期待における新旧友人の比較検討・・・・・64
(1)　目的と仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
(2)　方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
　(2)-1　調査協力者
　(2)-2　調査時期
　(2)-3　質問紙の内容
(3)　結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
　(3)-1　新友人と旧友人における友人関係期待の差異
　(3)-2　新友人と旧友人における友人関係期待の認知構造の

検討
(4) 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
(4)-1 新旧人に対する友人関係期待
(4)-2 仮説の検証
第4節 研究1の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
第5節 本章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70

第4章 研究2 大学生の一番親しい友人の選択に関する追跡的研究

第1節 研究2の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
第2節 友人選択が友人関係の評定に及ぼす影響の検討・・・72
(1) 目的と仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
(2) 方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
(2)-1 調査協力者
(2)-2 調査時期
(2)-3 質問紙の内容
(3) 結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
(3)-1 一番親しい友人の選択状況
(3)-2 各調査時点間の友人選択による友人への各評定推移の検討
(3)-3 5回の調査時点における友人選択パターンによる検討
(4) 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
(4)-1 新友人の友人選択状況の推移
(4)-2 友人選択よる親密さの程度、「対人感情」「関係認知」「対人行動」の時点間の推移
(4)-3 友人選択グループ群による親密さの程度、「対人感情」「関係認知」「対人行動」の時点間の推移
(4)-4 仮説の検証
第3節 友人選択に関わる要因の検討・・・・・・・・・・・・93
(1) 目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
(2) 方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
(2)-1 調査協力者
(2)-2 調査時期
(2)-3 質問紙の内容
(3) 結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
(3)-1 友人選択に関わる要因の検討
(4) 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
第4節 大学4年間の追跡的研究による友人選択の検討・・・97
(1) 目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97

(2)　方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
(2)-1　調査協力者
(2)-2　調査時期
(2)-3　手続き
(3)　結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
(3)-1　友人選択状況
(3)-2　友人選択過程の状況
(4)　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
第5節　研究2の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
第6節　本章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103

第5章　研究3　回想的調査面接による大学生の友人関係の親密化過程に関する研究

第1節　研究3の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
第2節　回想的調査面接法の検討・・・・・・・・・・・・・・106
(1)　目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
(2)　方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
(2)-1　調査協力者
(2)-2　調査時期
(2)-3　手続き
(3)　結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
(3)-1　面接調査に使用する質問項目の検討
(4)　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・109
第3節　回想的調査面接による親密化過程の類型化の検討・・110
(1)　目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
(2)　方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
(2)-1　調査協力者
(2)-2　調査時期
(2)-3　手続き
(3)　結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
(3)-1　回想的調査面接における親密化過程の分類
(3)-2　親密化過程の分類
(4)　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
第4節　回想的調査面接による親密化過程の類型化の適用・・116
(1)　目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・116
(2)　方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・116
(2)-1　調査協力者
(2)-2　調査時期
(2)-3　手続き

(2)-4　質問紙の内容
(3)　結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
(3)-1　協力者の友人選択と選択した友人との出会いの状況
(3)-2　親密化過程の分類
(3)-3　親密化過程の各類型の特徴
(4)　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・124
第5節　研究3の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・126
第6節　本章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・129

第6章　研究4　大学生の友人関係における親密化過程の様相が大学生活の適応感に及ぼす影響に関する検討

第1節　研究4の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・131
第2節　大学生活に関する適応感に関する項目の収集と尺度の作成・・・・131
(1)　目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・131
(2)　方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・132
(2)-1　調査協力者
(2)-2　調査時期
(2)-3　項目選定の手続き
(2)-4　質問紙の内容
(3)　結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・133
(3)-1　大学生活に関する適応感項目の因子構造の検討
(3)-2　大学生活に関する適応感項目とGHQとの関連
(3)-3　大学適応感項目の選定
(4)　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
第3節　大学生の友人関係における親密化過程と適応感に関する検討（量的データによる検討）・・136
(1)　目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・136
(2)　方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・136
(2)-1　調査協力者
(2)-2　調査時期
(2)-3　面接調査の手続き
(2)-4　質問紙の内容
(3)　結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・137
(3)-1　各時点における適応感項目の一次元性の検討
(3)-2　友人に対する評定の推移と大学適応感との関連に関する検討
(3)-3　一番親しい友人の選択（新友人・旧友人）が大学適応感に及ぼす影響

(3)-4　新友人の友人選択が大学適応感に及ぼす影響
(3)-5　回想的調査面接による親密化過程が大学適応感に及ぼす影響
(4)　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・144
第4節　大学生の友人関係における親密化過程と適応感に関する検討（質的データによる検討）・・147
(1)　目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・147
(2)　方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・147
(2)-1　調査協力者
(2)-2　調査時期
(2)-3　面接調査の手続き
(2)-4　質問紙の内容
(3)　結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・147
(3)-1　適応感得点による協力者の選定過程
(3)-2　現在の適応感高群上位5名における親密化過程の発話と適応感
(3)-3　入学時の適応感高群上位5名における親密化過程の発話と適応感
(3)-4　現在の適応感抵群上位6名における親密化過程の発話と適応感
(3)-5　入学時の適応感抵群上位5名における親密化過程の発話と適応感
(4)　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165
第5節　研究4の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・167
第6節　本章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・170

第7章　総括と今後の課題

第1節　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・172
(1)　大学生の新旧友人関係に関する追跡的検討・・・・・・・172
(2)　新友人の友人選択過程に関する追跡的検討・・・・・・・173
(3)　回想的調査面接による大学生の友人関係の親密化過程・・175
(4)　大学生の友人関係における親密化過程の様相が大学生活の適応感に及ぼす影響・・・・・・・・・・・・・178
第2節　本論文の意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・179
第3節　今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・181

第8章　要約

第1節　要約・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・185

(1)　青年期の友人関係における親密化過程研究
　　の理論的背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・185
(2)　本論文の目的・構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・186
(3)　研究1　大学生の新旧友人関係に関する追跡的研究・・・187
(4)　研究2　大学生の一番親しい友人選択に関する
　　追跡的研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・187
(5)　研究3　回想的調査面接による大学生の友人関係の
　　親密化過程に関する研究・・・・・・・・・・・・・188
(6)　研究4　大学生の友人関係における親密化過程の様相が
　　大学生活の適応感に及ぼす影響に関する検討・・189
(7)総括と今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・189
第2節　おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・190

引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・192

資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・206
A　研究1で使用した質問紙（全調査共通項目）
B　第1回目調査～5回目調査別・新旧友人別対人感情の因子構造
C　第1回目調査～5回目調査別・新旧友人別二者関係認知の
　因子構造
D　第1回目調査～5回目調査別・新旧友人別対人行動の因子構造
E　研究1友人関係期待の測定に使用した質問紙（第4回目調査）
F　回想的調査面接の類型の判定事例（１）
G　回想的調査面接の類型の判定事例（２）
H　面接調査に関する同意書
I　二者関係専心型（Ⅰ型）の事例
J　グループ関係維持型（Ⅱ型）の事例
K　二者中心グループ関係維持型（Ⅲ型）の事例
L　グループ関係変動型（Ⅳ型）の事例
M　二者中心グループ関係変動型（Ⅴ型）の事例
N　二者先行グループ関係変動型（Ⅵ型）の事例
O　二者先行中心グループ関係変動型（Ⅶ型）の事例

第 1 章
青年期の友人関係における親密化過程研究の理論的背景

第 1 節　本章の目的

本章では、青年期にとって重要な対人関係の一つである友人関係の特徴、友人関係の親密化過程、さらに友人関係が適応感に及ぼす影響を明らかにした先行研究を概観し、本研究の理論的背景を明らかにすることを目的とする。

第 2 節　青年期の友人関係の特徴に関する先行研究

広辞苑によると「友人・友達」とは親しく交わっている人を指す。また、社会心理学用語辞典によると友人関係（friendship）とは、互いが博愛と親密感で結合されている関係であり、職場の同僚、親族の関係とは異なり、全く任意の関係であるとされている（木村,1987）。人は生まれたときから、さまざまな対人関係の中で、生活をしている。児童期までの生活の中心が家庭であるのに対し、青年期では、それまでの児童期と比べ、家庭と徐々に距離を置き、親から心理的に独立し、社会や文化の影響をより能動的に受ける時期である（宮下,1995)。したがって友人関係における関係の構築および関係の継続に関する観点についても、児童期で重要な関係である親子関係とは違い、任意であり自発的である故に友人と親密になっていく過程の検討は青年にとって重要な意味を持つと考えられる。本節では、第 1 に青年期の友人関係全般について重要性と意義について、第 2 に青年期の友人関係の中でも同性友人関係の特徴について論じていく。さらに青年期の中でも高校から大学へ移行する際の友人関係について、先行研究を概観し、青年期の友人関係研究の理論的背景について検討していく。

(1)　青年期の友人関係全般に関する研究

(1)-1　青年期に友人関係の重要性と機能

青年期に友人関係を持つことの重要性について様々な指摘がある。

宮下（1995)は青年にとって友人の意味という観点から次のような3点を指摘している。まず第1に自分の不安や悩みを打ち明けることにより情緒的な安定感が得られること、第2に、自己を客観的に見つめることができるということ、第3に人間関係が学べるということである。すなわち友人関係では対等な関係であるが故に、楽しいことだけでなく、辛いことやトラブルを避けることはできない。しかしながらそのような状況を経験することで人間として、して良いことと悪いこと、人に対する思いやりや配慮の心を学べるという点に重要な意味が存在するといえる。また友人関係と恋愛関係は共に個人の意思によって選び築かれる関係であるが、Rands&Levinger(1979)によると、特に友人関係は、他の個人的関係よりも対等的で、形式ばらない関係であると述べている。遠矢(1996)も同様に、友人関係はお互いの立場の「対等性」、関係構築の「自発性」、お互いが影響しあう「相互的互恵性」に特徴付けられた関係といえると指摘した上で、個人次第でいくらでも拡充可能で柔軟性があるが、一方で脆い側面も備えていることを指摘した。例えば、佐野・黒石(2006)は、友人との競争場面の実験に参加した協力者に、相手（友人）に対する感情や認知を面接調査で検討したところ、親しい友人を想定した群で競争を経験することによって、関係の崩壊への懸念や相手に対する不安感情を報告した。すなわち、現代の友人関係では、相手との葛藤を経験するような場面は、その関係に悪影響を予測し、「脆さ」を感じる可能性がある。

また、友人関係の脆さについて「関係解消」に注目した研究(本田,2007)では、友人関係は恋人関係と同様に青年期の重要な対人関係であるにもかかわらず、友人関係の関係解消に焦点を絞った研究が少ないことを指摘し、友人関係解消経験が友人関係の満足度や孤独感に及ぼす検討を行った。その結果、協力者の約45%が親しい友人との関係解消を経験していた。すなわち、青年が友人関係でポジティブな側面だけでなく、葛藤や辛さを経験していることを示す結果である。またその解消経験の直後の感情には、否定的な側面もあるが、肯定的な感情も生起することが明らかになった。これらの結果は、友人関係の親密化のプロセスにも解消経験が影響を与える可能性がある。さらに男性のみ、解消経験で生じた否定的な感情が、現在の友人関係の満足感を低め、孤独感を高める結果を示した。この結果について、本田(2007)は女性の方が、辛い出来事を経験した時にうける周りからのサポートが多いこと(福岡・橋本,1997)を指摘した知見から、男性のみで、関係解消経験の影響が残ったものと考察している。

一方松井（1990）は友人関係の機能として、友人関係が個人の心理的健康や発達、行動に与える影響に注目し、3つの機能を指摘し

ている。第1に友人の関わりによって青年が様々な不安や問題を解消し、ストレスを発散する「安定化機能」、第2に家族以外の他者との付き合い方のスキルについて友人関係を通して学習する「社会的スキルの学習機能」、第3に青年が見習い、自分もそうなりたいと思う手本、発達的なモデルとしての「モデル機能」である。また、Maeda&Ritchie(2003)は友人関係の概念について、日本とアメリカの青年について Cole&Bradac(1996)の友人関係の概念に関する指標を使用し比較している。その結果、文化を超えた共通の概念として「一緒にいることを楽しむこと」、「自分を理解してくれること」が見出され、一方で日本の青年に特徴的なカテゴリーとして「いい意味でのライバル」、「対等に他者を扱うこと」「関係における快適さ（気楽な関係・長い時間を一緒に過ごす人)」に関する概念が存在することを指摘した。すなわち友人関係の機能や概念を概観すると、日本の青年にとって友人が存在することは、自己の成長、情緒的安定、人間関係のルール習得等の様々な側面に影響を与えていることがうかがえる。

(1)-2　友人関係への期待とサポート

現代の青年は友人関係において、相手に対してどのような期待があるのだろうか。Frankel(1990)は青年期前期の仲間関係の友人に対して求めるものには、感情的サポートや援助があることを指摘している。和田(1993)は La gaipa(1979)による友人関係期待の項目を一部修正し検討している。その結果、友人に対する期待として青年期では、友人に対して言いたいことが言い合える「真正さ」、「協力」すること、相手を「尊重」することを望んでおり、これらの期待が青年期の友人関係では重視される側面であることが伺える。また中学生・高校生・大学生を対象とした調査（和田,1996）では、「自己向上」「真正さ」は大学生で重視され、「共行動」は中学生でその期待が高いことが示されている。この結果について和田(1996)は青年期の友人関係の特徴について、児童期の「生活の友」の関係から青年期後期では「心の友」に変化していることを示すものだと考察している。この点に関連して、青年期の中でも大学生が友人から受けるサポートの重要性を指摘する多くの研究がある。嶋(1991)は、大学生にとって友人関係における心理的、問題解決、娯楽関連の様々なサポート源が重要であることを明らかにした。友人のソーシャル・サポートの効果が大学新入生の心理的適応に及ぼす影響に注目した福岡(2000・2007)は入学 6 カ月後の一時点による研究(福岡,2000)、および入学3か月後と9カ月後の縦断的研究(福岡,2007)の結果から、友人からのサポートが、青年の精神的健康を支える効果があることを示した。また、吉岡（2001）は友人関係に期待する

理想と現実のズレが少ないことが友人関係の満足感を高めること、また梅本(1988)は、友人関係への期待で重視している側面と現実の親しい友人が期待当てはまる人物であることを指摘している。以上のように青年が友人関係に期待するものに注目し、期待やサポートが友人関係に及ぼす影響や効果について様々な研究から指摘されてきた。

(1)-3　青年期の友人関係における発達的変化と性差

青年期の中でも中学生から大学生では、その成長過程の中で、友人関係の諸側面で変化することが明らかにされている。落合・佐藤（1996）や長沼・落合（1998）は、中学生・高校生・大学生を調査協力者とし、同性の友達とのつきあい方が年齢とともにどのように変化するのかを検討をしている。それによると青年期のはじめには「浅く広くかかわるつきあい方」が多くみられ、その付き合い方は年齢と共に減っていく。反対に「深く狭くかかわるつきあい方」は年齢が増すと多くなっていくことを明らかにしている。榎本（1999）は中学生・高校生・大学生を調査協力者とし、友人との関係について外面的な「活動的側面」と内面的な「感情的側面」の2側面から発達的な変化を明らかにしている。それによると、活動的側面において、男性では、友人と遊ぶ関係からお互いを尊重する関係に変化し、女性では、友人との類似性に重点を置いた関係から、他者を入れない絆の強い関係を経て、お互いを尊重する関係に変化することを明らかにした。一方で感情的側面に関しては発達的変化があまり見られないと報告している。さらに「欲求の側面」の発達的変化については、互いの個性を尊重する欲求は学校段階が進むにつれて高まることを明らかにしている（榎本,2000)。

青年期の友人関係では、その発達的変化とともに性差が存在することが様々な研究から明らかになっている。和田(1993)によると、大学生を対象とした調査の中で、友人関係の中で友人に望むものでは性差があることを指摘している。男性では、女性よりも一緒に行動するという「共行動」を重視し、女性では男性よりも悩みを打ち明けるといった「自己開示」や互いに甘えられるといった「相互依存」を重視するという。さらに、女性の方が恐怖、不安、幸福、平静な状態にあるときにそのような情動の状態を相手に開示するという。また、前述の友人関係の発達的変化を明らかにした榎本(1999)も、発達的変化が見出された活動的側面において、男女差があることを指摘している。男性では、中高生で、一緒に行動する「共有行動」が主であり、女性では中学生では仲がいいことを確認しあう「親密確認行動」、高校生では他者を入れない絆で関係を作る「閉鎖的行動」という行動が主であるが、大学生になると男女ともに互いの相

違点を認め合い、尊重しあう「相互理解活動」変化していく。つまり、大学生の段階におけるまでの行動に差があるという。また、感情的側面では、発達的変化はあまり認められなかったが、男性では、ライバル意識や葛藤が女子よりも強く、女性では信頼・安定や不安・懸念が男性よりも強く感じていることを確認した。さらに榎本(2000)による欲求との関連の研究では、欲求は全般的に女性が男性より高く、友人との共有・協調の関係の中で互いに求めるものが強いという特徴があるという。

(1)-4　青年期の友人関係における同性友人関係と異性友人関係

友人関係では、異性友人と同性友人の両方が存在するが、その特徴には差異があることが明らかにされてきた。高坂(2010)は、同性友人と異性友人に対する関係期待について性別に検討している。その結果、男性の異性友人および同性友人と女性における異性友人では、「積極的交流（一緒にいて楽しい存在）」を強く望んでいるのに対し、女性では、同性友人に対しては、「積極的交流」だけでなく「信頼・支援（困ったときに頼れる存在）」も強く期待していた。すなわち、女性は男性よりも同性友人に対し助ける存在としての期待を持っていることが明らかになった。丹野・松井(2006) は、友人関係機能を「友人関係が、個人の内的適応に与える影響、および内的適応に果たしている役割」と定義し項目を選定しているが、本田(2008)は、丹野・松井(2006)の項目を使用し、異性関係と同性関係の友人関係機能について比較している。その結果、関係機能の全ての領域で、異性友人よりも同性友人の得点が高く、同性友人が、異性友人に比べて多くの友人関係機能を有していることを明らかにした。

また青木(1993)は、様々な領域の日本語版自己開示質問(ESDQ-44；榎本,1987)を使用して、大学生の身近な他者への役割を比較検討している。その結果、対話内容の全領域について、第1位で選択されているのは同性友人(男性 37.5%：女性 51.5%)であり、異性友人の選択率(男性 1.0%：女性 0.8%)は非常に低い。この結果は、相談相手として、大学生の多くが同性友人を選択している結果であり、同性友人と異性友人の役割の差異が明らかにされたものである。自己開示に関連して高木浩人(2006)は大学生の自己開示と孤独感の関連について、自己開示相手が異性友人・同性友人であることが孤独感を減少させる要因として寄与していることを明らかにした。また、同性友人と異性友人では、自己開示内容に差異があることも示し、その役割の差異があることも示した。

異性友人関係の発達的変化について、大井・宮本(2009)は、中学生・高校生・大学生の比較を行っている。大学生は、異性友人関係との行動面が中学・高校生よりも有意にその頻度が増していること

を示し、大学という自由な環境の中で異性友人とのかかわりが増えていると指摘した。その一方で、大学生では中学生よりも全般的な異性関係に対する不安や緊張感が増すことも示されており、異性友人との関係について、同性友人とは異なるアンビバレントな側面が抽出されている。

以上の先行研究から、中学・高校とは違い、自由な環境にいる大学生にとって異性友人が重要な対人関係の一つであることはうかがえる。しかしながら、上記の先行研究で指摘したように両者には質の違いが見出されていることから、本邦の友人関係研究の多くの知見が同性友人に限定している(和田,1993・榎本,1999・2000他)。本論文についても同性友人のみを研究対象と限定する。したがって以下の内容は主として同性友人に取り扱った研究に限定し、論じていく。

(2) 青年期の同性友人関係の特徴に関する研究

(2)-1 複数で構成される友人関係

先述のとおり、友人関係の特徴は恋人関係とは違い関係を拡充することが可能である（遠矢,1996)。すなわち、青年期の友人関係が複数の対人関係で構成されることが予測される。友人関係研究では、一番親しい友人との1対1の関係性にとどまらず、サークル内の友人関係やクラス（ゼミ・学部学科）の友人関係といった集団としての友人関係にも注目する視点が求められる。青年期の恋愛関係と友人関係の親密化過程を縦断的調査で比較した研究（多川・吉田,2002)では、友人関係よりも青年期の恋愛関係の影響力の強さを示唆したが、この考察として多川ら(2002)は、恋愛関係では対象となる人物との二者関係が非常に重要であるのに対し、友人関係では二者関係以外の複数対人関係が影響しているためではないかと指摘している。松田（2000）によると友人関係は複数であるが故に、状況に応じて友人を選択することが可能となることを指摘し、現代青年の新しい友人関係のあり方であると指摘している。神山・清水(2005)は、友人イメージ法という投影法によって大学生の友人に対するイメージを捉える検討を行ったが、この手法では、最大5名の友人を想起することが協力者に求められるが、5人を想定したものが約5割であり、1人を想定した協力者は、141名中1名のみであった。内藤(2007)は同性の親友と同性の友人数をそれぞれ回答させているが、その結果、同性の親友の人数は平均で4.04人であり、同性の友人の人数は平均で40.45人であった。渡辺(2007a)も、大学1年生の調査協力者に同性の友人数を回答させたが、男性では45.14人、女性では54.27人の友人が存在すると回答している。友人関係は複数関係で構成さ

れるが故に、研究対象をどのように定義づけするかがに重要な視点となり、また親密さのレベルによってその意味づけが異なることが指摘されている（和田,1993；吉岡,2001）。複数友人関係を研究対象とすることは、データ収集の煩雑さから検討されることが少ないが、複数の友人関係を全体として捉え、形成過程を抽出する視点が望まれる。

(2)-2　友人関係での親密性

友人関係の親密性の捉え方にも研究者間に様々な見解がある。山中(1994）は、①友人に対してどの程度親しいと感じているか、②友人とどの程度関わっているのか、③友人のラベルとして「顔や名前を知っている程度」から「最も親しい同性の友人」までを7段階で評定させる 3 つの指標から、親密性を捉えている。下斗米(1990,1992a,1996,1999,2000)は、親密化過程を捉える段階として、「親友」「友達」「顔見知り」の3群を設定し、調査協力者にその段階を選択させることで親密性を捉えている。また行動面の指標から親密性を捉えようとする研究として、久保(1993)は RCI（Relationship Closeness Inventory）尺度を使用し、お互いに影響を及ぼす程度と頻度および2人で行う行動の多様性から親密性を捉える検討を行っている。

一方、友人関係における親密性を心理的距離という概念で捉えようとする研究（山口・土屋・藤本，1996；天貝,1996 藤井,2001a）では、心理的距離を二者間の親密度・親和性・新近感の度合いや程度を表す概念（山口・土屋・藤本，1996)、または、他者と親密さの程度と他者との融合の程度の両面から成り立つ概念（天貝,1996)、親密度度や依存度といった自己が他者との間で認知する心理的な距離(藤井,2004)であると説明している。心理的距離の測定方法としては、第1に、天貝(1996)・美山(2003)は、自分を中心として 9.5cm の線分の中で、相手の位置を投影させる方法、また山口ら(1996)はある特定の相手（例えば父親・母親）を1と規定した時に、調査対象を 10 段階評定のどこに位置するかを回答させる方法での測定している。第 2 に藤井(2001a)は、自由記述により、友人との心理的距離との取り方を収集し､その構造を明らかにしている｡その結果、心理的距離には相手との関係での「近い-遠い」･「柔軟さ-固定的」という2次元が存在することを明らかにした。

美山（2003）は、大学生活における友人関係における心理的距離は、大学入学後知り合った友人と学外での付き合いに発展すると、大学内のみの付き合いを続けている場合よりも相手との心理的距離が小さくなることから、親密度が高まることを示した。すなわち、大学生活の中での友人との親密性は、固定的なものではなく、時間

の経過の中で変動する様相をとらえる視点が望まれる。

(2)-3　友人関係における感情

対人感情とは、特定の他者に対して個人がもっている比較的持続的な感情傾向である。人に対する感情であるが、自己に対する感情や集団に愛する感情を含まず特定の他者に対する感情を指す（深田,1987）。また、齊藤(1985)は対人関係の相互作用過程において、相手の人に対して持っている感情傾向を対人感情と定義している。内田(1990)は青年が日常的に接する対人関係に向けられるまたは、関係の中で感じる個人の感情について、測定する対人関係尺度を開発した。この尺度は、肯定的感情として充実感・解放感・幸福感・連帯感、否定的感情として孤独感・疎外感・憂うつ感・焦りの感情から構成されている。この尺度に関しては、友人関係に関する感情に限定し、適用する検討もされている(加藤,2006)。また松田(2008)は、友人に対する不安感情が現実と理想の友人関係におけるズレに影響することを検討するために、多面的に友人に対する不安感情を測定する尺度を開発した。中高生を対象とした結果、友人に拒否されることの不安、グループ関係の輪を乱すことへの不安、グループ関係から離脱することへの不安が抽出され、全体的傾向として、不安感情が高いこと及び低いことは友人関係を積極的に築かず、中程度の不安を抱えた群での活発な友人関係の構築が確認された。

津村・大坊・林・今川（1984）は、対人関係において生起する感情項目 96 項目を収集し、対人感情の構造の検討を行っている。分析の結果、対人感情には、「受容－拒否」と「保護－依存」の 2 次元の構造があること、またクラスター分析によって、「反感」、「保護」、「甘え・依存」、「懸念」、「情愛」、「優越感」、「畏怖」、「負い目」、「一体感」、「尊敬」、「信頼」、「接近」の 12 個を見出している。さらに津村・大坊・林・今川（1985）は、対象人物として家族（父・母・祖父母・兄弟）、いとこ、大学の接触頻度の高い先生、高校 3 年生時の担任の先生、先輩、後輩、同性の友人、および異性の友人・恋人を対象として想定させ、これらの significant others に対する対人感情の構造として因子構造の検討を行っている。その結果、対人感情の構造として、「一体感・信頼」「保護・情愛」、「畏怖・尊敬・負い目」、「優越感・反感」の 4 因子を抽出している。また齊藤（1985・1990）は対人感情項目として「好意」、「慈悲」、「優越」、「軽蔑」、「嫌悪」、「恐怖」、「劣等」、「特別な感情のない人」を抽出している。さらに榎本（1999）は友人への感情的側面として、「信頼・安定」、「不安・懸念」、「独立」、「ライバル意識」、「葛藤」の 5 因子を抽出している。榎本(1999)と津村ら（1985）の significant others に限定した対人感情の共通点から、友人関係に特有の感情として、「信頼感・

安定感・一体感」といったような、友人に対するポジティブな感情と、友人関係の特徴が「対等性」や「自主性」であるが故に脆さを象徴する「葛藤・ライバル意識・負い目・優越感」等の友人関係に不安を感じるようなネガティブな感情も生起することが予想される。

また、測定項目の特徴として、榎本(1999)・松田(2008)の研究では、友人への感情の項目について、具体的な感情を伴う行動を示すと思われる項目も含まれていることが特徴である。一方、津村ら(1984 他)の項目では一般的な対人関係全般を対象としているため、具体的な文章ではなく、形容詞を使用した項目が選定されているのが特徴である。

(2)-4　友人関係における活動・行動面

友人関係において、さまざまな行動を共にすることがその関係の在り方に影響を与える研究が多く示されている。楽しみ喜びの活動において友人と一緒に多くの経験をすることは、友人関係における満足度を有意に高めること(Hays&Oxlay,1986;Jones,1991)、またHays(1989)は、親密な友人(Close friends)と親しい友人(Casual friends)との比較から、より親密な友人に対する相互作用の頻度が高いことを示している。また親しい友人に対しては、感情的及びインフォーマルなサポートを多く提供することも示した。

対人行動とは、特定の他者に対して個人が取る行動である(深田,1987)。今川・津村・大坊・林（1984・1985）は一般的行動として収集した項目 88 項目の因子構造の検討を行い、55 項目について「親和」､「優越」､「依存」､「支配」､「敵対」「拒否」､「服従」､「友好」､「礼儀」の 9 因子を抽出している。齊藤（1990）は対人行動を特定の他者に対して一定の対人感情を有する個人がその他者に対面した時、生じる行動と定義し､「支配的行動－服従的行動」と「親和的行動－拒否的行動」の 2 次元を基本とする対人行動の円環図式を提案し､「支配的」､「援助的」､「親和的」､「依存的」､「服従的」､「回避的」､「拒否的」､「攻撃的」の 8 つの行動に分類している。榎本（1999）は友人との活動的側面として自由記述の収集から、互いを尊重する「相互理解活動」､友人との類似性に重点を置いた「親密確認活動」､友人と遊ぶ行動である「共有行動」､他者を入れない絆を持つ「閉鎖的行動」の 4 因子を抽出している。また、友人関係の親密化過程の先行研究においても、行動面の指標を用いた研究がなされている。山中（1994）は予備調査において友人関係の行動的側面についてAltman＆Taylor（1973）の社会的浸透理論の「広さ」の領域として「Companionship」､「Communication」､「Consideration」､「Affection」の 4 領域を設定し､「深さ」の次元としてこれら 4 領域の項目を「顔見知り程度の友達（レベル 1)」､「会えば話をする程

度の友達（レベル 2)」、「ある程度親しい友達（レベル３）」、「最も親しい友達（レベル 4)」に分類する行動チェックリスト 102 項目を作成した。さらに石田（1998）は、友人関係の親密化に関連する行動の側面を抽出するために、大学に入学してから知り合った友人に対して行う行動として、その友人と出会ったときから現在に至るまでに行った行動として自由記述させ、抽出した 81 項目について因子構造による検討を行った。その結果「共行動」、「コミュニケーション」、「学習行動」の 3 因子を抽出している。項目に関する特徴として今川ら(1984 他)・齊藤(1990)の項目は、あらゆる対人関係にも生じうる一般的行動全般を収集しているのに対し、榎本(1999)・山中(1994)・石田(1998)の収集した項目は、青年期の友人関係でのみ該当すると考えられ､具体的行動を収集しているという特徴がある。

また、現代の友人の「希薄さ」や「表面的関係」の特徴から、崔・新井(1998)は友人に対し、ネガティブな感情表出を制御する頻度と友人関係満足感および精神的健康の関連について検討した。その結果、全体的傾向として、友人に対してネガティブな感情の表出を強く抑制すると、友人関係の満足感や精神的健康に望ましくない影響を与えることを示し、友人関係においてネガティブな感情をある程度行動面で示すことが､友人関係において必要であることを示した。すなわち、友人に対する行動面の指標として、ネガティブな側面も測定する視点が望まれる。

(2)-5　友人関係における関係認知

関係認知とは、個々の人間が自己を取り巻く他者との対人関係に対する認知構造である（林・今川・津村・大坊，1984；廣岡，1993）。林ら（1984）は、夫と妻、医者と患者、看守と囚人など全部で 60 の二者関係を取り上げ、関係性を示す特性語とその対語を両極として評定させ､「緊密な関係－表面的な関係」､「気楽な関係－緊張に満ちた関係」、「公的・課題志向的関係－私的情緒的関係」、「上下の関係－対等な関係」、「協調的関係－競合的関係」の 5 因子を抽出している。また significant others に限定した因子構造の検討では､「緊密な結合－表面的な結合」、「対等な関係－非対等な関係」、「競争的関係－協調的関係」、「情緒的結合－理性的結合」の 4 因子を抽出している（林・今川・津村・大坊，1985)。また、清水・大坊（2005）は関係性認知を｢人が関係性を認識してもつ認知的表象｣と定義し、この中には、関係の現在との状態や将来の予測なども含まれていると指摘し、恋愛関係の関係性認知として得られた「重要性」、「緊張感」、「不確実性」、「活発性」の各因子と関係評価の関連を検討している。その結果、関係性認知の「重要性」が関係への満足度、愛着度､重要度である関係評価の各項目と最も関連が強いことを示した。

さらに清水・金政・谷口（2006）は先述のRCI（久保,1993)を使用し、友人との接触頻度、行動の多様性（行動項目をチェックさせることで幅広さを測定)､友人から受ける影響度を測定した｡その結果、友人との多様な行動をより幅広く深く行った場合、友人との関係性認知が高く良好であるものに変化させることを示した。すなわち、関係認知は、先述の感情面や行動面と密接に関わることを示す結果である。

(2)-6　現代青年の友人関係の特徴

和田・林(2008)は1982年から2002年の20年間の同性友人関係の変化を比較検討し、同性友人に対する期待には変化がないが、2002年の友人関係では、20年前に比べ、友人との相互的行動が減り、友人と一緒にいる時の気分について緊張や回避の傾向が強いことを示した。藤井(2001b)は、同性友人関係では、孤独は避けたいが深くかかわることを避ける心理的距離が存在することを示した。橋本(1997)は青年における対人関係の理想的なスタイルとは､｢集団内でスムーズに関係を形成し、関係に積極的に関与しつつも、個人の価値観やプライバシーを侵害せず、葛藤は極力回避する」ことであることを示した。さらに近年、友人関係において表面的な円滑な関係を求める傾向（橋本,2000；岡田,1993・1995・2002；小塩，1998；上野・上瀬・松井・福富,1994）や友人関係において無関心である傾向(松永・岩元,2008；中園・野島,2003)が指摘されている。岡田（1993・1995）は、青年期の友人関係には互いの内面を開示することなく、傷つけないように接し、表面的で円滑な関係を築く傾向があることを指摘し、表面的な面白さを志向する「群れ関係群」・友人に気を使いながら接する｢気遣い関係群｣・深い関わり合いをさける「関係回避群」があることを示した。この結果は時代が移り行く中で友人関係のあり方が変化し、希薄化している傾向があることを示しているといえよう。その一方で理想的な友人関係については「本音で付き合うこと」を志向すること（松永・岩元,2008)、また岡田（1999）も現代青年は現実では希薄な関係を持ちながら、表面的な関係を肯定しているわけでなく、友人との内面的な関係を求めていることを示し、現代の特徴とされている関係性に現代青年が満足しているわけではないことを指摘している。また、齊藤・藤井(2009)は、現代の青年の友人関係の特徴である「表面的関係」と、また従来の友人関係の特徴である「内面的関係」の両面に注目し、2つの側面が充実感に及ぼす影響を検討している。その結果、友人との関係において「表面的」と「内面的」の両側面を認知している青年が存在し、この群における充実感が高かった。この群が果たして、適応的な友人関係を形成しているかの議論は残るものの、少なくとも

「表面的関係」が青年にとってネガティブな影響だけを与えるわけではないことを示すものである。現代社会における青年期の友人関係の特徴も捉えつつ、大学入学後の大学生がどのような友人関係を形成していくのかを検討していく必要がある。

(2)-7　大学入学後の新友人と旧友人における友人関係

先に述べたように、友人関係の特徴の一つは、複数の対人関係で構成されることだが、この点に関連して大学入学後に新たに形成される友人関係は、その以前に築いてきた友人関係の在り方を反映することが指摘されている。また新しい友人関係がスタートする際に、先行する関係が消滅するわけでなく、同時進行的に関係が存在することも多く、互いの関係がどのように推移していくのかの検討も重要な視点である。したがって、大学入学時の友人形成の検討の際に古くからの友人（以下旧友人とする）と新しい友人（以下新友人とする）との関わりのありようの検討する必要性が指摘されてきた(中村・浦,2000；和田,2001)。和田（2001）による入学 6 ヵ月後に行った調査の結果では、旧友人の方が新友人より親密であること、新友人に対しては身近な友人としての期待が現れること、また旧友人と新友人は相補的な機能を持っていることが明らかにされた。さらに多川(2006)は女子短大生を対象とし、新旧友人のとの関わりを、大学入学年の 5 月時点と 9 月時点の 2 回の調査で検討している。その結果、夏休み直後の調査においても旧友人との行動的な親密度は高く、少なくとも入学後 6 ヶ月程度では、友人関係で旧友人との関係の影響が強いことがうかがえる結果を示した。和田（2001）は大学 1・2 先生を対象とした調査において、新友人と旧友人の 2 名に対し先述の友人関係期待 10 項目を評価させている。その結果、新友人に対しては、旧友人よりも「情報」「協力」「共行動」を重視し、旧友人は新友人よりも「自己向上」「真正さ」「自己開示」を重視していることを明らかにした。故に大学生が旧友人と新友人に対して相補的な役割を期待していることを明らかにした。すなわち新旧友人には付き合い期間の差異があり親密さの程度にも差異がある。身近な存在で付き合い期間の浅い新友人に対しては、情報をくれることや自分との類似点を期待し、付き合いの長い旧友人にはより深い関係を期待している。それぞれの役割が存在することを示す結果である。以上の結果は、親密さの程度や付き合いの長さによって友人関係機能が異なることを示した結果ともいえる。この点に関連し、丹野(2007)は、友人関係機能を「接触頻度は高い友人」と「普段の接触頻度は低いが親密な友人」の差異を検討し、接触頻度の高い友人には、日常生活で行動を共有する機能を、また接触頻度の低いが親密な友人には安心感があり、長く持続する関係の機能があること

を示した。堀・島津(2005)は、大学生のソーシャルスキルが大学内の友人と大学外の友人へのサポート知覚に及ぼす影響を検討し、大学入学後の新入生では大学内の友人に対するサポート知覚において友人との親密さを維持し、強化するスキルが影響しているが、大学外の友人に対する有意な影響力を示さなかった。この結果の考察として、掘ら(2005)の調査協力者の多くが入学時に親元を離れるという居住状況と大学入学前の友人の場合には対人関係が成熟していることから、スキルが影響しなかったと説明している。以上の結果は、旧友人関係が、新友人関係を形成する段階及び関係が維持されている段階においても存在しうる関係であり、新友人とは異なった機能を有する関係であることがうかがえる。

また、旧友人関係から新友人関係への移行する視点に関する研究も存在する。ソーシャル・サポート提供の視点において大学入学後5月～6月には新環境のサポート者と旧環境のサポート者が融合する段階であること(古川・藤原・井上・石井,1983; Hays& Oxley,1986)、また飯島・川口・伊藤(1995)は1年生の6月には、新環境の同性・異性・先輩という関係にサポート対象を移行させていることを示した。一方で大学入学後もなお旧友人を強く思う感情は大学入学後の孤独感を高めることが示されている(Paul & Brier,2001)。また五十嵐・吉田(2003)は大学新入生の孤独感に与える影響について、新旧友人との関係性及び携帯メールの使用が及ぼす影響を検討し、入学後に知り合った友人へのメールの送信数が孤独感を低め、入学前の友人とのメールについて、重要であると認知することが孤独感を高めることを示した。これら結果から、大学入学後の新入生にとって、新しい環境での新しい対人関係を構築することが大学適応感に好ましい影響を与える可能性がある。大久保(2005)は、社会的スキルの能力が、大学入学直後の適応感には影響を示したが、夏休み後の測定では影響しなかった。この結果は、高校までに獲得されたスキルが、移行後の様々な環境変化には対応しきれないことを示すものである。石田(2003)は、大学入学後の友人ネットワーク変化として、新旧友人及び、大学内外の友人の友人を対象とし、大学入学1ヶ月・3か月月後の相互作用に頻度では大学内外の新友人が多いこと、大学1か月後に認知された旧友人の人数は3か月後においても減少しないことを示した。この結果は、大学入学直後の新友人との積極的な友人関係の形成がなされる一方で旧友人との安定した関係の継続を示すものである。さらに、高校から大学進学時の移行時における友人関係の縦断的調査(Bohnert, Aikins & Edidin, 2007)によると、移行 10 か月後では、協力者の半数が、新しい環境で出会った友人を親しい友人として選択した。一方で残りの半数は高校時代の友人が引き続き一番の友人であることを明らかにしている。また、新し

い友人を選択した群の友人関係における活動の頻度と広さが高まっていた。

以上のことから、複数友人関係をとらえる視点として、大学入学移行後に形成される友人関係と入学以前に形成された友人関係の在り方を考慮し、新しく形成される友人関係への影響を検討する視点が求められる。

第3節　青年期の友人関係における親密化過程に関する先行研究

親密化過程（close relationship process）とは、人と人が出会い互いに親しくなる過程である(松井,2005)。岡田(2008a)は友人関係場面で起こるイベントを自由記述で回答を求め、収集した。その結果、友人との再会、関係の形成、関係の親密化、活動の共有といった関係の親密化に関連するポジティブな感情と関連するイベントの他にも、友人に対しての印象の変化、関係の悪化や約束事の不履行という関係において、不快や不安の感情と関連するようなイベントも抽出された。この結果は友人関係の親密化が直線的に進行していくものではなく､複雑な過程が存在することを示唆するものである。

本節では､親密化過程において提唱されている「段階理論」と「関係性の初期分化現象」について、先行研究を概観し検討していく。さらに、友人関係研究および親密化過程の研究で使用される研究方法について先行研究の研究法を概観し、複数対人関係を特徴とする友人関係として親密化過程研究を検討する意義と研究手法について論じていく。

(1)　友人関係の親密化過程に関する先行研究

(1)-1　段階理論における親密化過程研究

親密化過程を説明する「段階理論（stage theory)」では、親密化の進展に伴い、段階を設定しその段階ごとに質的に異なる相互作用や行動がとられることを仮定している。

友人関係を中心に親密な関係の全般に関する親密化過程の代表的な段階理論としてまず第1に Altman＆Taylor（1973）の社会的浸透理論があげられる。この理論では、まず第1に対人関係の進展に関して「広さ（breadth)」と「深さ（depth)」という2次元を仮定し、対人関係が進展するにつれ、狭い領域での表面的な相互作用から広い領域での親密な相互作用へと段階的かつ系統的に進行していくことを仮定している。この理論では自己開示による関係発展をモ

デル化しており、未知の2人が自己開示を行い、またその領域を深めていることで2人の関係が親密化していくと説明している。第2に対人関係の進展は相互作用から予想される報酬とコストの量と質に大きく依存している。つまり、現在の評価と将来の予測が繰り返しなされ、それが好ましいものであれば、その関係は進展すると仮定するものである。

Levinger&Snock(1972)のモデルでは人と人が出会ってからの対人関係の発展段階として、2人がいかなる条件の下でより親しい関係になるかをその移行過程と移行を促進する要因を検討することに重点におき、4段階に分けている。レベル0の「相互的未知段階」では、お互い相手の存在に気づいていない段階、レベル1の「一方的気づき段階」はどちらか一方が気づき注目するようになる段階であり、対象人物の表面的な魅力が次の段階へと進む大きな要因となる。レベル2の「表面的接触段階」は、初めて2人が直接接触を持つ段階であり、挨拶などの表面的接触が行われる。レベル3の「相互的接触段階」で、2人の間に相互依存関係が生じる。この段階での2人の相互作用が深まる要因として価値観の共有、共感、同情などが必要であり、相互的接触段階はさらに浅い交わり（知り合い)、中程度の交わり（友人)、深い交わり（親友・恋人）の3段階に分けられているとされている。

本邦で段階理論を支持する下斗米（1992b）は、段階理論には自己開示、類似性と異質性の認知、役割行動の遂行の3点が重視されることを示し、「親密化過程の三位相説」を提唱している。下斗米（1996）は親密化過程とは、自己開示の交換を通して、当事者間の類似・異質性を認知すること、また現段階における課題解決に必要な役割行動を遂行するように期待し合い、さらに互いの相互依存性を高め影響力を増す過程であると定義付け､その検証を試みている。

第1に自己開示に関しては、下斗米（1992a）が各段階理論を概観し、関係がある段階を迎えると自己開示が互いの人物の情報交換の手段として重要である点で共通すると指摘している。また丹野・下斗米・松井（2005）によると自己開示量は親密になると様々な領域で増加することを明らかにし、中期段階では関係深化のために自己開示願望・自己開示義務が増加すること、後期段階では互いの類似点と相違点を認知する自己開示義務が増加することを明らかにした。第2に類似・異質性の認知に関して下斗米（1990）は親密度が深まるほど、態度や意見・恋愛・能力・人格・友人関係・身体や容姿に関して自己開示が高まること、その自己開示の高まりに伴い、態度や意見・趣味や嗜好・学業・友人関係・身体や容姿に関して類似・異質性認知も高まることを示した。第3に役割行動の遂行に関しては、下斗米（1996・1999・2000）が、友人関係における親密段階に

よって役割行動の遂行に関する差異を検討している。その結果親密化していく過程においてそれぞれの時期ごとに固有の課題が存在し、解決するための各役割行動度の期待度が変化すること（下斗米,1999)、顔見知り段階・友達段階に比べ、親友段階では、既存の役割行動を適切に遂行することが相対的に重要視されること、またそれぞれの段階において葛藤原因として顕在化されやすい役割行動と顕在化されにくい役割行動が存在することを明らかにしている（下斗米,2000)。

以上の結果から、段階理論を支持する先行研究では、各段階における課題や行動をこなすことが次の親密化する段階に進む条件とされていることが伺える。

(1)-2　関係性の初期分化における親密化過程研究

Berg & McQuinn（1986）は対人関係の親密化過程が段階的プロセスではなく、対人関係の親密化過程は、初期段階において後に親密になれる関係と表面的なままで終わる関係の分化が生じていると主張している。諸井(1986)は、大学新入生は4月~7月にかけて大学内での人間関係の形成を活発に行うことを指摘している。このように二者の親密化が関係の初期に決定されるとされる「関係性の初期分化現象（early differentiation of relatedness ; Berg &Clark, 1986)」に注目した研究では、親密な関係と表面的な関係の分化を関係の初期段階から二者を追跡する縦断的な研究（Berg, 1984 ; Hays, 1984,1985 ; 中村,1989 ; 山中,1994）によって明らかにしてきた。Berg（1984）は大学新入生の同性のルームメイトとの関係において、出会って2週間時点での関係の満足度が6カ月後の満足度や親密さを予期すること、中村（1989）は知り会って1ヶ月後の相手との相互作用の頻度が5か月後の相手との親密さを判別すること、山中(1994)は、友人との出会い1週間後のごく初期段階に注目し、出会いから2週間目には、関係の初期分化が生じていることを明らかにした。さらに、入学8ヶ月後でも初期分化が出会いから2週間後で予測可能であることが縦断的調査の中で明らかにされている（山中・廣岡, 1994)。各研究の測定時期により分化時期の差異は見られるものの、関係形成初期の友人関係のあり方がのちのちの関係に影響を与え､親しい友人関係を形成することを示すものである。

一方で貝瀬（1996）は同一調査協力者を対象として、友人に対する大学1年生から大学3年生における印象変容と親密度に注目して追跡的研究を行っている。その結果、分析対象者のうち7割が3年目までに入学当時の最も印象の良い友人を変化させていることを明らかにし、また大学3年生の時に、初期の印象の良かった友人を変化させていない群と印象の良い友人が変化した群では選択人物に対

する親密度には、差異がないことを示している。さらに渡辺（2007b）[1)]は、大学新入生を対象とし、入学後3ヶ月間に3回の質問紙調査を行ったが、その際対象友人を固定せず、各調査時点での最も親しい友人を選択させ評定させる手続きをとった。その結果、約45%の協力者が3回の調査で同じ友人を選択していた。つまりこの群では、3週間目の1番親しいという認知が3ヵ月後まで続いていた可能性があり、山中(1994)らの指摘した関係の初期分化の存在を示唆するものである。一方で渡辺(2007b)の結果からは、初期の印象より親しいと認知した友人が出現した調査協力者が約55%いるということも確認された。また、1-2回目調査時点間よりも2-3回目調査時点間で、同じ友人を選択した率が高まっており、入学後2、3ヶ月の間に、友人関係が安定してきている傾向も伺える。とはいえ、2回目から3回目にかけてなお、約33%が最も親しい友人を変えていたという事実は、少なくとも大学入学後2-3ヶ月の間に知り合った友人関係は、多くの場合、複数の友人関係の中で友人を選択している状況、また一番親しい友人が過程で変化するケースの存在を確認するものであった。また、内藤(2007)は、大学入学後知り合った人物に対して、知り合ってからの期間と親しくなってからの期間の両方を回答させる手法を採用している。その結果、知り合ってから親しくなるまでの期間には約7カ月の期間が存在していることを示した。

これらの先行研究の結果は、時間の経過の中で、初期の印象が良く、そのまま友人関係を継続させている場合と出会いの時期に好印象を持った人物よりも好意を持つ人物が出現する場合の2つの可能性を示唆するものといえよう。

(2)親密化過程に影響を及ぼす要因

友人関係の親密化過程研究では、第1に、居住状況や出会いの状況の偶発的要因がその親密化に関わる要因として検討されてきた。Newcomb（1961）は入寮生の親密化過程を入寮時から継続的に調査した研究の中で、入寮当初には部屋の近さなどの近接要因が影響をしていたことを指摘し、その後時間経過に伴い、類似した態度をもつもの同士が親しくなることを示している。また、大学入学直後に調査を行った糟谷（2005）・佐藤・菊池・畑山（2004）の友人関係形成の先行研究の中では、入学から4月下旬までの期間で友人形成が活発に行われ、「席の近さ」「入学ガイダンス・共通授業での出会い」など、偶発的要因の影響を受けることを明らかにしている。山中（1995）も親密化過程において「居住状況（下宿であること）」や「同じ授業の受講」が友人関係成立の契機となることを指摘している。

第2に、相手の魅力や自身の利便性が友人として選ぶ理由として検討されてきた。小塩(2002)は自己愛傾向と友人選択理由との関連を検討しているが､大学生が友人と親しくなった理由を分類すると、「相手の性格」、自分と近い存在であることを理由とする「近接」、利便性や援助をしてくれる存在を意味する「自己の利益」、相手の魅力的で尊敬できる「相手の能力」が抽出された。

第3に、友人に対する感情面や行動面といった相互作用的側面が友人関係の発展や継続に関わる要因として検討されてきた。内藤(2007)によると、関係を維持するためには接触頻度が重要であることが指摘されている。山中（1998）は入学式後の3日後に測定された関係の分化について好意度に関しては持続せず、行動面では持続したことを明らかにし、友人の親密化過程を内的な状態である認知・感情レベルと顕在している行動レベルでは、親密化で異なるプロセスが生じている可能性を示唆した。また女性では、出会ってから2週間のうちにあらゆる領域の行動を対象人物と行なうこと、男性では 1～2 週間に対象人物と一緒に活動や経験を共有することが友人と親密になるためには重要であるという性差を見出している（山中,1994)。前述の Hays(1984,1985)は、二者関係において共有行動、援助やサポートの提供、コミュニケーション、感情の4つの領域の推移を検討し、行動面や感情面の相互作用が、親しい関係に発展する重要な側面であることを指摘している。さらに関係の分化を予測する要因として、Berg（1984）は自己開示、対等性、一般的報酬の相互作用が影響すること、中村（1989）は、自己開示等の行動面の他にも、感情面や関係関与性もその判別に寄与することを明らかにした。また高木麻未(2006)は、友人関係の親密化過程の関係形成時と関係深化時に行わる行動を自由記述で収集している。その結果、形成時には、積極的に友人に話しかける行動と、相手から話しかけられるのを待つ消極的行動が多く抽出され、そのきっかけに差異があることを示した。また深化時には、会話することや行動を共にすることが多く抽出されたが、深化時の会話や行動の頻度が多い群の友人関係満足度が高いことを示した。すなわち、親密化過程において、友人関係で重視される相互の行動が変化する可能性を示している。Oswald, Clark & Kelly(2004)は、友人関係が始まり終わるまでの過程の中で、友人関係が維持されるために行われる行動の重要性を指摘し、尺度の開発と友人関係段階の差異を検討した。その結果友人関係において、その関係を維持する行動には､「積極的関わり」、「協力」、「自己開示」、「共有行動」の4因子が存在することを示し、親友段階の友人との行動が、親しい友人および知り合い程度の友人よりもその頻度が多く、ペアデータによる自己報告からは友人同士の行動の頻度について類似性が高いことが明らかにされた。

第4に山中（1996）は関係の初期分化に関する条件として個人差要因に注目し、個人の社会的スキル、信頼感等が友人との親密化過程に影響することを指摘している。また石田（1998,2003）は個人的要因としてシャイネスを取り上げ、シャイな人は親密化が進行しにくいことを明らかにした。

以上にように、これまでの親密化に及ぼす影響の検討では、居住状況・入学時の出会いの状況といったような環境的・偶発的要因、友人に対する感情面、行動頻度や自己開示等の二者の相互作用に関する要因、さらに、社会的スキル・シャイネス等の個人的特性要因、また友人の選択理由としては友人のパーソナリティや利便性による理由が示され、友人関係の形成・継続・維持に関わる要因が各研究の視点によって明らかにされてきた。これらの親密化過程に影響を及ぼす要因を検討してきた研究は、主として重要な1名の友人を対象としている特徴がある。

対象友人との相互作用が親密化に影響するという直接的要因に加えて、これまでの知見で明らかにされてきた生活環境面の指標、入学以前に形成された友人関係の在り方や入学時の状況の指標、個人差要因を検討するとともに、複数対人関係を対象とした新しく形成される友人関係の継続に関わる要因を検討する視点が求められる。

(3)　友人関係研究及び親密化過程研究における研究手法

友人関係研究や友人関係の親密化過程を明らかにしてきた研究の手法は、その多くが、質問紙法を使用している。その際、友人として「特定の個人」の特徴や協力者との関係の様相を明らかにするために1名を想起させる方法（山中, 1994）と友人関係の全般的な特徴を明らかにするために複数の友人関係全体を想定する方法（榎本, 1999；落合・佐藤,1995)、また相互の関係を明らかにするためにペアデータを使用した研究（Oswald, Clark & Kelly, 2004）に大別される。これらの量的な研究アプローチによって、現代の青年の友人関係の特徴やあり方が明らかにされてきたといえよう。先述のように多川・吉田（2002）は、友人関係では二者関係以外の対人関係が強く影響していることを指摘しているが、質問紙による手法では、複数の対人関係を網羅的にかつ継続的に把握することに限界があるといえよう。

一方、本邦での友人関係研究における質的研究では、難波(2005)が「仲間」の位置付けを友達・親友との比較から面接調査の発話によって明らかにしている。また水野（2004）は、青年期の協力者が信頼できる友人をどのようにとらえているのかをグラウンデッド・セオリー・アプローチを使用し面接調査の発話から検討した。さら

に大嶽(2007)は、女子中学生の学級集団に存在する1グループに注目し、対人関係の様相を面接調査から捉える試みを行っている。9人グループの協力者に対し、半構造化面接を実施したが、得られた逐語からは、友人関係が二者関係にとどまらず、複数の対人関係において個人の多様で複雑な認知が存在することが示された。また友人関係研究以外でも面接法を使用した研究がある。半澤(2002)は大学生活の意味付けの変容を捉えるために、大学新入生を対象に4回の縦断的面接調査を行っている。面接調査を採用した理由として、質問紙調査における研究者が設定した大学生活の意味づけのみならず、個人の文脈に基づく記述を抽出できると指摘している。橋本(1997)も同様の指摘から、面接法の有用性を説明している。

親密化過程研究における山中（1995・1998）の調査では、女性8名という小集団の中での入学3日後からの縦断的な調査の中で個々人が何を基準として友人選択を行い、その友人および、小集団内の構成員とのどのような関わりを行っているかを面接調査と好意度評定及び行動頻度により質的なアプローチを試みている。面接調査からは、関係のごく初期段階で特定との人とのインフォーマル・グループを形成していること、親しい人物と関係成立に関して何らかの類似性を理由としてあげており、将来の関係の親密可能性がごく初期段階に決定されてしまう可能性を示唆した。以上のように友人関係研究および親密化過程研究において、本邦では質的にアプローチした研究は少ないが、量的研究では捉えきれない詳細な描写を可能としてきた。質的研究では、協力者数の確保やその分析方法の煩雑さ、また結果における一般化や理論化の難しさという問題点を抱えているが、一方で、質的研究では現実に密着したいきいきとした情報を含んでいることが長所である（やまだ，2004)。先述の通り、友人関係は複数の対人関係の相互作用が重要であり、また、複数対人関係の親密化過程の詳細を明らかにするためにも質的アプローチは有用な手法であると考える。

具体的な有用性として、質的アプローチを導入することで、第1に一番親しい友人とその共通友人関係を同時に抽出できること、第2に過程の中で生じる相互作用について、量的な測定ではその抽出にはある程度の制約と限界が生じるが、質的なアプローチでは、自由度の大きい手法であるため、相互作用の質的な生き生きとした場面も抽出されることの2点が期待される。

第 4 節　友人関係が大学適応感に及ぼす影響に関する先行研究

近年大学生の不適応が、大きな問題となっている。大島(2007)は本邦の大学生における学生相談の傾向について、学生相談機関での相談が増加していること(大島・青木・駒米・楡木・山口,2007)、学生の多様化が進む中で、対応が難しいケースも多く報告されていることを示している。大学生が抱えるストレスの問題や精神的健康の維持・促進は大学にとっても重要な課題であり（西河・坂本,2005)、積極的な予防的アプローチや心理教育プログラムを導入する試みが増加している(及川・坂本,2007・2008)。また、小塩・桐山・願興寺(2006)は、1988 年から 2006 年度の大学新入生を対象に学校生活の悩みを調査し、2000 年以降の学生で、悩みを抱えているとの回答が増加し、特に 2005 年と 2006 年度の入学生では多かったことを明らかにした。悩みの内容別の検討のうち、対人関係の悩みでは、毎年家族に関する悩みは全体の 2%前後であるが、友人関係については、20～24%程度が悩みを抱え、恋愛関係についても 10～13%の学生が悩みを報告している。また、高井(2008)は、人間関係に関する悩みに限定し、大学生による調査を行い、全体の 3 割が友人関係の悩みを挙げていることを明らかにした。

本節では、第 1 に大学入学の移行期と大学適応感に関する知見、第 2 に学校適応感・大学適応感に関する研究、第 3 に友人関係と大学生活への適応感に関する研究を概観し、大学生を対象とした研究において適応感を扱う意義と友人関係が適応感に影響を与える知見について論じていく。

(1)　大学入学への移行と適応感に関する研究

(1)-1　大学生活と適応感に関する視点

南・山口（1992）によると青年にとって大学進学時には、大学生活という新しい環境に適応しつつ、対人関係においても大きな質的な変化や移行期を迎えることを指摘している。

半澤(2002)は大学生活への適応を考える視点として、大学生が大学生活に対しどのような意味づけを行うかに注目し、大学新入生の 4 月～7 月に 4 回の面接調査を行っている。その結果、大学生活への個人が重要と捉える側面は生活の中で変容していくものであり、その意味づけに対し、実際の行動に移行できるかが、大学生活への適応につながっていくことを示した。鶴田（2002）は大学生が学年よって、大学での過ごし方や人間関係が変化することに注目し「大学生活サイクル」の視点を提案している。これは、学年の移行に伴

う心理的課題を理解するために、大学生活を「入学期（入学後 1 年間）」、「中間期（大学 2－3 年）」「卒業期（卒業前 1 年間）」に区分し、それぞれの心理的特徴を比較検討している。その結果、全体的な心理的特徴として、第 1 に入学期には、大学入学後の新しい状況に立ち向かう課題が存在し、新しい生活に適応できない時には、過去のなじんだ習慣や古い友人関係への逃避が生じやすいことを指摘している。続いて中間期の生活が安定してきた段階では自分を見つめ、真の適応へと至る時期を迎える。さらに最終段階である卒業期には、卒業研究や就職など現実的な課題と学生生活のまとめと将来への不安から混乱が生じやすい時期であると指摘している。小嶋（1998）は中学・高校への進学とは違い、高校から大学への進学については、「新しい学生生活への移行」ばかりでなく、大学生活でもさまざまな出会い・経験・カリキュラムを通しての「新しい価値観への移行」、また卒業を控え就職・進学への「社会人への移行」へと環境的枠組みのなかでさまざまな選択が強いられることを指摘している。また、奥田・川上・坂田・佐久田(2010)は、大学 4 年間の大学生活充実度について、横断的データと縦断的データの両方から得られた知見から、その推移を検討した。その結果、4 回生で最も充実度が高まること、1-2 回生では、充実度がほとんど変化しないことが明らかにした。

この点に関連して、大学生の適応過程を検討するためは、大学生活の初期の様相にとどまらず、4 年間における過程を縦断的に検討する必要性が指摘されていることからも（安藤・廣岡・小川・坂本・吉田,2001；植村・小川・吉田,2001；吉田・橋本・安藤・植村,1999；奥田・川上・坂田・佐久田,2010)、大学 4 年間という大学生活全般への適応感を検討する必要がある。

(1)-2　大学入学への移行で生じる変化

青年期の中で高校を卒業する際には様々な進路の選択肢がある。大学進学や就職では生活環境にも大きな変化が生じ、友人関係にも影響を与える可能性がある。卒業、進学時には青年期の友人関係が大きく変化する可能性が指摘されている（Oswald & Clark, 2003；和田,2001)。山本（1992）は、ライフサイクルやライフコースの中で生起する変化の過程を「人生移行」と定義し、人生の出来事や移動等によって環境が変わることを「環境移行」と定義している。人生移行には入学・卒業・就職・結婚・退職等社会の大多数の人々が経験し、本人も予期している移行と不治の病における死の宣告や愛する人の死・災害など突発的に起こる出来事がある。後者は予期できない事態であるので、一般的に本人や周りに与えるインパクトも大きいといわれているが、前者のように予期できる移行であっても、

移行の前後では大きな変化が生じるので、個人にとっては衝撃が大きいこともあるといわれている。異なる環境への移行が新しい環境へうまく適応できるか、もしくは適応に失敗して何らかの不都合な事態を引き起こしてしまうかの分岐点であり、危機的な状況に陥る危険性を含んでいるといわれている。

和田（1992）は大学新入生の住居形態が孤独感に及ぼす影響を検討し、男性では自宅生よりも下宿生で孤独感を感じていることを明らかにした。高校時代までの友人と進路が違うために、疎遠になる可能性もあり、大学で新しい人間関係を築くことが重要となると考えられる。諸井(1986)は、下宿群が新環境の友人形成活動を活発に行うのに対し、自宅群では、入学以前の形成された友人関係を維持する傾向が示された。また大学進学ではないが、中高一貫校での高校入学時の内部進学生と外部入学生の友人選択を事例的に検討した研究では、外部入学生の友人選択は流動的であり、内部生では定着していることを示している（植村，2003)。また川上・坂田・佐久田・奥田(2004)は高校からの大学への内部進学生（内部生）と外部からの入学生（外部生）の比較から、外部生がより、新しい友人関係の構築に対して積極的であり、オリエンテーションの参加について、交友関係を形成する機会としての期待があったが、居住状況については、その差異が有意ではなかった。渡辺(2007a)の結果でも、大学1年生の居住環境は友人関係との諸側面には大きな影響を示さなかった。居住環境と友人関係に関する結果に一貫性がないことについては様々な要因が考えられる。例えば、大学の立地条件や、先述の通り内部進学者の人数構成によりその状況が大きく変動する可能性がある。したがって調査対象の地域特性を的確に把握した上で調査することが望まれる。

さらに近年、大学入学後のオリエンテーションの重要性が指摘されている(川上・坂田・佐久田・奥田,2004；西村・石崎,2008；奥田・川上・坂田・佐久田,2003；坂田・佐久田・奥田・川上,2007；佐久田・奥田・川上・坂田 2003・2008)。坂田ら（2007)・佐久田ら(2008)は、大学入学後に行われるオリエンテーションの効果は、単に友人関係を深める場としての役割だけでなく、大学及び所属学科への帰属感を高め、大学生活の充実度にも影響することを指摘した。このように青年が新しい環境にうまく適応するためには、友人関係の形成が大きな影響を与え、その契機として学校によるオリエンテーションの存在が大きいことを示すものである。

(2)　大学適応感に関する研究

(2)-1　適応及び適応感に関する概念

近年、大学新入生が高校から大学への移行に伴い、環境の変化が入学後の不適応の問題と関連することが指摘されている（丹羽,2005)。そのため、適応に関わる要因を検討した先行研究（東・浅川・古川・吉田,2002；水子・寺嵜・金光，1998；諸井,1986）は多数存在する。適応とは個体が物理的・社会的環境との間で様々な心身機能が円滑になされる関係を築いていく過程であり、個人と環境の関係を示す概念である(福島,1989；佐々木,1992)。不適応とはこのような環境と個体との調和関係が乱れた状態を指す（小林,2003)。小林(2003)は学校不適応を「児童・生徒と学校環境と合わないこと」と定義している。また近年は、学校不適応を広く捉え、学校生活の慢性的な不快感や心理的苦痛を感じている状態を指すようになってきている。適応感・不適応感は適応・不適応の概念について個人が感じる主観的なものとして捉えられている研究も存在する（谷井・上地,1994)。また大久保・青柳(2005)・石田(2009)は、「学校適応」という用語には、2 つの視点があることに注目している。第 1 に学校における環境における課題に対してどのように対処していくのか視点と第 2 にそれらの課題に対面した時の主観的な評価、認知、感情に対する視点である。石田(2009)は、中学生の学校適応について、後者の主観的な適応状態に視点をおいた多面的かつ簡便な学校適応感尺度を作成した。その結果、「友人関係」「学習関係」「学校全体」「教師関係」の 4 因子構造を見出している。以上のように、適応の概念の捉え方は多岐にわたっている。また、大学適応という概念について東・浅川・古川・吉田(2002)は「大学生の大学という環境が心理的調和にあって大学からの要請への適合と大学生の欲求や自発的・創造的な行動が、ともに実現される均衡状態」であると説明し、浅川・古川・竹原(2005)は「個人が積極的・能動的に大学環境に働きかけ、自発的・積極的に行動するとともに、大学からの要請への適合も行われること」であると説明している。

本研究の対象は大学生であるため、以降は大学生活における適応・適応感に限定し、大学生活への適応・適応感を測定する様々な尺度を先行研究から幅広く概観していく。

(2)-2　大学適応感の測定

東・浅川・古川・吉田（2002）は大学適応感の先述の定義に従い、Baker & Siryk（1984）の作成した FSA（Freshman Scale for Adjustment）を邦訳し大学生活適応感尺度を作成し、日本の女子大学生を対象に調査を行った。その結果、「他者からの評価」「学習意

欲」「対友人関係」「抑うつ感」「精神的疲労感」「対教師関係」の 6 因子構造であることを明らかにした。大久保・青柳（2003・2005）は、適応感について「個人が環境と適合していると意識していること」と定義し、先行研究における大学生活の適応感に関する尺度には、対人関係や学業などの要因の集合としての適応感を測定していることを指摘した。その上で、適応本来の意味である個人と環境の関係の視点からの尺度の検討を行い、「居心地の良さ」「課題・目的の存在」「被信頼・受容感」「劣等感のなさ」から構成される青年用適応感尺度を開発した。さらに亀岡(2006)は適応を「個人と環境の関係」を示す概念であると説明し、場所への愛着を環境への適応を示す「愛着感尺度」を開発している。また泰(2000)は居場所について物理的なスペースと心理的な状態の両方を含むものと定義している。古市・玉木(1994)学生生活の楽しさを測定する尺度として学校生活享受感尺度の作成を試みている。この尺度には全般的な「学校への楽しさ」を測定する項目が多く、中学校・高等学校と幅広く適用されているが(石本・久川・齊藤・上長・則定・日潟・森口,2009)、松尾・佐藤(2003)による大学生への適用も実現している。一方で藤井（1998）は大学生が学生生活において感じている不安を測定することが学校不適応の発見につながると指摘し、大学生活不安尺度を作成した。藤井(1998)は、大学生活不安尺度の作成に際し、1 年生から 4 年生の学生に対し、不安度を測定しているが、また 1 年時の不安度が 3・4 年生の時の不安度よりも高いことを示している。また、川上(2006)は藤井(1998)の大学生活不安尺度を使用し、女子大学生の新入生に対し、3 年間のデータを収集し比較しているが、その結果、大学生活における不安は、年度に関わらず安定して抽出されることを確認している。藤井(1998)が作成した大学生活不安尺度は、大学生活という特定の環境における主観的な不適応状態を意味する測度である。この尺度の充分な信頼性が確保され、妥当性も示されていることから、多くの研究において、この尺度が使用されている(川上,2006；水野・田積・炭谷・多胡,2007；西村・石崎,2008；小塩,2005a；田中・菅,2007・2009；山田,2006)。また、大学生活における適応を精神的健康の観点から測定する研究も多く存在する。佐久間・柴原・村上(2010)は大学生の学校適応過程について精神的健康度に関する指標を用いて検討した。その結果、入学時と 1 年次前期（7 月）の縦断的比較において、集中力の欠如や億劫さを示す情緒面の指標が、1 年次前期（7 月）に不安定な方向に得点されていることが明らかにした。この結果から、適応に至るまでのプロセスは直線的な推移ではないため、継時的な測定が必要であると述べている。

また、適応との関連がたびたび指摘される精神的健康度を指標と

し、精神健康調査票（General Health Questionnaire ；以下 GHQ と表記する）を使用し検討する研究は多数存在する(赤木・石垣・井上,2009；河村,2004；松永・岩元,2008；坂本・末木・反町,2008)。GHQ は主に精神的健康のスクリーニングを目的として開発された尺度であり、ストレス強度の評価や神経症の発見に有効とされている(Goldberg,1979)。GHQ は当初 60 項目からなる尺度として開発されたが、後に、30・28・12 項目の短縮版が開発され、個人や集団に対し、短時間にかつ簡便に測定可能である。

以上のように大学適応感に関してはその定義に従い、様々な側面からの測定がなされていることが明らかになった。この差異は研究目的に依存しており、適応感に関わる要因に応じた項目の採用もしくは、項目の選定が必要となるであろう。

(2)-3 大学適応感に関する性差

大学生や専門学校生の適応感に関する性差については、これまで多くの研究で女性の適応感が男性よりも高いことが示されている。例えば、大久保(2005)では、青年用適応感尺度について、男性よりも女性の方が、学校生活の居心地の良さや受け入れられている感覚を高く評定していた。佐藤・菊池・畑山(2004)は、全体的傾向として女性が男性よりも友人関係の満足度や、大学生活の楽しさといった大学への適応感が高いことを示した。高島・清水・五十嵐・平尾・中村(2003)・高島・五十嵐・平尾・清水・中村(2004)は、専門学校生の学校適応感の適応感の性差について検討し、高島・清水ら(2003)の 1 年時の測定では、女性の適応感は男性よりも高かったが、高島・五十嵐ら(2004)の 2 年時の測定では、性差がないことを示した。一方で、大学適応に関わる性差が見られない研究もある。諸井(1984)は女性の下宿群において男性よりも孤独感が低いことを示したが、2 年後の諸井(1986)の研究では性差は明らかにされなかった。また和田(1998)は、大学生のストレス対処に関する調査で、孤独感や精神的健康には性差が見られないことを指摘し、さらに藤井(1998)は大学生活不安尺度について、性差を検討している。その結果大学生活の不適応感には性差は見られないが、日常生活と自分への評価に関わる不安度が男性よりも女性の方が高かった。これらの結果から、全体的傾向では、女性の方が適応感を高く評定しているが、測定時期、測定内容により適応感に性差が示されない可能性もある。

(3) 友人関係が大学適応感に及ぼす影響

小嶋(1998)は大学生の面接から、大学生活への適応は、入学が高校時代の希望どおりだったという側面だけでなく、友人との関係や

新しい環境に対して積極的に対応できるかが大きく関わってくることを明らかにした。南・山口（1992）は大学入学という環境移行期において新しい環境にあった対人ネットワークを再構成することは、新しい環境での生活を適応的に過ごす上で重要であることを指摘している。また梅本（1992）は大学進学に見られる特有の環境変化の個人差に注目し、入学後早い時期に新しい人間関係は大学全般の印象や評価に関わりがあること、また自宅外の学生は入学後 1 人暮らすことへの開放感があり、友人の獲得ができた者は大学生活により肯定的なイメージを持っていることを明らかにした。一方で友人関係と不適応の関係に注目した研究も存在する。青年期の中学・高校の女学生を対象とした調査では、希薄的な友人関係は学校適応感に望ましくない影響を与えることを明らかにした(石本・久川・齊藤・上長・則定・日潟・守口,2009)。また橋本（2000）も大学生を対象とした調査から浅い関係を好み、気遣いをすることが精神的健康の低さや対人ストレスを高めることを明らかにした。すなわち、友人関係の不満足感や表面的で希薄な友人関係が形成され、その状態が維持されることは大学生活にとってマイナスの影響を与え、不適応をもたらすことが想定される。

先述とおり、松井（1990）は友人関係の機能として、「安定化機能」を指摘している。特に高校から大学への進学時には、青年にとって様々な環境の変化が生じるため、友人関係が環境の変化によって生じるストレスを緩和し、新環境への不安を取り除く重要な役割が存在する可能性がある。また鶴田(2002)の「大学生活のサイクル」の区分を友人関係に注目して概観すると、「入学期」には、新しい人間関係を構築する課題が存在し、「中間期」には、学生生活の中でいかに対人関係を広げ、深めることができるかの課題が存在し、「卒業期」には、研究室内における上下関係や卒業時の友人との別れが課題となることを指摘し、大学生活のサイクル内で、友人関係を中心とする対人関係に関する課題が変化することを示した。

神山・清水(2005)は投影的手法による友人イメージ法と質問紙調査による大学適応感尺度の関連を検討している。その結果、選択した最大 5 名までの友人のうち上位 3 位まで友人と大学適応感の関連が示されたことから、複数友人関係の存在が、大学適応感を促進することを示した。松永・岩元(2008)は現代青年の特徴である、友人関係に希薄的傾向のある「無関心群」や周りの友人との気遣いや深まりを保ちつつも、周りに影響されないことが特徴の「独立群」で、深い友人との付き合いを志向する「本音群」よりも、精神的健康度が低いことを示している。松尾・佐藤(2003)は、大学生を対象とし、古市ら（1994）の学校享受感尺度と友人関係認知及び教師関係認知との関連を検討し、友人関係認知と学校享受感には、有意な正の相

関がみられるが、教師関係認知との関連は見られなかった。同様に大久保(2005)も友人との関係認知が、適応感に影響を与えることを示唆した。鈴木・寺嵜・金光(1998)は友人関係の期待の高いことは友人関係の満足感の高さに影響すること、また友人関係の満足感が高いことは自尊心を高め、日常生活で感じる否定的な感情を低めることを明らかした。田口・盛・大谷（2004）も友人関係の満足度が高いことは学校で過ごす安堵感を高め、孤独感を低めることを示した。さらに、新入生の適応について、新しい環境での新しい友人関係における質的な側面が形成されることが大学生活への適応を高めることが面接調査からも明らかにされてきた(Buote, Pancer, Pratt, Adams, Lefcovich, Polivy & Wintrre, 2007)。すなわち、これらの先行研究から、大学生活が楽しい・満足している・充実していると感じる側面には、大学生が経験する様々な対人関係の中でも、友人関係のあり方が重要な側面として寄与することを示唆するものである。さらに、岡田(2008b)は親密な友人関係の形成・維持過程の動機モデルを提案している。友人関係を形成する動機付けは、友人関係の形成維持への影響があり、さらに、友人関係の形成・維持の段階で行われる友人関係行動（援助行動・自己開示）を通して、適応に影響を与えるという3段階のモデルを提案している。このモデルでは適応の支えとなる親密な友人関係が形成・維持されるプロセスを動機付けの観点から捉えようとするものである。すなわち、自律的な動機付けが、友人との積極的な関わりを促進し、その結果、適応が高まることを想定したモデルといえる。以上の先行研究から、大学入学後の友人関係の親密化過程において、過程の様相が大学生活の適応感に及ぼす影響を検討する視点が求められる。

第5節　本章のまとめ

本節では、第2節から第4節で概観した本論文にかかわる先行研究から得られた知見をまとめ、本論文における問題の所在に関する視点を検討していく。

第1に青年期という発達段階において、友人関係が青年の生活において様々な側面で重要な意味を持つことについて、概観してきた。先行研究によって、明らかにされた知見は、様々な対人関係の中でも、この時期の青年にとって重要な意味を持つ友人関係がどのように形成・維持されるかを明らかにする視点が重要であり、また友人との様々な相互作用の中で社会の中で生きていくルールを身につけ、自己の成長に寄与していることを示した。また、大学生にとっての友人関係はポジティブな友人関係を認知すること、友人からのソー

シャル・サポートを認知することが、青年の心理的適応に大きな影響を示す結果も多く示されてきた。その一方で、友人関係で生じるネガティブな感情や「脆さ」に関する側面も確認した。また大学入学時という時点に注目すると、進学という環境変化が存在するため、新しい友人との関係形成にはポジティブな経験だけでなく、不安感といった等なネガティブな感情を抱く可能性もあり、新友人に対しての行動・活動面また関係をどのように認知しているのかについて検討する必要がある。また、大学生の友人関係研究では、関係での相互作用の頻度や質のみに注目するのではなく、大学生にとって生活の基盤となる大学進学時の生活状況や学校カリキュラムを把握した視点が重要視されること、また複数対人関係が同時期に存在する可能性から、入学以前の友人関係の存在にも焦点を当て、検討する必要がある。これらの点を考慮した上で、大学生の友人関係研究を検討することで、これまで検討されることが少なかった二者関係にとどまらない友人関係を研究する意義が明らかになることが期待される。

第 2 に、親密化過程における先行研究では、段階理論(下斗米,1990 他)や関係性の初期分化現象(山中,1994 他)の理論に基づき、友人関係における過程の様相が明らかにされてきた。段階理論では、友人関係の親密化がその時点時点での関係性の評価に依存しており、関係形成初期の影響力の持続性を仮定していない。調査協力者が想定した友人に対し、調査時点での親密度を測定し、その分割した親密段階を元に、役割行動・自己開示への影響を検討した横断的研究が中心であるという特徴があげられる。一方で、関係性の初期分化では、二者関係が継続していていく中で友人が変化すること、対人関係状況に何らかの変化があったとしても関係形成初期の様相の影響力がのちのちの関係に影響力を与えると仮定し、対象人物 1 名との関係性を縦断的調査の中で捉えた研究が中心であるという特徴がある。大学入学といったような、進学時の友人関係の親密化過程を「段階理論」と「関係性の初期分化」に当てはめて考えた場合、友人の中には、入学直後に出会ったときにはそれほどよい印象ではなかったが、時間がたつにつれて徐々に親しくなっていく友人もいれば、出会ってすぐの印象がよくそのまま親しい友人関係を続けているという友人のどちらも存在することが想像される。この予測に従うと前者では「段階理論」が支持され、後者は「関係性の初期分化」は支持される。しかしながら、初期の友人のよい印象がなく、しばらく友人関係として進展しなくとも、何らかの経験を共有することで、親しい友人になることや、初期の印象が良くともその後の印象が変化する可能性もある。両者の理論に共通する視点として、従来の親密化過程研究では多くの場合、対象友人を 1 名に限定しているとい

う点があげられる。すなわち、複数の友人関係に焦点を当て親密化過程を明らかにしようとする際には、両者の理論に当てはまらないパターンも存在するのではないか。したがって、第1に両者の理論の各観点に従い過程の様相を検討すること、第2に理論の2者択一的な議論ではなく両者の視点をそれぞれ取り入れつつ、複数友人関係の親密化過程を捉えるという2つの視点の方向性が必要であると考える。

以上の議論から、友人関係の親密化過程を検討する際には、留意すべき点がいくつか存在すると考える。第1に先述のとおり、友人関係の特徴である二者関係にとどまらない複数の対人関係を考慮する必要がある。例えば、初期の対象人物よりも好意を持てる人物の登場の可能性や先行の友人関係が新しく形成する後続の友人関係に及ぼす影響の可能性を考慮し、協力者との複数の友人関係を抽出した上で、中村（1989）・山中（1994）の実施したような実際の時間的推移を考慮した追跡的調査の方法を採用することは必要不可欠であろうと考える。第2にこれまでの友人関係研究および親密化過程研究では、これまでの知見が主として質問紙法による量的アプローチにより明らかにしてきた。しかしながら複数対人関係を抽出する目的には質的アプローチも有用であることが指摘されていることから（やまだ,2004）、複数の関係をダイナミクスに捉える視点、時間的プロセスを考慮した上で、親密化過程を量的アプローチと質的アプローチを組み合わせた試みを実施することで新たな親密化過程のモデルが提案できることが期待される。

また先行研究では、親密化における形成・維持・発展にかかわる要因の検討もなされてきた。友人関係研究において、友人に対する感情面（榎本,1999）・行動面を取り上げた研究（榎本,1999；落合・佐藤,1996；岡田,1993）、前述の親密化過程での行動面の検討を試みる研究（山中,1998；Hays,1984,1985）では、親しい友人に限定した感情面や行動面の指標を集め、使用している。しかし親密化過程研究で出会いの初期に知り合った友人は、親しい友人ではあるが、出会ってからの期間が非常に短い関係であり、親しい友人に限定された指標だけではなく、より幅広い対人関係に対応可能な指標を用いることも重要な視点であると考える。

第3に、大学適応感に関する研究では、近年大学生の適応・不適応が、大きな問題となっており、大学生活の適応について、初期の様相にとどまらず、4年間における過程を縦断的に検討する必要性が指摘されてきた（安藤・廣岡・小川・坂本・吉田,2001他）。また、適応という概念に対する定義は様々であり、多岐にわたる測定がなされてきた。本研究は、友人関係の親密化過程と大学適応との関連を明らかにする目的から、その適応感は、生活全般とその主観的感

情を幅広く捉えた概念が適切であると考える。したがって、東・浅川・古川・吉田(2002)の「大学生の大学という環境が心理的調和にあって大学からの要請への適合と大学生の欲求や自発的・創造的な行動が、ともに実現される均衡状態」の定義を本論文でも採用する。

既存の適応感を測定する尺度は多く存在し、また東ら(2002)の適応感に関する定義は幅広いため、既存の尺度の項目には東ら(2002)の定義に当てはまる項目内容も存在する。また東ら(2002)の研究では、女子学生に限定した上での尺度の構成であるため、再検討する必要もあるだろう。したがって、その他の先行研究から得られた知見も参考にし、尺度内容について再構成をしていく視点も重要である。大学適応感についても、親密化過程同様に一時点の様相では、大学生活の一部分の適応感しか捉えられない。すなわち、適応感を大学生活全般の過程として捉え、親密化過程との関連を明らかにすることで、教育・学校現場への有益な提言が可能となると考える。

註）

1) 渡辺(2007b)は、2006年4月～7月に、304名の調査協力者に対し、3回の追跡調査を行った。本論文の調査協力者は、渡辺(2007b)のデータの一部である。

第 2 章
本論文の目的・構成

第 1 節　問題の所在

第1章で明らかにされてきた知見から本研究の目的につながる問題の所在について3つの観点から述べる。

第1に、青年期の友人関係研究全般に関する研究を概観した。従来の研究では青年期における友人関係の重要性を明らかにするために、友人関係の機能（松井，1990)、友人への期待（和田，1993)、友人にとの付き合い方（落合・佐藤，1996）等に関する多くの知見が明らかにされてきた。

第2に、友人関係の親密化過程研究を概観し、「関係性の初期分化（山中,1994 他）」や「段階理論（Altman＆Taylor,1973 他）」の両視点による検証から二者関係が進展するメカニズムが明らかにされてきたことを確認した。一方で友人関係の特徴として、多くの場合複数の対人関係で構成されていることが指摘されてきた（遠矢，1996）が、友人関係研究や親密化過程の多くの従来の研究では、友人を1名に限定した手続きを使用した上で、その過程が検討されてきたこと（山中,1994 他）を確認した。したがって、より現実場面の生き生きとした青年期の友人関係を明らかにすること、さらに、複数の対人関係で構成される友人関係に注目し、その過程を明らかにするために、これまで検討されることが少なかった複数友人関係を同時的に抽出し、かつ入学当初からの追跡的研究を適用することで、大学生活全般に渡る青年期の友人関係を明らかにする視点が必要である。

第3に、大学生活の適応感に関する研究については、大学生活の適応感は、入学当初のみならず青年のその後の人生にも大きな影響を与える可能性があり、近年の大学教育現場においても大きな関心事である(大島,2007 他)。したがって、本邦でも適応感に関する研究も多く、大学生活と適応感の関連や適応感に関わる要因として大学生の友人関係の在り方が影響すること(小嶋,1998 他)が明らかにされてきた。また入学時から大学生活の過程の中で適応感が変動すること（安藤ら,2001 他）を確認した。したがって、大学生活全般に渡る青年期の友人関係と大学生活への適応感を明らかにする視点が必要である。

第 2 節　本論文の目的と構成

(1)　本論文の目的

本論文では、前節で述べた問題の所在を踏まえ、本論文の目的は以下の 2 点である。第 1 に、大学生の友人関係の親密化過程を複数の友人関係の過程として捉え、長期的な追跡的研究から既存の二者関係における親密化過程理論に囚われない過程を明らかにすることである。第 2 に第 1 の目的で明らかにされる複数友人関係で構成される親密化過程が、大学生活の適応感に及ぼす影響を明らかにすることである。

本論文では、4 つの実証的な研究から上記 2 点の目的を検討していくが、以下には、各章で明らかにする目的を述べる。

研究 1 の目的は、友人関係が複数対人関係で構成されることの背景の一つとして、大学入学する前の友人関係（旧友人）と大学に入学後に知り合った友人関係（新友人）が同時期に存在していることに注目し、入学当初から、両者の関係を追跡的に比較検討することから、大学生活での両者の関係の推移を明らかにすることである。

研究 2 の目的は、大学生における友人関係の親密化過程について、二者関係にとどまらない過程を抽出する必要があることを確認するために、「一番親しい友人」が大学生活の中で、どのように選択されていくのかの過程と選択に関わる要因を明らかにすることである。また、「一番親しい友人」が、選択される過程について質的な検討かも加え、明らかにすることである。

研究 3 の目的は、研究 1 および研究 2 で明らかにされる複数で構成される大学生の友人関係について、その親密化過程を明らかにすることである。複数の対人関係を追跡的に明らかにすることは、従来の質問紙調査の量的検討のみで抽出することへの限界があることが想定される。したがって、複数対人関係の親密化過程を抽出するために、「回想的調査面接法」を採用し、手続きを確立すること目的とする。また複数友人関係の親密化過程のパターンを明らかにする類型化を提案するために探索的検討と適用を行う。

研究 4 の目的は、第 1・2・3 の目的で明らかにされる大学生の複数対人関係で構成される友人関係とその親密化過程が大学生活の適応感に及ぼす影響を検討することである。具体的には第 1 に、本研究では、複数友人関係の背景のひとつとして注目した新旧友人関係と適応感、第 2 に新友人の友人選択過程と適応感、第 3 に複数友人関係の親密化過程と適応感との関連を明らかにしていく。

以上の目的を実証的に検討していくために、本論文では、大学入学時から大学入学 1 年後までの 5 回の追跡的な質問紙調査、手続き

の検討を含めた3回の面接調査、大学生活の適応感の項目の収集と測定における2回の質問紙調査を行った。

一連の調査を実施することで、追跡的調査による量的アプローチと面接調査による質的アプローチの両面から複数対人関係の親密化過程が検討可能となる。量的アプローチでは、追跡的調査を適用することで、友人関係の全体的な推移を捉える視点を提供する。また質的アプローチである面接調査では、二者関係の親密化過程の中で、影響関係にあると想像される共通友人グループの過程も同時に抽出することで複数の対人関係で構成される友人関係の親密化過程を明らかにすることが可能となる。この2つのアプローチを組み合わせることで、これまで検討されることが少なかった大学時代に形成される友人関係全般の親密化過程が明らかにされることが期待される。さらに、本研究で明らかにされる親密化過程と友人関係の大学生活への適応感を測定しその関連を検討することで、単時点の友人関係と適応感の関連だけでなく、大学時代に経験した友人関係全般と適応感の関連を明らかにすることが可能となる。この一連の研究から、青年期の対人関係で重要視されている友人関係研究への有用な提言と近年議論の対象となっている教育現場に大学適応・不適応に関連して友人関係が与える影響の知見を提供できるものと考える。

（2）本論文の構成

論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

第1章では、青年期の友人関係の特徴（第1節）、友人関係の親密化過程（第2節）、さらに友人関係が適応感に及ぼす影響（第3節）に関する先行研究をレビューし、本論文の問題意識につながる理論背景を整理し、研究の着眼点を述べてきた。

第2章では、第1章の理論的背景を踏まえて、本論文の問題所在を明らかにし、研究の目的及び構成を述べてきた。

第3章では、第1の目的を検討するために、第1に5回の追跡調査において選択された新友人と旧友人について各指標の推移を比較する。具体的には、山中(1994)の関係の親密さの指標に加え、対人感情（津村・大坊・林・今川；1985)、二者関係認知（林・今川・津村・大坊；1984)、対人行動（今川・津村・大坊・林；1984）の比較に加え（第2節)、友人関係期待（4回目調査時点のみ測定,和田；1993）の指標（第3節）も合わせて検討する。

第4章では、第2の目的を検討するために、新友人の各調査で選択した「一番親しい友人」の選択状況に注目し、各指標に及ぼす影

響（第2節）および友人選択に及ぼす要因（第3節）の検討をする。各指標は第3章で使用した項目と同じものを使用する。また、大学生の「一番親しい友人」の選択状況について質的な検討（第4節）も加える。

第5章では、第3の目的を検討するために、回想的調査面接を実施し、親密化過程を検討する。第1に回想的調査面接の手続きを検討（第2節）し、第2に親密化過程の分類（第3節）を試みた上で、類型化の適用（第4節）を検討する。

第6章では、第4の目的を検討するために、大学生活の適応感に関する指標の検討と友人関係の親密化過程が大学生活の適応感に及ぼす影響を明らかにする。第1に、大学生活の適応感に関する項目の収集した上で項目を選定し、信頼性と妥当性の検討（第2節）を行う。第2に、第3～5章で明らかにされた友人関係および親密化過程と選定した適応感項目の関連を検証（第3節）する。さらに、適応感得点の推移と面接調査から抽出した発話から質的な検討（第4節）を加える。

第7章では、第3章から第6章までの本論文の一連の研究から得られた知見から、大学4年間における追跡的調査と回想的調査面接によって明らかにされた大学生の複数友人関係における親密化過程、および大学生活の適応感におよぼす影響についての知見を整理した上で、本研究の意義と今後の展望について論じていく。

最終章である第8章では要約として、各章を集約し記す。

研究の調査概要

第3章から第6章に使用する調査概要と使用するデータを示したものをTable2-2-1に示す。尚、本研究では、それぞれの分析内容に応じて、協力者のデータを最大限に使用した。したがって追跡的検討についても、調査時点の採用により協力者数が異なることをここに明記しておく。分析に使用した調査及び協力者数をTable2-2-2に示す。

第3章第2節では、第1回目質問紙調査（2006年4月下旬）～第5回目調査（2007年5月中旬）の入学3週間目～1年1ヶ月後までの5回の調査を使用する。調査協力者は、5回の調査に参加した115名（男性29名・女性86名）である。第3節では、第4回目質問紙調査（2006年11月上旬）を使用する。調査協力者は、190名（男性50名・女性190名）である。

第4章の第2節と第3節では第1回目質問紙調査（2006年4月下旬）～第5回目調査（2007年5月中旬）の5回の調査を使用する。調査協力者は、5回の調査に参加した115名（男性29名・女性86名）である。第4節では、第1回目・第5回目質問紙調査・第6

回目面接調査(2009 年 7 月～11 月)の 5 回の調査を使用する。調査協力者は、3 回の調査に参加した 80 名（男性 22 名・女性 58 名）である。

第 5 章の第 2 節では、第 1 回目予備面接調査(2007 年 11 月~2008 年 1 月)を使用する。調査協力者は、15 名(男性 4 名・女性 11 名)である。第 3 節では、第 2 回目予備面接調査(2008 年 7 月~9 月)を使用する。調査協力者は、31 名(男性 7 名・女性 24 名)である。第 4 節では、第 6 回目面接調査を使用する。調査協力者は、104 名(男性 31 名・女性 73 名)である。

第 6 章の第 2 節では、第 3 回目予備面接調査(2009 年 7 月)を使用する。調査協力者は、93 名(男性 23 名・女性 70 名)である。第 3 節では、第 6 回目面接調査を使用する。調査協力者は、104 名(男性 31 名・女性 73 名)である。一部の分析については、第 1 回目~第 6 回目調査を使用し、6 回の全ての調査に参加した 53 名(男性 14 名・女性 39 名)のデータ（第 3 節 2）および第 1 回目・第 5 回目質問紙調査・第 6 回目面接調査(2009 年 7 月～11 月)の 3 回の調査に参加した 80 名（男性 22 名・女性 58 名）のデータ（第 3 節 4）を使用する。第 4 節では、第 6 回目面接調査を使用する。調査協力者は、104 名(男性 31 名・女性 73 名)である。

Table2-2-1.調査概要と各研究で使用する調査の一覧

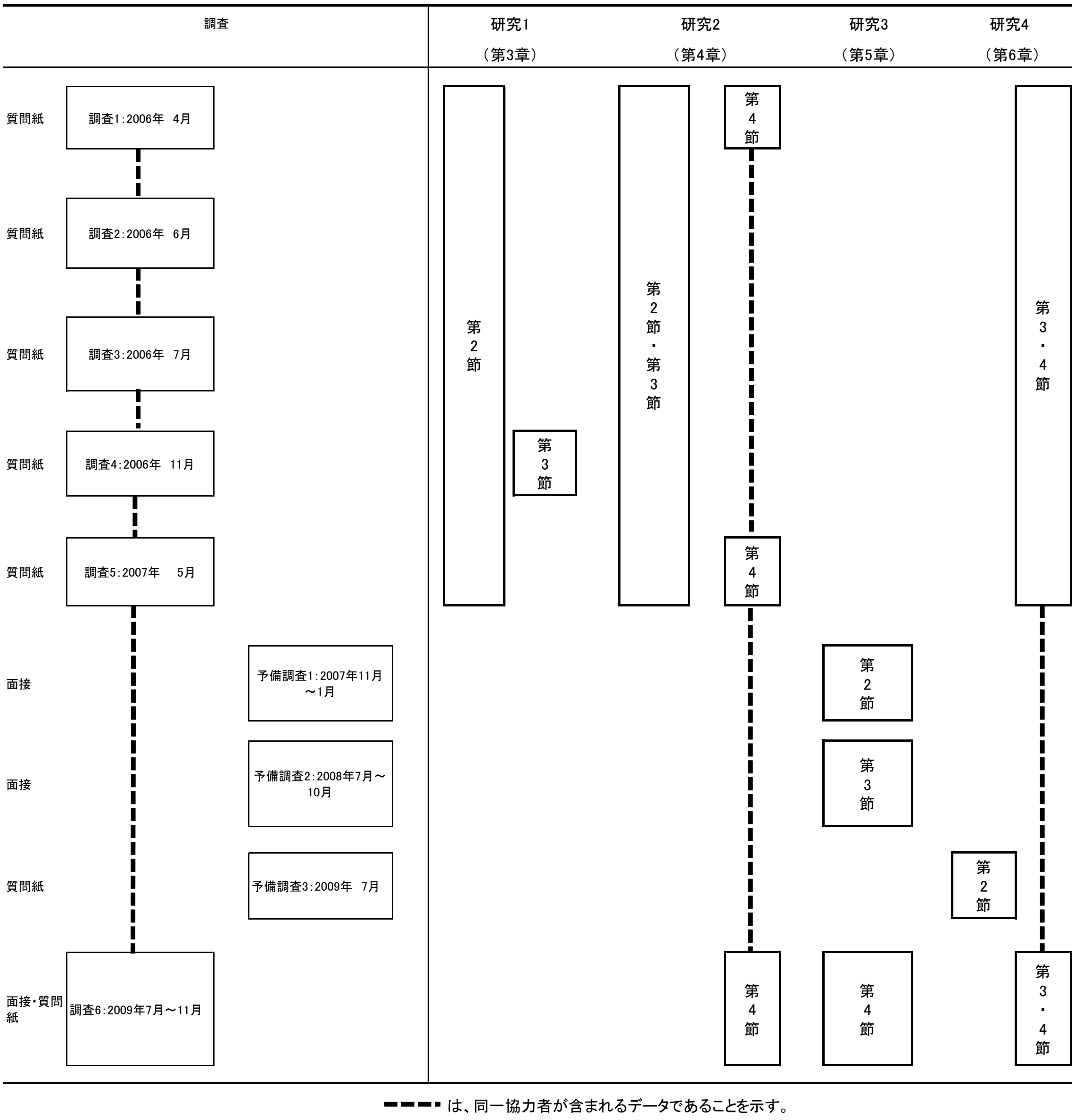


Table2-2-2 研究で使用した調査協力者数の詳細一覧

			使用調査（Table2-2-1参照）	調査協力者数
研究1	第3章	第2節	調査1 調査2 調査3 調査4 調査5	115名（男性29名・女性86名）
	第3章	第3節	調査4	190名（男性50名・女性190名）
研究2	第4章	第2節・第3節	調査1 調査2 調査3 調査4 調査5	115名（男性29名・女性86名）
	第4章	第4節	調査1 調査5 調査6	80名（男性22名・女性58名）
研究3	第5章	第2節	予備調査1	15名（男性4名・女性11名）
	第5章	第3節	予備調査2	31名（男性4名・女性11名）
	第5章	第4節	調査6	104名（男性31名・女性73名）
研究4	第6章	第2節	予備調査3	93名（男性23名・女性70名）
	第6章	第3節1・3・5	調査6	104名（男性31名・女性73名）
	第6章	第3節2	調査1 調査2 調査3 調査4 調査5 調査6	53名（男性14名・女性39名）
	第6章	第3節4	調査1 調査5 調査6	80名（男性22名・女性58名）
	第6章	第4節	調査6	104名（男性31名・女性73名）

第3章　研究1　大学生の新旧友人関係に関する追跡的研究[1)]

第1節　研究1の目的

研究1では、友人関係が複数対人関係で構成されることの背景の一つとして、大学入学する前の友人関係（旧友人）と大学に入学後に知り合った友人関係（新友人）が同時期に存在していることに注目し、入学当初から、両者の関係を追跡的に比較検討することから、大学生活における両者の関係の推移を明らかにすることを目的とした。

大学新入生を対象にした追跡的調査を実施し、各調査時点で新友人と旧友人の一番親しい友人をそれぞれ選択してもらうこと、またその選択友人に対する評定をしてもらうという手続きを採用する。

具体的な目的は以下のとおりである。大学生の友人関係において、新友人と旧友人に対する各評定を追跡的に比較することを第1の目的とする。また、新旧友人に対する関係期待の差異と認知構造を明らかにすることを第2の目的とする。

第2節　新友人と旧友人における友人関係の追跡的検討

（1）目的と仮説

第2節の目的は、入学3週間後から入学1年1か月後までの5回の追跡的調査において、新友と旧友人の親密さ、「対人感情」「二者関係認知」「対人行動」の各指標の推移を検討することである。親密化過程の段階理論（Altman＆Taylor,1973 他）に従えば、親密化過程では、対人関係が進展するにつれ狭い領域での表面的な相互作用から広い領域での親密な相互作用へと段階的かつ系統的に進行していくことが予測される。また和田（2001）は、新友人との関係形成について、付き合いの長く親密である旧友人との関係が背景となることを指摘している。以上の知見から以下の3つの仮説を検証していく。

仮説1　入学1年1か月後の新友人に対する親密さの程度は入学3週間後よりも高く評定される。

仮説2　旧友人に対する親密さは新友人よりも高く評定される。

仮説 3　新しい友人関係の背景となる旧友人の各評定（親密さ・感情・認知・行動）が新友人への評定に影響を与える。

(2)　方法

(2)-1 調査協力者

北海道内の大学 1 年生を対象とし、質問紙調査を行った。1 回目の調査参加者は 227 名であり、以下 2 回目は 186 名、3 回目は 204 名、4 回目は 190 名、5 回目は 243 名であった。1 回目から 5 回目までの調査参加協力者数の詳細を Table3-2-1 に示す。1 回目における平均年齢は 18.23 歳（SD＝.63 ）であった。本節では 5 回の調査全てに参加した 115 名(男性 29 名・女性 86 名)を分析対象とした。

Ｔａｂｌｅ.３－２－１　１回目から５回目の参加状況（人数）

	１回目 （２００６年４月下旬）	２回目 （２００６年６月上旬）	３回目 （２００６年７月上旬）	４回目 （２００６年１１月上旬）	５回目 （２００７年５月
男性	75	57	58	50	74
女性	152	129	146	140	169
計	227	186	204	190	243

(2)-2　調査時期

1 回目調査の実施は 2006 年 4 月下旬であり、以下 2 回目は 2006 年 6 月上旬、3 回目は 2006 年 7 月上旬、4 回目は 2006 年 11 月上旬、5 回目は 2007 年 5 月中旬に調査を実施した。調査回数は全 5 回であった。

(2)-3　質問紙の内容

質問紙の内容は以下の通りであった。質問紙の構成として、付き合い期間が長く友人に対する評価・イメージが定着していると考えられる旧友人の評定が、知り合ってからの期間がまだ浅い新友人に対する評定に影響することを考慮して、第 1 に新友人に関して各項目に回答してもらった後、旧友人に関して回答してもらった。第 2 回目調査時点の質問紙を資料 A として添付する。

(2)-3-1　基本的属性および居住状況

年齢・学籍番号と性別について選択させた。住居状況については、現在と大学入学前について、それぞれ「1. 親と同居」「2. 一人暮らし」「3. 寮・下宿」「4. その他」の 4 項目から当てはまるものを

選択させ、「4．その他」の場合には具体的な居住状況を自由記述させた。

(2)-3-2　同性友人のイニシャルの記入

「新友人」として大学に入学してから知り合った人で一番親しい同性友人を、また「旧友人」として大学に入学する前に知り合った人で一番親しい同性友人を想起するように教示した上で、それぞれのイニシャルを記入させた。また、2回目以降の調査では、前回選択した友人と同じ人物を想起したかを確認するために「1．同じ人物」「2．違う人物」「3．覚えていない」の3項目から当てはまるものを選択させた。

(2)-3-3　選択友人との関係

友人と出会った場所

①新友人と出会った場所を「1．同じ大学の同じ学科」「2．同じ大学のサークル・部活」「3．1、2以外の同大学内」「4．同じアルバイト先」「5.その他」の5項目から当てはまるものを選択させ、「5.その他」の場合には具体的に出会った場所を自由記述させた。②旧友人と出会った場所を「1．同じ高校」「2．同じ小・中学校」「3．同じアルバイト先」「4．その他」の4項目から当てはまるものを選択させ、「4．その他」の場合には具体的に出会った場所を自由記述させた。

知り合ってからの期間

①新友人と知り合ってからの期間を「1．1週間以上2週間未満」「2．2週間以上3週間未満」「3．3週間以上1ヶ月未満」「4．1ヶ月以上2ヶ月未満」「5．2ヶ月以上3ヶ月未満（2回目調査以降追加）」「6．3ヶ月以上6ヶ月未満（4回目調査以降追加）」「7．6か月以上1年未満（4回目調査以降追加）」「8．1年以上（5回目調査以降追加）」の項目から当てはまるものを選択させた。②旧友人と知り合ってからの期間を「1．3ヶ月未満」「2．3ヶ月以上6ヶ月未満」「3．6ヶ月以上1年未満」「4．1年以上3年未満」「5．3年以上6年未満」「6.6年以上」の6項目から当てはまるものを選択させた。

友人との接触頻度

①新友人と直接会う頻度を「1．ほとんど毎日」「2．1週間に4日以上」「3．1週間に2・3日以上」「4．1週間に1日程度」「5．1週間に1日未満」の6項目から当てはまるものを選択させた。②旧友人と直接会う頻度を「1．ほとんど毎日」「2．1週間に4日以上」「3．1週間に2・3日以上」「4．1週間に1日程度」「5．2週間に1日程度」「6．1ヶ月に1日程度」「7．1年に1日程度」「8．ほとんど会うことはない」の8項目から当てはまるものを選択させた。

電話やメールで接触頻度

友人と電話やメールで連絡し合う頻度を「1. ほとんど毎日」「2. 1週間に4日以上」「3. 1週間に2・3日以上」「4. 1週間に1日程度」「5. 1週間に1日以下」「6. 電話やメールはしない」の6項目から新友人・旧友人のそれぞれについて、当てはまるものを選択させた。

旧友人の現在の生活状況（旧友人に関してのみ回答を求めた。）

旧友人が現在どのような環境で生活しているかを、「1. 他大学・専門学校にいる」「2. 同じ大学・同じ学科にいる」「3. 同じ大学・他学科にいる」「4. 就職している（アルバイトを含む）」「5. 浪人している（予備校生）」「6. その他」の4項目から当てはまるものを選択させ、「6. その他」の場合には具体的にどのような環境で生活しているかを自由記述させた。

(2)-3-4　関係の親密さの測定

関係の親密を測定する尺度として山中(1994)の指標を使用した。以下の3項目で構成されている。

好意度

新友人・旧友人に対して、それぞれどの程度好感を持っているかについて「1. 全く好感が持てない＝1点」から「7. 非常に好感が持てる＝7点」までの7段階で評定させた。

関係関与度

新友人・旧友人に対して、それぞれどの程度深く関わっているかについて「1. 非常に浅く付き合っている＝1点」から「7. 非常に深く付き合っている＝7点」までの7段階で評定させた。

関係のラベリング

新友人・旧友人に対して、それぞれどの程度親しいかについて7段階で評定させた。評定尺度上には「顔見知り＝1点」、「会えば話す関係＝3点」、「ある程度親しい友人＝5点」、「非常に親しい友人＝7点」といった関係のラベルを示した。2、4、6点には何も示されていなかった。

(2)-3-5　対人感情の測定

津村・大坊・林・今川（1985）の対人感情項目18項目のうち、大学生の友人関係における対人感情項目として適すると判断した16項目を使用した。削除した項目は「負い目を感じる」「恐れ多い」の2項目である。新友人・旧友人のそれぞれに対して、項目に示した感情をどの程度感じているかを「1. 決してそう感じない＝1点」から「7. とても強く感じる＝7点」までの7段階で評定させた。津村ら（1985）は、significant others に対する対人感情の構造とし

て、「一体感・信頼」「保護・情愛」「畏怖・尊敬・負い目」「優越感・反感」の 4 因子を抽出している。また、渡辺(2007b)は、本論文と同じ項目を使用し、「ポジティブ感情」「拒否感情」の 2 因子を抽出している。

(2)-3-6 関係認知の測定

林・今川・津村・大坊（1984）の二者関係認知項目 30 項目のうち、調査協力者の回答の負担を考慮して、各因子で因子負荷量が高く、かつ大学生の友人関係における関係認知項目として適すると判断した 14 項目を抜粋して使用した。新友人・旧友人とそれぞれについて、関係性を示す特性語とその対語を両極とした、7 段階の尺度評定上で評定させた。林らは、対人関係で想定しうる様々な 60 の関係概念を想定し、二者関係認知の構造として、「緊密な関係－表面的な関係」「気楽な関係－緊張に満ちた関係」「公的・課題志向的関係－私的・情緒的関係」「上下の関係－対等な関係」「協調的関係－競合的関係」の 5 因子を抽出している。また渡辺(2007b)は、本論文と同じ項目を使用し、「親密な関係」・「理性－感情的関係」の 2 因子を抽出している。

(2)-3-7 対人行動の測定

今川・津村・大坊・林（1984）の対人行動 55 項目のうち、調査協力者の回答の負担を考慮して、各因子から大学生の友人関係における対人行動項目として適すると判断した 24 項目を抜粋して使用した。新友人・旧友人のそれぞれに対して、項目に示した行動をどの程度行うかを「1. めったにしない＝1 点」から「5. いつもする=5 点」までの 5 段階で評定させた。今川・津村・大坊・林（1985）は、「親和」「優越」「依存」「支配「敵対」「拒否」「服従」「友好」「礼儀」の 9 因子を抽出している。本研究では、大学生の友人関係における行動であることを考慮して「礼儀」因子の項目は削除して使用した。また渡辺(2007b)は、本論文と同じ項目を使用し、「主張的行動」・「親和的行動」・「回避的行動」の 3 因子を抽出している。

(3) 結果

(3)-1 親密度得点の算出と「対人感情」「関係認知」「対人行動」の因子構造の検討

(3)-1-1 親密度得点の算出

山中（1994）の関係の親密さ 3 項目の 1 次元性の確認をするために新友人および旧友人別および調査時点別に 3 項目に対してそれぞ

れ主成分分析を行った。その結果、累積説明率からいずれも1成分が採用でき、成分の重みも全ての指標において.800以上と大きいこと、またそれぞれのα係数も.816～.872であることが確認された。よって、本研究では、二者関係の親密さの評定として、「好意度」･「関係関与度」･「関係のラベリング」の3指標の評定平均値を友人種（新友人・旧友人）別および調査時点別に算出し、親密度得点とした。

(3)-1-2　対人感情・関係認知・対人行動の因子構造の検討

新友人および旧友人に対する対人感情・関係認知・対人行動の各側面の構造を明らかにするために因子構造の検討を行った。第1に新友人および旧友人別に、また調査時点別に因子構造を確認した。その結果、対人感情については、すべての調査及び友人種（新友人・旧友人）について、2因子構造を確認し、因子の意味的内容も同様の項目で説明されていた（資料B参照）。二者関係認知では、1次元の構造または、3因子構造が抽出された（資料C参照）。対人行動では、2因子構造または、3因子構造が抽出された（資料D参照）。対人感情では、削除される項目の差異や項目の因子負荷量の順番に差異が見られたがほぼ同じ構造が得られることを確認した。二者関係認知と対人行動では、各調査別及び友人種により、複数の構造を確認したが、共通する因子も多く抽出されたことを確認した。本研究の目的は、新旧友人の5回の調査時点の推移を検討することであり、比較のためには共通した構造を抽出することが必要となる。したがって、以下の分析では対人感情・関係認知・対人行動の各項目における新友人に対する評定（5回分）と旧友人に対する評定（5回分）の評定平均値を求め、因子分析を行った。

なお、友人関係では性差が指摘されているが（和田,1993）が、性別の検討については男性の分析対象者が29名と少数であるため、分析不可能と判断し検討しなかった。

対人感情

対人感情尺度16項目に対して主因子法による因子分析を行った。共通性の値が低い「16. 義理を感じる」を削除した上で、主因子法・Promax回転による因子分析を行い、固有値の減衰状況から2因子解を採用した。また2つの因子間の相関は-.16とほぼ直交していたため、主因子法・Varimax回転による因子分析を再度行い、15項目での解釈を採用した（Table3-2-2参照）。累積寄与率は58.07%であった。第1因子は、「2. やさしくしたい」「15. 好き」など友人に対し前向きでポジティブな感情に関する内容であることから「ポジティブ感情」因子と命名した。第2因子は「4. 反発を感じる」、「10. 軽べつを感じる」など、友人に対して距離感を持ち拒否感を示す感

情に関する内容であることから、「拒否感情」因子と命名した。項目全体の信頼性係数（α）はα＝.844、第1因子「ポジティブ感情」はα＝.915、第2因子「拒否感情」はα＝.803であり、ほぼ十分な信頼性を示した。

Table3-2-2. 対人感情の因子構造（主因子法・バリマックス回転）

	I	II	h^2
第1因子＝ポジティブ感情			
2やさしくしたい	**.840**	-.144	.726
15好き	**.833**	-.161	.719
12かわいい	**.798**	-.021	.637
11信頼できる	**.792**	-.355	.753
6尊敬したい	**.744**	-.105	.565
9励ましたい	**.736**	.068	.546
1親しみを感じる	**.716**	-.331	.622
5甘えたい	**.702**	.254	.558
8一体感がもてる	**.666**	-.043	.446
13助けて欲しい	**.651**	.358	.552
第2因子＝拒否感情			
4反発を感じる	.024	**.913**	.833
10軽べつを感じる	-.072	**.816**	.671
3こわい	.021	**.648**	.421
7優越感を感じる	-.051	**.604**	.367
14負けたくない	-.111	**.531**	.295
因子寄与	5.764	2.947	
寄与率(%)	38.430	19.647	
信頼性係数(α)	.915	.803	

二者関係認知

関係認知尺度14項目に対して主因子法による因子分析を行った。共通性の値が低い「9. 単純な－複雑な」を削除した上で、主因子法・Promax回転による因子分析を行い、複数の因子に負荷量の高い「1.協同的－競争的」「14.緊張した－リラックスした」を除き、固有値の減衰状況から3因子解を採用した（Table3-2-3参照）。尚、回転前の3因子で11項目の全分散を説明する割合は61.90%であった。第1因子は「4.永続的な－一時的な」、「12. 安定した－不安定な」など、友人との関係の深さに関する程度を示す内容であることから、「深さの関係認知」因子と命名した。第2因子は「13.上下関係のある-上下関係のない」、「2. 対等な－対等ではない」など、友人との関係について対等さの程度を示す内容であることから、「対等性の関係認知」因子と命名した。第3因子は「11. 感情的な－理性的な」、「6. 冷静な－情熱的な」の友人との関係において感情の程度を示す内容であることから「感情的な関係認知」因子と命名した。項目全体の信頼性係数（α）はα＝.867、第1因子「関係の深さ」はα＝.901、第2因子「関係の対等さ」はα＝.803、第3因子「関係における感情」はα＝.562であり、第1・2因子では、ほぼ十分な信頼性を示したが、第3因子の信頼性は低かった。

Table3-2-3. 二者関係認知の因子構造(主因子法・プロマックス回転)

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
第1因子＝深さの関係認知			
4永続的な-一時的な	**.953**	-.146	.046
12安定した-不安定な	**.877**	.031	-.146
3深い-浅い	**.842**	-.147	.140
10快的な-不快な	**.649**	.198	.009
8気楽な-落ち着かない	**.620**	.178	.020
7誠意に満ちた-偽りのある	**.461**	.322	-.050
第2因子＝対等性の関係認知			
13上下関係のある-上下関係のない	.210	**-.970**	-.056
2対等な-対等ではない	.156	**.698**	-.061
5敵対的な-友好的な	-.244	**-.610**	-.002
第3因子＝感情的な関係認知			
6冷静な-情熱的な	-.035	-.162	**-.694**
11感情的な-理性的な	.005	-.110	**.639**
因子寄与	4.599	3.547	1.357
α	.901	.803	.562
因子相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ		.585	.303
Ⅱ			.148

対人行動

対人行動尺度 24 項目に対して主因子法・Promax 回転による因子分析を行なった。固有値の減衰状況から 3 因子解を採用し、因子負荷量の低い「7. 妥協する」を除く 23 因子での解釈を採用した(Table3-2-4 参照)。尚、回転前の 3 因子で 23 項目の全分散を説明する割合は 57.72%であった。第 1 因子は「9.協力する」、「17. 親切にする」など友人に対する行動として友好や親密さを示す行動を示す内容であることから、「親和的行動」因子と命名した。第 2 因子は「12. 忠告する」、「20. 指導する」など友人に対する行動として直接に拒否や支配する行動を示す内容であることから「主張的行動」因子と命名した。第 3 因子は「22. 避ける」、「14. 無視する」など友人に対する行動として、距離をとり、回避する行動を示す内容であることから「回避的行動」因子と命名した。項目全体の信頼性係数(α)は α ＝.900、第 1 因子「親和的行動」は α ＝.896、第 2 因子「主張的行動」は α ＝.895、第 3 因子「回避的行動」は α ＝.825、であり、ほぼ十分な信頼性を示した。

Table3−2−4. 対人行動の因子構造（主因子法転）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
第1因子＝親和的行動			
9協力する	**.886**	−.122	−.062
17親切にする	**.875**	−.151	.077
3頼りにする	**.864**	−.076	.110
19助けをもとめる	**.743**	.155	.106
23うちとける	**.741**	−.006	−.272
8仲良くする	**.709**	−.090	−.367
24援助する	**.627**	.225	.044
11甘える	**.608**	.069	.239
16一緒に遊ぶ	**.438**	.243	−.090
1謝る	**.418**	.129	.243
第2因子＝主張的行動			
12忠告する	.087	**.888**	−.229
20指導する	−.018	**.835**	−.080
13反抗する	−.066	**.805**	.128
4命令する	−.129	**.797**	.041
21意地をはる	.073	**.697**	.125
2自慢する	.147	**.628**	.051
5不平を言う	−.056	**.622**	−.030
第3因子＝回避的行動			
22避ける	.026	−.166	**.971**
14無視する	.015	−.086	**.912**
6他人行儀にふるまう	−.112	.163	**.623**
10軽べつする	−.005	.366	**.461**
18自分のために利用する	.065	.255	**.413**
15服従する	.134	.255	**.411**
因子寄与	5.686	6.511	5.047
α	.896	.895	.825
因子相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ		.315	−.124
Ⅱ			.570

全調査協力者の因子構造から得られた「対人感情」2 因子（ポジティブ感情・拒否感情)、「関係認知」3 因子（深さの関係認知・対等性の関係認知・感情的な関係認知)、「対人行動」3 因子（親和的行動・主張的行動・回避的行動）についてそれぞれの因子の項目数に違いがあるため、各因子の評定平均値を算出し、以下の分析で使用することとした。また、関係認知の尺度得点に関しては、得点の高い方向がより「深い関係」「対等な関係」「感情的な関係」であることを示すようにするために項目№2、3、4、7、8、10、11、12 を項目の評定を逆転し扱うこととした。

上記で算出した親密度得点、対人感情・二者関係認知・対人行動の各評定平均値の性差を検討するために、性を被験者間要因、調査時点を被験者内要因の独立変数、各時点の各評定値（新旧友人別に検討）を従属する 2 要因の分散分析を行った。時点の推移は、次節の検討内容となるため、ここでは、性要因の関わる結果のみを記述

する。

その結果、いずれの評定値においても、性と時点の有意な交互作用は見られなかった。親密度得点では新旧友人とも性の有意な主効果が見られ(新友人：$F(1,113)=5.76, p<.05$；旧友人：$F(1,113)=5.48, p<.05$)、男性よりも女性の方が友人に対する親密さの程度が高かった。

ポジティブ感情では、新旧友人とも性の有意な主効果が見られ(新友人：$F(1,111)=32.74, p<.001$；旧友人：$F(1,113)=67.45, p<.001$)、男性よりも女性の方が友人に対するポジティブ感情得点が高かった。

新友人に対する拒否感情では性の有意な主効果が見られ($F(1,111)=5.04, p<.05$)、女性よりも男性の方が友人に対する拒否感情得点が高かった。

深さの関係認知と対等さの関係認知では、新旧友人とも性の有意な主効果が見られ(深さ新友人：$F(1,111)=10.41, p<.01$；深さ旧友人：$F(1,113)=12.74, p<.01$；対等さ新友人：$F(1,111)=23.46, p<.001$；対等さ旧友人：$F(1,113)=12.43, p<.01$)、男性よりも女性の方が友人に対する深さや対等さの関係認知得点が高かった。

親和的行動では、新旧友人とも性の有意な主効果が見られ（新友人：$F(1,113)=15.64, p<.001$；旧友人：$F(1,113)=12.65, p<.01$)、男性よりも女性の方が親和的行動得点が高かった。性別の5回の調査時点の平均値をTable3-2-5に示す。

以上の結果から、各評定には性差があることが確認されたが、本研究で男性29名、女性86名と人数にバラつきがあるため、以下の分析では、性の要因については検討しない。

Table3-2-5 .新旧友人に対する各評定における性別の平均値(5回の評定の推定周辺平均)

		親密度得点	対人感情		二者関係認知			対人行動		
			ポジティブ	拒否	深さ	対等さ	感情的	親和的	主張的	回避的
新友人	男性	5.18	3.99	2.31	5.00	5.43	3.97	2.93	1.60	1.32
	女性	5.54	4.95	1.98	5.45	6.67	4.13	3.41	1.60	1.22
旧友人	男性	6.10	4.16	2.25	5.72	5.76	4.31	3.22	1.83	1.29
	女性	6.40	5.51	2.12	6.20	6.32	4.38	3.65	1.82	1.20

(3)-2　新友人と旧友人に対する親密度、および「対人感情」「二者関係認知」「対人行動」の各評定平均値の推移

友人種別（新旧友人）および調査時点（5調査時点）によって、友人に対する親密度・対人感情・関係認知・対人行動に差が見られるかを検討するために、友人種別・調査時点を被験者内要因の独立変数、友人に対する各評定平均値を従属変数とする2×5の2要因の分散分析を行った。各時点及び新旧友人別の評定平均値を

Table3-2-6 に示す。

(3)-2-1　親密度得点における検討

親密度得点では、その結果、友人種別および時点の有意な主効果が見られたが（友人：$F(1,114)=38.05, p<.001$・時点：$F(4,456)=74.94, p<.001$）、友人種別と調査時点の有意な交互作用が見られたため（$F(4,456)=20.95, p<.001$）、友人種別、及び調査時点別に単純主効果の検定を行った。調査時点別の検討ではいずれも旧友人への親密度得点が新友人への得点よりも有意に高かった。また友人種別の検討において新友人では、5 回目の得点が 1 回目・3 回目の得点よりも有意に高かったが、旧友人では、調査時点による差異は見られなかった。

(3)-2-2　対人感情における検討

ポジティブ感情では、友人種別および時点の有意な主効果が見られたが（友人：$F(1,112)=13.62, p<.001$・時点：$F(4,448)=24.73, p<.001$）、友人種別と調査時点の有意な交互作用が見られたため（$F(4,448)=2.58, p<.05$）、友人種別、及び調査時点別に単純主効果の検定を行った。調査時点別の検討では 1 回目から 4 回目調査時点における旧友人へのポジティブ感情得点が新友人への得点よりも有意に高かったが、5 回目調査時点では有意な差は見られなかった。また友人種別の検討において新友人では、5 回目の得点が 1・3・4 回目の得点よりも有意に高かったが、旧友人では、調査時点による差異は見られなかった。

拒否感情では、時点の有意な主効果が見られ（$F(4,448)=6.29, p<.001$）、1 回目調査時点における拒否感情得点が、2・4・5 回目の得点よりも低く、3 回目調査時点における得点が、4・5 回目の得点よりも低かった。

(3)-2-3　二者関係認知における検討

深さの関係認知では、友人種別および時点の有意な主効果が見られたが（友人：$F(1,112)=24.91, p<.001$・時点：$F(4,448)=62.77, p<.001$）、友人種別と調査時点の有意な交互作用が見られたため（$F(4,448)=6.56, p<.001$）、友人種別、及び調査時点別に単純主効果の検定を行った。調査時点別の検討ではすべての調査時点における旧友人への関係の深さ得点が新友人への得点よりも有意に高かった。また友人種別の検討において新友人では、5 回目の得点がその他の調査時点の得点よりも有意に高かったが、旧友人では、調査時点による差異は見られなかった。

対等性の関係認知では、時点の有意な主効果が見られたが

（F(4,448)=6.72,p<.001）、友人種別と調査時点の有意な交互作用が見られたため（F(4,448)=2.54,p<.05）、友人種別、及び調査時点別に単純主効果の検定を行った。調査時点別の検討では1回目から4回目調査時点における旧友人への関係の対等さ得点が新友人への得点よりも有意に高かったが、5回目調査時点では有意な差は見られなかった。

感情的な関係認知では、友人種別および時点の有意な主効果が見られたが（友人：F(1,112)=12.80,p<.01・時点：F(4,448)=5.25,p<.001）、友人種別と調査時点の有意な交互作用が見られたため（F(4,448)=2.90,p<.05）、友人種別、及び調査時点別に単純主効果の検定を行った。調査時点別の検討では1・2・3・5回目調査時点における旧友人への関係の感情得点が新友人への得点よりも有意に高かったが、4回目調査時点では有意な差は見られなかった。

(3)-2-4　対人行動における検討

親和的行動得点では、時点の有意な主効果が見られたが（時点：F(4,456)=24.74,p<.001）、友人種別と調査時点の有意な交互作用が見られたため（F(4,456)=5.57,p<.001）、友人種別、及び調査時点別に単純主効果の検定を行った。調査時点別の検討では1回目から4回目調査時点における旧友人への親和的行動得点が新友人への得点よりも有意に高かったが、5回目調査時点では有意な差は見られなかった。また友人種別の検討において新友人では、5回目の得点がその他全ての調査時点の得点よりも有意に高かったが、旧友人では、1回目調査時点での得点が3・4・5回目調査時点の得点よりも有意に高く、また2回目調査時点の得点が5回目の得点よりも有意に高かった。

主張的行動では、友人種別および時点の有意な主効果が見られたが（友人：F(1,114)=10.35,p<.01・時点：F(4,456)=24.69,p<.001）、友人種別と調査時点の有意な交互作用が見られたため（F(4,456)=3.06,p<.05）、友人種別、及び調査時点別に単純主効果の検定を行った。調査時点別の検討では1・2・3回目調査時点における旧友人への主張的行動得点が新友人への得点よりも有意に高かったが、4・5回目調査時点では有意な差は見られなかった。また友人種別の検討において新友人では、1回目の得点がその他全ての調査時点の得点よりも有意に低く、2回目は4・5回目よりも低く、3回目は5回目よりも低かった。旧友人では調査時点による差異は見られなかった。

回避的行動では友人種別と調査時点の有意な交互作用が見られたため（F(4,456)=3.61,p<.01）、友人種別、及び調査時点別に単純主

効果の検定を行った。友人種別の検討において新友人では、1回目調査時点の回避的行動得点が4・5回目の得点よりも有意に低かったが、旧友人では調査時点による差異は見られなかった。

Table.3-2-6. 新友人と旧友人の各評定値の推移とSDおよびF値

	新友人					旧友人					F値
	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	上段=時点の主効果 中段=友人種の主効果 下段=交互作用
親密度	5.30	5.46	5.38	5.46	5.63	6.41	6.36	6.36	6.28	6.21	74.94***
	(.95)	(.86)	(.91)	(.97)	(.82)	(.78)	(.73)	(.74)	(.72)	(.85)	38.05***
											20.95***
ポジティブ感情	4.59	4.78	4.67	4.62	4.99	5.28	5.18	5.22	5.08	5.09	24.73***
	(1.11)	(.98)	(1.12)	(1.10)	(.99)	(1.06)	(1.08)	(1.10)	(1.14)	(1.10)	13.62***
											2.58*
拒否感情	1.82	2.00	2.13	2.26	2.06	1.94	2.21	2.17	2.21	2.17	6.29***
	(.90)	(.94)	(.91)	(1.07)	(.88)	(.89)	(1.09)	(.99)	(1.04)	(.89)	0.32
											1.97
深さの関係認知	5.21	5.36	5.34	5.32	5.58	6.07	6.03	6.15	6.05	6.09	62.77***
	(.89)	(.87)	(.95)	(.96)	(.83)	(.81)	(.83)	(.76)	(.82)	(.86)	24.91***
											6.56***
対等性の関係認知	5.81	5.99	5.98	5.83	5.97	6.17	6.22	6.22	6.15	6.12	6.72***
	(.93)	(.84)	(.99)	(1.01)	(.90)	(.95)	(.99)	(.97)	(.97)	(.93)	2.91
											2.54*
感情的な関係認知	4.01	4.09	4.09	4.19	4.06	4.46	4.30	4.30	4.38	4.38	5.25***
	(.60)	(.85)	(.90)	(1.03)	(.89)	(.99)	(.97)	(1.06)	(1.01)	(1.04)	12.80**
											2.90*
親和的行動	3.16	3.28	3.26	3.25	3.48	3.68	3.61	3.53	3.47	3.41	24.74***
	(.68)	(.62)	(.73)	(.75)	(.66)	(.63)	(.66)	(.71)	(.73)	(.72)	3.15
											5.57***
主張的行動	1.38	1.55	1.60	1.70	1.75	1.81	1.89	1.84	1.80	1.79	24.69***
	(.48)	(.58)	(.58)	(.67)	(.61)	(.64)	(.71)	(.73)	(.65)	(.64)	10.35**
											3.06*
回避的行動	1.16	1.24	1.26	1.30	1.26	1.16	1.23	1.24	1.25	1.22	2.15
	(.24)	(.44)	(.41)	(.56)	(.35)	(.31)	(.38)	(.40)	(.48)	(.36)	0.01
											3.61**

(　)内はSD　$^{***}p<.001$　$^{**}p<.01$　$^{*}p<.05$

(3)-3　新友人と旧友人に対する親密度、および「対人感情」「二者関係認知」「対人行動」の潜在曲線モデルによる検討

新旧友人に対する5時点の親密度得点・対人感情・関係認知・対人行動の各平均評定値について、1次の成長曲線を仮定し、潜在曲線モデルによって切片と傾きを推定した。潜在曲線モデルの特徴は、①切片と傾きで縦断的な得点を予測できること、②切片や傾きは個人ごとに異なる確率点数であること、③切片や傾きの平均値を求めることで集団全体の傾向を把握することが可能なことである(小塩,2005b)。本研究の目的は、新旧友人の評定の推移を検討するとともに、新旧友人の双方の影響力を検討することである。したがって、新旧友人それぞれの潜在曲線モデルを作成後、両モデルを同時に分析し、新友人→旧友人および旧友人→新友人の双方の影響力を仮定し、探索的にパスを想定した。分析にはAmos16.0を使用した。

潜在曲線モデルは、縦断的な調査において、得点の1次の直線的

な傾きを仮定するモデルであるため、傾きから各時点の観測変数へのパス係数について 1 回目調査時点を「0」、2 回目調査時点を「1」、3 回目調査時点を「2」、4 回目調査時点を「3」、5 回目調査時点を「4」といったように固定するものである。しかしながら、本研究のいずれの変数における分析でも、適合するモデルを得られなかった。本研究の各評定値の推移は、先述の分散分析の結果から、必ずしも直線的な推移を示していなかった。したがって、適合するモデルを作成するために、非線形曲線を想定し、パス係数の固定について、1 回目調査時点を「0」、5 回目調査時点を「1」（ポジティブ感情のみ 1 回目調査時点を「1」、5 回目調査時点を「0」と設定した[2]。）とし、その他のパスの固定を外す手法を用いた（豊田,2003）。また、適合度を上げるために修正指数を参考にし、必要な誤差共分散を導入した。各モデルにおける新旧友人に対する 5 回の評定平均値の潜在曲線モデルにおける推定値の一覧表を Table3-2-7 に示す。

Table3-2-7.新旧友人に対する5回の評定平均値の潜在曲線モデルにおける推定値（非標準化

	新切片・旧切片	新切片・旧切片	新傾き・旧傾き	新切片・旧傾き	旧切片・新切片	旧傾き・新傾き	旧切片・新傾き	新傾き・旧傾き
親密度	.33***		.41*					
ポジティブ感情		.59***				.64***		
拒否感情	.87***		1.65+					
深さの関係認知		.20***				.79***		
対等さの関係認知	.71***		.48**				.79*	
理性－感情的な関係認知							.46***	.11*
親和的行動					.73***	.83**		
主張的行動		.17**				1.09***		
回避的行動					.70***	1.15*		

	新傾き・1回目	新傾き・2回目	新傾き・3回目	新傾き・4回目	新傾き・5回目	旧傾き・1回目	旧傾き・2回目	旧傾き・3回目	旧傾き・4回目	旧傾き・5回目
親密度	.00	.25	.42*	.69***	1.00	.00	.50***	.62**	.90*	1.00
ポジティブ感情	1.00	.60***	.92***	.75***	.00	1.00	.47*	.54**	.33*	.00
拒否感情	.00	1.01**	1.71***	1.96***	1.00	.00	1.24***	1.34***	1.64***	1.00
深さの関係認知	.00	.35*	.61***	.76***	1.00	.00	.60***	.70***	1.06**	1.00
対等さの関係認知	.00	.65***	.99***	.82***	1.00	.00	1.41***	1.41***	.78**	1.00
理性－感情的な関係認知	.00	1.04***	1.37***	1.36***	1.00	.00	1.62**	1.86**	.97**	1.00
親和的行動	.00	.43***	.57***	.49***	1.00	.00	.41***	.69***	.88**	1.00
主張的行動	.00	.53***	.81***	1.03***	1.00	.00	1.44***	2.39**	1.62***	1.00
回避的行動	.00	2.74**	3.45**	3.77**	1.00	.00	1.72**	2.83**	3.48*	1.00

***p<.001　**p<.01　*p<.05

(3)-3-1　親密度得点における検討

親密度得点における適合度は、$\chi^2(36)=40.91$, *n.s.*・CFI=.99・RMSEA=.04 であった。

推定された新友人の切片は 5.33、傾きは.29 であり、旧友人の切

片は 4.69、傾きは-.30 であった。また新友人の切片と傾きの相関係数は-.18 で有意であった。新友人の切片から旧友人への切片に対する影響力は.33（非標準化推定値；$p<.001$）であり、新友人の傾きから旧友人への傾きに対する影響力は.41(非標準化推定値；$p<.05$）であった。（Figure3-2-1 参照）。

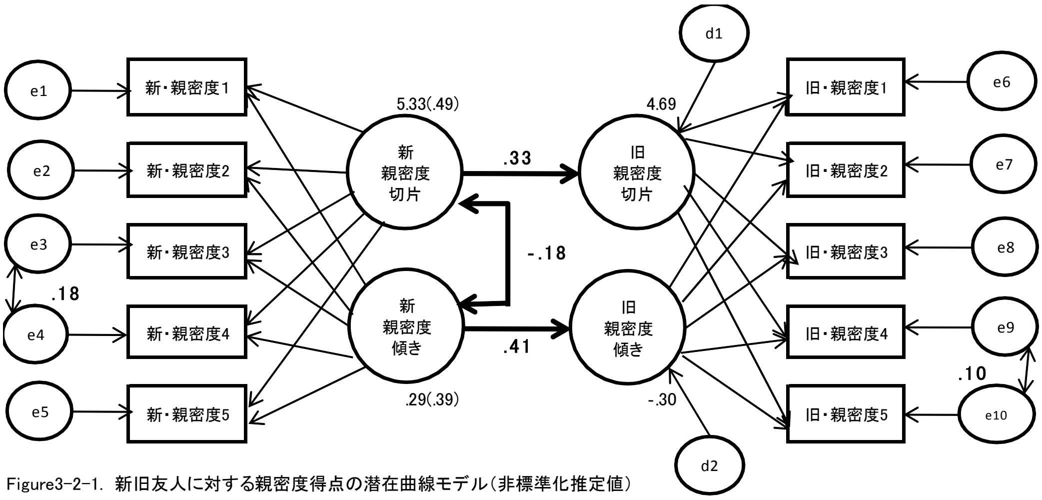


Figure3-2-1. 新旧友人に対する親密度得点の潜在曲線モデル（非標準化推定値）

(3)-3-2　対人感情における検討

ポジティブ感情得点における適合度は、$\chi^2(37)=62.75, p<.01$・CFI=.97・RMSEA=.08 であった。

推定された新友人の切片は 4.96、傾きは 5.05 であり、旧友人の切片は-.52、傾きは.22 であった。また新友人の切片と旧友人の切片の相関係数は.59 で有意であった。旧友人の傾きから新友人への傾きに対する影響力は.64（非標準化推定値；$p<.001$）であった。(Figure3-2-2 参照)。

拒否感情得点における適合度は、$\chi^2(35)=54.74, p<.05$・CFI=.97・RMSEA=.07 であった。

推定された新友人の切片は 1.84、傾きは.19 であり、旧友人の切片は.34、傾きは-.30 であった。新友人の切片から旧友人への切片に対する影響力は.87（非標準化推定値；$p<.001$）であり、新友人の傾きから旧友人への傾きに対する影響力は 1.65（非標準化推定値；$p<.10$）であった。(Figure3-2-3 参照)。

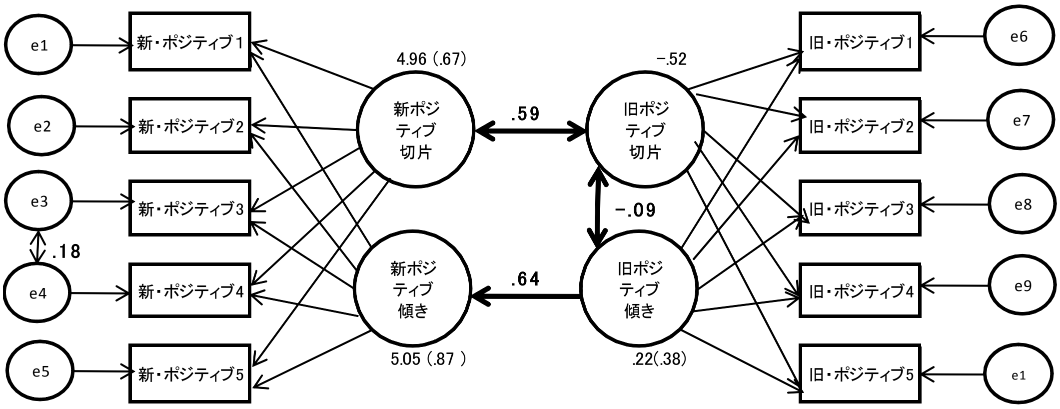


Figure3-2-2. 新旧友人に対するポジティブ感情得点の潜在曲線モデル（非標準化推定値）

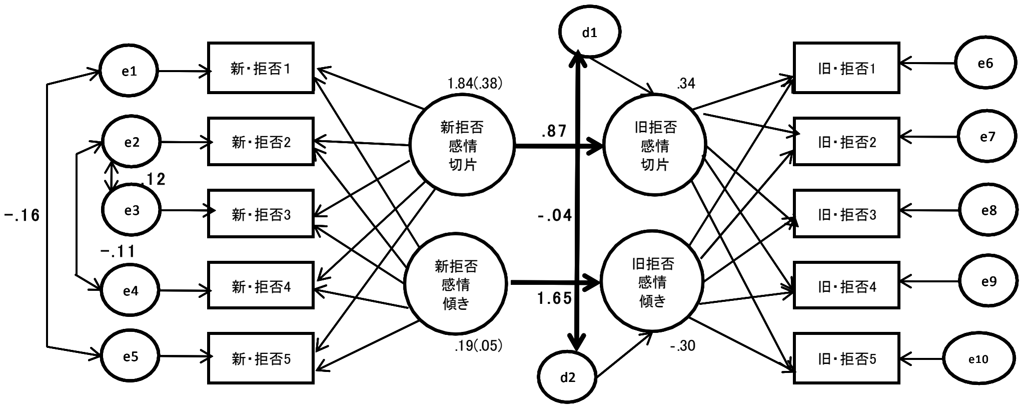


Figure3-2-3. 新旧友人に対する拒否感情得点の潜在曲線モデル（非標準化推定値）

(3)-3-3　二者関係認知における検討

深さの関係認知得点における適合度は、$\chi^2(37)=75.31, p<.001$ ・CFI=.93・RMSEA=.10 であった。

推定された新友人の切片は 5.18、傾きは.34 であり、旧友人の切片は 6.07、傾きは-.01 であった。また新友人の切片と旧友人の切片の相関係数は.20 で有意であった。旧友人の傾きから新友人への傾きに対する影響力は.79（非標準化推定値；$p<.001$）であった。(Figure3-2-4 参照)。

対等さの関係認知得点における適合度は、$\chi^2(34)=54.63, p<.05$ ・CFI=.96・RMSEA=.07 であった。

推定された新友人の切片は 5.80、傾きは-4.67 であり、旧友人の切片は 2.03、傾きは-.03 であった。旧友人の切片から新友人への傾きに対する影響力は.79（非標準化推定値；$p<.05$）であった。また新友人の切片から旧友人への切片に対する影響力は.71(非標準化推定値；$p<.001$)、新友人の傾きから旧友人への傾きに対する影響力は.48（非標準化推定値；$p<.01$）であった(Figure3-2-5 参照)。

理性-感情的な関係認知得点における適合度は、$\chi^2(34)=61.53, p<.01$ ・CFI=.94・RMSEA=.09 であった。

推定された新友人の切片は 4.01、傾きは-2.00 であり、旧友人の切片は 4.45、傾きは-.08 であった。また新友人の傾きと旧友人の傾きの相関係数は.11 で有意であった。旧友人の切片から新友人への傾きに対する影響力は.46（非標準化推定値；$p<.001$）であった。(Figure3-2-6 参照)。

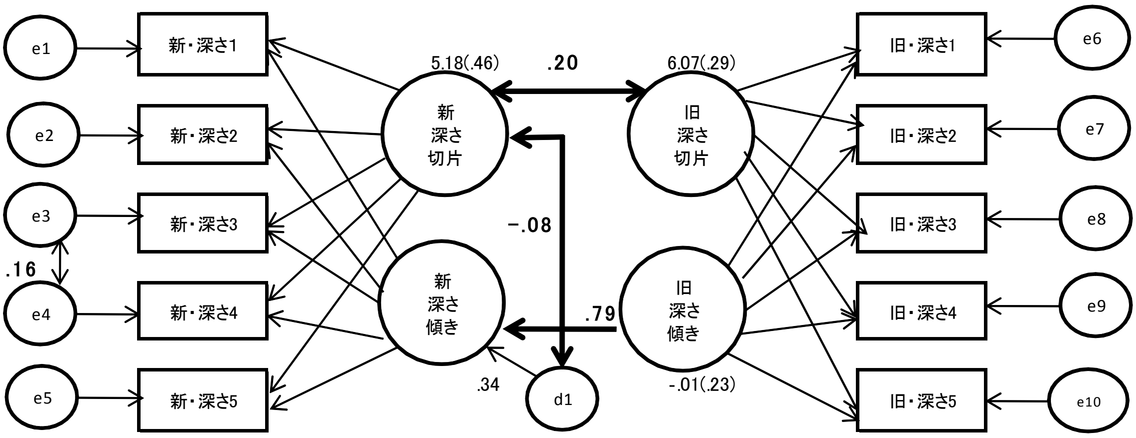


Figure3-2-4. 新旧友人に対する深さの関係認知得点の潜在曲線モデル（非標準化推定値）

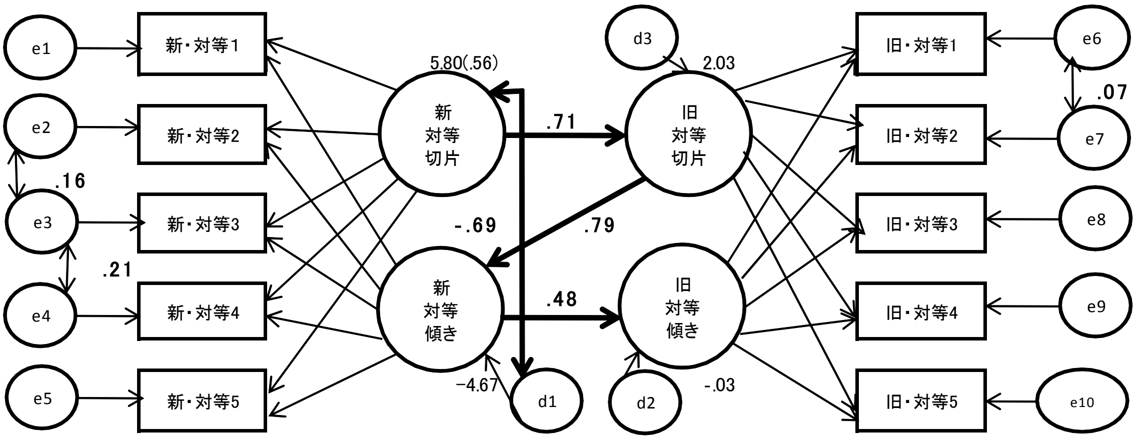


Figure3-2-5. 新旧友人に対する対等さの関係認知得点の潜在曲線モデル（非標準化推定値）

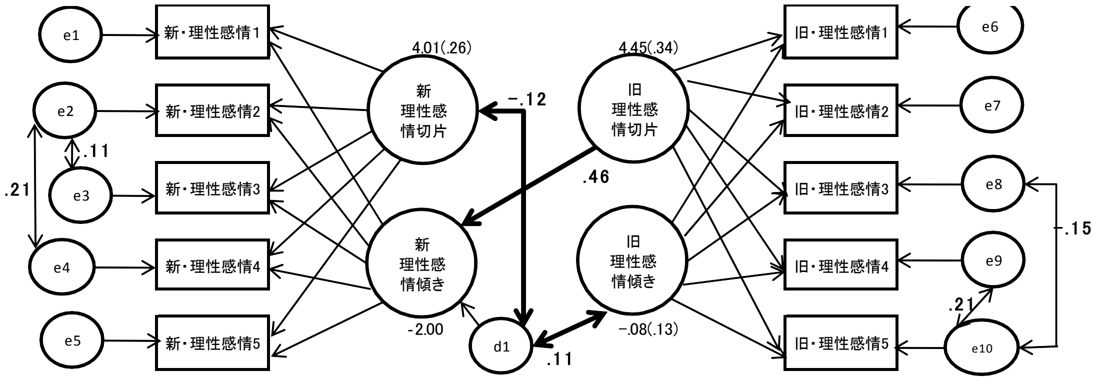


Figure3-2-6. 新旧友人に対する感情的な関係認知得点の潜在曲線モデル（非標準化推定値）

(3)-3-4　対人行動における検討

親和的行動得点における適合度は、$\chi^2(36)=76.37, p<.001$・CFI=.96・RMSEA=.10 であった。

推定された新友人の切片は.45、傾きは 3.70 であり、旧友人の切片は.54、傾きは-.26 であった。旧友人の切片から新友人への切片に対する影響力は.73（非標準化推定値；$p<.001$）であり、旧友人の傾きから新友人への傾きに対する影響力は.83（非標準化推定値；$p<.01$）であった。(Figure3-2-7 参照)。

主張的行動得点における適合度は、$\chi^2(36)=110.28, p<.001$ ・CFI=.91・RMSEA=.14 であった。

推定された新友人の切片は 1.38、傾きは.30 であり、旧友人の切片は 1.81、傾きは.01 であった。また新友人の切片と旧友人の切片の相関係数は.17 で有意であった。旧友人の傾きから新友人への傾きに対する影響力は 1.09（非標準化推定値；$p<.001$）であった。(Figure3-2-8 参照)。

回避的行動得点における適合度は、$\chi^2(34)=160.28,\ p<.001$ ・CFI=.81・RMSEA=.18 であった。

推定された新友人の切片は.35、傾きは.00 であり、旧友人の切片は 1.17、傾きは.02 であった。旧友人の切片から新友人への切片に対する影響力は.70（非標準化推定値；$p<.001$）であり、旧友人の傾きから新友人への傾きに対する影響力は 1.15（非標準化推定値；$p<.05$）であった。（Figure3-2-9 参照)。

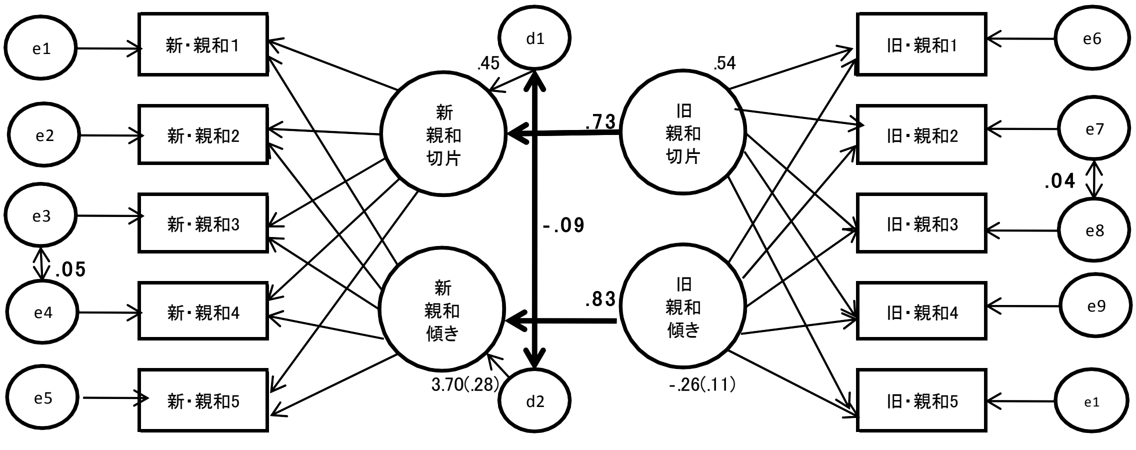


Figure3-2-7. 新旧友人に対する親和的行動得点の潜在曲線モデル（非標準化推定値）

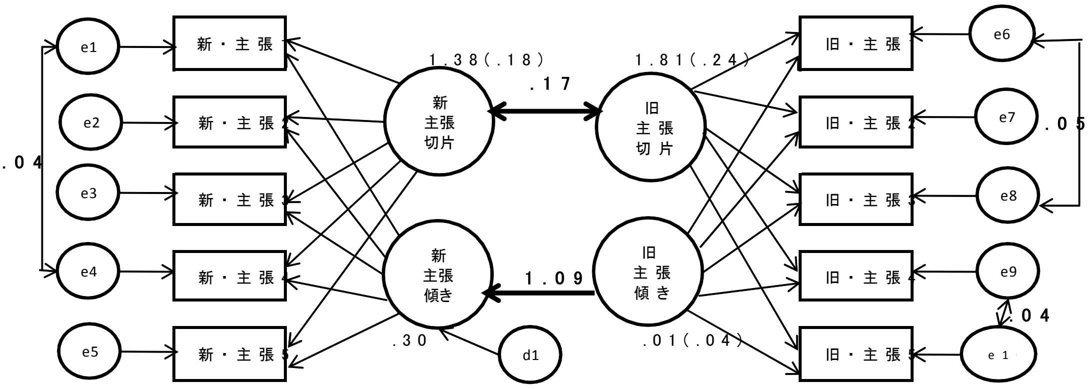


Figure3-2-8. 新旧友人に対する主張的行動得点の潜在曲線モデル(非標準化推定値)

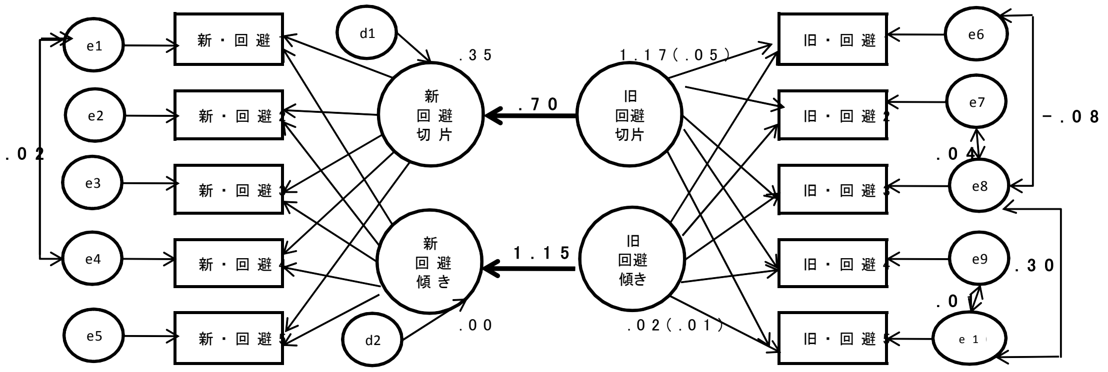


Figure3-2-9. 新旧友人に対する回避的行動得点の潜在曲線モデル(非標準化推定値)

(4) 考察

本章では、5回の追跡調査において、各調査時点での「一番親しい新旧友人」の評定を追跡することから、新旧友人それぞれの推移と差異、及び双方に及ぼす影響について比較検討した。各結果の考察を述べた上で、最後に仮説の可否について論じていく。

(4)-1 対人感情・関係認知・対人行動の因子構造と性差

第1に「対人感情」・「関係認知」・「対人行動」の各指標について、全調査協力者の新友人および旧友人に対する評定を統合し、親しい友人に対する全体の構造として検討した。

「対人感情」では「ポジティブ感情」・「拒否感情」の2因子が見出された。この結果は渡辺(2007b)と因子構造、項目構成、信頼性について、ほぼ同じ結果が得られた。津村ら(1985)の significant others に限定した因子構造の検討では、対人感情の構造として4因子を抽出しているが、津村らの「一体感・信頼」「保護・情愛」は本論文のポジティブ感情に、「畏怖・尊敬・負い目」うち「尊敬したい」のみポジティブ感情に、「畏怖・尊敬・負い目」「優越感・反感」のその他の項目は本研究の「拒否感情」に集約された。津村らの研究

でも significant others に限定した構造の検討であったが、対象は家族、いとこ、大学の先生、先輩・後輩、同性の友人、および異性の友人・恋人といった異性や上下関係が存在する本研究よりも幅広い対象に対する結果である。本研究では、同性の最も親しい新友人と旧友人に対する評定のみであり、対象人物の範囲は極めて狭く、感情の構造が分化されなかったものと考えられる。例えば、甘えたい、かわいいといった「保護・情愛」の感情や負い目を感じる、尊敬したいといった「畏怖・尊敬・負い目」の感情は先生との関係、両親との関係、先輩後輩関係といった上下関係が存在する場合に分化する感情であると考えられる。同性友人関係の特徴のひとつはお互いの立場の「対等性」であるため(遠矢,1996)、これらの感情は分化されず、友人に対して「ポジティブ」な感情を示す程度と、友人に対して「拒否」の感情を示す程度に統合されたものと考えられる。渡辺(2007b)は入学 3 週間目～3 カ月目までの入学当初の検討であり、本章のデータは、1 年 1 ヶ月後までの追跡データであり調査期間の差異があるが、友人に対する感情は、少なくとも入学 1 年後の新旧友人に対して、安定した構造が見られることが明らかになった。また、因子分析の結果による信頼性係数も渡辺(2007b)と変わらない高い値を得ている。本研究では、入学 3 週間後に出会った新友人から、付き合い期間の長い旧友人まで、幅広い友人の測定を対象とするため、一般的な他者への感情を採用した。この尺度の採用によって、友人関係特有の感情面を全て網羅することができなかった可能性への課題は生じたが、友人関係で出会いの初期から生じる感情面を抽出でき、またある程度の期間で継続的に測定可能な感情面を捉えることができたと考える。

「関係認知」では「深さの関係認知」・「対等性の関係認知」・「感情的な関係認知」因子の 3 因子が見出された。渡辺(2007b)における「親密な関係認知」の因子が、本論文では、「深さ」「対等性」に分化した。林ら(1984)の「緊密－表面」「気楽－緊張」「上下－対等」「協調－競合」のうち、本論文では、「上下 - 対等」が「対等性の関係認知」に、その他の内容が「深さの関係認知」に統合された。両因子の因子間相関は.585 と高いものの、各因子の信頼性が高く、因子の解釈も可能であった。本論文の協力者が一番親しい友人に対する関係認知には、関係の「深さ」に関する認知と関係の「対等さ」に関する認知が両方存在することを意味するものである。渡辺(2007b)や本論文では調査協力者の負担を考え、各因子の因子負荷が高い項目を抜粋し、また林ら(1984)の研究で使用された特性語が 20 年以上前に使用されたものであることから現代の大学生が友人関係との関係認知として回答に適すると判断した項目のみ 14 項目を使用している。そのため、林らとは同じ因子構造が得られなかったと

考えられる。また、林ら(1985)は significant others に限定した「関係認知」構造の検討も行っているが、その結果、「気楽－緊張」関係は抽出されなかった。林らはこの考察として、一般的な対人関係では自分にとって「内」側の関係と「外」側の関係認知が存在するが、significant others に対象を限定した場合、「内」の中のみの関係であるためこの因子が抽出されなかったと報告している。本論文の結果でも「気楽 - 緊張」の項目は、「深さ」の認知に含まれていることから、林ら(1985)の結果を支持するものである。一方で感情的な程度を示す関係認知は、渡辺(2007b)と同様に独立のものとして抽出された。

「対人行動」では「親和的行動」･「主張的行動」･「回避的行動」の 3 因子が見出された。この結果は渡辺(2007b)と因子構造、項目構成、信頼性について、ほぼ同じ結果が得られた。今川ら(1984)は一般的行動 55 項目について 9 因子を抽出しているが、本研究では、対等な大学生の友人関係で行動が生起しないと思われる「礼儀」の因子項目を削除し、8 因子の中から代表的な 24 項目を選び使用した。その結果、今川らの「親和」「依存」「友好」は本研究の「親和的行動」に集約された。また今川らの「敵対」は本研究の「主張的行動」に、「服従」は本研究の「回避的行動」に相当するが、その他の「優越」「支配」「拒否」は、項目によって本研究の「主張的行動」と「回避的行動」に項目によってそれぞれ組み込まれる結果となった。「主張的行動」と「回避的行動」には中程度の正の因子間相関(.570)が見出されている。すなわち 2 つの因子が、協力者の中で似たような認知がなされている可能性がある。友人に項目内容を比較すると、「主張的行動」は忠告する、反抗するなど直接的で積極的な関わりを、「回避的行動」は無視する、避けるなど、友人との距離を保つ消極的な関わりを示す行動と捉えられる。両因子とも親しい友人に対する行動項目として、否定的、拒否的側面を反映しつつも、積極的な関わりをもつ行動か、消極的な関わりをもつ行動が親しい友人との付き合いに中では別次元の側面として分化したものと考えられる。また「関係認知」同様に項目を抜粋(55 項目→24 項目)していることも、先行研究と同じ構造が得られなかった要因として考えられる。

次に、上記の因子構造から得られた各評定平均値について、性差の検討を行った。その結果親密さの程度・ポジティブ感情・深さと対等さの関係認知・親和的な行動についていずれも女性の得点が男性よりも高く、新友人に対する拒否感情は男性の方が高かった。榎本（1999）によると、男性では、ライバル意識や葛藤が女子よりも強く、女性では信頼・安定や不安・懸念が男性よりも強く感じていることを報告している。本研究では、女性が男性よりも友人に対して、全般的にポジティブな指標である親密さ・親しみを示す感情や

認知・行動面を高く評定しており、榎本(1999)の知見を一部支持した。拒否感情（新友人のみ）は男性の方が女性よりも高く認知しており、新しく出会った友人に対して、男性では女性より反発感や優越感を抱いており、この性差が親密化過程にも影響する可能性がある。

一方で感情的な認知・主張的行動・回避的行動について性差が見られなかった。本研究では男性の協力者が少ないため、この結果を一般化することは難しいと考えるが、友人関係研究では性差が指摘されているため、今後は性別の検討が課題となる。

(4)-2 親密度・対人感情・関係認知・対人行動の新旧友人関係の推移

第 2 に、親密さの程度及び「対人感情」「関係認知」「対人行動」の各因子における評定平均値について、大学入学 3 週間目から大学入学 1 年 1 か月後の「一番親しい友人」に対する評定の推移を新旧友人の観点から比較した。

親密さの推移では、一貫して旧友人への親密さの程度が新友人よりも高く、旧友人への親密さの程度は高い数値で安定していることが明らかになった。また、新友人の得点は 1 年 1 か月後に入学初期段階及び大学 3 か月後よりも有意に高く、一番親しい友人に対する親密さが時間の推移にしたがい、高まっていくことが明らかになった。また、二者関係認知の深さの関係認知においても、親密さの推移と同様に、旧友人との関係について一貫して、新友人よりも深く認知しており、新友人に対する認知では、5 回目調査時点において、そのほかの調査時点よりも関係がより深まったと認知していることが明らかになった。新友人への親密さや二者関係における深さの認知は、知り合ってから 1 年間の付き合いの中でより高まっていくものであるが、それでもなお、古くからの友人に対する高く安定した親密さや深さの認知には及ばないものであることが明らかになった。

対人感情におけるポジティブ感情、二者関係認知の対等性の認知、対人行動の親和的行動得点では、1 回目から 4 回目における指標の比較では、いずれも旧友人に対しての得点が高かったが、5 回目調査時点における新旧友人間の差が見られなかった。すなわち、友人に対して優しくしたいといった感情や、関係が対等であることの認知、協力するといった友人に対する親和的な行動は、新友人との日々ともに過ごす生活の中で、より旧友人に対する評価に近づいていく過程を示すものである。特に、入学当初行っていた親和的な行動の頻度は、同大学内の付き合い頻度の高い新友人では時間の経過とともに高まり、旧友人に対しては、相対的に減少してきたことを示しており、具体的な行動面について、新旧友人に対して行動頻度の変

容が、他の指標に比べて、顕著に示された。

拒否感情、および二者関係認知の感情的な関係認知では、いずれの友人に対しても、入学直後よりも入学１年後の拒否感情が、高まり、感情的な認知が増していた。また、感情的な認知については、旧友人との関係について、新友人よりも感情的な認知をしていた。時間の経過とともに、友人に対する感情面や関係を認知する側面について感じる程度が変動していることが明らかになった。拒否感情の項目内容は「反発感」・「軽蔑」・「ライバル意識」に関する内容が含まれている。1 年間の間に様々な経験を共有する中で、初期には抱く程度が低かったような感情面の変化を示すものである。友人関係の形成から推移では、より親しくなりポジティブな感情や認知が増すという側面とネガティブな感情面も若干強く認知されるように変動するという別の側面も明らかにされた。

対人行動の主張的行動では、大学入学半年後(4 回目)には、新旧友人の頻度の差が見られなくなり、新友人に対する主張的行動の頻度が、大学入学１年１か月後（５回目）では、他の調査時点よりも高まっていた。時間の推移ととともに、主張的行動の頻度が増えていくことが明らかになった。注意すべき点として主張的行動の項目内容は忠告する、反抗するなど直接的で積極的でネガティブな関わり合いの行動であると考えられるが、全体的傾向として評定平均値は低く推移していた。新旧友人間および新友人の調査時点間に有意差が見られたとはいえ、親しい友人の関係の中で行動頻度が低い行動であることを考慮すべきである。よって、これから新しい友人関係を築いていく新友人に対しては、より主張的行動の頻度が低く、特に出会って 3 週間の初期段階では、行動頻度が低かったと考えられる。しかしながら、主張的行動を行う頻度が高まることは親密な友人関係の付き合いの中で必ずしもネガティブな方向だけに作用するものではない可能性がある。同性友人関係の特徴のひとつはお互いの立場の「対等性」である(遠矢,1996)。本研究で旧友人の方が新友人よりも行動頻度が多いことが示されたことは、付き合いが長く安定している関係の旧友人に対しては「対等」な関係が確立されているが故に、「忠告」・「反抗」・「自慢」といった主張的関わりを行うことが可能となる関係である可能性を示唆し、頻度がやや増したものとも考えられる。新友人に対しても時間の経過の中で知り合い期間が長くなり、主張的行動を行う頻度も出会いの初期段階よりも増してきたものと考えられる。

回避的行動では新友人で 4・5 回目調査時点の行動頻度が 1 回目よりも高いことが示された。回避的行動の評定平均値は全体的に低く、有意差が見られたとはいえ、親しい友人の関係の中ではまず行動頻度が非常に低い行動であることを考慮すべきである。前述のよ

うに、1 回目調査時点は、新友人との関係はもちろんのこと、旧友人との関係においても、高校を卒業し別環境での生活がそれぞれスタートしている可能性があり、新たな関係の出発地点である。このような関係の出発点において「避ける」、「無視する」といった回避的行動を多く行うことはどちらの友人関係の形成・再構成が進展しない可能性があり、いずれの関係においても頻度が低いという結果につながったものと考えられる。

(4)-3 親密度・対人感情・関係認知・対人行動の新旧友人関係の推移と影響関係の検討

第 3 に、同一協力者の時系列データを使用し潜在曲線モデルを採用することから、新旧友人に推移モデルが適合するのかを検討し、さらにその推移モデルの中で、新旧友人関係に双方の影響関係を探索的に検討した。その結果、親密度・対人感情・関係認知の対等さと感情的な認知のモデルでは、傾きのパスに自由度を与える等の改良によりほぼ満足できる適合度に達した。一方で、関係認知の深さ、及び対人行動のモデルはやや適合度が劣るものであった。この結果については、各評定の推移が一次関数的な直線的な推移ではなかったため、モデルの適合が高まらなかったと考えられる。

新旧友人の切片と傾きに関する影響関係のパスについては、①新友人から旧友人へのパス、②旧友人から新友人へのパス、③双方向のパスの 3 パターンが抽出される可能性がある。したがって、探索的にパスを想定し、有意なパスのみを設定し、最終的に最も適合度が高いモデルを採用した。全体的傾向として、対人行動のモデル(親和的・主張的・回避的)では、初期値（切片）および変動（傾き）の旧友人から新友人への正の影響力が示された。この結果は、古くからの知り合っている旧友人に対する行動の頻度が協力者にとっての友人に対する行動のベースとなり、それが新友人との新たな関係でもその影響を反映させていた可能性がある。一方で、親密度・拒否感情・対等さの関係認知の 3 つのモデルでは、初期値（切片）および変動（傾き）の新友人から旧友人への正の影響力が示された。知り合ったばかりの新友人に対しての親密度や対等さの初期値、及びその変動は、旧友人への評定に影響することが明らかになった。すなわち初期段階から新友人に対して親密さを持つこと、対等な人間関係であることは旧友人との大学入学直後の関係に影響を与え、その変動についても新友人に対する親密度や対等さの認知の伸びが、旧友人に対する評定の伸びにも影響していた。一方で拒否感情は、友人に対する反発感やライバル心といった内容であるが、親密度と対等な関係の認知といったようなポジティブな内容のモデルと同様の影響関係が得られたことは興味深い知見である。先に述べたよう

に、拒否感情は新旧友人ともに入学直後よりも1年後で、このような感情をやや強く感じていた。入学して1年が経過し、大学生活に対しての緊張感は、初期よりも少なくなり安定した段階であろう。新友人と関係においても初期の段階では生起しにくかった反発感のような感情が徐々に表出するようになったという伸びが旧友人への感情面の伸びにも反映する結果として示されたものである。ポジティブ感情と深さの関係認知では、新旧友人の初期値は双方向の影響が示され、旧友人のポジティブ感情と深さの関係認知の伸びが新友人の評定の伸びに影響していた。友人に対しての信頼感や親しさの感情や、友人の関係について深さを認知する指標の初期値やその推移は友人関係の親密化過程で重要な要因であると考えられるが、伸びについて旧友人から新友人に有意な正の影響が示されたことは、旧友人との関係で培っている認知の推移が新友人の評定に反映することを示した。また、対等さの認知と、感情的な認知の旧友人に対する初期値が、新友人の伸びに影響を与えていた。旧友人に対する第1回目の評定が高いほど新友人に対してより対等だと感じ、より感情的だと感じる認知の伸びに影響を示す結果である。入学直後に感じていた旧友人への認知が、その後の新友人の評定の推移に影響を与えていることを示した。

潜在曲線モデルついては、縦断的なデータについて予測可能なことや切片や傾きの平均値を求めることで集団全体の傾向を把握することが可能なことであるため(小塩,2005b)、本研究のような時系列データでは、有用な手法であると考えられる。しかしながら、分析の前提が直線的な伸びを示すことであり、本研究では、いくつかの修正を必要とした。その結果、解釈が難しいモデルもが存在したことも事実である。今後の課題としてモデルの改良が望まれる。

(4)-4　仮説の検証

以上の考察を踏まえ、本章で提示した仮説の検証を行っていく。

「仮説1　入学1年1か月後の新友人に対する親密さの程度は入学3週間後よりも高く評定される。」は5回目の親密度得点が1・3回目の得点よりも高まっていたことから、支持された。また新友人に対する評定についてはポジティブな側面だけでなく、拒否感情や主張的行動といった一見友人に対する感情・行動面としてはネガティブな側面についてもその評定が高まることが示された。

「仮説2　旧友人に対する親密さは新友人よりも高く評定される」は旧友人に対する親密さは新友人と比べ、安定し高い値を示していたため、支持された。和田(2001)・多川(2006)では入学6カ月後の旧友人に対する親密さの高さを示しているが、本研究では、入学1年を経過した段階での旧友人への高い親密さを維持していることを

明らかにした。
「仮説 3　旧友人の各評定が新友人への各評定に影響を与える。」は潜在曲線モデルを使用した分析により検証された。その結果全体的傾向として、友人に対する行動面は古くからの友人の頻度が新友人への行動に正の影響を与え、親密さ・対人感情・関係認知では、その指標により、身近な新友人への評定が旧友人への評定に正の影響を与えている指標と双方向および新友人から旧友人に正の影響を与える指標がそれぞれ得られたことから、仮説は一部支持された。新旧友人関係は、古くからの旧友人関係が新友人関係に影響を与えるだけでなく、双方に影響を与えていることが明らかになった。

第 3 節　友人関係期待における新旧友人の比較検討

(1)　目的と仮説

第 3 節の目的は、入学 7 カ月後に測定した「友人関係期待」おいて、新旧友人に対する友人関係に期待するものの差異を明らかにすることである。また、新旧友人の関係期待について、その認知構造についても比較検討する。和田(2001)は、新旧友人の友人関係期待について、大学 1-2 年生を対象とし 11 月に測定し新旧友人の関係期待を比較している。その結果、新友人には「情報」「協力」「共行動」を重視し、旧友人は新友人よりも「自己向上」「真正さ」「自己開示」を重視していることを明らかにした。本節でも、3 回目の調査時点までに測定してきた指標だけでなく、友人関係期待という新たな視点を追加し、新旧友人の差異を検討することを目的とする。和田(2001)と同時期の測定をすることで、適切な比較が可能となることを想定し、大学 1 年生の 11 月(第 4 回目調査時点)で測定し、以下の仮説を検証する。

仮説　新友人と旧友人への関係期待は異なるものである。新友人では身近な友人としての「情報」「協力」「共行動」の期待が、旧友人には「自己向上」「自己開示」「真正さ」の深い付き合いとしての関係期待が重視される。

(2)　方法

(2)-1 調査協力者

北海道内の大学 1 年生を対象とし、質問紙調査を行った。友人関係期待の検討については、第 4 回目調査データをのみを測定したた

め、190名（男性50名・女性190名）を分析対象とした。

(2)-2 調査時期

2006年11月上旬に質問紙調査を行った。

(2)-3 質問紙の内容

5回の追跡的調査に使用した質問紙の共通項目については、第2節で記載済みであり、第3節では使用しないため詳細を割愛する。

(2)-3-1 友人関係期待（4回目調査時点のみ回答）の測定

和田(1993)による同性の友人関係に望むもの10領域(協力、情報、類似、自己向上、敏感さ、共行動、真正さ、自己開示、尊重、相互依存）を使用し、新旧友人との関係について、それぞれもっとも重要だと思う領域を1位に、以下10位まで順位をつけさせた。

友人関係に対する期待項目を資料Eとして添付する。

(3) 結果

(3)-1 新友人と旧友人における友人関係期待の差異

第4回目調査時点で実施した友人関係期待の項目をTable3-3-1に示す。

Table3-3-1. 友人関係期待10領域の項目内容

	質問項目	領域名
1	互いに協力し合える。困ったとき助けてくれる。	協力
2	話題が豊富で楽しい。自分の知らないことを教えてくれる。	情報
3	趣味や好みが一致している。性格が似ている。	類似
4	いろいろな面で刺激を与えてくれる。自分を向上させてくれる。	自己向上
5	よく気がつく。自分の気持ちを察してくれる。	敏感さ
6	何かにつけ、一緒に行動できる。いつも一緒にいる。	共行動
7	言いたいことが言い合える。利害関係なく付き合える。	真正さ
8	悩みをうちあけることができる。何でも話してくれる。	自己開示
9	自分を必要としてくれる。互いの個性を尊重しあえる。	尊重
10	互いに役に立つことができる。甘えられる。	相互依存

友人関係期待における各領域で、新旧友人に対する期待の順位に差が見られるかを検討するために、各領域別に符号検定を行った（Table3-3-2参照）。その結果、「共行動(Z= -3.70、p< .001)」では新友人への期待が旧友人よりも有意に高かった。一方、「自己開示(Z= -3.14、p< .01)」・「尊重(Z= -.2.68、p< .01)」「真正さ(Z= -.1.26、p< .10)」では旧友人への期待が新友人よりも有意に高かった。よって「共行動」では新友人の、また「自己開示」「尊重」では旧友人の

期待が高いことが示された。

Table3-3-2. 新旧友人の友人関係期待10領域の順位

	協力	情報	類似	自己向上	敏感さ	共行動	真正さ	自己開示	尊重	相互依存
旧友人＜新友人:順位	61	66	69	77	78	54	85	97	88	70
新友人＜旧友人:順位	74	81	74	72	75	101	63	57	55	63
同順位	55	43	47	40	37	35	42	36	47	57
符号検定(Z値)	−1.03	−1.16	−0.33	−0.33	−0.16	−3.70	−1.26	−3.14	−2.68	−0.52
p値	.302	.248	.738	.743	.872	.000	.084	.002	.007	.603

(3)-2　新友人と旧友人における友人関係期待の認知構造

次に、友人関係期待 10 領域における新旧友人への認知構造を検討するために、多次元尺度法(ALSCAL) を使用した。はじめに、10 領域の各領域間における順位差の絶対値を算出し、調査協力者別に距離行列を作成し分析に使用した。新旧友人とも解釈可能性を考慮し、2 次元解釈を採用した。適合度指標は新友人では R^2= .28・Stress=.34、旧友人では R^2= .29・Stress=.31 であった。新旧友人との関係期待の各領域の布置を Figure3-3-1 に示す。新旧友人への関係期待において「情報と類似」、「敏感さと自己向上」がいずれの友人についても近い位置に布置され、共通した認知構造であることが明らかになった。また新友人では「情報・類似・協力」「真正さ・共行動・自己開示」「自己向上・敏感さ」が近くに布置されているが、旧友人の布置は新友人に比べ、単独項目での布置が多かった。

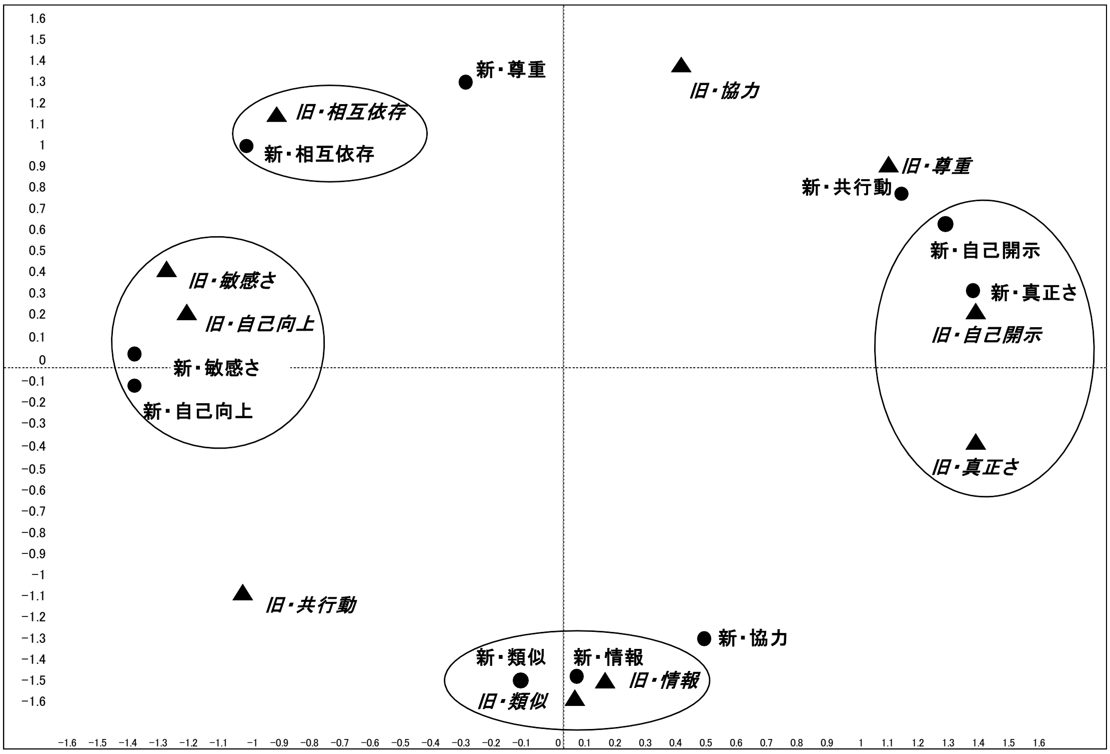


Figure3-3-1. 新・旧友人との友人関係期待の布置　　●＝新友人・▲＝旧友人

(4) 考察

(4)-1 新旧友人に対する友人関係期待

本節では、新旧友人に対する友人関係期待の差異を期待順位の差異と布置構造の観点から検討を行った。順位付けによって新旧友人の差異を検討したところ、同じ生活環境で時間を共有することの多い新友人に対しては、「一緒に行動すること」が、一方で出会ってからの期間が長く、深い信頼関係が築かれていると考えられる旧友人に対しては、新友人に比べて、「自己開示すること」、「言いたいことが言い合える関係」「自分を必要としてくれる」などの関係を重視していることが明らかになった。この結果は新友人には日常生活で頼りになる存在としての期待があり、旧友人に対してはより内面を重視する深い関係を期待していることがうかがえる結果である。

さらに本研究では、多次元尺度法を使用し、その布置から新旧友人の関係期待の構造も明らかにした。各領域への期待の順位が近ければ、その領域同士が近い位置に布置されている。新旧友人ともに「情報と類似」「敏感さと自己向上」は近くに布置され、親しい友人に対する共通した認知構造が得られた。また新友人では、「協力」が「情報と類似」と、「共行動」が「自己開示と真正さ」と近い位置に布置されたが、旧友人の「協力」や「共行動」の布置は、他の領域とは単独の位置に布置された。この差異は、付き合い方の差異であるためと考えられる。「協力」や「共行動」が付き合い頻度等、生活環境の共有度に関連する期待であるため新友人の場合他の領域と近い認知構造が得られたものと考えられる。旧友人への関係期待 10項目の布置は、新友人と比べて、項目間の距離が大きかった。「協力」や「共行動」の期待項目離れた位置に布置された。旧友人の場合には、様々な付き合い方が想定される。例えば、大学入学時に遠距離に存在する関係となり直接的な相互作用が年に数回の友人関係、近くの環境に存在しているが大学入学以前よりも付き合い頻度が減っている友人関係、比較的近くの環境の中で交流を続けている友人関係等様々な友人関係の状況が想定される。また旧友人は新友人よりも付き合いが長く、すでに深い関係を築いていた可能性が高い。旧友人の場合、付き合い方の個人差と関係の深さがあるために、各協力者は友人に対して関係期待の差異を明確に認知し、その構造が単独の布置という結果に示されたと想像される。すなわち旧友人では期待項目がそれぞれ別の次元として認知され、存在していることを示す結果である。

本節の課題について述べる。友人関係期待の測定について本研究では協力者の回答への負担を軽減するために、10個の項目内容について 1位から 10位まで順位をつけてもらう手続きを採用した。一

方和田(2001)は、項目同士を一対比較させることで評定させていた。得られた結果は先行研究をおおむね支持するものであったが、関係期待 10 項目はいずれも友人関係で重要な期待であり、優劣を決めることが協力者にとって回答しにくい手続きであったことが懸念される。したがって、今後の課題として手続きの工夫が望まれる。

(4)-2　仮説の検証

「仮説　新友人と旧友人への関係期待は異なる。新友人では身近な友人としての「情報」「協力」「共行動」の期待が、旧友人には「自己向上」「自己開示」「真正さ」の深い付き合いとしての関係期待が重視される。」について検証していく。和田（2001）の結果と比較すると、すべての項目ではないが、「共行動」「真正さ」「自己開示」では、同様の結果を得た。したがって仮説は一部支持された。和田(2001)では、大学 1-2 年生が対象であり、本研究では、1 年生のみが対象であった。また、先述の課題で述べたように、測定方法も異なっていた。このような差異があったとしても和田(2001)の結果を一部支持できたことで、その新旧人に対する期待には、安定し、異なる認知として抽出されるものであることを明らかにした。

第 4 節　研究 1 の考察

第 2 節と第 3 節から得られた結果から研究 1 の考察を行う。

本章では、第 1 に大学入学後の大学生に対し、追跡的調査から、一番親しい新旧友人に対する評定を比較し、その推移を明らかにした。その結果、全体的傾向として、入学 3 週間から入学 1 年 1 か月後では、いずれの調査時点でも旧友人に対する親密さやポジティブな関係を認知していることが明らかになった。また、友人関係期待の指標から、新友人と旧友人では、その友人に対して期待するものが異なっており、また認知構造も異なるとから、和田（2001）が指摘するように、相補的な役割が存在することが明らかになった

大学入学 1 年 1 か月後（5 回目調査）の比較では、4 つの指標で新旧友人にその差が見られなかった。つまり、入学 1 年程度が経過し、旧友人に比べ、日々の日常生活で一緒に過ごす時間の長い一番親しい新友人に対する認知が、旧友人に対する認知と変わらないものに変化しつつあることを示す結果である。新友人に対する各評定の全体的傾向では、親密さやポジティブな感情、深さや対等的な関係認知、親和的・主張的行動が、徐々に高まっている傾向が示され、一方、旧友人に対しては親和的行動では、少しずつその頻度が減っていることが明らかになったものの、全体的傾向としては、その親

密さやポジティブな感情・認知の変動が少なく、安定したものであることを示唆した。旧友人に対する安定した親密な認知ついては、その要因の一つとして協力者の居住状況や現在の付き合い方の特徴があげられる。本論文の協力者の73%が親と同居し、自宅から通学する学生であった。すなわち、大学進学前の居住状況のまま、新生活を送っている事実を示す。この結果から身近に旧友人がいる協力者が身近に存在する可能性がある。また、電話やメール・インターネット上のコミュニケーションも可能な時代である。進学という環境の変化により、以前よりも旧友人との付き合い頻度が減ったとしても、上記のような要因から旧友人に対しては変わらない認知が持続する結果につながったと考えられる。また新旧友人の影響関係を検討したところ、全般的な傾向として顕在的な友人に対する行動面は古くからの友人の頻度が新友人への行動に正の影響を与えていたことが明らかになった。一方で内面的な親密さ・対人感情・関係認知では、その指標により、身近な新友人への評定が旧友人への評定に正の影響を与えている指標と双方向および新友人から旧友人に正の影響を与える指標がそれぞれ確認された。新旧友人関係は、古くからの旧友人関係が新友人関係に影響を与えるだけでなく、双方に影響を与えつつ存在している状況が明らかになった。

また、入学半年後に測定した、友人関係で期待するものについて、その期待の順位と布置構造から検討した。その結果、新友人と旧友人において、その期待に差異があることが明らかになった。新友人に対しては、「一緒に行動すること」が、一方で出会ってからの期間が長く、深い信頼関係が築かれていると考えられる旧友人に対しては、新友人に比べて、「自己開示すること」、「言いたいことが言い合える関係」「自分を必要としてくれる」などの関係を重視しており、布置構造についても、新友人では、各領域がいくつかのカテゴリにまとまったのに対し、旧友人に対しては10領域がそれぞれ個々に布置されていた。新友人との関係の特徴は、常に学校生活において接する頻度が高く、友人関係においても期待が、日々の生活の具体的な友人との付き合いと関連し評定されたのに対し、旧友人は、進学により付き合い方には個人差があり、また古くからの付き合いを反映した親しさや安定した認知の中で評定されているため、個々の期待が別次元のものとして布置されたものと推定される。

旧友人の存在については、旧友人を強く思う感情や相互作用は大学入学後の孤独感を高めること五十嵐・吉田,2003；Paul & Brier,2001)、また、旧友人関係の在り方が新友人関係にも反映すること（和田,2001）が示されてきた。本研究で得られた知見は、新旧友人関係は少なくとも入学1年後までは、それぞれの関係期待を持ち、新旧友人への各評定が変動することが示唆された。また一方

の関係が他方の関係に反映されるだけでなく、双方向に影響し合う関係として存在していることが明らかになった。

第5節　本章のまとめ

本章では、大学新入生が新しい友人関係を形成する際に、新友人関係のみを追跡するのではなく、複数友人関係で構成されることの背景の一つとして、入学する前からの知り合っている旧友人関係にも注目し、両者の関係を追跡的に比較することを目的とした。

第1に大学新入生に対して、5回の追跡調査を行った。その際、一番親しい大学入学後の友人（新友人）と大学入学前に知り合った一番親しい友人（旧友人）を、毎回の調査で選択させ、比較検討した。第2節の結果、入学から1年1ヶ月間の追跡的調査では、全体として旧友人に対する安定した親密さや関係認知、ポジティブな感情を確認した。その一方で、新友人に対しては、時間の経過とともに、親密度が増し、深さや対等性の関係認知が高まり、親和的行動や主張的行動の頻度が増していた。この結果から、出会い初期からの親密化過程では、親密さや、友人に対する感情、関係認知が少しずつ高まり、行動面の頻度も高まることを示した。また、新旧友人関係の各評定は双方向への影響関係があることが明らかにされたことから、個々の推移状況と双方の評定が影響し合うという両側面の特徴を確認した。第3節の結果では、友人に対する期待には、新旧友人へのそれぞれの期待があることが明らかにされた。新旧友人の差異はその付き合い期間に応じた親しさのレベルの差異という観点だけではなく、接触頻度が高く、日々の生活で常に接している可能性が高い友人と、古くからの付き合いを経験している友人には、関係に対する期待や機能面の認知構造にも差異がある可能性を示唆した。

新旧友人関係は、双方に影響を与えつつ同時期に存在するものである。その時間的推移の中で各友人に対する評定は変動し、その関係期待には、明らかな差異を認知していることが本章の検討により実証された。

註）

[1]この研究の一部は「渡辺舞(2009).　新旧友人への友人関係期待が友人関係に及ぼす影響　北星学園大学大学院論集,**12**,123-140.」にて発表された。

2)潜在曲線モデルのポジティブ感情の傾きのパスについて他の変数同様に、1回目調査時点を「0」、5回目調査時点を「1」と設定したところ、2回目・3回目・4回目のパスが負の値(有意ではない値)を示し、モデルとして成立しなかった。ポジティブ感情の1回目調査時点を「1」、5回目調査時点を「0」と設定したところ、適合度の良いモデルを得ることができたため、このモデルを採用した。

第４章　研究２　大学生の一番親しい友人の選択に関する追跡的研究 1）2）

第１節　研究２の目的

研究２では、本研究の各調査時点で「一番親しい友人」を選択してもらう手続きにより明らかにされる新友人の友人選択に注目し、大学生による新友人の選択の推移を検討することを目的とする。本研究では、調査時点間で同じ友人を選択することまたは友人を変更することを「友人選択」と定義し、以下で使用していく。具体的には、第１に、調査時点によって、大学生の一番親しい友人に対する友人選択状況を明らかにしたうえで、友人選択が各評定に及ぼす影響を検討する。また５回の調査時点の推移について、協力者を４群パターンに分類し、５回の評定値の推移状況を検討する。第２に友人選択に関わる要因について検討する。第３に大学１年時から４年時の一連の調査から大学生活全般にわたる友人選択状況を明らかにする。

第２節　友人選択が友人関係の評定に及ぼす影響の検討

(1)　目的と仮説

第２節の目的は、新友人について、各調査時点における友人選択の推移の検討、および各調査時点において選択された友人への評定の推移を検討していくことを目的とする。

二者の親密化が関係の初期に決定されるとされる「関係性の初期分化現象（early differentiation of relatedness ; Berg &Clark, 1986)」に従って以下の仮説を検証する。

仮説：入学当初に選択した友人を変更しない協力者の初期の親密さは、後に友人を変更する協力者よりも高く評定される。

(2) 方法

(2)-1 調査協力者

北海道内の大学1年生を対象とし、質問紙調査を行った。1回目の調査参加者は227名であり、以下2回目は186名、3回目は204名、4回目は190名、5回目は243名であった。第2節では5回の調査全てに参加した115名（男性29名・女性86名）を分析対象とした。

(2)-2 調査時期

1回目調査の実施は2006年4月下旬であり、以下2回目は2006年6月上旬､3回目は2006年7月上旬､4回目は2006年11月上旬、5回目は2007年5月中旬に調査を実施した。調査回数は全5回であった。

(2)-3 質問紙の内容

質問紙の内容は、第3章第2節で記載済みであるため、詳細については割愛する。

(2)-3-1 基本的属性および住居状況

(2)-3-2 同性友人のイニシャルの記入

「新友人」として大学に入学してから知り合った人で一番親しい同性友人を、また「旧友人」として大学に入学する前に知り合った人で一番親しい同性友人を想起するように教示した上で、それぞれのイニシャルを記入させた。また、2回目以降の調査では、前回選択した友人と同じ人物を想起したかを確認するために「1. 同じ人物」「2. 違う人物」「3. 覚えていない」の3項目から当てはまるものを選択させた。

(2)-3-3 選択友人との関係

友人と出会った場所・知り合ってからの期間・友人との接触頻度：電話やメールで接触頻度・旧友人の現在の生活状況について回答を求めた。

(2)-3-4 関係の親密さの測定

好意度・関係関与度・関係のラベリングの3項目を使用した。

(2)-3-5 対人感情の測定

津村・大坊・林・今川（1985）の対人感情項目18項目のうち、16項目を抜粋して使用した。

(2)-3-6 関係認知の測定

林・今川・津村・大坊（1984）の二者関係認知項目30項目のうち、14項目を抜粋して使用した。

(2)-3-7 対人行動の測定

今川・津村・大坊・林（1984）の対人行動55項目のうち、24項目を抜粋して使用した。

(3) 結果

(3)-1 一番親しい友人の選択状況

本研究では5回にわたる追跡的調査を行ったが、その際対象友人を固定せず、各調査時点での最も親しい友人を選択し、評定してもらう手続きをとった。調査協力者が友人を前回の人物と「違う人物」と回答していてイニシャルが一致している場合は分析から基本的に除外した。本人確認がデータの性質に影響を与えているかの検証を行った上[3)]で、「同じ人物」と回答していてイニシャルが不一致の場合は、違う人物を選択したと判断し、「覚えていない」と回答した場合には、イニシャルの一致状況を採用した。

「1-2回目」、「2-3回目」、「3-4回目」、「4-5回目」の友人選択状況をTable4-2-1に示す。新友人について、1回目の調査時点から5回目の調査時点まで一貫して同じ友人を選択した調査協力者は29名（25.22%）であった。なお結果(3)-2の分析では、調査時点間で同じ友人を一番親しい友人として選択した群を「一致群」、調査時点間で一番親しい友人を変更した群を「不一致群」として扱うこととする。

尚、旧友人に関しては、各時点間で、同じ友人を選択した協力者が、約70%～78%前後であることが確認された。第3章で、旧友人に対する安定した感情・認知・行動面の時点推移も確認されたことから、本章では、新友人に対する友人選択のみに焦点を絞り、以下の分析を進めていく。

Table4-2-1. 新友人と旧友人の人物選択状況(N=115)

	新友人				旧友人			
	1-2回目	2-3回目	3-4回目	4-5回目	1-2回目	2-3回目	3-4回目	4-5回目
同じ人物(一致)	62	75	79	66	80	90	85	88
	(53.91)	(65.22)	(68.70)	(57.39)	(69.57)	(78.26)	(73.91)	(76.52)
違う人物(不一致)	53	40	36	49	35	25	30	27
	(46.09)	(34.78)	(31.30)	(42.60)	(30.43)	(21.74)	(26.09)	(23.48)

( )＝%

新友人の選択を変更した不一致群について、新しく選択した友人との知り合った時期について確認をしたところ、2回目の友人選択を変化させた53名中4名(7.5%)だけが、1‐2回目調査期間中に新たに知り合った友人を選択していた。以下、3回目の友人選択を変化させた40名中4名(10.0%)、4回目の友人選択を変化させた36名中8名(22.22%)、5回目の友人選択を変化させた49名中6名(12.2%)が、調査期間中に新たに知り合った友人を選択したことが明らかに

なった。

(3)-2　各調査時点間の友人選択による友人への各評定推移の検討

(3)-2-1　1-2回目調査時点間の検討

新友人の1-2回目の友人選択状況（「一致：同じ人物を選択」・「不一致：違う人物を選択」）によって1-2回目の親密度得点・対人感情・二者関係認知・対人行動の評定に差異があるかを検討するために、友人選択を被験者間要因、1-2回目の調査時点を被験者内要因の独立変数、友人への各評定平均値を従属変数とする2要因の分散分析を行った（Table4-2-2参照）。

その結果、親密度得点では、時点の有意な主効果が見られ（$F(1,113)=4.19, p<.05$）、2回目の親密度得点（5.46点）が1回目の得点（5.30点）よりも有意に高かった。対人感情のポジティブ感情得点では、時点の有意な主効果が見られたが（$F(1,113)=6.70, p<.05$）、時点と友人選択の有意な交互作用が見られたため（$F(1,113)=6.70, p<.05$）、時点及び、友人選択別に単純主効果の検定を行った。不一致群では2回目のポジティブ感情得点（4.85点）が1回目の得点（4.48点）よりも有意に高かったが一致群では時点における有意な差は見られなかった。

二者関係認知の深さの関係認知及び対等性の関認知得点で、時点の有意な主効果が見られ（深さ：$F(1,113)=4.14, p<.05$、対等性：$F(1,113)=4.47, p<.05$）、いずれの得点も2回目の得点（深さ：5.35点・対等性：5.99点）が1回目の得点（深さ：5.21点・対等性：5.67点）よりも高かった。対人行動の親和的行動・主張的行動・回避的行動得点で時点の有意な主効果が見られ（親和：$F(1,113)=6.36, p<.01$、主張：$F(1,113)=16.47, p<.001$、回避：$F(1,113)=4.06, p<.05$）、いずれの得点も2回目の得点（親和：3.28点・主張：1.55点・回避：1.24点）が1回目の得点（親和：3.16点・主張：1.38点・回避：1.16点）よりも高かった。その他の指標では、有意な主効果及び交互作用はみられなかった。

Table.4-2-2. 新友人の1-2回目の友人選択別評定平均値とSDおよびF値

	1回目		2回目		F値
	一致	不一致	一致	不一致	上段＝時点の主効果 中段＝友人選択の主効果 下段＝交互作用
親密度	5.31 (.87)	5.28 (1.04)	5.46 (.91)	5.47 (.81)	4.44* 0.01 0.21
ポジティブ感情	4.68 (1.06)	4.48 (1.16)	4.72 (1.02)	4.85 (.94)	6.70* 0.05 4.19*
拒否感情	1.89 (.95)	1.74 (.86)	2.15 (.97)	1.83 (.89)	2.88 2.87 0.79
深さの関係認知	5.23 (.82)	5.18 (.98)	5.31 (.88)	5.42 (.86)	4.14* 0.03 1.22
対等性の関係認知	5.94 (.86)	5.67 (.99)	6.00 (.85)	5.99 (.83)	4.47* 2.91 1.07
感情的な関係認知	4.06 (.62)	3.95 (.58)	4.13 (.63)	4.05 (1.07)	0.81 0.83 0.03
親和的行動	3.18 (.68)	3.13 (.69)	3.32 (.62)	3.25 (.63)	6.36*** 0.30 0.05
主張的行動	1.39 (.48)	1.36 (.47)	1.62 (.64)	1.46 (.50)	16.47*** 1.05 2.47
回避的行動	1.16 (.21)	1.15 (.26)	1.26 (.43)	1.22 (.46)	4.06* 0.14 0.21

（　）内はSD　　　　***p<.001　*p<.05

(3)-2-2　2-3回目調査時点の検討

新友人の2-3回目の友人選択状況（一致・不一致）によって2-3回目の親密度得点・対人感情・二者関係認知・対人行動の各評定に差があるかを検討するために、友人選択を被験者間要因、2-3回目の調査時点を被験者内要因の独立変数、友人への各評定平均値を従属変数とする2要因の分散分析を行った（Table4-2-3参照）。

その結果、親密度得点と二者関係認知の深さの関係認知では、友人選択の有意な主効果が見られ（親密度：$F(1,113)=5.98, p<.05$・深さ：$F(1,113)=4.17, p<.05$）、いずれの得点も一致群の得点（親密度：

5.55点・深さ：5.46点）が、不一致群の得点（親密度：5.18点・深さ：5.14点）よりも有意に高かった。その他の指標では、有意な主効果及び交互作用はみられなかった。

Table.4-2-3. 新友人の2-3回目の友人選択別評定平均値とSDおよびF値

	2回目		3回目		F値
	一致	不一致	一致	不一致	上段＝時点の主効果 中段＝友人選択の主効果 下段＝交互作用
親密度	5.59 (.85)	5.23 (.85)	5.52 (.93)	5.13 (.82)	1.33 5.98* 0.06
ポジティブ感情	4.89 (.96)	4.58 (1.00)	4.77 (1.00)	4.48 (1.15)	1.89 2.53 0.04
拒否感情	1.97 (.91)	2.05 (1.02)	2.10 (.89)	2.18 (.95)	2.32 0.20 0.01
深さの関係認知	5.49 (.81)	5.10 (.92)	5.42 (.91)	5.17 (1.01)	0.00 4.17* 0.83
対等性の関係認知	6.11 (.79)	5.78 (.90)	6.05 (.95)	5.84 (1.07)	0.00 2.99 0.57
感情的な関係認知	4.13 (.88)	4.01 (.80)	4.07 (.89)	4.13 (.93)	0.09 0.04 1.33
親和的行動	3.34 (.60)	3.19 (.65)	3.31 (.72)	3.17 (.74)	0.16 1.42 0.03
主張的行動	1.50 (.51)	1.63 (.70)	1.57 (.56)	1.67 (.61)	1.70 1.13 0.17
回避的行動	1.21 (.37)	1.30 (.55)	1.21 (.34)	1.35 (.52)	0.82 2.15 0.58

（　）内はSD　　　　　　　　　　　　　*p<.05

(3)-2-3　3-4回目調査時点の検討

新友人の3-4回目の友人選択状況（一致・不一致）によって3-4回目の親密度得点・対人感情・二者関係認知・対人行動の評定に差異があるかを検討するために、友人選択を被験者間要因、3-4回目の調査時点を被験者内要因の独立変数、友人への各評定平均値を従属変数とする2要因の分散分析を行った（Table4-2-4参照）。

その結果、二者関係認知における感情的な関係認知得点では、時点の有意な主効果が見られたが（$F(1,113)=4.99, p<.05$）、時点と友人選択の有意な交互作用が見られたため（$F(1,113)=9.52, p<.01$）、時点および友人選択別に単純主効果の検定を行った。その結果、不一致群において4回目の感情的な関係認知得点（4.46点）が3回目（3.93点）よりも有意に高かったが一致群では時点間の有意な差は見られなかった。また、対人行動の主張的行動得点で時点の有意な主効果が見られ（$F(1,113)=5.46, p<.05$）、4回目の得点（1.70点）が3回目の得点（1.61点）よりも高かった。その他の指標では、有意な主効果及び交互作用はみられなかった。

Table.4-2-4. 新友人の3-4回目の友人選択別評定平均値とSDおよびF値

	3回目		4回目		F値
	一致	不一致	一致	不一致	上段＝時点の主効果 中段＝友人選択の主効果 下段＝交互作用
親密度	5.45 (.87)	5.22 (.99)	5.49 (1.04)	5.38 (.82)	1.53 0.96 0.57
ポジティブ感情	4.66 (1.08)	4.59 (1.18)	4.63 (1.15)	4.59 (1.00)	0.05 0.08 0.03
拒否感情	2.08 (.81)	2.29 (1.08)	2.24 (1.06)	2.31 (1.09)	0.88 0.68 0.51
深さの関係認知	5.40 (.83)	5.12 (1.12)	5.38 (.99)	5.19 (.88)	0.09 1.81 0.38
対等性の関係認知	6.07 (.88)	5.72 (1.18)	5.90 (1.06)	5.68 (.89)	1.50 2.48 0.50
感情的な関係認知	4.16 (.99)	3.93 (.69)	4.07 (1.01)	4.46 (1.02)	4.99* 0.23 9.52**
親和的行動	3.32 (.70)	3.15 (.79)	3.27 (.78)	3.21 (.71)	0.00 0.68 1.17
主張的行動	1.57 (.57)	1.67 (.60)	1.63 (.52)	1.85 (.92)	5.46* 1.76 1.31
回避的行動	1.21 (.31)	1.38 (.56)	1.25 (.42)	1.42 (.77)	1.07 3.56 0.01

（　）内はSD　　**p<.01　*p<.05

(3)-2-4　4-5 回目調査時点の検討

新友人の 4-5 回目の友人選択状況（一致・不一致）によって 4-5 回目の親密度得点・対人感情・二者関係認知・対人行動の評定に差異があるかを検討するために、友人選択を被験者間要因、4-5 回目の調査時点を被験者内要因の独立変数、友人への各評定平均値を従属変数とする 2 要因の分散分析を行った（Table4-2-5 参照）。

親密度得点では、時点と友人選択の有意な主効果が見られたが（時点: $F(1,113) = 6.98, p<.01$・友人選択: $F(1,113) = 4.79, p<.05$）、時点と友人選択の有意な交互作用が見られたため（$F(1,113) = 5.66, p<.01$）、時点および友人選択別に単純主効果の検定を行った。その結果、4 回目調査時点において一致群の親密度得点（5.67 点）が不一致群（5.16 点）よりも有意に高かったが、5 回目調査時点では友人選択による有意な差は見られなかった。また不一致群において 5 回目の親密度得点（5.55 点）が 4 回目よりも有意に高かったが、一致群では時点間における有意な差は見られなかった。

対人感情におけるポジティブ感情では、時点の有意な主効果が見られたが（$F(1,111) = 19.34, p<.001$）、時点と友人選択の有意な交互作用が見られたため（$F(1,111) = 4.95, p<.05$）、時点および友人選択別に単純主効果の検定を行った。その結果、4 回目調査時点において一致群のポジティブ感情得点（4.81 点）が不一致群（4.36 点）よりも有意に高かったが、5 回目調査時点では友人選択による有意な差は見られなかった。また友人選択の両群において 5 回目のポジティブ感情得点が 4 回目よりも有意に高かった。拒否感情では、時点の有意な主効果が見られ（$F(1,111) = 5.68, p<.05$）、4 回目の拒否感情得点（2.26 点）が 5 回目の得点（2.06 点）よりも有意に高かった。

二者関係認知における深さの関係認知では、時点と友人選択の有意な主効果が見られたが（時点: $F(1,111) = 11.74, p<.01$・友人選択: $F(1,111) = 5.70, p<.05$）、時点と友人選択の有意な交互作用が見られたため（$F(1,111) = 4.31, p<.05$）、時点および友人選択別に単純主効果の検定を行った。その結果、4 回目調査時点において一致群の深さの関係認知得点（5.54 点）が不一致群（5.02 点）よりも有意に高かったが、5 回目調査時点では友人選択による有意な差は見られなかった。また不一致群において 5 回目の深さの関係認知得点（5.46 点）が 4 回目よりも有意に高かったが、一致群では時点間における有意な差は見られなかった。対等性の関係認知では、時点と友人選択の有意な交互作用が見られたため（$F(1,111) = 6.14, p<.05$）、時点および友人選択別に単純主効果の検定を行った。その結果、4 回目調査時点において一致群の対等性の関係認知得点（6.04 点）が不一致群（5.54 点）よりも有意に高かったが、5 回目調査時点では友人選択による有意な差は見られなかった。また不一致群において 5 回

目の対等性の関係認知得点（5.94点）が4回目よりも有意に高かったが、一致群では時点間における有意な差は見られなかった。感情的な関係認知では、時点と友人選択の有意な交互作用が見られたため（$F(1,111)=7.02, p<.01$）、時点および友人選択別に単純主効果の検定を行った。その結果、不一致群において4回目の感情的の関係認知得点（4.41点）が5回目の得点（3.98点）よりも有意に高かったが、一致群では時点間における有意な差は見られなかった。

対人行動における親和的行動では、時点の有意な主効果が見られたが（$F(1,113)=22.63, p<.001$）、時点と友人選択の有意な交互作用が見られたため（$F(1,113)=5.38, p<.05$）、時点および友人選択別に単純主効果の検定を行った。4回目調査時点において一致群の親和的行動得点（3.38点）が不一致群（3.07点）よりも有意に高かったが、5回目調査時点では友人選択による有意な差は見られなかった。また友人選択の両群において5回目の親和的行動得点が4回目よりも有意に高かった。回避的行動では、時点と友人選択の有意な交互作用が見られた（$F(1,113)=4.95, p<.05$）。時点および友人選択別に単純主効果の検定を行ったが、有意な差は見られなかった。主張的行動では有意な主効果及び交互作用はみられなかった。

Table.4-2-5.　新友人の4-5回目の友人選択別評定平均値

	4回目		5回目		F値
	一致	不一致	一致	不一致	上段＝時点の主効果 中段＝友人選択の主効果 下段＝交互作用
親密度	5.67 (.92)	5.16 (.98)	5.69 (.79)	5.55 (.87)	6.98** 4.79* 5.66**
ポジティブ感情	4.81 (1.07)	4.36 (1.10)	5.00 (.94)	4.91 (1.04)	19.34*** 2.27 4.95*
拒否感情	2.16 (1.05)	2.40 (1.09)	2.10 (.87)	2.01 (.92)	5.68* 0.23 3.17
深さの関係認知	5.54 (.85)	5.02 (1.03)	5.65 (.80)	5.46 (.85)	11.74** 5.70* 4.31*
対等性の関係認知	6.04 (.91)	5.54 (1.07)	5.97 (.93)	5.94 (.87)	3.07 3.02 6.14*
感情的な関係認知	4.03 (1.00)	4.41 (1.03)	4.11 (.80)	3.98 (.99)	3.36 0.65 7.02**
親和的行動	3.38 (.73)	3.07 (.75)	3.51 (.61)	3.44 (.72)	22.63*** 2.39 5.38*
主張的行動	1.62 (.51)	1.81 (.84)	1.74 (.62)	1.76 (.60)	0.41 1.07 2.35
回避的行動	1.22 (.30)	1.42 (.77)	1.28 (.63)	1.24 (.34)	1.28 1.26 4.95*

（　　）内はＳＤ　　＊＊＊p＜.001 *p＜.05 ＊＊ p＜.01

(3)-3　5回の調査時点における友人選択パターンによる検討

(3)-3-1　友人選択グループ群の再構成

次に、新友人の5回の友人選択状況について、前半（1-2回目）と後半(4-5回目)の選択状況から、参加協力者を4群に分け、グループ群による友人への各評定の推移を比較検討していく。

第1に、5回の調査時点におけるイニシャルの記入状況をTable4-2-6に示す。1-2回目及び4-5回目の友人選択について、同

人物を一番の友人として選択した群を「前後半一致群(n=40)」、1-2回目が同人物を、4-5 回目を違う人物を選択した群を「前半一致・後半不一致群(n=22)」、1-2 回目が違う人物を、4-5 回目を同じ人物を選択した群を「前半不一致・後半一致群(n=26)」、1-2 回目及び 4-5 回目の友人選択について違う人物を選択した群を「前後半不一致群(n=27)」とした。

Table4-2-6. 新友人の5回の調査時点における友人選択状況

	型	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	各パターンの人数	各群の人数
前後半一致群	1	A	A	A	A	A	29	40
	2	A	A	B	B	B	5	
	3	A	A	A	B	B	2	
	4	A	A	B	C	C	4	
前半一致・後半不一致群	5	A	A	A	A	B	9	22
	6	A	A	B	B	C	3	
	7	A	A	A	B	C	5	
	8	A	A	B	C	D	5	
前半不一致・後半一致群	9	A	B	B	B	B	18	26
	10	A	B	C	C	C	6	
	11	A	B	B	C	C	0	
	12	A	B	C	D	D	2	
前後半不一致群	13	A	B	B	B	C	6	27
	14	A	B	C	C	D	3	
	15	A	B	B	C	D	6	
	16	A	B	C	D	E	12	

註）アルファベットは人物の選択状況を示す。アルファベットの変化は、調査時点間で友人を変化させたことを示す。

上記で再統合した新友人の友人選択グループ群（4 群）による 5 回の調査時点における親密度得点・対人感情・二者関係認知・対人行動の評定の推移を検討するために、友人選択グループ群を被験者間要因、5 回の調査時点を被験者内要因の独立変数、友人への各評定平均値を従属変数とする 2 要因の分散分析を行った。

(3)-3-2　友人選択グループ群による親密度得点の推移

親密度得点では、時点の有意な主効果が見られたため（$F(4,444)=4.11, p<.01$）、Bonferroni の多重比較を行ったところ、5 回目調査時点の親密度得点が、1 回目・3 回目調査時点よりも高かった。友人選択グループ群の主効果（$F(3,111)=1.58, n.s.$）、および時点と友人選択グループ群の交互作用（$F(12,444)=1.24, n.s.$）は有意ではなかった（Table4-2-7 参照）。

Table4-2-7.人物選択パターン別の親密度得点の平均値の推移とSD

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
前後半一致	5.32	5.51	5.53	5.69	5.73
	(.86)	(.92)	(.83)	(.86)	(.72)
前半一致・後半不一致	5.32	5.36	5.27	5.12	5.73
	(.91)	(.93)	(1.14)	(.92)	(.86)
前半不一致・後半一致	5.31	5.76	5.51	5.64	5.63
	(.86)	(.68)	(1.06)	(1.03)	(.89)
前後半不一致	5.25	5.20	5.11	5.20	5.41
	(1.20)	(.83)	(.59)	(1.04)	(.86)
計	5.30	5.46	5.38	5.46	5.63
	(.95)	(.86)	(.91)	(.97)	(.82)

(　)はSD

(3)-3-3　友人選択グループ群による対人感情の各評定値の推移

対人感情におけるポジティブ感情では、友人選択グループ群の主効果は、有意ではなかった($F(3,109)=.60, n.s.$)。また時点の有意な主効果が見られたが（$F(4,436)=7.42, p<.001$）、時点と友人選択グループ群の有意な交互作用が見られたため（$F(12,436)=2.25, p<.01$）、時点及び友人選択グループ群別に単純主効果の検定を行った。各時点の検討では、いずれの時点でも友人選択グループ群の有意な主効果を見られなかった。友人選択グループ群別の検討では、「前後半一致群」と「前半一致・後半不一致群」の時点における有意な主効果が見られ、Bonferroniの多重比較の結果「前後半一致群」では、5回目調査時点のポジティブ感情得点が1・2・3回目の得点よりも高かった。また、「前半一致・後半不一致群」では5回目調査時点のポジティブ感情得点が2・4回目の得点よりも高かった(Table4-2-8参照)。

拒否感情では、時点の有意な主効果が見られたため（$F(4,436)=5.21, p<.001$）、Bonferroniの多重比較を行ったところ、3回目と4回目の調査時点の親密度得点が、1回目の調査時点よりも高かった。友人選択グループ群の主効果（$F(3,109)=2.00, n.s.$）、および時点と友人選択グループ群の交互作用（$F(12,436)=1.41, n.s.$）は有意ではなかった（Table4-2-9参照）。

Table4-2-8.人物選択パターン別のポジティブ感情得点の平均値の推移とSD

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	単純主効果の結果
前後半一致	4.59	4.73	4.72	4.94	5.11	5回目＞1・2・3回目
	(1.04)	(.89)	(.97)	(.89)	(.91)	
前半一致・後半不一致	4.70	4.55	4.62	4.39	5.27	5回目>2・4回目
	(1.07)	(1.17)	(1.40)	(1.20)	(1.02)	
前半不一致・後半一致	4.51	4.96	4.71	4.63	4.83	
	(1.22)	(1.12)	(1.24)	(1.28)	(.97)	
前後半不一致	4.45	4.74	4.46	4.33	4.63	
	(1.13)	(.73)	(.92)	(1.04)	(.99)	
計	4.56	4.75	4.64	4.62	4.96	
	(1.10)	(.97)	(1.11)	(1.10)	(.98)	

(　)はSD

Table4-2-9.人物選択パターン別の拒否感情得点の平均値の推移とSD

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
前後半一致	1.76	2.22	2.27	2.27	2.27
	(.78)	(.97)	(.87)	(.93)	(.92)
前半一致・後半不一致	2.15	2.08	2.25	2.49	2.02
	(1.18)	(1.00)	(1.14)	(1.16)	(1.09)
前半不一致・後半一致	1.38	1.88	1.83	1.98	1.85
	(.51)	(1.03)	(.64)	(1.20)	(.75)
前後半不一致	2.09	1.78	2.19	2.33	2.01
	(.98)	(.76)	(.94)	(1.04)	(.77)
計	1.83	2.01	2.14	2.26	2.06
	(.91)	(.95)	(.91)	(1.07)	(.89)

(　)はSD

(3)-3-4　友人選択グループ群による二者関係認知の各評定値の推移

二者関係認知における深さの関係認知では、友人選択グループ群の主効果は、有意ではなかった($F(3,109)=1.16, n.s.$)。また時点の有意な主効果が見られたが($F(4,436)=5.36, p<.001$)、時点と友人選択グループ群の有意な交互作用が見られたため($F(12,436)=2.07, p<.05$)、時点及び友人選択グループ群別に単純主効果の検定を行った。各時点の検討では、4回目調査時点で友人選択グループ群の有意な主効果が見られたが、多重比較の結果はグループ群の有意な差は見られなかった。友人選択グループ群別の検討では、「前後半一致群」と「前半一致・後半不一致群」の時点における有意な主効果が見られ、Bonferroni の多重比較の結果「前後半一致群」では、5回目調査時点の深さの関係認知得点が1・2・3回目の得点よりも高かった。また、「前半一致・後半不一致群」では5回目調査時点の深さの関係認知得点が4回目の得点よりも高かった(Table4-2-10参照)。

対等さの関係認知では、時点及び友人選択グループ群の主効果は、有意ではなかった(時点：$F(4,436)=1.89$, $n.s.$・グループ：$F(3,109)$

= .48, *n.s.*)。時点と友人選択グループ群の有意な交互作用が見られたため（$F(12,436) = 1.93, p < .05$）、時点及び友人選択グループ群別に単純主効果の検定を行った。各時点の検討では、4 回目調査時点で友人選択グループ群の有意な主効果が見られ、Tukey の多重比較の結果、「前後半一致群」の得点が「前半一致・後半不一致群」の得点よりも高かった。友人選択グループ群別の検討では、「前半一致・後半不一致群」の時点における有意な主効果が見られたが、多重比較の結果、時点間の有意な差は見られなかった（Table4-2-11 参照）。

感情的な関係認知では、時点及び友人選択グループ群の主効果、時点と友人選択グループ群の交互作用はいずれも有意ではなかった(時点：$F(4,436) = 1.09$, *n.s.*・グループ：$F(3,109) = .87$, *n.s.*・交互作用：$F(12,436) = 1.58$, *n.s.*；Table4-2-12 参照)。

Table4-2-10.人物選択パターン別の深さの関係認知得点の平均値の推移とSD

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	単純主効果の結果
前後半一致	5.07	5.29	5.33	5.50	5.63	5回目＞1・2・3回目
	(.74)	(.81)	(.83)	(.76)	(.73)	
前半一致・後半不一致	5.40	5.22	5.10	4.99	5.66	5回目>4回目
	(.84)	(.95)	(1.20)	(.94)	(.87)	
前半不一致・後半一致	5.33	5.44	5.62	5.60	5.68	
	(.91)	(.90)	(.94)	(.97)	(.90)	
前後半不一致	5.03	5.40	5.17	5.06	5.30	
	(1.04)	(.84)	(.78)	(1.11)	(.82)	
計	5.19	5.33	5.31	5.32	5.57	
	(.88)	(.86)	(.93)	(.96)	(.82)	

(　)はSD

Table4-2-11.人物選択パターン別の対等さの関係認知得点の平均値の推移とSD

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	単純主効果の結果
前後半一致	5.84	5.98	5.99	6.14	6.08	
	(.82)	(.87)	(1.03)	(.82)	(.85)	
前半一致・後半不一致	6.02	5.94	5.76	5.41	6.11	
	(.91)	(.81)	(1.23)	(.95)	(.69)	4回目調査時点：前後半一致＞前半一致・後半不一致
前半不一致・後半一致	5.65	5.87	6.13	5.90	5.82	
	(1.02)	(.89)	(.89)	(1.03)	(1.04)	
前後半不一致	5.68	6.10	5.91	5.65	5.80	
	(.98)	(.76)	(.84)	(1.17)	(.99)	
計	5.79	5.98	5.96	5.83	5.96	
	(.92)	(.83)	(.99)	(1.01)	(.90)	

(　)はSD

Table4-2-12.人物選択パターン別の感情的関係認知得点の平均値の推移とSD

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
前後半一致	3.92	4.14	4.00	4.14	4.05
	(.49)	(.61)	(.67)	(.85)	(.76)
前半一致･後半不一致	4.32	4.11	4.20	4.52	4.23
	(.76)	(.69)	(.85)	(.88)	(1.08)
前半不一致･後半一致	3.98	3.88	4.12	3.87	4.19
	(.39)	(1.16)	(1.30)	(1.18)	(.87)
前後半不一致	3.93	4.20	4.07	4.31	3.78
	(.73)	(.95)	(.83)	(1.15)	(.89)
計	4.01	4.09	4.08	4.19	4.05
	(.61)	(.86)	(.91)	(1.03)	(.89)

(　)はSD

(3)-3-5　友人選択グループ群による二者関係認知の各評定値の推移

対人行動における親和的行動得点では、時点の有意な主効果が見られたため（$F(4,444)=10.35, p<.001$）、Bonferroniの多重比較を行ったところ、5回目調査時点の親和的行動得点が、その他全ての調査時点よりも高かった。友人選択グループ群の主効果（$F(3,111)=1.09, n.s.$）、および時点と友人選択グループ群の交互作用（$F(12,444)=1.29, n.s.$）は有意ではなかった（Table4-2-13参照）。

主張的行動得点では、時点の有意な主効果が見られたため（$F(4,444)=16.82, p<.001$）、Bonferroniの多重比較を行ったところ、5回目調査時点の主張的行動得点が、1・2・3回目調査時点よりも高く、4回目調査時点の得点が1・2回目査時点よりも高く、3回目調査時点の得点が1回目調査時点よりも高かった。友人選択グループ群の主効果（$F(3,111)=.61, n.s.$）、および時点と友人選択グループ群の交互作用（$F(12,444)=1.14, n.s.$）は有意ではなかった（Table4-2-14参照）。

回避的行動得点では、時点の有意な主効果が見られたため（$F(4,444)=3.78, p<.01$）、Bonferroniの多重比較を行ったところ、4・5回目調査時点の回避的行動得点が、1回目調査時点の得点よりも高かった。友人選択グループ群の主効果（$F(3,111)=.99, n.s.$）、および時点と友人選択グループ群の交互作用（$F(12,444)=1.05, n.s.$）は有意ではなかった（Table4-2-15参照）。

Table4-2-13.人物選択パターン別の親和的行動得点の平均値の推移とSD

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
前後半一致	3.18	3.35	3.34	3.45	3.51
	(.60)	(.58)	(.67)	(.63)	(.63)
前半一致･後半不一致	3.19	3.26	3.22	3.18	3.57
	(.82)	(.68)	(.86)	(.79)	(.84)
前半不一致･後半一致	3.15	3.39	3.41	3.27	3.50
	(.72)	(.70)	(.78)	(.88)	(.60)
前後半不一致	3.11	3.10	3.05	2.98	3.33
	(.68)	(.52)	(.64)	(.72)	(.60)
計	3.16	3.28	3.26	3.25	3.48
	(.68)	(.62)	(.73)	(.75)	(.66)

(　)はSD

Table4-2-14.人物選択パターン別の主張的行動得点の平均値の推移とSD

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
前後半一致	1.34	1.60	1.62	1.72	1.79
	(.41)	(.58)	(.59)	(.48)	(.62)
前半一致･後半不一致	1.49	1.66	1.55	1.81	1.77
	(.60)	(.75)	(.61)	(.92)	(.63)
前半不一致･後半一致	1.29	1.45	1.57	1.46	1.65
	(.40)	(.51)	(.61)	(.52)	(.61)
前後半不一致	1.43	1.48	1.66	1.82	1.76
	(.53)	(.51)	(.51)	(.78)	(.60)
計	1.38	1.55	1.60	1.70	1.75
	(.48)	(.58)	(.58)	(.67)	(.61)

(　)はSD

Table4-2-15.人物選択パターン別の回避的行動得点の平均値の推移とSD

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
前後半一致	1.15	1.19	1.22	1.24	1.28
	(.20)	(.27)	(.26)	(.28)	(.35)
前半一致･後半不一致	1.17	1.39	1.36	1.39	1.30
	(.23)	(.61)	(.54)	(.71)	(.37)
前半不一致･後半一致	1.10	1.19	1.19	1.20	1.28
	(.13)	(.27)	(.26)	(.34)	(.39)
前後半不一致	1.22	1.25	1.31	1.44	1.20
	(.34)	(.60)	(.57)	(.83)	(.30)
計	1.16	1.24	1.26	1.30	1.26
	(.24)	(.44)	(.41)	(.56)	(.35)

(　)はSD

(4)　考察

第2節では、5回の追跡調査において、調査協力者にとっての「一番親しい新友人」を選択させる手続きから、新友人選択状況とその評定の推移を検討した。各結果の考察を述べた上で、最後に仮説の可否について論じていく。

(4)-1 新友人の友人選択状況の推移

本論文では、友人関係の親密化過程を追跡的調査から捉えることを目的としているが、その際、各調査時点一番親しい友人を固定せずに、各時点での一番親しい友人に対する各評定をさせる手続きを使用した。この手法を採用することによって、過程で一番親しいと協力者が選択する友人が変容する可能性の有無、及びその変容の様相を捉えることを可能とした。

本論文の調査協力者が選択した一番親しい友人が、5 回の調査期間中にどのような変容するのかを検討した。全調査協力者中、初期に選択した友人を 5 回の調査期間中、一度も変化させなかった調査協力者は約 25%であった。この群では、少なくとも入学 3 週間目の 1 番親しいという認知が 1 年 1ヵ月後まで続いていた可能性がある。

一方で本研究の手続きを使用した結果、初期の印象より親しいと認知した友人が出現し、少なくとも 1 回以上「一番親しい友人」を変化させた調査協力者が約 75%いるということも確認された。また、1-2 回目調査時点よりも 2-3 回目調査時点、3-4 回目調査時点で、同じ友人を選択した率が高まっていたが、4-5 回目調査時点の友人選択では、同じ友人の選択率が約 57%であり、友人が変化した率が高まった。この期間には冬休み・春休みの長期休み期間を経ており、進級し、新たな授業選択や活動の広まり、友人との様々な相互作用を経験することで、親しい友人が変化した可能性を示唆するものであった。友人を変更した不一致群について、新しく選択した友人と知り合った時期を確認したところ、調査期間中に新たに出現した友人の割合は、10%～20%であった。新友人は多くの場合同じ大学内で選択されている。したがって、80%以上が、入学当初にその存在を認知していて、後に親しい友人として選択されていたことが明らかになった。すなわち、1 年間の追跡的研究の中で一番親しい友人を変化させる群の存在は、多くの場合、入学当初から複数の友人関係で構成されているか、もしくは複数の異なる友人関係グループを有しており、幅広い選択の中で、一番親しい友人が変化するケースの存在を明らかにした。その一方で、友人を変化させたもう一つの可能性として、大学入学後 1 年間で、新たに選択した友人と知り合ったことで、親しい友人関係が変化した群も存在していた。少なくとも親しい友人を変化させた群は、親しい友人を一度も変化させなかった群よりも、入学から 1 年間の間に活発な友人関係を経験した可能性がある。

(4)-2 友人選択よる親密さの程度、「対人感情」「関係認知」「対人行動」の時点間の推移

第 2 に友人選択よる、親密さの程度、「対人感情」「関係認知」「対

人行動」の推移を検討した。

1-2 回目の時点間の友人選択による各評定の推移に差がみられるかの検討を行った。親密度得点・深さの関係認知・対等性の関係認知・対人行動の全ての因子について、新友人の入学初期段階では、友人選択によって親密さの程度に差異は見られず、一貫して入学 2 ヶ月後（2 回目）の値が確認された。つまり、友人と出会って間もない段階では、友人の選択状況が得点には影響せず、全体としての「一番親しい友人」に対する評定として、入学から友人と過ごした期間の長さが、親密さを高め、関係の深さや対等性の認知を高め、行動の頻度を増すことを示すものである。ポジティブ感情では、友人を変化させた群のみで、2 回目のポジティブ感情が高まる結果を得た。ポジティブ感情は、信頼感や優しくしたいなど、友人が好印象であることを示す感情面の指標である。入学直後よりも新たな好印象の友人を選択したということが他の指標に比べて表出されやすい指標である可能性がある。その他の指標では、友人選択の主効果はみられないことから、入学当初の友人選択が各評定に及ぼす影響は少ないことが明らかになった。入学当初の友人形成は、一人の友人のみと出会うケースだけではなく、オリエンテーションやサークル活動で集団の中で友人と出会う可能性もある。大学入学 3 週間目と大学入学 1 か月後における友人選択は、友人形成時期にあたると推測され、「一番親しい友人」は様々な出会いの中で選択された可能性が高い。すなわち、この段階での一番という基準が、協力者の中では明確なものではなく、時間の推移が全体の友人関係としての評定に影響したと考えられる。

2-3 回目の調査時点間では、親密度得点と深さの関係認知の得点で友人選択の主効果が有意であり、一貫して同じ友人を選んだ群の親密度や深さの認知が高いことから、同友人を選択した場合には安定した高い親密感や深さの認知があること、一方で、入学 2-3 カ月目に友人を変化させた群では、初期の友人よりも親しい友人が出現したものの、その友人への親密度や深さの認知が高まっていなかった。またその他の指標では、時点・友人選択の主効果はみられなかった。入学 2-3 ヶ月目は、前期の中盤から後半に当たる。この時点間で同じ友人を選択したのは全体の約 65％であり、その友人との関係が安定していることを示したが、その一方で、友人を変えた群において、親密さや深さの認知に変化が見られないことは、諸井（1986）が指摘するように、入学 3 か月後の間は友人形成が活発段階である群が存在し、初期に出会った友人以外の友人関係が新たにスタートしている段階であった可能性もある。

3-4 回目の調査時点間では、主張的行動において、友人選択に関わらず、主張的行動の頻度が 4 回目調査時点で増していた。また、

感情的な関係認知では、4回目で友人を変えた群での感情的な認知が高まっていた。3-4回目の時点間には、夏休み期間を含んでいる。すなわち、不一致群は夏休み前に選択した友人を夏休み後に変更したことを意味する。夏休み後は、授業の選択が変化し、また、新たなる関係がスタートする可能性もある。また夏休みの間に、友人間で大学生活以外の学外での付き合いを経験した可能性がある。ある程度大学生活に慣れてきた時点で、一番親しい友人の選択を変えることが、感情的な認知の変動に特に影響することを示すものである。

4-5回目の友人選択においては、同じ友人を選択したか、違う友人を選択したかによって多くの評定でその変動が確認された。親密度得点・二者関係認知の全ての因子において友人選択による差異が見られた。両調査で同じ友人を選択したものは、評定値に差異が見られないが、友人を変えた者は、入学1年1ヶ月後（5回目）で選択した友人に対する親密さ・深さの認知・対等性の認知が有意に増し、感情的な認知が低下していた。また、入学7ヵ月後（4回目）の親密度得点・ポジティブ感情・二者関係認知の全ての因子・親和的行動では次回に友人を変化させるか否かで評定平均値に差異が見られた。すなわち、5回目の友人選択で同じ友人を選択する群は、友人を変更する群に比べて4回目の得点が高く推移していた。4-5回目の友人選択には、他の調査時点間と若干異なる状況が想定される。3回目調査時点までは、前期期間中の講義スケジュールが変わらない中での友人選択であった。3-4回目では、夏休みという長期休み期間と後期の新たな講義スケジュールも存在したが、通年科目等も多く進学段階に比べると変化は少ない。一方、4-5回目は、冬休み・春休みといった長期休み期間に加え、2年生に進学しその授業選択も多岐にわたり、専門科目の選択、資格の方向性など、将来の進路に向け、第1の重大な岐路を迎える時期である。友人選択にもこの様な状況が関わってくることが想像される。また入学生活が落ち着いた中で、複数の友人関係の中でも「一番」という基準が協力者の中で明確になってきた可能性がある。その結果、友人を変化させた群の変更前友人と変更後の友人に対する指標の変動が他の調査時点よりも明確に表れたと考える。本節の結果から新学年に進級する段階における友人選択が友人に対する様々な評定の推移に影響を与えることが示唆された。

(4)-3　友人選択グループ群による親密さの程度、「対人感情」「関係認知」「対人行動」の時点間の推移

第3に、協力者を5回の調査時点の友人選択状況をもとに、入学直後（入学3週間目～2ヶ月後）の友人選択と、入学半年～入学1年後の友人選択状況をもとに4群に再グループ化した。新友人の5

回の調査時点における友人選択過程では、5 回の調査期間中、一度も変化させなかった調査協力者が最も多く、29 名(25.2%)であり、以下 1-2 回目のみ友人を変化させた協力者 18 名(15.7%)、毎回友人を変化させた協力者 12 名(10.4%)と続いた。しかしながら、その他のパターンにも数名ずつの協力者が存在し、全体的印象として、友人選択推移には様々なパターンが存在することが明らかになった。

先述の時点間別（1-2 回目・2-3 回目・3-4 回目・4-5 回目）の検討では、入学直後の友人選択では、友人選択の要因によって評定が変動することは少ないが、入学半年～入学 1 年後の友人選択の要因は、多くの評定の変動が影響していたことが明らかになった。時点間のみの検討ではその他の時点間とのつながりが推定できないが、特徴あるグループ群について 5 回の調査時点を一度に分析することで、友人選択パターンによる各評定の推移の特徴を抽出することが目的であった。9 つの評定のうち、友人選択グループに関する要因による指標の推移に差異がみられたのは、対人感情における「ポジティブ感情」、二者関係認知における「深さの関係認知」および「対等さの関係認知」の 3 評定であった。「ポジティブ感情」と「深さの関係認知」では、「前後半一致群」の時点による変動が確認され、5 回目の調査時点の得点が 1・2・3 回目よりも高かった。他群ではこのような傾向は確認されなかった。1 回目～5 回目の得点の推移を概観すると、他群にくらべてこの群の特徴は、直線的ではないものの、入学直後よりも得点が高まっていることである。4-5 回目における有意な差がみられていないことから、入学半年後(4 回目)に選択した友人に対しては、すでに安定したポジティブ感情や深さの認知が存在することを示すものであった。「前後半一致群」と対照的な変動を示したのが「前半一致・後半不一致群」だった。ポジティブ感情では、2 回目・4 回目よりも 5 回目の得点が、また深さの関係認知では 4 回目よりも 5 回目の得点が高かった。この群の特徴は、4 回目の得点が、調査時点の中で一番低い値を示しており、5 回目の得点が高く評定されていることである。この群は、4-5 回目には友人選択を変化させているが、同じ 4-5 回目に変化をさせている「前後半不一致群」ではこのような変動は確認されていない。先述の時点間での検討でも「4-5 回目不一致群」の得点の変動が確認されたが、この 2 つの指標については、「前半一致・後半不一致群」の様相が時点間の変動に大きな影響を与えていたことが明らかになった。この群は少なくとも入学直後の友人選択では同じ友人を選択しており、すなわち、一見すると入学直後から順調な友人関係をスタートさせているようである。この友人選択状況は「前後半一致群」と同様である。しかしながら、後半の調査時点に至るまでの友人選択は様々だが、4 回目に選択した友人への評定が低く、結果として 5 回目の

友人選択を変化させた可能性がある。大学2年生に進学し5回目に選択された友人には、より強いポジジティブ感情と深い関係認知を評定していることから、少なくとも入学半年の間に「一番」だと認知していた友人よりも進学した段階には、より印象の良い友人ができたことを示す結果である。「対等さの関係認知」では、4回目の調査時点にパターンによる差異が明らかにされ、「前後半一致群」の得点が「前半一致・後半不一致群」の得点よりも高かった。「前後半一致群」は4回目の時点で対等さを強く認知し、5回目でも同じ友人を一番の友人として選択するが、「前半一致・後半不一致群」では、前者よりも対等さの認知を低く評定し、その結果友人選択を変化させるというこの2群の特徴を示す結果を得た。3つの指標に関しては、全般的な傾向として、「前後半一致群」「前半一致・後半一致群」の特徴的な得点推移が明らかにされ、その推移に影響を与えているのは、この2群における4-5回目の友人選択であることが明らかになった。

その他6つの評定には選択グループ群による評定の変動は見られなかった。この結果は、グループ群の再グループ化の方法の手続における問題点が考えられる。本節では115名の全協力者を、グループ化することを目標としたため、1-2回目と4-5回目の友人選択状況のみをグループ化する際の基準に使用した。したがって、各群には、2-3回目・3-4回目の友人選択には、言及していない。その結果、6つの評定の変動には差が見られないという結果に至ったものと考える。

(4)-4　仮説の検証

本節の仮説である「入学当初に選択した友人を変更しない協力者の初期の親密さは、後に友人を変更する協力者よりも高く評定される。」について検証していく。

5回の調査時点で友人を変更することなく同じ友人を選択した協力者が確認されたことは、山中(1994)らの指摘した関係の初期分化の存在を示唆するものである。しかしながら仮説となる1回目の親密さをはじめとした各評定について友人選択が及ぼす影響を検討したところ、友人選択による評定の差異は示されなかった。したがって仮説は支持されなかった。また、友人選択のパターン別の検討でも、1回目の評定には各群の評定には差異がみられなかった。したがって、同じ友人を選択したことの意味には、2つの解釈が可能となった。すなわち、特に初期の段階の友人の選択は、第1に初期分化によって、同じ友人が選択された可能性と第2に最初に選択した友人以外に親しい友人が出現しなかったための選択の両面が存在する可能性がある。

第 3 節　友人選択に関わる要因の検討

(1)　目的

本節の目的は、各調査時点間の友人選択に及ぼす影響要因を明らかにすることである。第 1 章で述べたように、先行研究では、親密化にかかわる要因について、友人関係の相互作用・親密さ・感情に関する側面に加えさまざまな指標が検討されてきた。本研究では、友人に対する親密さ、感情・認知の評定、および行動の頻度に加えて、性差の検討、また環境的側面として居住状況、さらに、具体的な相互作用の量的側面として、付き合い頻度とメールや電話の頻度を変数として加える。これらの変数を同時に検討することで、時点の推移に従い、友人選択にかかわる要因を明らかにしていく。

(2)　方法

(2)-1　調査協力者
(2)-2　調査時期
(2)-3　質問紙の内容

調査協力者・調査時期・質問紙の内容は、第 3 章および第 4 章第 2 節で記載済みであり、本節は同データを使用するため、詳細を割愛する。

(3)　結果

(3)-1　友人選択に関わる要因の検討

各調査時点間（1-2 回目・2-3 回目・3-4 回目・4-5 回目）の友人選択に及ぼす要因を検討するために、数量化Ⅱ類による検討を行った（Table4-3-1 参照）。説明変数は、性・住居状況・付き合い頻度・電話メールの頻度および新友人に対する親密度・対人感情、関係認知、対人行動の各評定値を使用した。なお、新友人の付き合い頻度と電話メールの頻度は、協力者の人数状況をもとに協力者の人数がほぼ同人数になるように 3 群に統合し、対人感情、関係認知、対人行動および親密度の各指標については、平均値±0.5SD を基準として 3 群（抵・中・高群）に再カテゴリ化した。

(3)-1-1　1-2 回目の友人選択に関わる要因

1 回目の友人に対する各指標を説明変数、1-2 回目の友人選択状況を基準変数とする数量化Ⅱ類を行った。なお、説明変数は一括投入法を採用した。

数量化Ⅱ類の結果、判別率は 67.83%だった。同じ友人を選択した協力者の判別関数の平均値は.44、友人を変化させた協力者の平均値は、-.51 であった。判別に寄与する有意な偏相関係数を示したのは、1%水準で、「性」、「接触頻度」であり、5%水準で、「住居状況」であった。カテゴリスコアの大きさから 1 回目調査時点で住居状況が独り暮らしや下宿での生活であること、また週に 4-6 日の中程度の接触頻度であることが、2 回目の調査でも同じ友人を選択する要因であった。また男性は 2 回目の調査で新友人を変化させる要因として寄与していた。

(3)-1-2　2-3 回目の友人選択に関わる要因

数量化Ⅱ類の結果、判別率は 68.70%だった。同じ友人を選択した協力者の判別関数の平均値は.30、友人を変化させた場合は、-.56 であった。判別に寄与する有意な偏相関係数を示したのは、5%水準で「電話やメールでの付き合い頻度」「深さの関係認知」「主張的行動」であった。カテゴリスコアの大きさから、主張的行動の頻度が低いことが 3 回目の調査でも同じ友人を選択する要因であった。また、新友人と中程度の電話やメールでの付き合い頻度であること、深さの関係認知が低いこと、主張的行動が多いことが 3 回目の調査で新友人を変化させる要因として寄与していた。

(3)-1-3　3-4 回目の友人選択に関わる要因

数量化Ⅱ類の結果、判別率は 76.52%だった。同じ友人を選択した協力者の判別関数の平均値は.31、友人を変化させた場合は、-.69 であった。判別に寄与する有意な偏相関係数を示したのは、1%水準で、「感情的な関係認知」、「主張的行動」であり、5%水準で「親密度」であった。カテゴリスコアの大きさから、3 回目調査時点での感情的な関係認知が高いことが 4 回目の調査でも同じ友人を選択する要因であった。また、親密度が低く、中程度の主張的行動が行うことが 4 回目の調査で新友人を変化させる要因として寄与していた。

(3)-1-4　4-5 回目の友人選択に関わる要因

数量化Ⅱ類の結果、判別率は 84.07%だった。同じ友人を選択した協力者の判別関数の平均値は.55、友人を変化させた場合は、-.72 であった。判別に寄与する有意な偏相関係数を示したのは、1%水準で、「接触頻度」「電話やメールでの接触頻度」「親密度」「感情的な関係認知」であり、5%水準で「拒否感情」であった。カテゴリスコアの大きさから、4 回目調査時点での中程度の接触頻度で、電話やメールの頻度が高いこと、親密度が高いことが 5 回目の調査で

も同じ友人を選択する要因であった。また、感情的な関係認知が高いこと、拒否感情が高いことが5回目の調査で新友人を変化させる要因として寄与していた。

Table4-3-1.新友人の各時点間における友人選択に及ぼす要因

		1-2回目			2-3回目			3-4回目			4-5回目		
			n	偏相関		n	偏相関		n	偏相関		n	偏相関
性		(1.17)		.23**	(0.01)		.00	(0.21)		.04	(0.11)		.04
	男性	-.87	29		-.01	29		-.15	29		.08	29	
	女性	.29	86		.00	86		.05	86		-.03	84	
住居状況		(0.87)		.19*	(0.03)		.01	(0.02)		.00	(0.60)		.19
	親と同居	-.23	84		.01	84		.00	84		.16	83	
	一人暮らし・寮	.63	31		-.02	31		.01	31		-.44	30	
出会い場所		(0.03)		.00	(0.55)		.01	(0.26)		.05	(0.02)		.08
	同学科内	.00	99		-.15	84		.06	88		.01	81	
	同学科以外	.02	16		.40	31		-.20	27		-.02	32	
接触頻度		(1.03)		.24**	(0.58)		.09	(0.72)		.13	(0.90)		.30**
	低(週4日未満)	-.41	19		-.41	33		.50	36		-.40	33	
	中(週4-6日)	.61	46		.17	51		-.15	49		.50	46	
	高(毎日)	-.41	50		.12	51		-.21	30		-.29	34	
電話・メール		(0.93)		.17	(1.20)		.20*	(0.80)		.15	(0.88)		.28**
	低(週1日未満)	-.41	46		.15	40		.59	62		-.22	27	
	中(週2-3日)	.09	40		-.87	24		-.14	24		-.39	41	
	高(週4日以上)	.52	29		.33	51		-.22	29		.49	45	
親密度		(0.58)		.09	(0.38)		.06	(1.13)		.21*	(1.03)		.28**
	低	.32	33		-.01	41		-.64	29		.06	24	
	中	-.03	49		.23	31		.49	46		-.47	50	
	高	-.27	33		-.15	43		-.10	40		.56	39	
ポジティブ感情		(0.57)		.12	(0.27)		.04	(1.19)		.19	(0.12)		.03
	低	.21	41		-.17	37		.45	38		-.04	32	
	中	-.35	38		.06	41		.19	43		-.04	44	
	高	.13	36		.10	37		-.75	34		.08	37	
拒否感情		(0.25)		.06	(0.62)		.10	(0.67)		.14	(0.76)		.22*
	低	.07	44		-.33	41		-.24	44		-.05	39	
	中	-.14	44		.10	41		.43	35		.36	41	
	高	.11	27		.29	33		-.13	36		-.40	33	
深さの関係認知		(0.25)		.05	(1.25)		.21*	(0.17)		.03	(0.63)		.15
	低	-.17	35		-.82	38		-.03	42		-.01	38	
	中	.07	37		.43	38		.11	34		.29	41	
	高	.08	43		.38	39		-.01	39		-.34	34	
対等性の関係認知		(0.55)		.10	(0.32)		.06	(0.87)		.16	(0.62)		.16
	低	.22	38		.03	31		-.63	29		-.30	25	
	中	-.32	30		-.16	46		.20	45		-.15	44	
	高	.02	47		.17	38		.23	41		.32	44	
感情的な関係認知		(0.64)		.12	(1.06)		.12	(1.35)		.24**	(1.16)		.34**
	低	-.19	19		-.36	24		-.19	26		.09	27	
	中	-.10	71		-.04	75		-.20	72		.35	58	
	高	.44	25		.71	16		1.15	17		-.81	28	
親和的行動		(0.13)		.02	(0.56)		.09	(0.46)		.09	(0.38)		.10
	低	.06	38		-.01	32		.02	31		.03	32	
	中	-.01	47		-.21	51		-.20	48		-.17	47	
	高	-.07	30		.34	32		.26	36		.21	34	
主張的行動		(0.82)		.17	(1.46)		.20*	(1.09)		.23**	(0.54)		.14
	低	-.53	35		.63	33		.50	48		.09	45	
	中	.21	58		-.02	58		-.59	42		.17	40	
	高	.28	21		-.82	24		.02	25		-.38	28	
回避的行動		(0.70)		.12	(0.39)		.07	(0.48)		.08	(0.52)		.11
	低	-.04	61		-.12	58		.14	59		-.07	50	
	中	-.29	28		.27	35		.01	30		-.07	48	
	高	.40	26		-.10	22		-.33	26		.45	15	
	正準相関係数	.47			.41			.47			.63		
	判別係数-同友人選択	.44			.30			.31			.55		
	判別係数-別友人選択	-.51			-.56			-.69			-.72		
	判別率(%)	67.83			68.70			76.52			84.07		

(　　)内はRangeを示す　　　　p**<.01　p*<.05

（4）考察

本節では、数量化Ⅱ類の結果から、友人選択に関わる要因の検討を行った。友人に対する親密度をはじめとした、各評定に加え、先行研究で親密化に関わる要因として指摘されている居住状況（Newcomb,1961；山中,1995 ら）や接触頻度（内藤,200)を考慮し、これらの変数も加え分析した。1-2 回目の友人選択に寄与する変数は性、居住状況、友人との接触頻度であり、友人に対する親密度やその他の評定値は影響しなかった。この結果は友人関係形成時に座席の近さ等の要因が寄与することをした先行研究（糟谷,2005；佐藤・菊池・畑山,2004）を支持するものであった。2-3 回目の友人選択では、電話・メールの頻度、深さの関係認知、主張的行動が、その判別に寄与しており、3-4 回目の友人選択では、親密度、感情的な関係認知、主張的行動の各 3 つの変数が、その判別に寄与していた。4-5 回目の友人選択に寄与した変数は、接触頻度、電話・メールの頻度、親密度、拒否感情、感情的な関係認知の 5 変数であった。接触頻度が週 4-6 日で、電話やメールの頻度が週に 4 日以上の場合、5 回目でも同じ友人を選択していた。週に 4-6 日の接触頻度は、休日以外の大学内の生活での接触頻度に相当すると考えられ、大学入学 2ヶ月後の時点で大学内での行動を共有し、電話やメールでの連絡も週 4 回以上という高頻度で接している場合、同じ友人を選択する要因であると考えられる。また 4 回目調査時点での親密度が高い場合に 5 回目調査時点で同じ友人を選択し、拒否感情が高く、感情的な認知が高い場合には、5 回目で友人の選択を変えていた。4 回目調査時点は、入学後半年以上経過し 1 年の後期である。この時期の友人に対する親しさの高さは、その後半年後である進級した段階においても、同じ友人を選択する要因して寄与することを示した。一方で、入学半年後にその友人との関係を感情的であると高く認知し、拒否感情を高く持っていることは、その友人を選択しないことに寄与するものであった。拒否感情については、その感情の程度が中程度であることが、次回の友人選択で同じ友人を選択していた。拒否感情の時点間の推移では、新友人に対して、入学当初よりもその得点が高まり、親しい友人に対しても「反発感情」や「優越感」が付き合い中で生じる感情であることを明らかにされてきたが、数量化Ⅱ類の結果からは、高いレベルの拒否感情を持つことは友人を変化させる要因であり、中程度の拒否感情を認知することが友人を変わらず選択する要因であることが明らかになった。新井(1998)のある程度友人ネガティブな感情表出は、友人関係の満足度や精神的健康に必要であることを示す知見と一致するものである。「感情的認知」については、3-4 回目と 4-5 回目の友人選択にいずれも寄与す

る要因であったが、その影響する方向性が逆転している。3-4 回目の 1 年時前半から後半に移行する段階では、感情的な認知が高いことが、また 4-5 回目の入学 1 年時後半から 2 年時の進学の段階では冷静な関係認知が高いことが、同じ友人を選択する要因として寄与していた。1 年生の前半では、新しく出会った友人関係であるため、「感情的」といったような動的で刺激ある関係が、同じ友人を選択する方向に関連していた可能性がある。一方で 1 年生の後半には、大学生活にも慣れてきたこと、また長期の休みを経て友人関係に対しても、前期の段階よりもその「冷静さ」を感じていることが親密化の過程で得られた関係認知であり、「冷静さ」を感じた二者関係では、半年後にも同じ友人を選択する結果に結びついたものと考えられる。

判別率の推移では 1-2 回目調査時点では、約 68%、2-3 回目では約 69%、3-4 回目では約 77%、4-5 回目では約 84%であり、時間の経過に従い、本研究で採用した多く変数が友人選択に寄与する要因となっていき、判別に寄与することが明らかになった。すなわち、大学入学直後では、直接的な行動頻度や新生活に影響する住居状況といった内容が、友人選択に及ぼす要因であり、友人に対する認知感情、具体的な行動内容では友人は選択されていないことを意味する。しかしながら、新しい生活にも落ち着いてきた段階の友人選択について、様々な指標が選択に寄与するようになったことは、友人を選択する際に、多角的な判断がなされていることを示す結果であり、その多角的な判断が、判別率の高まりにもつながっているものと考える。

第 4 節　大学 4 年間の追跡的研究による友人選択の検討

(1) 目的

第 4 節では、大学入学時（1 回目質問紙調査：以下 T1）、大学 2 年時（5 回目質問紙調査：以下 T2）では質問紙調査のデータを、大学 4 年時（6 回目面接調査：以下 T3）では面接調査のデータを使用するが、T3 時点の面接調査の発話から大学 4 年間における「一番親しい友人」の選択過程状況の分類を試みることを目的とする。尚、回想的調査面接の手続きおよび分析は第 5 章の内容であるため、本章では説明を割愛する。すでに第 2 節では、115 名の協力者について、入学 1 年間における質問紙調査による友人選択状況を明らかにしてきた。その結果、約 25%の協力者が一貫して同じ友人を選択している一方で、約 75%の協力者は調査期間中少なくとも 1 回以上友

人を変更させている。T3 調査時点では、大学 4 年時に一番親しいと選択された友人が、大学 1 年時、および 2 年時に既に選択または認知されていた友人であったかの確認すること、また現在の関係について回答してもらうことで、大学生の大学 4 年間にわたる友人選択状況を明らかにしていく。

(2) 方法

(2)-1 調査協力者

T3 調査時点（第 6 回目面接調査）に参加した 104 名（男性 31 名・女性 73 名）の大学 4 年生のうち T1 ・T2（1 回目及び 5 回目質問紙調査）も含め 3 回の調査全てに参加したのは 81 名であった。このうち 1 名は、T1 調査と T2 調査のイニシャルの友人の特定が不可能であったため、分析から除外した。したがって、イニシャルの確認が可能であった 80 名（男性 22 名・女性 58 名）を分析対象とした。

(2)-2 調査時期

調査時期は、T1：2006 年 4 月下旬（第 1 回目質問紙調査）、T2：2007 年 5 月中旬（第 5 回目質問紙調査）、T3 ：2009 年 7 月～11 月（第 6 回目面接調査）の 3 回であった。

(2)-3 手続き

T1・T2 時点の質問紙調査では、大学入学後に知り合った一番親しい友人 1 名（以下新友人とする）と大学入学前に知り合った友人 1 名（以下旧友人とする）のイニシャルを記入させる手続きを使用した。また T3 時点の面接調査では、現時点での「一番親しい友人」を選択させ、親密化過程を回想させた上で、最後に T1 および T2 時点でのイニシャルとの一致する友人であるかを確認してもらった。また、T3 時点で、T1 および T2 時点で異なる友人を選択していた場合には、協力者の了解の範囲で友人選択過程のエピソードや T1・T2 時点で選択した友人との現在の関係を回答してもらった。なお、本節では使用しない T1～T3 時点の調査内容については詳細を割愛する。また、本節では新友人のデータのみを使用する。

(3) 結果

(3)-1 友人選択状況

T1～T3 時点における新友人の選択状況を表 1 に示す。T1～T3 時点において、一貫して「一番親しい友人」が変化しなかった「Ⅰ：無変更型」は 23.75%（19 ケース）であった。このケースでは、初期の出会い直後に選択した「一番親しい友人」が、大学 2 年時、大学 4 年時（現在）の調査でも同じ相手を選択したことを示す結果であり、大学 4 年間の生活全般においても、「一番親しい友人」が変化しない協力者の存在を確認した。その一方で、調査時点間で 1 回以上親しい友人の選択を変更した「変更型(Ⅱ～Ⅴ型)」が 76．25%（61 ケース）であり、また、毎回親しい友人の選択をさせる「Ⅴ：変更型」が 41.25%（33 ケース）で、最も多かった（Table4-4-1 参照）。

Table4－4－1． T1～T3時点における友人選択状沢

型		人数
Ⅰ(A→A→A)	無変更型	19
Ⅱ(A→A→B)	変更型(T1・T2一致型)	11
Ⅲ(A→B→B)	変更型(T2・T3一致型)	11
Ⅳ(A→B→A)	変更型(T1・T3一致型)	6
Ⅴ(A→B→C)	変更型(T1・T2・T3すべての時点で変更)	33

註）アルファベットは親しい友人を示す。アルファベットの差
変化したことを示す。

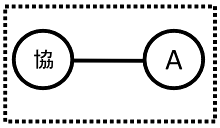
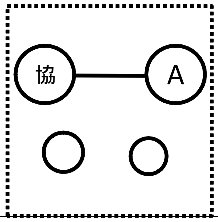
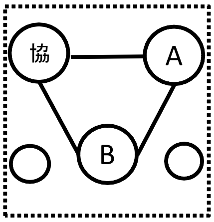
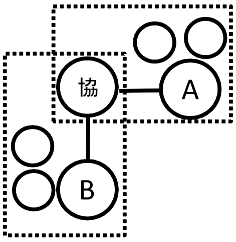
(3)-2 友人選択過程の状況

大学 4 年間の友人選択について、協力者が選択した友人選択の状況を面接調査（T3）から確認した。

「Ⅰ：無変更型」19 ケース中 2 ケースのみが、T1 時点から共通の友人が存在せず、選択友人との二者関係の中で選択されていたことが確認された。残り 17 ケースでは複数人数で構成される共通友人グループ関係の中で、T1～T3 時点において一貫して、同友人を選択していた。T1～T3 時点で、少なくとも 1 回以上友人選択が変化した「変更型（Ⅱ～Ⅴ型)」の 61 ケースのうち、共通友人グループ

関係にある複数友人関係の中で一番親しい友人の選択が変化したのが 26 ケースであり、残りの 35 ケースでは、初期に選択した友人関係と接点のない他の友人関係で一番親しい友人を選択していた（Table4-4-2 参照）。

Table4－4－2. 友人選択過程の類型

	Ⅰ型（n＝19）		Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ 型 （n=61） （Ⅴ型では、3名の友人が選択されるが図を省略	
	二者関係専心型	グループ内同人物選択型	グループ内選択変化型	別友人関係選択型
類型				
	T1～T3の推移で常に一番人が変化せず、また共通のも確認されない型	T1～T3の推移で常に一番人が変化せず、また共通のも確認される型	T1～T3の推移で一番親しい化しているが、共通の友人関選択が変更された型	T1～T3の推移で一番親しい化しているが、共通の友人関選択が変更された型
スケ数ー	2	17	26	35 註）Ⅴ型の一部同グループ（5ケ

註）AおよびBは一番親しい友人を示す。○は協力者と一A・Bと

(4) 考察

本節の対象となる 3 回の調査に 81 名中、第 1 回目（T1)、および第 5 回目調査（T2）に質問紙に記入したイニシャルの人物の特定が不可能であった協力者は、1 名のみであり、そのほか 80 名の協力者については、大学入学当初に選択した友人の属性や選択した理由、またその友人が面接調査の回想の中で出現した友人であるか否かも含めて、報告することが可能であった。この結果は回想による面接調査と 1-2 年時の質問紙調査の整合性を確認できるとともに、この一連の調査全体としての信頼性を示す結果である。回想的な手続きは、記憶の歪みや消失が課題となるが、追跡調査で選択した友人のイニシャルと面接で回想された友人関係の一致状況は確認できたことは、量的アプローチと質的アプローチの組み合わせる研究手法の一定の有用性を示す結果である。

本研究では、各調査時点で「一番親しい友人」を選択させる手続きにより、大学生の大学生活における友人関係において一番親しい友人の選択の変容を検討した。その結果、大学 1 年時の入学当初（T1 調査）に一番親しいと選択した友人を大学 2 年の 5 月（T2 調査)、大学 4 年時の面接調査(T3 調査)で、同じ友人を選択した協力者は、約 23％であった。また、同一友人を選択した 19 名中 2 名は共通する友人は存在せず二者関係であることを確認した。その他の 17 名の協力者は、共通の友人関係の存在を認知した上で、同一友人を選

択していた過程を確認した。
一方で、大学生活3年半の間少なくとも1回以上一番親しい友人の選択を変更した協力者は約76%であった。その中でも、3回の調査時点で毎回一番親しい友人を変更したケースが41%確認された。また、一度以上友人を変更した「変更型(61ケース)」の選択過程状況を確認したところ、面接調査で抽出された共通の友人グループ関係の中のみで、「一番」が変更されていたケースは26ケースであった。このケースでは、初期の印象がよかったメンバーよりもグループ内での付き合いの中で、より親しくなったメンバーが出現し、選択された状況が確認された。また友人の選択の変更が確認された残りの35ケースでは、面接調査で抽出された共通の友人グループ関係とは接点のない異なる友人関係での友人選択が確認された。すなわち、大学生は、ある一つの友人関係ネットワーク内だけに所属しているわけではなく、同時期もしくは大学生活の過程で新たなネットワークが形成され、その中から幅広く「一番親しい友人」の選択がなされている状況が確認された。
本節の追跡的調査の結果から、大学生の友人関係の一番親しい友人の選択過程において初期の出会いの状況のみでは明らかにされない過程があることが示された。すなわち、長期の継続的な調査と複数の対人関係の追跡の必要性を示唆するものであった。

第5節　研究2の考察

第2節～第4節から得られた結果から研究2の考察を行う。
本章において、「一番親しい友人」を固定せずに、各調査時点において友人を選択する手続きにより、先行研究で明らかにされてきた親密化過程を確認するとともに、複数友人関係で推移する友人関係の過程を抽出する必要性を確認する新たな視点を提供するものであった。第2節では、入学3週間で知り合った一番親しい友人がその後の追跡的調査期間中一度も変化せずに、学年が変わった1年後の選択においても同じ友人を選択した群が25%程度いることが明らかにされた。また、第4節の大学4年間における追跡調査では、イニシャルの推移を大学入学から3年半において追跡した結果、同じ友人を選択した協力者は、約23%が存在した。この群では山中(1994)らの指摘した関係の初期分化が生じていた可能性がある。初期分化が生じているか検証として、第2節では、初期の評定値について友人選択による比較を行った。その結果、同じ友人を選択した群の友人への初期の印象について、友人を変更した群よりもポジティブな評定をしているという結果は得られなかった。本研究の協力

者は調査各時点で「一番親しい友人」を選択している。すなわち同じ友人を選択したことの意味は、先行研究で指摘された初期の友人に対するポジティブな印象が続き選択されてきたパターンと少なくとも調査期間中にそれ以上の印象の良い友人が出現することなく、同じ選択がされた結果であるといえる。特に、入学 3 週間目から 2 ヵ月後の友人選択による各指標の差異は少ない。すなわち入学直後の友人選択が必ずしも、初期分化を示すものではなく、新しく出会った友人に対する全般的な評価であり、時点の効果のみが影響した可能性もある。その一方で、少なくとも 1 回以上、友人の選択が変更された協力者が 75％存在することは、友人選択が複数の対人関係の中で選択されている可能性と関係の初期分化以外の親密化過程が存在することを確認するものであった。また、友人選択が各指標に及ぼす影響、友人選択に寄与する変数の検討では、大学入学半年と入学 1 年後における推移で、その友人選択によって各評定の推移が変動していた。また友人選択を前後半のパターンでグループ化した検討によると、前後半とも同じ友人を選択した群では、全ての指標ではないが、その得点の推移を概観すると、入学当初から少しずつ、よりポジティブな感情や相手との関係に深さを認知する推移が確認された。一方で、友人を変化させた群の中でもパターンにより差異があることが確認された。特に、前半の友人選択が一致していたにも関わらず、後半の友人を変更したグループ群の得点の推移は 4 回目得点が低く、5 回目に選択した友人へのポジティブ感情や深さの認知が有意に高まっていたことが特徴的であった。先に述べたように、「同じ友人を選択すること」の 2 つ可能性について述べたが、この 2 群の存在とその得点の推移から、両方が存在することを裏付けるものとなった。また、第 3 節で検討した友人選択に寄与する要因についても、入学直後よりも入学半年〜1 年後の判別に寄与する変数が多く抽出された。判別率も、時間の推移を経ることに、高くなっていることから、「一番親しい友人」が意識化された中で選択される時期が入学半年後以降であることが確認することができた。すなわち、入学当初の友人選択は複数の友人関係の中で行われ、親しさを甲乙つけがたい状態である可能性があること、友人形成が少なくとも入学 3 か月の前期期間中ではいまだ活発な状態であり、その中で友人選択が行われた可能性を示す結果であった。

第 4 節の大学 4 年間における追跡的調査では、イニシャルの推移を追跡するだけでなく、友人を変化する過程についても面接調査の発話から検討した。その結果複数の共通する友人関係の中で一番親しい友人が変更されたケースと回想された友人関係とは全く別のネットワークの友人関係が確認されるケースが抽出された。すなわち大学生の友人関係が単に複数対人関係で成立しているという事実で

はなく、複数のネットワークを有していることが、この分析により明らかにすることができた。

大学生では、中学・高校に比べ、生活面でも多様な活動が可能となる。中学・高校ではクラスという単位で学校生活が構成されるため、友人関係もその枠に限定される可能性がある。また全ての中・高生が課外活動やアルバイトを経験しているわけではない。大学生は授業選択の自由度は格段に広がり、学部・学科という枠の中でも、大学生活の大半が自主的に構成可能である。アルバイトを経験する学生も増え、自由に使えるお金も高校生より多いことが明らかにされている(渡辺,2007a)。また大学 2 年時には成人し、高校時代には経験できない遊び方も可能となり、さらに大学 4 年生の面接時は、まさに社会人になる前の移行準備期間であるため、就職活動等学外での活動が非常に活発であったことが想像される。大学生活での活動の幅の広がりは、すなわち対人関係の広がりに直接関連している。大学生は学内だけでなく学外の活動も含めて、多様な友人関係ネットワークを有していることが本研究の手続きにより実証されたことの意義は大きいと考える。

第 6 節　本章のまとめ

本章では、大学新入生に対して、5 回の追跡調査を行った。その際、一番親しい大学入学後の友人（新友人）と大学入学前に知り合った一番親しい友人（旧友人）を、毎回の調査で選択してもらい、新友人の友人選択の推移とその選択に関わる要因を検討した。第 2 節の結果、初期に一番親しいと選択した新友人を一貫して、選択する協力者が確認され、山中(1994)らの指摘した関係の初期分化の存在を確認するものであったが、本研究の指標の推移による検討から、山中ら(1994)の初期の友人に対するポジティブな印象が続き選択されてきたパターンと少なくとも調査期間中にそれ以上の印象の良い友人が出現することなく、同じ選択がされたパターンの両方の存在を示唆した。また、友人を各調査時点で一番親しい友人を選択させることで、約 75％の協力者が入学 1 年間の中で少なくとも 1 回以上、初期に選択した友人を変更した。親密化過程には初期分化では捉えきれない様相があること、また複数友人関係の中で友人が選択されていることを確認するものであった。また、入学半年～入学 1 年後の友人選択においても、いまだ約 43％の協力者が友人を変更させている結果から、親密化過程研究において、長期的な追跡の必要性を確認するとともに、1 人の友人を追跡するだけではなく、複数の対人関係を含め、その友人がどのように選択され、親しくなっていく

かの詳細を追跡する視点を提供した。

また、大学4年間の追跡的検討でも、友人選択が変更される過程を確認した。この変更は大学1年時の初期の時期だけでなく、大学生活の後半においても起こることが確認されたことから、大学生の親密化過程の検討では、学生生活の大半を追跡する視点が重要であることを確認した。また大学生の友人関係では、単に複数の友人関係が存在しているという事実だけではなく、大学生の友人関係には複数の友人関係グループが存在し、多様な関係の中で一番親しい友人が選択されている過程が明らかにされたものである。

これらの様相は質的検討の手続きと質問紙による追跡調査の統合的検討により実現されたものであった。本章の目的は友人関係の親密化過程を複数友人関係で捉える必要性を確認することであったが、「友人選択」という手続きを採用することによりその目的を達成した。

註）

[1]この研究の一部は「渡辺舞・今川民雄(2008a). 大学新入生の新旧友人関係に関する追跡的研究（3）－新旧友人の友人選択状況の違いが親密度得点の推移に及ぼす影響－ 日本心理学会第72回大会発表論文集, 126.」にて発表された。

[2]この研究の一部は、「渡辺舞・今川民雄(2009). 大学生の友人関係に関する追跡的研究－大学生活で「一番親しい友人」は変化するのか？－ 北海道心理学会第56回大会発表論文集, 32」にて発表された。

[3]新友人の「1-2回目の調査におけるイニシャル一致群」では、本人の確認が「1. 同じ人物」群、「3. 覚えていない」群で、2回目調査時点の親密度得点に差があるかを検討したところ、有意な差は見られなかった($F(1,60)=1.85, n.s.$)。「1-2回目調査のイニシャル不一致群」では、「1. 同じ人物」群、「2. 違う人物」群及び「3. 覚えていない」群で、2回目調査時点の親密度得点に差があるかを検討したところ、有意な差は見られなかった($F(2,50)=0.60, n.s.$)。同様の手順で「2-3回目調査のイニシャル一致群($F(1,73)=0.00, n.s.$)」、「2-3回目調査のイニシャル不一致群($F(2,37)=2.96, n.s.$)」「3-4回目調査のイニシャル一致群($F(1,77)=4.32, p<.05$)」、「3-4回目調査のイニシャル不一致群($F(2,33)=0.91, n.s.$)」「4-5回目調査のイニシャル一致群($F(1,64)=0.40, n.s.$)」、「4-5回目調査のイニシャル不一致群($F(2,46)=0.34, n.s.$)」について分析をおこなったところ、「3-4回目

調査のイニシャル一致群」で有意な差がみられ、同じ人物であると確認した群の親密度得点（5.70 点）が前回調査のイニシャルを忘れた群の得点（5.22 点）よりも高かった。しかしながら、その他の調査時点、友人選択ではでは有意な差は見られなかったため、記入されたイニシャルの一致状況を採用した。尚、旧友人ではすべての調査時点間、友人選択ではでは有意な差は見られなかった

第 5 章
研究 3：回想的調査面接による大学生の友人関係の親密化過程に関する研究 1)2)

第 1 節　研究 3 の目的

第 4 章では、「一番親しい友人」を追跡的調査で毎回選択してもらう手続きを採用することにより、複数友人関係で親密化過程を抽出する必要性を確認した。また、大学生が、複数の友人関係グループを有し、その中で「友人選択」がなされている状況が確認されたことは、従来の質問紙調査の量的検討のみで、友人関係か進展していくことを抽出することへの限界が明らかになった。本章では、回想的調査面接を実施し、友人関係の親密化過程について、複数の共通友人関係も含めて、その様相を明らかにすることを目的とする。本研究で親密化過程を抽出する回想的調査面接とは、「協力者が選択した一番親しい友人について、出会いから現在の状況を、時間の推移に従い、友人関係における出来事を回想させる方法、また選択友人と協力者を含む共通友人が確認された場合には、選択した友人との関係に加え、共通友人との関係も回想させる方法」であると本論文では定義する。

具体的には、第 1 に回想的調査面接によって親密化過程を抽出する方法を検討することである。第 2 に複数友人関係の親密化過程のパターンを明らかにする類型化を提案するために探索的検討と適用を行うことを目的とする。

第 2 節　回想的調査面接による手法の検討

(1) 目的

第 2 節の目的は、回想的調査面接によって親密化過程を明らかにするために、回想的調査面接の手続きを確立することを目的とする。

(2) 方法

(2)-1　調査協力者

北海道道内の大学生および卒業生 15 名（男性 4 名・女性 11 名）

を対象に面接調査を行った。内訳は、大学3年生（7名）・4年生（6名）・大学卒業生（科目履修生；2名）であり、平均年齢は21.40歳（SD=1.24）であった。

(2)-2　調査時期

2007年11月～2008年1月に個人面接で行った。

(2)-3　手続き

面接に使用した時間は11分～48分であった。面接内容は協力者の許可を得て録音し、逐語録は著者が面接終了後に起こした。面接の内容については、個人情報に関する公表は行わないこと、調査分析終了後は、面接の録音を消去することを口頭で約束し、協力者全員から了承を得た。大学生の友人関係の親密化過程を抽出するために、以下の流れに従い、面接を行った。①今現在付き合いのある中で一番親しい友人（同性）を選んでもらい、その友人との親密化過程について語ってもらうことを説明した。②出会った時の状況の抽出するために、出会った時期、出会った場所、出会った時の状況を質問し、回答を求めた。③協力者と選択した友人を含む共通の友人関係の有無を確認し、複数の友人関係であると回答した協力者には、その共通する友人の人数を回答させた。⑤最初の出会いから、すぐに親密化が始まったのかを確認し、出会いから、すぐに親密化が始まらなかったケースの場合には仲良くなった出来事（きっかけ）のエピソードを語ってもらった。⑤以上の出会いの状況を確認した上で、親密化過程の回想をさせた。親密化過程については、学年（学校段階）ごとにその過程を語ってもらった。その選択された友人が、大学入学以前に知り合った旧友人であった場合には、高校入学以降から現在までの過程を中心に回想してもらった。また、協力者が「一番親しい友人」について、大学入学以前に知り合った旧友人を選択した場合には、その友人との親密化過程を回想してもらった後、再度、大学入学後に知り合った友人の中で一番親しい友人をもう一名選択してもらい、上記の流れに従い再度回想してもらった。

(3) 結果

(3)-1　面接調査に使用する質問項目の検討

一番親しい友人として大学入学前に知り合った旧友人を想起した割合は60%（15名中9名）であった。なお、3年生の調査協力者では7名中6名が、旧友人を選択していた。旧友人に関する面接記録は9ケース、新友人に関する面接記録は15ケース（内2名は新旧友人が同一友人であった。）を得たが、本報告の目的は、親密化過程

を抽出するための質問項目の検討であることから、新旧友人を区別せず、22 ケースを分析対象とした。

面接調査から得られた逐語録から、内容を検討したところ、22 ケース中 17 ケースで、選択友人以外の共通する友人が存在することが明らかになった。共通友人の確認された 17 ケース中 7 ケースでは、高校や大学の入学当初のオリエンテーションやクラスメイトとして知り合い、同時期に共通の友人関係とも知り合っており、グループ関係が現在まで継続しているケースが中心であった。残りの 10 ケースでは最初の出会いから、他の友人関係を経て現在の関係に至ったケースが確認された。初期の出会い時には、親しい友人関係に発展しなかったが、ある時期のきっかけ（出来事）から友人関係が始まったケースや、出会いからグループ関係に発展した後に、ある時期のきっかけ（出来事）を経て、個人関係に移行したケースが含まれていた。

また面接調査によって得られた発話を回想による時間的推移に従い簡略化し作成した資料を参考にし、親密化過程の抽出に必要と思われる選択友人との出会いの状況や共通友人の存在に関する質問項目を著者と指導教員および所属研究室大学院生（5 名）によって、検討し、以下の 11 項目を採用した（Table5-2-1 参照）。尚、面接調査の手続きでは、質問項目 No1～No8 までの項目に回答してもらった後、協力者に時間的推移にしたがって回想してもらうことを説明した。過程の中で選択友人と共通友人関係で経験した出来事やエピソードについて出会いから現在までを回想してもらうが、できる限り協力者の回想による発話を基調とすることを目的とするため、回想中の面接では、実験者が設定した質問項目をあえて設定しなかった。面接中に必要と思われる確認事項について著者が面接調査中に質問を加えていく方法を採用した。したがって、回想中の共通質問項目は存在しない。現在までの回想終了後、No9～No11 の共通質問項目に回答してもらった。

Table5-2-1. 面接に使用する質問項目一覧（共通項目のみ）

	質問項目	質問例
1	一番親しい友達（大学に入ってから知り合った一番親しい友達）の選択	今、お付き合いのある友人の中で一番親しい友人を1名、選択してください。 大学入学後知り合った友人の中で一番親しい友人を1名、選択してください。
2	最初に出会った時期	Aさんと最初に出会ったのはいつですか？
3	最初に出会った場所	Aさんと最初に出会ったのは、どのような場所ですか？
4	最初に出会った時の状況（場面）	Aさんと最初に出会ったときにエピソードを教えてください。
5	最初に交わした言葉	Aさんと最初に出会ったとき、どのような会話をしましたか？ Aさんと最初に出会ったとき、どのような会話をしましたか？どちらの方から、どのような言葉をかけましたか？
6	最初の印象	Aさんに対する第1印象はどのようなものでしたか？
7	選択友人と協力者を含めた共通の友人関係の有無と人数	今現在、Aさんとあなたを含めた共通の友人関係はありますか？ 共通の友人は、Aさんとあなたを含めて何名ですか？
8	仲良くなったきっかけ	Aさんとあなたは、出会ってからすぐに仲良くなりましたか？
9	グループでの付き合いが話の中心の場合、その友人を選んだ理由	今回、Aさんを中心に、お話いただきましたが、Aさんを選択した理由を教えてください。
10	選択友人の他の友人との差異	Aさんとその他の共通する友人では、行動面や感情面で違いはありますか？
11	今後の付き合い予測	大学卒業後Aさんとの関係は、どのように変化していくと考えていますか？ 大学卒業後、Aさんとあなたを含む共通の友人関係はどのように変化していくと考えていますか？

（4） 考 察

本節では、回想的調査面接から得られたケースから、大学生の友人関係の親密化過程の抽出に必要な質問項目の選定を試みた。本節では、青年期の友人関係の親密化過程の抽出に必要な質問項目の作成と手続きの確立が目的であったため、新旧友人の発話の全てを対象とした。新友人と旧友人では、知り合ってからの時間的な差異が存在するが、同時に分析することにより、様々な友人関係の親密化過程の抽出に適用可能な共通質問項目を選定できたものと考える。

親密化過程では、多くの場合、複数友人関係で推移し、最初の出会いのほかに、友人関係を認知する出来事やきっかけが存在していた。その多くが学校生活の出来事や部活動・サークルに関連しており、その関係の方向性に大きな影響を与えていることが明らかになったことから、これらの内容が抽出できるような質問項目が必須である。本報告のケース数は少なく、同大学内の協力者にとどまっている。今後追加調査を行い、方法の検討を重ねていく必要があると考える。

第 3 節　回想的調査面接による親密化過程の類型化の検討

(1)　目的

既に第 4 章では、「友人選択」という手続きから、大学生の友人関係では、「一番親しい友人」が変化することを明らかにしている。すなわち、複数対人関係の親密化過程を明らかにする意義を確認した。第 3 節の目的は、第 2 節で確立した回想的調査面接の手続きを用いて回想的調査面接を実施し、大学入学後に知り合った新友人を対象としてその過程の分類を試みることから複数対人関係の親密化過程を明らかにすることである。

(2)　方法

(2)-1　調査協力者

北海道道内の大学 4 年生 31 名（男性 7 名・女性 24 名）であった。平均年齢は 21.87 歳（SD=.62）であった。

(2)-2　調査時期

2008 年 7 月～9 月に個人面接で行った。

(2)-3　手続き

面接に使用した時間は 17 分～43 分であり、面接内容は協力者の許可を得て録音し、逐語録は著者が面接終了後に起こした。面接の内容については、個人情報に関する公表は行わないこと、調査分析終了後は、面接の録音を消去することを口頭で約束し協力者全員から了承を得た。手続き・質問項目は、第 2 節で検討した手続きを使用した。面接の流れは以下のとおりである。

①今現在付き合いのある中で一番親しい友人（同性）を選んでもらい、その友人との親密化過程について語ってもらうことを説明した。したがって、その選択された友人は、大学入学以前に知り合った旧友人であった場合と大学入学後に知り合った友人である場合の可能性がある。
②出会った時の状況の抽出するために、出会った時期、出会った場所、出会った時の状況を質問し、回答を求めた。
③協力者と選択した友人を含む共通の友人関係の有無を確認し、複数の友人関係であると回答した協力者には、その共通する友人の人数を回答させた。
④最初の出会いから、すぐに親密化が始まったのかを確認し、出会

いから、すぐに親密化が始まらなかったケースの場合には仲良くなった出来事（きっかけ）のエピソードを語ってもらった。
以上の質問項目については第 2 節で検討した共通質問項目（Table5-2-1 参照）を使用した。
⑤上記の①~④の出会いの状況を確認した上で、親密化過程の回想をさせた。親密化過程については、学年（学校段階）ごとにその過程を語ってもらった。
⑥協力者が「一番親しい友人」について、大学入学以前に知り合った旧友人を選択した場合には、その友人との親密化過程を回想してもらった後、再度、大学入学後に知り合った友人の中で一番親しい友人をもう一名選択してもらい、上記の流れに従い回想させた。
尚⑤と⑥親密化過程を回想してもらう際には、協力者の発話を基調とするため、回想中の面接では、実験者が設定した質問項目を使用しなかった。面接中に必要と思われる確認事項について著者が面接調査中に質問を加えていく方法を採用した。
⑦親密化過程の回想が終了後、「一番親しい友人」を選択した理由、共通友人と選択友人との差異、今後の付き合いを予測してもらった（Table5-2-1；質問項目 No9～11 使用）。
⑧面接調査終了後デブリーフィングを行い、調査を終了した。

(3) 結果

(3)-1 回想的調査面接における親密化過程の分類

一番親しい友人として大学入学後の新友人を想起した協力者は 19 名であり、このうち 18 名は、大学入学当時に出会った友人を選択した。残りの 1 名は大学 3 年時の 12 月に知り合った友人を選択した。大学入学前に知り合った旧友人を想起した協力者は 12 名であった。旧友人との出会いの時期は小学生・幼稚園・保育所時の友人（7 名）、中学時の友人（1 名）、高校時の友人（4 名）であった。
親密化過程の分類について、新友人との親密化過程 31 事例を分析対象としたが、協力者の選択した友人は同大学同学科内（22 名）が最も多く、他学科（2 名）、部活・サークル内（5 名）を含めると、94％の協力者が、一番親しい新友人として、同じ大学内の友人を選択していた。その他の 2 事例では、アルバイト先の友人を選択していた。
次に友人との関係が出会いの直後から進展した事例と、初期の出会い時には、友人関係に発展しなかった事例を発話から判定した。その結果、初期の出会い時には、友人関係に発展しなかったが、ある時期のきっかけ（出来事）から友人関係が始まったケースが 11 事例確認された。本研究では、以下の親密化過程の分類について、

選択した友人との関係がスタートして以降の内容を分類に採用していく。

友人関係が形成された後の親密化過程の分類について、①共通友人の有無、②選択友人と共通友人の関係スタート時期の差異、③選択友人及び共通友人との関係変動をもたらした出来事の有無、④グループ関係成立後における選択友人とだけの経験・行動の共有の有無の4点をチェック項目とした。4点の設定については、第1に著者が逐語録から､協力者別に時間的推移に従いマトリクスを作成し、上記の4項目を抽出した。次に本研究の協力者31名のマトリクスから4項目が判定可能であるかについて、著者と指導教員、及び同研究室内の大学院生（4名）によって確認した。その結果4項目が判定可能であると判断した。以下に結果の詳細を記す。

(3)-1-1　判定項目1　共通友人の有無

大学に入学してから知り合った友人の中で現在付き合いのある一番親しい人物を一人選択させた後、その友人と協力者の共通の友人の有無を尋ねた。共通友人がいないと回答した協力者は3名であった。共通の友人がいると回答した協力者（28名）の友人数（選択友人は除く）の平均人数は3.54（SD=1.64）人であった。

(3)-1-2　判定項目2　協力者と選択友人との友人関係形成時期の差異

選択友人と共通する友人関係があると回答した28名の協力者について、友人関係形成時期に差異があるかを発話から分類した。その結果、協力者28名中18名は、一番親しい友人と共通友人との関係が、同時期にスタートしていることが確認されたが、残り10名の協力者は、一番親しい友人との二者関係が先行してスタートし、共通友人と「共通の授業」「サークル・部活内の出来事」「飲み会・学外での付き合い」等の何らかの出来事を経て共通の複数友人関係として成立したことが確認された。

(3)-1-3　判定項目3　協力者と選択友人及び共通友人との関係変動をもたらした出来事の有無

選択友人と共通する友人関係があると回答した28名の協力者について、過程の中での生じた出来事や経験の中で、友人関係の変動が確認されたものを発話から抽出した。その結果、28名中6名は、選択友人と共通友人との関係がスタートした後、その関係が変動するような出来事が確認されず、出会いの段階から、現在まで関係が維持されていた。一方で残り22名の協力者は、選択友人との関係スタートから現在までの過程において、共通友人関係を含む関係の

変動が確認された。その関係変動に関連した出来事エピソードとして「共通の授業・演習・実習（8 事例）」「サークル・部活内のイベント（6 事例）」といった、学科や学内の活動や経験が多く抽出された。その他「飲み会・誕生日会・学外の付き合い（4 事例）」の経験が確認された。経験の結果、初期に確認した関係から、共通友人の増減、友人グループの合体・分離、グループ関係から二者関係の移行、二者関係からグループ関係への移行といった関係の変動を確認した。

(3)-1-4　判定項目 4　協力者と選択友人とだけの経験・行動の共有の有無

選択友人と共通する友人関係があると回答した 28 名の協力者について、選択友人とだけ共有する行動や経験があるかを発話から分類した。上記の判定項目 3 では、経験の結果、何らかの関係の変動が確認された発話を抽出したが、判定項目 4 では、関係変動の確認されない出来事（行動・経験）について判定した。

その結果、28 名中 14 名は、選択友人と共通友人との関係がスタートした後、常にグループとしての行動が主であり、選択友人と共通友人との行動や経験に差が確認されなかった。一方で残り 14 名の協力者には、共通の友人関係のほかに選択友人とだけ共有する行動や経験を有している認知があることが確認された。

(3)-2　親密化過程の分類

以上の 4 つの判定項目の組み合わせにより、親密化過程を 7 類型に集約した。分類は以下の Figure5-3-1 のチャートに従った。分類名と各分類の定義を Table5-3-1 に示す。判定に関する事例として、グループ関係維持型（Ⅱ型）の事例を資料 F に、二者先行中心グループ関係変動型（Ⅶ型）の事例を資料 G として添付する。

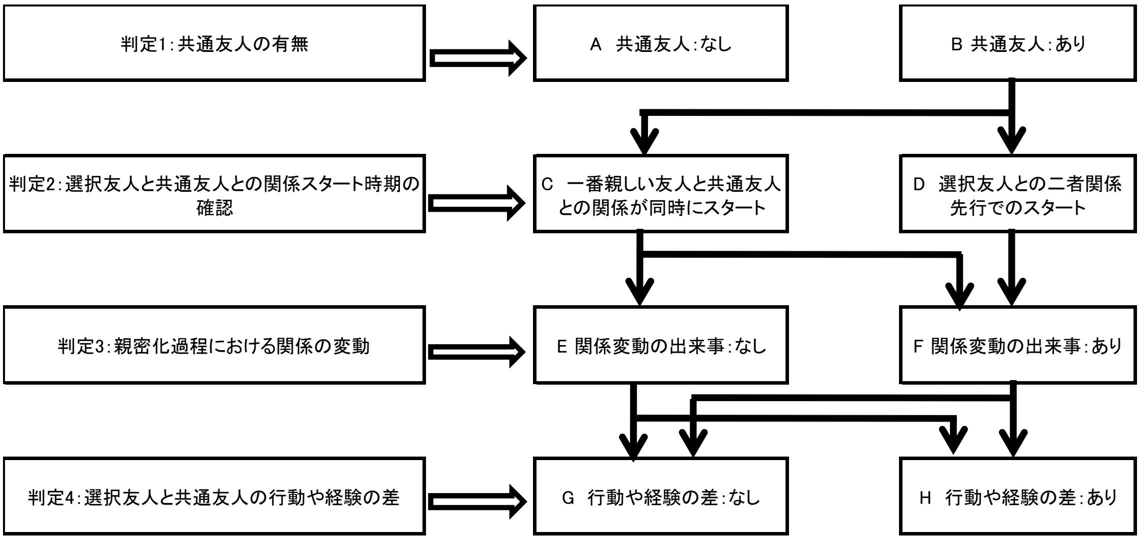


Figure5-3-1. 親密化過程の判定項目

註)「B共通友人あり」で「D二者関係先行でのスタート」である場合、過程の中で「F関係変動の出来事あり」のルートをたどることとなる。D→Eのルートについては、存在しない。

Table5-3-1. 回想的調査面接による大学生の友人関係に関する親密化過程分類(1)

分類名(判定記号)	定義	事例数
Ⅰ:二者関係専心型(A)	出会いから現在の関係まで、選択友人との関係のみが確認された型	3
Ⅱ:グループ関係維持型(BCEG)	選択友人と共通友人の関係が同時期に成立し、その後関係が変化せず、グループ関係が継続している型	5
Ⅲ:二者中心グループ関係維持型(BCEH)	「Ⅱグループ関係維持型」と同様の過程であるが、過程の中で選択友人とだけの経験や行動の共有がある型	1
Ⅳ:グループ関係変動型(BCFG)	選択友人と共通友人の関係が同時期に成立したが、その後友人関係の変化が確認される型	6
Ⅴ:二者中心グループ関係変動型(BCFH)	「Ⅳグループ関係変動型」と同様の過程であるが、過程の中で選択友人とだけの経験や行動の共有がある型	6
Ⅵ:二者先行グループ関係変動型(BDFG)	選択友人との出会いから、二者関係が成立した後にグループ関係が確認される型。	3
Ⅶ:二者先行中心グループ関係変動型(BDFH)	「Ⅵ二者先行グループ関係変動型」と同様の過程であるが、過程の中で選択友人とだけの経験や行動の共有がある型。	7

(　　)内のアルファベットはFigure5-3-1の判定項目の組み合わせを示す。

(4) 考察

本研究の結果、多くの協力者が選択友人と共通の複数の友人関係を認知していることが確認された(90%:Ⅱ~Ⅶ型)。また選択友人

と共通友人との関係がその過程において「学科のカリキュラム」や「サークル・部活動」等の経験の共有を通して相互に影響しあいながら親密化していく過程が確認され、多川ら(2002)の指摘の通り、友人関係の研究において、複数の対人関係を追跡する必要性を示す結果である。

次に選択友人との出会いから関係に変化なく、継続的な友人関係である事例（23%：Ⅰ～Ⅲ型）が確認された一方で、その他事例（Ⅳ～Ⅶ型）では、関係スタートから、学部学科のカリキュラム（専門科目の選択・資格取得の方向性）、実習、就職、卒論等の経験や友人関係の中での出来事によって、初期に確認した関係から、共通友人の増減、友人グループの合体・分離、グループ関係から二者関係の移行、二者関係からグループ関係への移行等に関係が変動し、現在に至っている過程が明らかにされた。これらの関係変動は、大学入学直後に限らず、大学3年～4年時の就職活動での情報交換や就職の方向性等でも確認されており、友人関係が安定して確立され、そのまま維持されていく過程と、卒業間近まで様々な経験の中で友人関係が変動する過程の両方の事例が確認された。

さらに友人関係の親密化過程では、共通友人を含むグループ関係が認知されている中で、選択友人との特別な経験や行動も有している事例（45%：Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ型）も確認された。面接時に一番親しい友人を選択する際に、二者関係だけでの経験の共有を認知している協力者は、選択についての判断に迷いが見られなかったが、常にグループでの関係を認知している協力者の中には、そのグループ関係の中から一人を選択することが難しいと感想を述べる協力者もいた。グループで友人関係を構成されている中で、友人関係を二者関係ととらえず、グループ全体として友人関係を捉えている協力者の存在が明らかとなった。

友人関係における追跡的研究（Berg, 1984；Hays, 1984,1985；中村，1989；山中，1994）の多くは、初期の調査で選択した友人を固定しその推移を検討しているが、本研究において回想的調査面接の手続きを適用したところ、選択友人と共通友人との共有する経験や行動の有無により、過程の中で「一番親しい友人」が変更されている可能性を示唆し、面接調査により過程を抽出する意義を明らかにした。

本研究では、回想的調査面接にて使用することで、複数の対人関係を同時に回想させ、友人関係が変動する過程も含めて大学生活における友人関係の親密化過程の詳細をとらえることを可能とした。

一方で本研究の協力者は31名であり、大学も学科も全て同じ協力者であったため、学科のカリキュラムが、グループでの演習、資格取得を目指す特徴があることを考慮すべきである。これらの学科

の特徴が友人関係の親密化過程に影響を与えた可能性がある。今後の課題として協力者数を増やし、複数の学部・学科での検討が望まれる。

第4節　回想的調査面接による親密化過程の類型化の適用

(1)　目的

第4節の目的では、第3節で検討した親密化過程の類型化に従い、類型化の適用を検討することである。

(2)　方法

(2)-1　調査協力者

北海道道内の大学4年生104名（男性31名・女性73名）の大学4年生であった。平均年齢は21.65歳（SD=.57）であった。

(2)-2　調査時期

2009年7月～11月に個人面接で行った。

(2)-3　手続き

(2)-3-1　同意書による研究協力の了承

面接調査に協力してもらう前に、文章で調査に関する同意書を交わした。同意書の内容は、以下の通りであった。①調査は友人関係に関するものであるが、友人の個人を特定するものではなく、友人をイニシャル（例：Aさん）で話してもらうこと、②面接の内容は録音し、著者以外の人物がこの録音を聞くことはないこと、また録音の内容は共同研究者である著者の指導教員、および同研究室の大学院生が研究のため確認をする場合があるが、著者は個人情報及び個人名を特定する情報は開示しないこと、③2006年及び2007年の質問紙調査の内容（第3・4章；1～5回目質問紙調査）について質問するが、個人情報または、協力者の友人を特定する内容には触れないこと、④この調査の録音・質問紙は著者の責任において厳重に管理し、個人情報が外部に漏れることはないこと、また調査結果は、論文作成、及び学会研究活動のみ使用し、調査研究終了後は、著者の責任において、録音・質問紙を破棄すること、⑤協力者は面接調査前または面接調査中に、この調査への協力を中止した場合には、その旨を甲に申し出ることができ、調査はいつでも中止することができることの以上の内容であった。同意書は、著者が読み上げをし

ながら、双方で1項目ずつ確認をし、調査協力者がその内容に承諾した場合には、同意書2通にサインを求め、著者と協力者が1通ずつを所有することとした。同意書を資料Hとして添付する。

(2)-3-2 面接内容・手続き

面接方法の内容については第2節で検討し、第3節で使用した手続きに従い実施したため、詳細を割愛する。面接における平均録音時間は40分06秒（R＝22分53秒～62分47秒）であり、逐語録は著者が面接終了後に起こした。親密化過程に関する面接調査終了後に、第3・4章の第1回目～5回目の調査にも参加していた協力者には、質問紙調査で記入した友人のイニシャル及び、本研究で選択した友人について、同じ友人を想定したのかについて確認を行った。調査期間中に一番親しい友人が変化していた場合には、協力者が回答可能な範囲で、どのような友人を選択したのかについて回答を求めた。この分析結果は、第4章第4節で記載済みである。

(2)-4 質問紙の内容

面接調査終了後、大学生活の適応感に関する質問紙調査に回答させた。項目の詳細は第6章で説明するため、本章では割愛する。

全ての調査終了後に、デブリーフィングを行った。また本研究に対する協力の謝礼として、2000円を支払い[3)]、領収証に名前・住所の記入と捺印を求めた。調査の過程は以上のとおりであり、面接録音時間以外の、研究目的の趣旨説明、同意書の確認・サイン、質問紙の記入、領収書の記入での所要時間は、15～20分程度であった。

(3) 結果

(3)-1 協力者の友人選択と選択した友人との出会いの状況

面接時に、調査協力者に一番親しい友人の選択をさせたが、大学入学後に知り合った新友人を選択した大学生は58名（55.77%）であり、入学以前に知り合った旧友人を選択した大学生は46名(44.23%)であった。次に協力者と選択された友人との出会い時期と場所の状況をTable5-4-1及びTable5-4-2に示す。その結果、大学入学後に知り合った新友人のうち、大学4年生の面接調査時に一番親しい友人として選択した人物とは、約90%以上の協力者（95名）が、大学入学半年以内に知り合っており、大学前オリエンテーション[4)]を含め、授業が始まる前の入学式やオリエンテーションの行事

の中で、約50%以上の協力者（56名）が知り合っていた。また、90%以上の協力者（95名）が、同じ大学内の友人を選択しており、その他の9名は、学外のアルバイト内の友人（4名）、および大学入学前の学校（5名）で知り合っており、大学入学試験時に出会っているケースや、大学入学後再会したケースが確認された。

Table5-4-1. 選択された友人との出会いの時期の人数（%）

入学前	大学1年（前期終了前）	大学1年（後期）	大学2年	大学3年
17	78	3	5	1
(16.35)	(75.00)	(2.88)	(4.81)	(0.96)

Table5-4-2. 選択された友人との出会いの場所の人数（%）

入学式前オリエンテーション	入学式・オリエンテーション	授業	サークル・部活	アルバイト	大学以前の学校
12	44	24	15	4	5
(11.54)	(42.31)	(23.08)	(14.42)	(3.85)	(4.81)

(3)-2 親密化過程の分類

親密化過程の分類については、大学に入学後知り合った一番親しい友人に対する逐語を使用した。新友人の親密化過程の分類について、①共通友人の有無、②選択友人と共通友人の関係スタート時期の差異、③選択友人・友人グループの関係変動をもたらした出来事の有無、④選択友人とだけの経験・行動の共有の有無の4点を親密化過程分類のチェック項目とした。共通の友人関係の有無と共通友人の人数については、著者が逐語から判定し、親密化過程の始まりの時期の特定と親密化過程の分類に使用する3項目については、著者と指導教員および同研究室大学院生7名によって、1ケースにつき3名で判定を行った。判定については、著者が逐語録から、親密化過程の分類に必要と判断した内容を一部抜粋し、協力者ごと作成したマトリクスを使用した。各項目の3者による完全一致率は約70～87%であった（Table5-4-3）。3者での一致が見られなかった判定については、二者の一致した判定のうち、判断した箇所が二者間で一致していることを確認した上で、二者の判定を採用することによって分類を確定させた。なお、この作業の際には、逐語を再確認した上で判定を確定した。

Table5-4-3. 回想的調査面接の類型化における判定一致率の一覧

判定項目		n		n	判定総データ数	完全一致判定数	一致率(%)
①親密化の始まり時期	A出会いと同時期	79	B出会いと別時期	25	104	87	**83.7**
②親密化の始まり関係	A二者関係が先行している	21	B共通の友人関係と同時期に成立	79	100	87	**87.0**
③関係変化	A変化なし	38	B関係変化あり	66	104	73	**70.2**
④Aさんとの個別関係	A個別関係なし	19	B個別関係あり	81	100	79	**79.0**

その結果、初期の出会い時には、友人関係に発展しなかったが、ある時期のきっかけ（出来事）から友人関係が始まったケースが25事例（24.03％）確認された。本研究では、以下の親密化過程の分類について、選択した友人との関係がスタートして以降の内容を分類に採用していく。

4項目の組み合わせから7分類を確定させた（Table5-4-3)。友人関係における親密化過程では、多くの協力者が選択友人と共通の複数の友人関係を認知していた（96.20％：Ⅱ~Ⅶ型)。共通の友人がいると回答した100ケースのうち協力者と選択友人を除いた共通友人の平均人数は4.06（SD=3.42）人であった。また選択友人との出会いから関係に変化なく、継続的な友人関係である事例（36.54％：Ⅰ～Ⅲ型）が確認された一方で、その他事例（Ⅳ～Ⅶ型）では、関係スタートから、学科のカリキュラム、実習、就職、卒論等の経験や友人関係の中での出来事によって、その関係が変動し、現在に至っている過程が明らかにされた。また、共通友人を含む、グループ関係が認知されている中で、選択友人との特別な経験や行動も有している事例（77.88％：Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ型）も確認された。

Table5－4－3．回想的調査面接による大学生の友人関係に関する親密化過程分類（2）

分類名（判定記号）	定義	事例数
Ⅰ：二者関係専心型（A）	出会いから現在の関係まで、選択友人みが確認された型	4
Ⅱ：グループ関係維持型（BCEG）	選択友人と共通友人の関係が同時期の後関係が変化せず、グループ関係る型	6
Ⅲ：二者中心グループ関係維持型（BCEH	「Ⅱグループ関係維持型」と同様の過過程の中で選択友人とだけの経験やがある型	28
Ⅳ:グループ関係変動型(BCFG)	選択友人と共通友人の関係が同時期が、その後友人関係の変化が確認さ	10
Ⅴ:二者中心グループ関係変動型(BCFH)	「Ⅳグループ関係変動型」と同様の過過程の中で選択友人とだけの経験やがある型	35
Ⅵ:二者先行グループ関係変動型(BDFG)	選択友人との出会いから、二者関係にグループ関係が確認される型。	3
Ⅶ：二者先行中心グループ関係変動型（B	「Ⅵ二者先行グループ関係変動型」とあるが、過程の中で選択友人とだけの共有がある型。	18

（　　　）内のアルファベットはFigure5－3－1の判定

(3)-3　親密化過程の各類型の特徴

各 7 類型の特徴を以下に示す。各類型につき 1 事例を資料として添付するが、この資料は、類型の判定の際に使用したものである。

(3)-3-1　二者関係専心型（4 事例）

二者関係専心型の事例を資料Ⅰとして添付する。二者関係専心型は、4 事例確認されたが、この型の特徴は、大学入学後に友人と知り合い、他の共通友人関係を含む期間が皆無であり、常に二者関係を意識した中で、現在に至っていることである。他の友人関係を含まないケースであるが、4 ケース中 3 ケースは、他の友人グループにそれぞれ（もしくは一方）が所属し、その関係とは全く別関係として二者関係を強く意識しているケースであった。この 4 ケース以外の 100 ケースでは、少なくとも 1 人以上の共通友人の存在を認知しており、大半の大学生の友人関係では、友人関係の特徴である複数の対人関係で構成され、その中で、一番親しい友人を選択している状況が確認された。

事例 F の協力者は大学 1 年生の授業で知り合った友人との二者関係を回想したが、この事例では、その他の友人関係が双方にあるこ

とを認知しながら、二者関係に他の対人関係を含めない個人の関係を重視している。1-2 年時の付き合いは、授業を一緒受講するなどの学内の付き合いが中心だが、3 年生以降、恋愛関係の相談を受ける、メールや電話の頻度が増加するなどの学外の付き合いに発展し、後半の学年での付き合いがより増していることが確認された事例である。

(3)-3-2　グループ関係維持型（6 事例）

グループ関係維持型の事例を資料 J として添付する。グループ関係維持型は 6 事例確認されたが、この型の特徴は、大学入学後に、一番親しいと選択した友人と複数の共通友人関係が同時に成立し、その後、友人関係に変動なく現在に至っていることが特徴である。また、大学生活の時間の推移の中で、一番親しい選択した友人とその他の共通友人を含めた複数の友人関係の中で常に行動や経験が共有されていた。このケースの協力者の中には、面接調査の始めに一番親しい友人を選択する際に、一番を選択することが難しいと感想をのべる者もいた。

事例 G の協力者は、一番親しい友人を含むサークルの友人関係を回想した。サークル全体(20 名)の付き合いと一番親しいと選択した友人（A）ともう一人の友人（B）との 3 人の付き合いも認知している。3 人での付き合いが多い時期とサークル全体としての付き合いが多い時期がそれぞれ確認されている。いずれの場合も、常に複数の友人関係での行動・認知が協力者の中には存在し、一番親しい友人の選択についても迷いがあったと報告している。

(3)-3-3　二者中心グループ関係維持型（28 事例）

二者グループ関係維持型の事例を資料 K として添付する。二者グループ関係維持型は 28 事例確認されたが、この型の特徴は、グループ関係維持型と同様に大学入学後に、一番親しいと選択した友人と複数の共通友人関係が同時に成立し、その後、友人関係に変動なく現在に至っていることが特徴である。また、大学生活の時間の推移の中で、一番親しい選択した友人と協力者とだけの二者関係のみに共有される行動や経験を有していた。グループ関係としては、変動がないため、安定した関係が継続されているが、大学生活の中でサークルへの所属、授業の選択、ゼミの選択、就職活動の方向性、恋愛関係等の個人的な相談等様々な経験を二者だけで共有することで、二者の特別な関係を認知していた。

事例 H の協力者は、一番親しい友人を含むサークルの友人関係を回想した。サークルの中でも特別な仲間意識を持つ友人関係（6 名）がある。サークルの全体や仲間意識を持つ友人関係は、サークル入

部後から変わらず、維持されているが、一番親しい友人(A)との二者関係も3年生以降は強く意識し、2人で遊びに行くなどの行動も確認されている。サークルの友人関係との付き合いの大切さを述べるとともに、一番親しい友人(A)に対して、他のメンバーと違う特別な気持ちがあることも報告している。

(3)-3-4　グループ関係変動型（10事例）

グループ関係変動型の事例を資料Lとして添付する。グループ関係変動型は10事例確認されたが、この型の特徴は、大学入学後に、一番親しいと選択した友人と複数の共通友人関係が同時に成立し、その後、友人関係に何らかの変動を経験し、現在に至っていることが特徴である。また、大学生活の時間の推移の中で、一番親しい選択した友人とその他の共通友人を含めた複数の友人関係の中で常に行動や経験が共有されていた。関係の変動の型としては、初期に形成されたグループの関係について、成員が変化（グループからのメンバーの離脱や新メンバーの加入）したケース、と初期に形成されたグループに別の友人関係グループが合併したケースが確認された。グループ関係に変動がある中でも、複数の友人関係の中で常に行動や経験が共有されていることもこの型の特徴である。

事例Iの協力者は、1年生の授業で一番親しい友人Aと共通するもう一人の友人(B)と出会っている。共通のグループ関係は5名であるが、このグループ関係が成立したのは2年生で同じサークルに所属したことであり、3年生になって、5人での学外での付き合いも確認された。協力者の認知として、他の友人と比較し、Aに対しての特別な気持ちはなく、一番親しい友人の選択についても迷いがあったと報告している。

(3)-3-5　二者中心グループ関係変動型（35事例）

二者中心グループ関係変動型の事例を資料Mとして添付する。二者中心グループ関係変動型は35事例確認されたが、この型の特徴は、大学入学後に、一番親しい選択した友人と複数の共通友人関係が同時に成立し、その後、友人関係に何らかの変動を経験し、現在に至っていることが特徴である。また、大学生活の時間の推移の中で、一番親しい選択した友人と協力者とだけの二者関係のみに共有される行動や経験を有していた。この型は、グループ関係が初期の様相から何らかの変動とする中で、選択した友人との特別な関係を認知しているが、この型の中には、選択友人と協力者に共通する複数の友人グループ関係（例：学科内友人グループとサークル内の友人グループ）を有しているケースが6ケース含まれている。

事例Jの協力者は、一番親しい友人Aと共通友人について、2つ

のグループ関係（学科内友人グループとサークル内友人）があることを報告している。その過程の中で、学科内の友人グループのメンバーの離脱やサークル内での関係が変動する出来事を報告している。一番親しい友人(A)との関係では、1年生の段階から、特別な関係を意識しており、行動面や価値観の共有など個別の行動も確認されている。

(3)-3-6　二者先行グループ関係変動型（3事例）

二者先行グループ関係変動型の事例を資料Nとして添付する。二者先行グループ関係変動型は3事例確認されたが、この型の特徴は、大学入学後に、一番親しいと選択された友人との二者関係のみで友人関係がスタートし、過程の中で、別の複数の友人関係が形成される変動を経て現在の形に至っていることが特徴である。またこの型では、複数の友人関係が成立した後には、一番親しい選択した友人とその他の共通友人を含めた複数の友人関係の中で常に行動や経験が共有されていた。

事例Kの協力者は、一番親しい友人(A)ともう1名の3人グループを報告している。この関係では、1年時の知り合った段階からすぐに親密化はスタートしていない。それぞれの初期の友人関係での出来事を経て、Aと協力者の二者関係が先行している。もう一人の友人(B)が加わり3人の関係が成立した後は、3人グループとしての行動が中心である。

(3)-3-7　二者先行中心グループ関係変動型（18事例）

二者先行中心グループ関係変動型の事例を資料Oとして添付する。二者先行中心グループ関係変動型は18事例確認されたが、この型の特徴は、二者先行グループ関係変動型と同様に大学入学後に、一番親しいと選択された友人との二者関係のみで友人関係がスタートし、過程の中で、別の複数の友人関係が形成される変動を経て現在の形に至っていることが特徴である。また、大学生活の時間の推移の中で、一番親しい選択した友人と協力者とだけの二者関係のみに共有される行動や経験を有していた。つまり、複数の友人関係が成立した後にも、最初に知り合った一番親しい友人との特別な関係を認知していていることが特徴である。

事例Lの協力者は、一番親しい友人(A)を含む4人グループを報告している。1-2年時の付き合いは、Aとの二者関係であり、2人の関係が先行している。共通する授業や卒論の経験などで経て4人の関係を認知したのは3年生以降である。4年生になって4人での行動が中心であるが、学生生活の大半がAさんと2人だったと報告している。

(4) 考察

本章では、回想的調査面接を使用し、第2節および第3節 - 1で検討した方法を用いて、104名の大学4年生への面接調査を実施した。第3節-1で検討した分類法に基づき、調査および共同研究者である指導教員、同研究室内大学院生（7名）によって、1事例3名ずつに判定を求めたところ、各判定項目について7割以上で3者の判定が完全に一致した。この分類法の信頼性がほぼ確保できたことを示すものである。

協力者には、友人の限定をせず、「一番親しい友人」の想定を求めた。その結果、大学生活を3年半以上経過した段階において、大学入学以後に知り合った新友人を想定した協力者は、約55%であり、その一方で、約45%は一番親しい友人として、入学前に知り合った旧友人を想定していた。この結果は、大学4年生になっても旧友人を重要と考える協力者の存在を確認した。

本章での目的は、大学生の友人関係の親密化過程を抽出することであるため、旧友人の発話に関する結果の詳細は割愛した。大学4年時に一番親しいと選択した新友人との出会いの時期は、約93%の協力者が大学1年時の前期期間中までに知り合っていると報告した。大学生の親密化過程研究(Berg, 1984 ; Hays, 1984,1985 ; 中村, 1989 ; 山中, 1994)では、その調査の大半が、入学直後からの追跡調査を行っているが、その必要性を裏付ける結果である。その一方で、出会った直後からすぐに親密化がスタートしないケースが、約25%確認された。これらのケースでは、初期に選択した友人1名を数か月追跡した調査では、その過程が明らかにされないが、本研究の手続きでは、過程を回想させるため、抽出を可能としたといえる。また選択した友人との出会いの場所については、同大学内以外での出会い場所を報告した協力者は9ケースのみであり、残りの95ケースは大学内の友人を選択していた。また協力者の約53%が授業の始まる前の学内行事の中で知り合っている。さらに入学前のオリエンテーションで知り合ったと回答した協力者も10%以上存在した。糟谷（2005）・佐藤・菊池・畑山（2004）は友人形成時にはオリエンテーションや座席の近さが形成のきっかけの契機となることを示しているが、本研究でも、その結果を支持するものである。また、近年、大学入学後のオリエンテーションの重要性が指摘されている(佐久田・奥田・川上・坂田,2003 ら)が、入学後のみならず入学前からのオリエンテーションの実施が新しい環境での友人関係が形成される契機には重要な役割を果たしていることを示した。

親密化過程の分類の結果、大学入学後に知り合った友人関係の親密化過程では、96%以上の協力者が、選択した友人の他に共通する

友人の存在を認知していた。また現時点（大学4年生の面接調査時点）では複数の友人関係を報告しているが、二者関係が先行しているケースが約20%であり、これらのケースでは、その後の過程の中で共通する友人が加わるという関係変動を経て、グループ関係に至っていた。また、共通の友人との関係が、一番親しい友人と同時期に成立したケースは79%（79ケース）であり、そのうち約57%(45ケース)はその共通の友人関係の中の変動を認知していた。関係の変動は、資格の志向性やゼミの選択、就職の方向性、友人関係のトラブルの経験やサークル内での出来事など様々な経験が抽出された。関係変動は、大学入学直後だけの出来事だけでなく、大学生活の後半に至るまで関係変動に関連する出来事が確認された。この結果は、友人関係の親密化過程の様相が、複数の対人関係の相互作用の中で変動することを確認するとともに、初期の段階の追跡調査では、捉えられない様相を確認するものであった。

さらに本研究では、親密化の類型として、複数の友人関係で成立している中で、一番親しい友人との個別の行動や経験が確認されるかを類型の判定項目とした。その結果、複数の友人関係を報告した協力者の約80%が、一番親しい友人を「特別な関係」であると認知し、2人だけで行う「行動」を経験していた。また、残りの20%の協力者は、1番親しい友人と共通の友人との差異はないと認知し、1番の友人を選択することに迷いがあったことを報告する協力者がいた。本研究の104事例中35事例(33.7%)が「二者中心グループ関係変動型」の事例であり全体の約3分の1を占めていた。この型では、協力者と友人との二者関係の様相のみで成立し維持・発展されてきたものでないこと、過程では、友人関係で関係変動を認知する出来事が存在し、過程の中で一番親しい友人との関係を「特別なもの」を認知するなど様々な過程が確認された。本研究においてこの型の親密化過程が最も多かった。すなわち、関係の変動や二者関係に限定される行動や経験が抽出されたということは、過程の中で、友人との様々な相互作用の経験をしたこと示すものである。1時点の調査や追跡的な調査においても二者関係の追跡ではこのような過程は明らかにされない。この型の出現が多かったことは、本研究の手続きの意義が証明されるものである。

本研究では回想的調査面接という手続きの検討から類型化まで探索的な検討中心であったため、今後の検討課題も存在する。

第1に、回想的調査面接で得られた過程と友人関係での親密さや満足度等の量的な指標との関連を検討すべきである。面接調査で得られた親密化過程は、協力者の回想に依存していることへの懸念が想定される。そのため、友人関係に関する評価的な側面を同時に検討することで、類型化の意義がより明らかになるものと考えられる。

第2に回想的調査面接の手続きにより、7つの類型の存在を明らかにしたが、男性の協力者が少なく、類型の性差や男女における親密化過程の特徴を抽出するには至らなかった。今後の展望として、男女で類型の出現率に差が見られるのか、本研究で協力者が少なかった男性に焦点を合わせた検討も必要となろう。

第3に回想的調査面接によって抽出された大学生の友人との親密化過程では、大学生活での様々な経験（サークル・実習等）がその過程に大きく関与していた。したがって大学生の友人関係の在り方が、大学生活全般の満足感や適応感に影響すると考えられ、今後は親密化過程と大学生活の適応感との関連を検討してことが望まれる。

第5節　研究3の考察

第2節から第4節から得られた結果から研究3の考察を行う。本章では、先行研究で明らかにされてきた友人関係のプロセスが時間の推移に従い段階的に親密していく段階理論(下斗米,1990 他)や出会った直後の初期段階において後に親密になれる関係と表面的なままで終わる関係の分化が生じている関係性の初期分化現象(山中,1994 他)で検討されてきた先行研究の知見を踏まえて、回想的調査面接を使用することで、2つの理論では説明しきれなかった複数友人関係の親密化過程を明らかにすることが目的であった。具体的には第1に、友人関係研究でたびたび指摘されている友人関係の特徴は複数の対人関係であること(多川・吉田,2002 他)の配慮から、二者関係だけにとどまらず共通友人関係の存在も抽出した。手続きとして協力者の選択した一番親しい友人と共通する友人関係の有無を確認した上で、その共通友人との関係も合わせて親密化過程を回想してもらった。第2に関係性の初期分化現象(山中,1994 他)を確認するために、大学4年生の現在一番親しいと認知した友人について、初期の出会いと関係の形成状況を確認した。第3に、段階理論(Altman＆Taylor,1973)に従えば、友人関係の親密化過程により、出会いから親密化する過程で表面的な相互作用から親密な相互作用へと段階的に変化するものである。したがって、本研究では、時間の推移に従い、選択友人、および共通友人関係とのグループ関係で経験したエピソードを回想してもらった。

回想的調査面接の手続きについては、その方法の試みから検討する必要があったため、第1に、第2節でその手続きを検討した。その結果、選択友人との出会いの状況や共通の友人の有無と人数等の基本情報を確認した上で、過程の詳細については、構造化された質問項目は設けず、学年及び学期ごとに友人と経験した出来事につい

て、時間の経過の順に回想してもらった。その結果、多くの場合、複数友人関係で推移し、最初の出会いのほかに、友人関係を認知する出来事やきっかけを確認することができた。第 2 に、第 3 節では、設定した質問項目と手続きを修正した上で、回想的調査面接による親密化過程の類型化を試み、親密化過程の分類について、①共通友人の有無、②選択友人と共通友人の関係スタート時期の差異、③選択友人及び共通友人との関係変動をもたらした出来事の有無、④グループ関係成立後における選択友人とだけの経験・行動の共有の有無の 4 点をチェック項目とし、7 類型を確定させた。その結果、多くの場合、複数の友人関係で構成されることを確認し、その共通する友人グループの存在にも注目し、一番親しい友人との親密化過程でどのような出来事を経験し、関係が形成される過程を明らかにすることを可能とした。しかしながら、分析事例が 31 事例のみで少数だったため、類型化の適用を試みるために、第 4 節では、104 事例について、同様の手続きで分析を行った。104 事例については、著者と指導教員および同研究室内の大学院生によって 1 事例につき 3 名で独立に判定した。その結果いずれの判定項目についても 70%以上の 3 者の完全一致を得ることができた。本節で採用した項目についてある程度、客観的な基準が存在し、分類可能であることを示唆した。

本研究では、複数対人関係が特徴である友人関係研究において、二者関係にとどまらない、共通友人関係の過程も同時に抽出することが目的であった。第 4 節の協力者 104 名中 100 名が、共通友人関係を報告し、その共通友人関係の存在が関係変動に関わっていたケースや共通友人関係と選択友人との比較から、グループ関係の中で選択された「一番」という選択の基準となる二者関係のみの行動や経験も抽出でき、類型化にも寄与した。すなわち、回想的調査面接の手続きの意義を示す結果である。

回想的調査面接で得られた親密化過程では、大半の大学生が、大学入学後に知り合った一番親しい友人の出会いの状況について、大学 1 年時の入学時～前期中に知り合っており、大学内で実施されたオリエンテーションや入学式などの機会に知り合っていた。これらの様相を実証的に追跡するためには、Berg(1984)・Hays,(1984,1985)・中村(1989)・山中(1994)らの検討の通り、入学直後の大学新入生による調査が必要であることが確認された。その一方で、出会いからすぐに親密化せず、時間を経て親密化が始まったケース存在が確認されたことは、調査初期に選択された 1 名を追跡していく手続きでは、抽出されない過程の存在を明らかにした。関係性の初期分化現象のうち初期の印象が良くそのまま親しい関係を維持している現象の存在について、第 4 章第 4 節の検討では、大学 1 年時・

2 年時・4 年時の友人の選択過程でもその存在が確認されている。一方で、初期の印象がそれほど高くなく、大学生活前半では全く親密化しなくとも、後半以降の生活の中で友人と様々な経験を共有する中で大学 4 年時には、「一番親しい友人」になったケースも存在する。Berg(1984)らの 1 名を 1 年程度追跡する研究手続きでは、その過程は明らかにされない。回想的調査面接で得られた親密化過程では、関係性の初期分化で、初期の印象が悪くとも必ずしも表面的な関係では終わるのではなく、親密化する過程の存在を確認可能とした。

さらに段階理論にしたがえば、親密化過程は、表面的な相互作用から親密な相互作用に段階的に進展していくものである。本研究の回想的調査面接では時間的推移に従い、友人関係で経験したエピソードを抽出し、その時間的推移に従いマトリクスを作成し類型化の適用に使用している。その過程を概観すると、親密化過程は、資格の志向、授業やゼミの選択、就職活動、部活動・サークル内出来事、友人関係で共有された行動・感情的な経験の中で、関係における相互作用の増減が過程の中で確認された。必ずしも現在の相互作用が一番親密であるとは限らなかった。またこの経験によって大学 4 年時の就職活動や卒論作成に至る現在に至るまで関係変動が確認されるなど、段階理論でたびたび使用される、親密段階を分けて行動や役割の差異を比較する方法から得られた段階理論のパターンとは大きく異なっていた。本研究では、親密化過程の類型化が目的であり、相互作用の質的な分析を行っていないため、段階理論との直接的な比較は難しい。しかしながら、4 年間という時間的なスパンでとらえた親密化過程で抽出された友人関係のエピソードは、直線的に親密化する過程だけではなく、大学生活での経験に大きく依存し、変動することが確認された。今後の課題として、時間的推移に基づき、友人関係で得られた出来事の質的な分析を行うことが必要となる。さらに協力者には、1 名の友人を選択させるが、その友人の関係が他の共通友人とは違う特別な関係認知や 2 人だけの行動を認知している協力者が大半(約 80%)であった。その一方で、一番の友人選択の難しさを報告し、親密化過程について共通友人関係を含めた全体の過程として回想するケースも確認された。友人関係研究では、多くの場合、特定の友人 1 名を選択させる手法を採用するが、青年期の大学生の中には、二者関係としての友人関係ではなく、全体としての友人関係あり方を重視する大学生の存在が明らかになった。

既存の二者関係の親密化過程の理論の枠に囚われず、複数対人関係の親密化過程の類型化を達成したことは、回想的調査面接の手続きにより質的なデータを得たことによる結果であり、本章の目的を達成できたものと考える。

第 6 節　本章のまとめ

本章では、大学生の友人関係の親密化過程を捉えるための方法として第 1 に、回想的調査面接の手続きの有効性を確認すること、第 2 に回想によって得られた発話から親密化過程の類型を試み、その詳細を明らかにした上で、その類型化の適用を試みた。

第 1 に回想的調査面接の手続きについて、質問項目の選定、類型化の試みを経て、104 名の協力者への適用を検討した。

第 2 に、回想的調査面接で得られた友人関係の親密化過程のほとんどが、選択された友人との二者関係で推移しているわけではなく、共通する複数の友人関係の中で親密化している様相を捉えることを可能とした。また、友人関係が変動する出来事の有無や、親密化過程で「一番親しい友人」との特別な関係が認知の確認により、親密化過程の類型化（7 類型）を実現した。これらの判定については、複数の独立した判定の中で検討することで、一定の一致した結果が得られることが確認されたことから、類型化はある程度客観的な基準の中で判定可能であることが示された。

しかしながら一方で課題もある。本章では、同一大学の同学部の 4 年生のデータに限定されている。今後はデータ数を増やすことや他大学や同学科以外の協力者のデータも必要であると考える。第二に、親密化過程について本研究では、「現在付き合いのある中で一番親しい友人」を想起させたうえで、出会いからのエピソードを回想してもらう手続きを採用した。したがって、回想における記憶の曖昧さや歪みがある程度存在することは否定できない。また、非常に発話が多く、多くのエピソードを語ってくれた協力者となかなか回想が難しかった協力者も存在しており、この手続きではその個人差があることも事実である。この点に留意した発話の抽出の手続きの検討が必要となる可能性がある。今後の展望として、例えば、ペアデータでの検討をすることで整合性を確認することや、回想的調査面接を大学生活の中で複数回実施することで、回想による弊害を少なくする手続きが望まれる。

註）

[1]この研究の一部は、「渡辺舞・今川民雄(2008b).　大学生における友人関係の親密化過程に関する研究（１）－回想的調査面接による探索的検討－　日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集,556-557.」にて発表された。

[2]この研究の一部は、「渡辺舞(2010). 大学生における友人関係の親密化過程に関する研究－回想的調査面接による探索的検討－ 北星学園大学大学院論集,1（通巻第 13 号）,71-83.」にて発表された。

[3] 第 3 節-2 回想的調査面接による親密化過程の類型化の適用は、著者と指導教員との共同研究であり、謝礼金の 2000 円については、指導教員の研究費を使用した。

[4]調査協力者の所属大学では、入学決定者の希望者を対象に入学前オリエンテーションを実施している。入学前約 1 か月前～入学式直前までに 3 回実施されており、同学部同学科への進学者がグループとなり、自己紹介や学内を見学する企画が実施されている。

第 6 章
研究 4　大学生の友人関係における親密化過程の様相が大学生活の適応感に及ぼす影響に関する検討 1)2)

第 1 節　研究 4 の目的

第 3 章から第 5 章で明らかにされた知見は、大学生の友人関係が多くの場合に複数の友人関係の中で成立し、推移していく過程を抽出することの意義を提供するものであった。第 6 章では、これらの過程で抽出された大学生の友人関係が大学生活の適応感に及ぼす影響を検討することである。

本章では、大学生における友人関係の親密化過程が、大学生活の適応感に及ぼす影響について検討することを目的とする。具体的には、大学生活の適応感の関する尺度について、先行研究で使用されてきた尺度から項目を収集した上で、集約した尺度を作成することを第 1 の目的とする。また、作成した尺度を用いて、大学生の友人関係と適応感との関連、及び親密化過程の様相が適応感に及ぼす影響を量的データと質的データの両側面から検討することを第 2 の目的とする。

第 2 節　大学生活に関する適応感に関する項目の収集と尺度の作成

(1)　目的

第 2 節では、大学適応感の定義を、東・浅川・古川・吉田(2002)の「大学生の大学という環境が心理的調和にあって大学からの要請への適合と大学生の欲求や自発的・創造的な行動が、ともに実現される均衡状態」を採用し、この定義に当てはまる項目を、本邦の大学生活の適応感を扱った先行研究から、幅広く収集することを第 1 の目的とする。東ら(2002)の定義は幅広く大学生活全般を網羅したものと考えられるが、女子学生のみの検討であること、本邦には、多数の大学適応感を測定する尺度が存在するが、東らの定義に当て

はまり、かつ東らの尺度と重複しない内容の項目も存在することから、再構成を試みる。また項目の信頼性を確認した上で、精神的健康（GHQ）との関連から妥当性を確認する。さらに、本研究では面接調査を終えた協力者の疲労度・負担度を軽減するために、少ない項目で全般的な大学適応感を測定するために、大学生活の関する適応感を表す集約した項目を選定することを第2の目的とする。

(2) 方法

(2)-1 調査協力者

北海道内の大学生93名（男性23名・女性70名）に対し質問紙調査を行った。平均年齢は20.67歳（SD=1.72）であり、協力者の学年の内訳は2年生23名、3年生49名、4年生29名だった。

(2)-2 調査日時

2009年7月に質問紙調査を行った。

(2)-3 項目選定の手続き

本邦の先行研究を概観し、適応感を測定していると想定される7領域（1対人関係満足感・2学習関係・3大学生活への不安度・4大学生活満足度・5学校享受感・愛着感・6居心地の良さ・7抑うつ感）を選定した。選定方法は、因子負荷量の高い項目を最優先とし、著者と指導教員及び大学院生4名の合議によって、内容が重複しないように考慮した上で各領域から3項目ずつ、計21項目を採用した。尚、言語表現を統一するために、各尺度の表現を一部変更した[3)]。

(2)-4 質問紙の内容

(2)-4-1 大学生活に関する適応感項目（7件法21項目）

１：対人関係満足感（東・浅川・古川・吉田,2002；植村・小川・吉田,2001）・２：学習関係（東・浅川・古川・吉田,2002；大久保・青柳,2003）・３：大学生活への不安度（藤井,1998）・４：大学生活満足度（植村・小川・吉田,2001；大久保・青柳,2003；坂田・佐久田・奥田・川上,2007）・５：学校享受感・愛着感（古市・玉木，1994；亀岡,2006）・６：居心地の良さ（大久保・青柳,2003；植村・小川・吉田,2001）・７：抑うつ感（藤井,1998）の領域から上記の手続きにより各3項目計21項目を使用した。

(2)-4-2 GHQ28項目（4件法；中川・大坊,1985）

28項目版では4下位尺度（身体的症状、不安と不眠、社会的活動障害、鬱状態）について各7項目で構成されている。主として神経

症者の症状把握、評価および発見に有効であるとされている。

(3) 結果

(3)-1 大学生活に関する適応感項目の因子構造の検討

大学生活に関する適応感 21 項目に対して主因子法・Promax 回転による因子分析を行い、固有値の減衰状況から 4 因子解を採用した。第 1 因子は、大学に対する享受感、満足度、居場所に関する項目が集約され、「大学生活に関する満足感」因子と命名した。第 2 因子は大学生活に関する抑うつ感や不安度に関する項目が集約され、「大学生活に関する抑うつ感」因子と命名した。第 3 因子は、学習関係の評価に関する項目が集約され「学習に対する適応感」因子と命名した。第 4 因子は友人関係に関する項目が集約され、「対人関係の満足感」因子と命名した(Table6-2-1 参照)。

項目全体の信頼性係数(α)は α=.916 であった。各因子での検討では、第 3 因子(α=.670)・第 4 因子(α=.678)では、項目数が少なく、信頼性係数はやや低い値となったものの、おおむね十分な信頼性を確保できた。

Table6-2-1. 大学生活適応感項目の因子構造

先行研究尺度領域名		1	2	3	4
居場所	19.この大学は自分の居場所だと感じる	**.899**	.169	.075	-.056
享受・愛着	11.大学では楽しいことがたくさんある	**.856**	.006	.022	-.004
生活満足	13.大学での日々の生活は充実している	**.833**	-.143	.060	-.154
生活満足	6.良い大学生活が送れていると感じる	**.831**	-.099	-.119	.018
享受・愛着	18.この大学は自分の生きがいである	**.766**	.283	.218	-.101
享受・愛着	4.大学に行くのが好きだ	**.763**	-.194	-.160	.015
居場所	5.大学の中では周囲に溶け込めている	**.635**	.018	-.171	.256
生活満足	20.大学で自分は成長できている	**.573**	-.054	.253	.037
学習関係	9.この大学に入学して良かったと感じる	**.529**	.012	.269	.176
居場所	12.大学の中ではリラックスできている	**.525**	-.338	-.313	.019
抑うつ感	14.大学にいる時は、イライラしがちだ	.093	**.829**	.058	-.133
抑うつ感	7.大学にいる時は、寂しくなる	-.050	**.655**	-.118	.119
不安度	10.この大学にいると何か不安な気持ちになる	-.022	**.644**	-.145	.102
抑うつ感	21.大学にいる時は、ゆううつになりがちだ	.011	**.633**	-.196	-.070
不安度	3.この大学にいると、自分がダメになるのではないかと感じる	-.090	**.421**	-.354	.075
学習関係	2.大学では将来役に立つことが学べている	-.025	-.103	**.820**	.041
不安度	17.できることなら、転学部(転学科)したくて仕方がない	.127	.341	**-.461**	.029
学習関係	16.大学での勉強が楽しい	.038	-.069	**.451**	.159
対人関係	15.大学の中に何でも話せる友人がいる	-.009	-.016	-.017	**.716**
対人関係	8.大学の友人と勉強以外の個人的な付き合いがある	-.079	.010	.081	**.620**
対人関係	1.大学に入学して良い友人に出会えたと感じる	.165	.063	.168	**.593**
	α	.928	.834	.670	.678
	因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
	Ⅱ	-.502			
	Ⅲ	.453	-.361		
	Ⅳ	.496	-.104	.226	

(3)-2　大学生活に関する適応感項目とGHQとの関連

GHQ28項目については、中川・大坊（1985）の算出方法に従い、4件法のうち精神的不健康な方向を示す3及び4に記入があった場合、1点を付与した。したがって、最高点は28点となる。調査協力者の評定平均値は9.60（SD=6.04）点であった。

次に大学適応感と精神的健康（GHQ）得点のピアソンの積率相関係数を算出した。尚、適応感全21項目の評定平均値を算出する際には、項目NO3・7・10・14・17・21を逆転項目として処理した。したがって、得点の高さは、全項目における適応感の高さを表す。その結果、全体の適応感とGHQには負の有意な相関（r=-.275）がみられた(Table6-2-2参照)。

各因子別の検討では、抑うつ感とGHQには正の有意な相関（r=.430）がみられ、学習に関する満足感(No17は逆転項目)とGHQには負の有意な相関（r=-.259）がみられた。

Table6-2-2. 大学適応感項目と精神的健康（GHQ）との関連

	全項目	第1因子 生活	第2因子 抑うつ感	第3因子 学習	第4因子 対人関係
GHQ	-.275*	-.151	.430**	-.259*	-.033

$p^{**}<.01$　$p^{*}<.05$

(3)-3　大学適応感項目の選定

本節の目的は、調査協力者への回答の負担を考慮するために、21項目から、大学適応感を表す項目の集約を試みることであった。したがって、第1因子では因子負荷量の高い3項目を、第2・3・4因子では因子負荷量の最も高い各1項目を採用した。採用した6項目での一次元性を確認するために主成分分析を行い、信頼性係数を算出したところ、α＝.760であり、一次元で扱う信頼性は確保された(Table6-2-3参照)。また、6項目の評定平均値を算出（「4.大学にいる時はイライラしがちだった」は逆転項目として処理）した上で、GHQ28項目とのピアソンの積率相関係数を算出したところ、有意な負の相関が得られた（r＝-.247）。

Table6-2-3. 6項目による主成分分析の結果

	第1主成分
1. この大学は、自分の居場所だと感じている	.823
2. 大学では、楽しいことがたくさんある	.858
3. 大学での日々の生活は、充実している	.887
4. 大学にいる時は、イライラしがちである	.484
5. 大学では、将来役に立つことが学べている	.621
6. 大学の中に何でも話せる友人がいる	.344
累積説明率	48.95%
α	.760
平均値	4.74
（SD）	(1.01)

(4) 考 察

本節では、本邦で明らかにされてきた大学適応感を測定する項目を幅広く収集し、その構造を検討した上で、大学適応感を集約された項目を選定することが目的であった。先行研究で収集した項目を7領域での解釈を採用し、因子負荷量の高い順から3項目ずつ選定した。因子には友人関係に関する項目も含まれているが、本研究で明らかにされる親密化過程との関連において、大学適応感の一領域である友人関係に対する評価を量的指標で測定することも必要であると考え採用した。因子構造を検討した結果、4因子構造が抽出された。第1因子の「大学生活に関する満足感」は、想定した7領域のうち、大学生活満足感、学校享受感・愛着感、居場所の3領域を中心とし、大学生活全般に関する満足度に関する10項目が集約された。第2因子の「大学生活に関する抑うつ感」は、藤井(1998)の大学生活不安尺度の項目が因子として抽出された。第3因子の「学習に対する適応感」は、学習関係の評価に関する3項目が集約され、第4因子の「対人関係の満足感」は本論文の目的でもある友人関係に対して大学生活の中で満足感や充実感を感じているかに関する項目が集約された。21項目の信頼性は、α=.918であり十分な信頼性が確保されたが、因子別の信頼性の検討では、第3、第4因子はやや低い値となった。この要因の一つとして、3項目ずつの少数の項目であったと考えられる。しかしながら、先行研究での領域と因子構造が一致していたことや因子構造の解釈可能性からも4因子構造が適当であると判断した。

次にGHQ28項目との関連を検討した。GHQの得点が高いことは、精神的不健康であることを示すことから、本節で使用した適応感項目との有意な負の関連(r=-.275)を確認することで基準関連妥当性が確保されたものと考えられる。しかしながら、全体としての相関

は、弱いものであった。因子別の関連では、GHQと「大学生活における抑うつ感」には正の中程度の関連が、また GHQ と「学習に対する適応感」には負の弱い程度の関連が見られたが、「大学生活に関する満足感」・「対人関係の満足感」では関連が見られなかった。GHQは主に精神的健康のスクリーニングを目的として開発された尺度であり、ストレス強度の評価や神経症の発見に有効とされている(Goldberg,1979)。すなわち、本節で採用した大学適応感項目には、心身の不調に直接関連する項目とその評価が主観的な心身の不調と関連が低い内容の両側面が含まれている結果であり、幅広く大学生活の適応感を測定していると考えられる。

第 3 に本節の目的は、協力者の回答への負担を考慮し、かつ「大学生の大学という環境が心理的調和にあって大学からの要請への適合と大学生の欲求や自発的・創造的な行動が、ともに実現される均衡状態」の大学適応感の定義に当てはまる最適の項目を選定することであった。因子構造の結果と先行研究で明らかにされている領域との関連を考慮し、第 1 因子の因子負荷量上位 3 項目と第 2～4 因子の最上位項目を採用した。採用した 6 項目の第 1 主成分の重みを確認し、信頼性(α =.760)も確保できたことから、6 項目の集約を達成した。

第 3 節　大学生の友人関係における親密化過程と適応感に関する検討（量的データによる検討）

(1)　目的

第 3 節の目的は第 3～5 章で明らかにされた大学生の友人関係および親密化過程が第 2 節で採用した 6 項目の大学適応感に及ぼす影響を検討することである。具体的には、友人に対する評定の推移と大学適応感との関連を検討したうえで、複数友人関係の背景のひとつとして注目した新旧友人関係と適応感、新友人の友人選択と適応感、さらに複数友人関係の親密化過程と適応感との関連を明らかにしていくことを目的とした。

(2)　方法

(2)-1　調査協力者

面接調査に参加した 104 名（男性 31 名・女性 73 名）の大学 4 年生のうち、分析内容により、協力者の人数が異なるため、各結果で協力者の人数を示す。

(2)-2　調査時期

2009年7月～11月であり、面接調査終了後に質問紙に回答してもらった。

(2)-3　面接調査の手続き

第5章に記載済みであるため、本節では詳細を割愛する。

(2)-4　質問紙の内容

面接調査終了後、「①現在」、「②入学当初」、「③大学生活において一番友人関係で辛かった時期」、「④大学生活において一番友人関係で充実していた時期」の4時点について第2節で選定した大学適応感の6項目にどれくらいそのような気持ちを感じていたのかを7件法で回答させた。「①現在」については質問項目を現在形の表現に、その他の3時点については過去形の表現に統一した。また「③大学生活において一番友人関係で辛かった時期」、「④大学生活において一番友人関係で充実していた時期」については、具体的なエピソードとその時期を自由記述で回答させたが、本論文では使用しないため、詳細を割愛する。

(3)　結果

(3)-1　各時点における適応感項目の一次元性の検討

第2節で採用した6項目の適応感項目について、各時点での一次元性を確認するために、分析対象者104名のデータについて、主成分分析を行い、信頼性係数を算出したころ、$\alpha = .730 \sim .747$であり、一次元で扱う信頼性は確保された

各時点の適応感得点の変動を検討するために性を被験者間要因、各時点を被験者内要因の独立変数とし、大学適応感得点を従属変数とする2要因の分散分析を行った。

その結果、性の主効果及び性と時点の交互作用は有意ではなかった。時点の有意な主効果が見られ（$F(3,306) = 98.92$, $p < .001$）、Bonferroniの多重比較の結果、充実時期は全ての他の時点よりも有意に適応感得点が高く、現在の適応感は入学時、辛い時期よりも有意に得点が高かった(Table6-3-1参照)。

Table6-3-1.各時点における第1主成分の重みと平均値

	現在	入学時	友人関係で辛い時	友人関係が充実していた時
1. この大学は、自分の居場所だと感じていた	.822	.759	.850	.823
2. 大学では、楽しいことがたくさんあった	.879	.888	.900	.861
3. 大学での日々の生活は、充実していた	.812	.891	.910	.851
4. 大学にいる時は、イライラしがちだった	-.411	-.482	-.177	-.410
5. 大学では、将来役に立つことが学べていた	.491	.396	.534	.542
6. 大学の中に何でも話せる友人がいた	.492	.482	.515	.450
累積説明率(%)	45.97	46.32	49.03	46.78
α	.747	.738	.730	.742
平均値	5.57	4.28	4.20	5.76
(SD)	(0.80)	(1.10)	(1.07)	(0.69)

※項目4を逆転項目として処理
※現在の適応感は現在形の表現であった。

(3)-2　友人に対する評定の推移と大学適応感との関連に関する検討

(3)-2-1　潜在曲線モデルと大学適応感モデルの構成

第3章で検討した新旧友人に対する潜在曲線モデルのうち、新友人の5時点の親密度得点・対人感情・関係認知・対人行動の各平均評定値のモデルに限定し、5回の調査と大学4年時の面接調査の計6回の調査全てに参加し、欠損値が見られない53名（男性14名・女性39名）に対し、再度モデルを適用した。1次の成長曲線を仮定し、潜在曲線モデルによって切片と傾きを推定した。傾きから各時点の観測変数へのパス係数について1回目調査時点を「0」、2回目調査時点を「1」、3回目調査時点を「2」、4回目調査時点を「3」、5回目調査時点を「4」といったように固定し、各モデルで充分な適合度を確認した。このモデルに6回目調査時点（面接調査；大学4年時7月-11月）に測定した入学時を回想させた大学適応感と現在の適応感の変数を追加し、下図のようにパスを探索的に設定した(Figure6-3-1)。各モデルについて有意なパスのみを採用した。分析にはAmos16.0を使用した。その結果、親密度得点・対人感情におけるポジティブ感情、対人行動における主張的行動と回避的行動では、適応感と5回の調査時点における測定の推移間の有意なパスは見られなかったため、結果から除外した。適応感の指標については、「友人関係で辛い時期」と「友人関係で充実していた時期」は協力者の経験に依存する時期による測定であるため、分析から除外した。

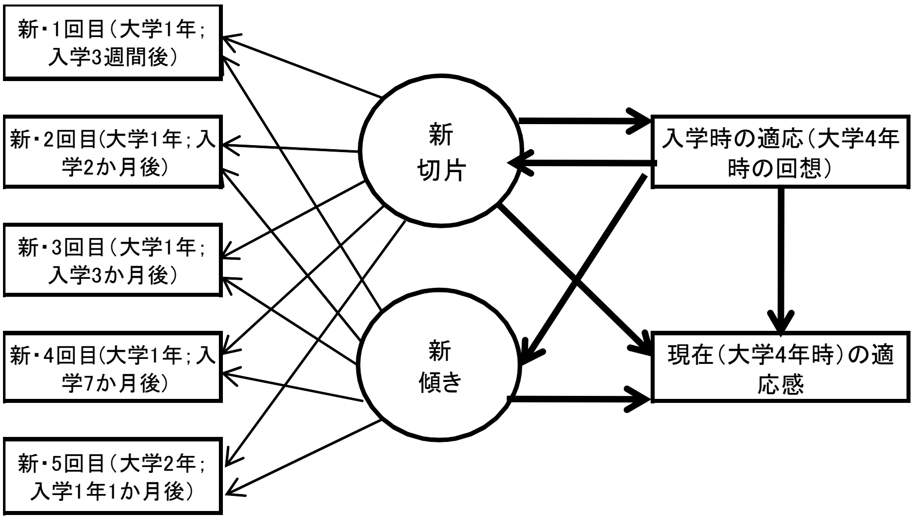


Figure6-3-1. 5回の調査時点の潜在曲線モデルと大学適応感との関連で想定したパス

(3)-2-2　各指標の推移（潜在曲線モデル）と大学適応感の関連

対人感情における拒否感情得点における適合度は、$\chi^2(17)=1.37$, *n.s.*・CFI=.90・RMSEA=.09であった。推定された新友人の切片は2.64、傾きは.09であった。入学時の適応感から拒否感情の切片に有意な負のパス(-.18；以下全て非標準化推定値で表示する)が得られ、入学時から現在の適応感へ正の有意傾向のパス(.16)が得られた。

二者関係認知の深さの関係認知得点における適合度は$\chi^2(19)=1.05$, *n.s.*・CFI=.99・RMSEA=.03であった。推定された新友人の切片は4.51、傾きは.12であった。入学時の適応感から深さの認知の切片に有意な正のパス(.17)が得られ、入学時から現在の適応感へ正の有意傾向のパス（.16）が得られた。対等さの関係認知得点における適合度は$\chi^2(20)=1.17$, *n.s.*・CFI=.96・RMSEA=.06であった。推定された新友人の切片は5.16、傾きは.03であった。入学時の適応感から対等さの認知の切片に有意な正のパス(.17)が得られ、入学時から現在の適応感へ正の有意傾向のパス（.16）が得られた。理性-感情的な関係認知得点における適合度は$\chi^2(18)=1.20$, *n.s.*・CFI=.97・RMSEA=.06であった。推定された新友人の切片は4.00、傾きは.04であった。感情的な認知の傾きから現在の適応感に有意な負のパス(-1.85)が得られ、入学時から現在の適応感へ正の有意なパス（.18）が得られた。

対人行動の親和的行動における適合度は$\chi^2(20)=2.00$, $p<.01$・CFI=.89・RMSEA=.14であった。推定された新友人の切片は3.25、傾きは-.03であった。入学時の適応感から親和的行動の傾きに有意傾向の正のパス(.03)が得られ、入学時から現在の適応感へ正の有意

傾向のパス（.16）が得られた。各モデルの指標を Table6-3-2 に示す。

Table6-3-2. 新友人における各評定値の推移（潜在曲線モデル）が大学適応感に及ぼす影響（非標準化推定値）

	入学適応→切片	入学適応→傾き	傾き→現在適応	入学適応→現在適応	誤差共分散
拒否感情	$-.18^{*}$			$.16^{+}$	2回目⇔3回目:.12 2回目⇔4回目:.20 3回目⇔4回目:.09
深さの関係認知	$.17^{*}$			$.16^{+}$	1回目⇔3回目:−.11
対等さの関係認知	$.17^{*}$			$.16^{+}$	
理性−感情の関係認知			-1.85^{*}	$.18^{*}$	2回目⇔3回目:.15 2回目⇔4回目:.32
親和的行動		$.03^{+}$		$.16^{+}$	

$^{*}p<.05$　$^{+}p<.10$

(3)-3　一番親しい友人の選択（新友人・旧友人）が大学生活の適応感に及ぼす影響

第 5 章第 4 節の面接調査時点における一番親しい友人の選択が新友人である場合と旧友人である場合によって、「①大学入学時と現在」および「②友人関係で一番辛かった時期と一番充実していた時期」の大学適応感に差が見られるかを検討するために、友人選択を被験者間要因、調査時点を被験者内要因の独立変数とし、大学適応感得点を従属変数とする 2 要因の分散分析を行った。分析対象者は面接調査に参加した 104 名（男性 31 名・女性 73 名）の大学 4 年生であった。尚、本調査で測定した適応感の時点には、入学時と現在という時間的制約がある中での評定と、4 年間の大学生活の友人関係で一番辛かった時期と充実していた時期という協力者の経験に依存する時期による測定に分類されるため、時点を分けて検討することにした。

「大学入学時と現在」における大学適応感では、時点及び友人選択の有意な主効果が見られ（時点：$F(1,102)=110.95, p<.001$；友人：$F(1,102)=7.28, p<.01$）、現在の適応感得点(5.57 点)が入学時（4.28 点）よりも有意に高く、新友人選択群の適応感得点（5.09 点）が旧友人選択群（4.71 点）よりも有意に高かった。

「友人関係で辛かった時と充実していた時」における大学適応感では、時点の有意な主効果が見られ（$F(1,102)=187.52, p<.001$）、充実期の適応感得点(5.76 点)が辛い時期（4.20 点）よりも有意に高かった(Table6-3-3 参照)。

Table6-3-3. 友人選択別の適応感(「現在-入学時」「辛い時-充実期」)の平均値とSD

	新友人 n =58	旧友人 n =46	F値 上段＝時点 中段＝友人選択 下段＝交互作用
現在	5.68 (0.70)	5.43 (0.91)	110.95*** 7.28**
入学時	4.50 (1.02)	3.99 (1.13)	1.12
辛い時	4.32 (1.05)	4.04 (1.09)	187.52*** 3.64
充実期	5.86 (0.64)	5.63 (0.74)	0.05

(　)はSD　　***p<.001　**p<.01

(3)-4　新友人の友人選択が大学適応感に及ぼす影響

大学生活 3 年半に追跡調査によって明らかにされた大学生の一番親しい友人（新友人）の選択過程が大学適応感に及ぼす影響を検討する。第 3・4 章の 5 回の調査時点のうち 1 回目及び 5 回目質問紙調査と面接調査（大学 4 年時）全てに参加したのは 80 名（男性 22 名・女性 58 名）を分析対象とした。

第 4 章第 4 節で明らかにされた、友人選択パターンについて「①大学入学時と現在」および「②友人関係で一番辛かった時期と一番充実した時期」の大学適応感に差が見られるかを検討するために、友人選択パターン(無変更型・同グループ内変化型・別友人選択型)を被験者間要因、調査時点を被験者内要因の独立変数とし、大学適応感得点を従属変数とする 2 要因の分散分析を行ったが、友人選択パターンの主効果および、友人選択パターンと時点の有意な交互作用は見られなかった。したがって次に、新友人の友人選択パターンの同グループ内変化型・別友人選択型を「変更型」に再統合した。「無変更型」とは、入学初期に選択した 1 番親しい友人を、3 回の調査間中一度も変更しなかった群であり、「変更型」は少なくとも一度以上友人を変更した協力者を統合した群である。

友人選択パターン（無変更型・変更型）によって大学適応感に差が見られるかを検討するために、友人選択パターンを被験者間要因、調査時点を被験者内要因の独立変数とし、大学適応感得点を従属変数とする 2 要因の分散分析を行った。「大学入学時と現在」における大学適応感では、時点及び選択パターンの有意な主効果が見られ（時点：$F(1,78)=68.21, p<.001$；選択：$F(1,78)=4.72, p<.05$）、変

更型の適応感得点（4.98 点）が無変更型の得点（4.62 点）よりも高かった。「友人関係で辛かった時と充実していた時」における大学適応感では、時点の有意な主効果が見られたが（$F(1,78)=139.27, p<.001$）、時点と選択パターンの有意な交互作用が見られたため（$F(1,78)=4.39, p<.05$）、時点および友人選択パターン別に単純主効果の検定を行った。その結果、充実期よりも辛い時期で大学適応感得点が高く、また「友人関係で辛かった時」において「変更型」の適応感得点(4.42 点)が「無変更型」の得点(3.79 点)よりも有意に高かった(Table6-3-4 参照)。

Table6-3-4. 友人選択過程の適応感(「現在-入学時」「辛い時-充実期」)の平均値とSD

	無変更型 n=19	変更型 n=61	F値 上段＝時点 中段＝友人選択 下段＝交互作用
現在	5.39	5.61	68.21***
	(1.06)	(0.70)	4.72*
入学時	3.84	4.43	1.08
	(1.43)	(1.00)	
辛い時	3.79	4.42	139.27***
	(0.89)	(1.03)	3.30
充実期	5.74	5.78	4.39*
	(0.87)	(0.63)	

(　)はSD　　***$p<.001$　*$p<.05$

(3)-5　回想的調査面接による親密化過程が大学適応感に及ぼす影響

第 5 章で得られた、本研究の親密化過程の類型が、大学適応感に及ぼす影響を検討する。本分析では、類型化による各時点の適応感を検討するために時点別の分析を採用した。

類型化の型を被験者間要因、各時点の適応感得点を従属変数とする 1 要因の分散分析を行った(Table6-3-5 参照)。

その結果、「入学時」、「辛い時期」、「充実時期」ではいずれも類型化の型の有意な主効果見られなかった（入学時：$F(6,97)=.54, n.s.$; 辛い時期：$F(6,97)=.40, n.s.$; 充実時：$F(6,97)=1.71, n.s.$）。現在では類型化の型の有意な主効果が見られ($F(6,97)=2.27, p<.05$)、Tukey の多重比較を行ったところ、二者中心グループ関係変動型の現在の適応感得点(5.72 点)が、グループ関係維持型(4.58 点)よりも高かった。

Table.6-3-5回想的面接調査の親密化過程類型によ適応感得点の平均値とSD

	二者関係専心型	グループ関係維持型	二者中心グループ関係維持型	グループ関係変動型	二者中心グループ関係変動型	二者先行グループ関係変動型	二者先行中心グループ関係変動型
今現在	5.96 (.21)	4.58 (.89)	5.62 (.77)	5.70 (.67)	5.72 (.63)	5.44 (.51)	5.38 (1.09)
入学時	4.17 (1.50)	4.47 (.93)	4.51 (1.19)	4.47 (1.12)	4.13 (1.12)	4.33 (.44)	4.03 (.99)
辛い	3.88 (1.41)	3.83 (.98)	4.10 (1.02)	4.37 (1.15)	4.26 (1.03)	3.95 (.25)	4.36 (1.30)
充実	6.21 (.32)	5.08 (.50)	5.87 (.64)	5.75 (.67)	5.84 (.65)	5.44 (1.06)	5.63 (.81)

次に、共通の友人を含む親密化過程の様相が大学適応感に及ぼす影響を検討するために、第5章第4節で明らかにされた、選択友人・友人グループの関係変化をもたらした出来事（以下「関係変化」と表記する：判定項目③）、および、選択友人とだけの経験・行動の共有（以下「個別行動」と表記する：判定項目④）の有無を被験者間要因の独立変数、大学適応感得点を従属変数とする2要因の分散分析を行った。尚、本分析では、「二者関係専心型（Ⅰ型）」の4ケースは共通友人が抽出されないため分析から除外する。また、各時点での適応感得点で検定を行った。

「現在」の適応感得点では、関係変化および個別行動の有意な主効果が見られたが（変化：$F(1,96)=5.86, p<.05$・個別：$F(1,96)=5.39, p<.05$）、関係変化と個別行動の有意な交互作用が見られたため（$F(1,96)=6.22, p<.05$）、各要因別に単純主効果の検定を行った。その結果、関係変化なし群で、個別行動あり群（5.62点）の適応感得点が、個別行動なし群（4.58点）の得点よりも高く、個別行動なし群で、関係変化あり群（5.64点）の適応感得点が、関係変化なし群の得点よりも有意に高かった。

充実期の適応感得点では、個別行動の有意な主効果が見られ（$F(1,96)=5.38, p<.05$）、個別行動有群の適応感得点（5.61点）が個別行動無群の得点（5.31点）よりも有意に高かった。

「入学時」および「辛い時期」における適応感では、有意な主効果および交互作用は見られなかった（Table6-3-6参照）。

Table6-3-6. 親密化過程における関係変化と個別行動の有無による

	関係変動あり		関係変動なし		F値
	個別行動あり	個別行動なし	個別行動あり	個別行動なし	上段=関係変化 中段=個別行動 下段=交互作用
	n=53	n=13	n=28	n=6	
現在	5.60	5.64	5.62	4.58	5.86*
	(0.82)	(0.62)	(0.77)	(0.89)	5.39*
					6.22*
入学時	4.10	4.44	4.51	4.47	0.58
	(1.07)	(0.99)	(1.19)	(0.93)	0.25
					0.41
辛い時期	4.30	4.27	4.10	3.83	1.16
	(1.12)	(1.02)	(1.02)	(0.98)	0.25
					0.18
充実期	5.77	5.68	5.87	5.08	1.76
	(0.71)	(0.74)	(0.64)	(0.50)	5.51*
					3.49

(　　)はSD　　　　　　　　　　*p<.0

(4) 考察

第3節では、第3章から第5章で明らかにされた友人関係及び親密化過程の様相が、第2節で選定した大学適応感項目に及ぼす影響を検討することを目的とした。

第1に、本節で測定した4時点(現在・入学時・友人関係で辛い時期・友人関係で充実していた時期)の時点間の差異を検討したところ、友人関係で充実していた時期の大学適応感が他の時点よりも高かった。つまり、友人関係の充実していた時には大学適応感が高まることを示す結果である。また現在の大学適応感は入学時と友人関係で辛い時期よりも得点が高かった。つまり、大学生にとって最終学年となる大学4年時の適応感は入学時よりも高まることを示す結果である。

第2に、大学1-2年時に測定した一番親しい友人に対する各指標の推移が、大学4年時に測定した入学時の適応感(回想によるもの)と面接調査時点での「現在」の適応感に及ぼす影響について検討した。第1に、大学4年時の回想による入学時の適応感が、拒否感情・深さと対等さの関係認知の切片に有意な影響力が示され、入学時の適応感が高まると拒否感情の初期値が低くなり、深さと対等さの関係認知が高まることが示された。この結果は、入学した当初の新入生が内的に安定した適応状態を持つことが新しくできた友人に対する不安・拒否を示す感情を低下させ、その友人との関係についてよ

り深く、また対等であるという認知をしていることであり、入学時の適応感が高いことは友人に対する安定したポジティブな評定につながることが明らかになった。また、入学時の適応感が親和的行動の推移（傾き）に弱いが正の影響が示されたことは、初期に評定にとどまらず、入学当初の適応感が、その後の親和的な行動の頻度を予測することを示した。このモデルについて、注意すべき点としては、入学時の適応感は大学 4 年時の回想の上での回答ではあるための歪みが想定されるとことである。しかしながら、複数の指標で入学時の適応感の影響との関連が示されたことは、入学時の友人関係と適応感との関連が確認できたと考える。また、9 つの友人に対する指標のうち 4 つの指標では、適応感と 1-2 年時に測定した指標の推移間に有意なパスが得られず、影響関係を確認できなかった。また、現在の適応感に影響するパスは、感情的な認知の傾きから得られた、負の有意傾向のパスのみであった。この結果から、大学 1-2 年時に測定した一番親しい友人に対する評定の初期値とその推移は、大学 4 年時の適応感を予測しないことを示すものである。大学 1-2 年時の友人関係では、友人選択の推移が示すようにまだ 4 割以上の大学生が一番の友人を変化させている。また回想による面接結果から大学 2 年以降には、資格の選択、就職活動、卒論等大学 4 年時の至る過程の中で、様々な出来事を経験し、友人関係の親密化もその経験に依存し変化することが示されている。すなわち、大学 1-2 年生の評定が、大学 4 年時の大学適応感との関連を示さなかったことは、それ以後の友人関係における様相が重要となることを示す結果である。この検討に関しては、5 回の質問紙調査および 4 年時の面接調査にすべて参加した協力者(53 名)のみの分析でありサンプル数の限界があった。本研究の協力者の一部のデータの結果であり、分析方法を再検討する必要もあろう。

第 3 に大学 4 年生の面接調査時点において、一番親しい友人が新友人と旧友人である場合の大学適応感を検討した。大学 4 年時に「新友人」が一番親しい友人と選択した群の適応感は、「現在 - 入学時」の時点において、「旧友人」が親しいと選択した群の得点よりも有意に高かった。Paul & Brier(2001)は大学入学後もなお旧友人を強く思う感情は大学入学後の孤独感を高めることを指摘しているが、本研究の結果もこの知見を支持するものであった。つまり大学内に一番親しいと呼べる親友ができたことは、大学生活全体への適応感を高めることを示す結果である。

第 4 に新友人の友人選択よる大学適応感得点の比較では、大学入学時と現在の時点において、友人を変更した群の適応感得点が、友人を一度も変更しなかった群よりも高かった。つまり、大学に入学してからの過程において初期に選択した一番親しい友人よりも別の

親しい友人が出現した方が全体としての適応感を高めることが示唆された。さらに友人関係で辛い経験をした時期において、友人を変更した群の適応感得点が、友人を一度も変更しなかった群よりも高く、友人関係が充実していた時期では差はみられなかった。友人関係の充実した経験をした時にはその選択パターンに関わらず、適応感が高く評定されることを示唆した。初期の親しい友人を変更した群は、少なくとも初期に選択した友人よりも、仲の良い、印象の良い人物が 4 年間の学生生活の中で、出現したことを示す。第 4 章第 4 節で検討したように、その変更については、同じグループ内で親しい友人を変更した場合と別の友人関係ネットワークから選択された場合の変更もある。この変更の意味は、少なくとも一度も友人を変更しなかった群よりもグループ内またはグループ外の友人との活発な友人関係を経験してきた結果変更された可能性がある。友人関係で辛いことが生じた時期には、多様な友人関係内での経験していることが、大学生活における適応感を高めることを示唆するものである。

第 5 に、第 5 章で検討された親密化過程の様相と適応感の関連について、検討した。親密化過程の 7 つの類型による検討では、現在の適応感のみで差がみられ、「二者中心グループ関係変動型」では、「グループ関係維持型」よりも面接調査時点での高い適応感を報告した。親密化過程における関係変動および個別行動の判定項目による検討でも、現在の適応感について、関係の変化なく、選択した友人との個別の経験や行動が確認されない群における適応感が低く、同様の結果を得ている。グループ関係維持型の特徴は、大学 4 年間の過程の中で、選択友人との親密化過程がグループ関係と同時に成立し、グループ関係が変動せず維持され、協力者と一番と選択された友人との特別の行動が確認されなかったことである。すなわち、大学生の友人関係では、過程の中での様々な経験によって関係変化を経て現段階の関係が形成されることや、関係変化がなくとも過程の中で一番親しい友人との特別な行動や経験が認知されることが、関係が変動せずグループ関係が維持されるケースよりも、大学生活の適応感を高めることを示唆するものである。また、友人関係で充実していた時の適応感では、個別行動がある群の適応感が高かった。充実期は、他の時点よりも適応感が高いが、その中でも個別行動がある群の適応感が特に高いことが明らかになった。

本節で測定した適応感については課題が存在する。本章で使用し適応感は、面接時の回想による「適応感」である。すなわち、回想的調査面接の発話同様に回想によって適応感が歪められ評定された可能性は否定できない。今後の展望として、少なくとも入学時に測定した適応感と現在の適応感の変動を再度検討する必要がある。

第4節　大学生の友人関係における親密化過程と適応感に関する検討（質的データによる検討）

(1) 目的

第3節では、第3章から5章で検討されてきた追跡的研究および回想的調査面接で抽出された親密化過程と適応感との関連について量的な分析手法により検討してきた。

第4節の目的は第5章で明らかにされた大学生の友人関係における親密化過程と大学適応感との関連について、大学適応感の得点に特徴ある群の発話から質的な検討を行うことである。

(2) 方法

(2)-1 調査協力者

面接調査に参加した104名（男性31名・女性73名）の大学4年生のうち、面接調査から得られた発話について分析対象となったのは21名（男性2名・女性19名）であった。

(2)-2 調査時期

(2)-3 面接調査の手続き

第5章第4節に記載済みであるため、本節では詳細を割愛する。

(2)-4 質問紙の内容

第3節で記載済みであるため、本節では詳細を割愛する。本節では、適応感に特徴ある群の選定について、入学時の適応感と現在の適応感のみを使用する。

(3) 結果

(3)-1 適応感得点による協力者の選定過程

大学適応感得点のうち、現在と面接調査時点で回想させた入学時の適応感得点を使用し、得点の上位5名と下位5名の協力者を選出した。第1グループは現在の適応感高群、第2グループは入学時の適応感高群、第3グループは現在の適応感低群、第4グループは入学時適応感低群である(Table6-4-1参照)。

Table6-4-1. 適応感得点に特徴がみられる協力者の得点と親密化過程の類型

適応特徴グループ	ID	SEX	現在の適応感得点	入学時の適応感得点	親密化過程の類型
第1グループ（現在適応感高）	1	女性	7.00	2.33	Ⅲ:二者中心グループ関係維持型
	2	男性	6.83	2.50	Ⅲ:二者中心グループ関係維持型
	3	男性	6.83	2.50	Ⅲ:二者中心グループ関係維持型
	4	女性	6.83	3.83	Ⅳ:グループ関係変動型
	5	女性	6.83	3.50	Ⅴ:二者中心グループ関係変動型
第2グループ（入学適応感高）	6	女性	6.17	6.55	Ⅳ:グループ関係変動型
	7	女性	6.50	6.33	Ⅵ:二者先行グループ関係変動型
	8	女性	6.00	6.33	Ⅲ:二者中心グループ関係維持型
	9	女性	5.00	6.33	Ⅲ:二者中心グループ関係維持型
	10	女性	6.00	6.17	Ⅰ:二者関係専心型
第3グループ（現在適応感低群）	11	女性	2.50	1.67	Ⅶ:二者先行中心グループ関係変動型
	12	女性	3.17	4.67	Ⅱ:グループ関係維持型
	13	女性	3.83	5.00	Ⅱ:グループ関係維持型
	14	女性	4.00	4.83	Ⅶ:二者先行中心グループ関係変動型
	15	女性	4.17	5.00	Ⅲ:二者中心グループ関係維持型
	16	女性	4.17	3.83	Ⅶ:二者先行中心グループ関係変動型
第4グループ（入学適応感低群）	※重複11	女性	2.50	1.67	
	17	女性	4.33	1.67	Ⅴ:二者中心グループ関係変動型
	18	女性	5.33	2.17	Ⅴ:二者中心グループ関係変動型
	19	女性	5.17	2.17	Ⅲ:二者中心グループ関係維持型
	20	女性	5.00	2.17	Ⅴ:二者中心グループ関係変動型
	21	女性	4.33	2.17	Ⅶ:二者先行中心グループ関係変動型

第2に「入学時の適応感得点」と「現在－入学時の適応感の変動得点」との関連を検討し、特徴群21名の適応感が入学時からどのように変動しているかを検討した。面接調査に協力した全協力者の人数（n=104）から各3群にグループ分けし、クロス集計を行った上で、上記で選出した4群の協力者がどの群に属するかを確認した（Table6-4-2参照）。

その結果、「入学時の適応感低－変動高群」には、第1グループ全員と第4グループ5名中4名(No11の協力者を除く)が属していた。「入学時の適応感が高群－変動低群（－方向もしくは少ない＋方向群）」には第2グループ全員が属していた。第3グループは、6名中5名(No11の協力者を除く)が変動低群に属し、入学時の適応感については、高・中・低の全ての群に協力者が存在する結果となった。

Table6-4-2.入学時の適応感(3群)と適応感の変動(3群)の関連（人数）

		変動群			合計
		-1.5から0.5（低）	.66から1.84(中)	2.00から4.67（高）	
入学群	低群（1.67～3.83）	1	4	25	30
	中群（4.00～4.67）	7	23	9	39
	高群（4.83～6.50）	26	9	0	35
合計		34	36	34	104

以上の結果から、適応感の変動には特徴あるグループ群が存在することが明らかになった。したがって、次に個人の発話を抽出し質的な検討を行っていく。発話について、個人情報に関わる部分は、著者が文言を変更して使用するが、原則として協力者から得られた発話を使用する。

(3)-2　現在の適応感高群（第1グループ）上位5名における親密化過程の発話と適応感

現在の適応感高群上位5名の親密化過程および大学生活への影響を述べた発話について抜粋し、記述したうえで、全体的特徴についてまとめていく(Table6-4-3参照)。

(3)-2-1　現在の適応感高群上位5名の個人発話

No1（現在7.00点・入学時2.33点）女性

一番親しい友人として高校時代の旧友人（A）を選択している。Aは他大学であるが、同じ市内であるため、交流は続いている。「大学入学した時にとても嫌でなじめないということ、ずっと友達もあまりできなくて、泣きながら大学辞めたい」という入学当時の気持ちをAに相談していることがきっかけで親友だと認知した。

新友人(B)は授業で知り合った同学科の友人を選択しているが、大学1年生の時には全く一緒にはいなかったこと、Bに対する印象が悪く、遠ざけていたところがあることを報告している。グループとしては10人の共通友人がおり、その中には高校が同じ友人もいる。1年生の時は新しい友達とか新しい人、環境に抵抗や拒否反応も大きかったが、2年生になりサークルが一緒になったことと、1年生の時の気持ちも落ち着いてきて、Bを受け入れられたという意識の変化があった。大学2年生時から、このメンバー全員で、誕生

会を開くようになり、グループとしての友人関係も充実しつつある状況にあった。B との親密化のきっかけは、3 年時の 2 人で一緒に行ったバイトであった。その際、2 人で協力し合って、大変だった経験を経て仲良くなったというきっかけを報告している。その後実習の辛さをお互いに励ましあう関係に発展し、心を開く相手になった。大学 4 年時の現在は、就職の進路も違うため、バラバラに過ごす時間も多いが、B とは気晴らしに一緒に過ごすこともある。B の選択理由として「一番、私が困った時、頑張ってと言ってくれた人。ほめてくれたし大丈夫と言ってくれた人」であることを報告した。

大学生活に友人関係が及ぼす影響について、「大学に入った時は、本当に、高校からの友人もいたけど、なじめなかった。友達も新しい友達なんかいらないという自分の中の反発があった。友達ができてからは、10 人もできた時、毎日楽しいし、みんなに会えるのが楽しみで学校に来るようになった」と報告しており、入学後から現在に至る意識の変化がうかがえる面接であった。No1 の協力者は、質問紙調査 1・2・3・5 に参加し、この時点では B は新友人として選択されていない。共通する友人グループ内で友人が選択されていた。

No2（現在 6.83 点・入学時 2.50 点）男性

一番親しい友人として高校時代の旧友人（A）を選択している。A は他大学であり、協力者は浪人しているため、現在 A は社会人である。協力者が大学入学後、学年が上がるにつれて、その交流の頻度が多くなってきたことを報告している。

新友人（B）はオリエンテーションで知り合った同学科の友人を選択しているが、同じサークルにも参加しており、サークルの同期（20 名）が共通友人である。1 年生のころからサークル内の友人関係が活発であり、生活の中心である。B とは 1 年生の夏休みには恋愛相談ができる関係になった。共通の友人である 20 名のメンバーは大学 2 年時には固定したメンバーである。3 年生以降、協力者はアルバイトでも忙しい生活を送っていたが、サークルのメンバーとの遊びの頻度は変わらず、むしろ授業が減ったことで、時間を調整しやすくなったようだ。就職活動時期には、B には相談をよくしていた。4 年生になって忙しくなったがサークルのメンバーとパソコン室にこもり、一緒にいる時間は増えた。昼は一緒の場で作業をして、夜は息抜きに遊ぶ関係であり、1 年生から現在に至るまで、サークルの友人関係が密で安定している様子がうかがえる面接であった。B の選択理由として、「一番近い存在で学科も同じであること、一緒にいる時間が長く、相談事も多かった」と報告している。

大学生活に友人関係が及ぼす影響について、「一緒に遊ぶ友達ができたので、協力できる関係を作れた。その結果、学科に友達があま

りできなかった。学科では（B）と２人でいることが多くて、サークルばかりで、偏りがあったかなと思う。最近はゼミもあるので、少し関係が広がったとは思う。」と報告した。No2 の協力者は、質問紙調査 1・2・3・4 に参加し、この時点では B は新友人として選択されていた。

No3（現在 6.83 点・入学時 2.50 点）男性

一番親しい友人として幼稚園からの旧友人（A）を選択している。高校以降は、別の学校に進学しているが、共通友人を含めて、現在も交流がある。協力者が浪人し大学に入学した後は、大学生の方が時間が作りやすく、頻繁に遊んでいることを報告している。

新友人（B）はオリエンテーションで知り合った同学科の友人を選択しているが、同じ部活に所属している友人である。共通友人も含め 1 年生の時の交流はそれほど頻繁ではなかった。2 年生になって、協力者が一人暮らしを始め、家に遊びに来るようになった。また B との関係では、部活の中での同学年の結束もあり、いっしょにいる時間が増えたことを報告している。協力者は、バイトを複数掛け持ち、忙しい生活で、B に部活に関してまかせきりになっていたことやレポートや授業では助けてもらったことを報告している。3 年以降はグループ関係としてよりも個々の友人関係が充実していたようだ。B の選択理由として「一緒にいる時間が長いこと、信頼してもらったと思っていること、学科と部活の仲間と共有していること」を報告している。

大学生活に友人関係が及ぼす影響について、「友人に勉強の面で助けてもらったからこそ卒業ができる」という感謝の気持ちを述べている。「またバイトで疲れ切り疲弊した姿も見せていたこと」「B を中心として友人がいることが大学生活で重要である」と報告した。No3 の協力者は、質問紙調査 1・2・3 回目に参加し、1-2 回目調査時点では新友人として別の友人を選択し、3 回目調査時点で B を選択していた。

No4（現在 6.83 点・入学時 3.83 点）女性

一番親しい友人として、同大学内他学科の新友人（A）を選択している。共通の友人関係は他 3 名だが、協力者以外は全員が同じ学科である。協力者には、同学科内にも 5 人の友人関係があるが、一番の友人には学科のメンバーは思い浮かばないという。

語学の授業で知り合い週 4 日一緒に授業を受ける関係であった。2 年生になるまでは、関係は深まっておらず、プライベートの付き合いはない。2 年生になり協力者が所属するサークルに、このメンバーが入ったことで関係がスタートしている。「このメンバーは全員

資格を目指しており、同学科内の友人は資格関係の授業を一緒に受ける人がいなかったので、授業も一緒に受けるようになった」というきっかけを報告している。3 年生は、一緒の授業も多く、何かしら一緒に行動する関係に発展した。4 年生になり会えない日々が続くが、メーリングリストを 5 人で作っており、情報を共有している。A を選択した理由として、一緒にいた時間の長さであると報告したが、そのほかのメンバーに対する気持ちも変わらず、一番を決めることが難しかったと報告している。

大学生活に友人関係が及ぼす影響について、「生活の思い出の大半を占めているのがこの友人関係であり、サークル、勉強、実習全部に関わっていたメンバーであった」ことを報告している。No4 の協力者は、質問紙調査全てに参加しており、4 回目調査時点のみで A を選択していた。

No5（現在 6.83 点・入学時 3.50 点）女性

一番親しい友人として、同大学内他学科の新友人（A）を選択している。共通する友人グループの他のメンバーは異性（男性）であり、協力者以外は同学科の友人関係である。語学のクラスで知り合い、授業を一緒に受ける関係になり、1 年の 6 月くらいからは、5 人では月に 1 回、語学クラス全体でも月に 1 回の学外の付き合いができた。2 年生になり授業自体が重ならないことから付き合い頻度は減少したが、メンバーのうち 2 人が一人暮らしを始めて、家に集まることが増えた。A との関係では 2 年生になって買い物に行ったり、同性の友人関係ができた。3 年生では、夏休みとか忘年会とかのイベント時期には集まった。4 年生になり全体としてはなかなか機会がないが A さんとの付き合いは続いている。A を選択した理由として、「2 年生以降プライベートで 2 人での関係ができた特別な存在であること」を報告した。

大学生活への影響について、「このメンバーの存在があることで楽しい関係ができたこと、大学生活の遊びの部分で後悔のない生活が送れた」と報告している。No5 の協力者は、質問紙調査全てに参加しており、一番親しい友人として、全ての調査時点で A 以外の友人（別グループ）を選択していた。

(3)-2-2　現在適応感高群における親密化過程における全体的特徴

現在適応感高群の全体的特徴として、現在適応感得点と入学時の得点差が非常に大きく、入学時の適応感を比較的低いことである。現在と入学時の変動得点を算出したところ、その変動（＋方向への変動）が大きい上位 5 名の中にこのメンバーが 4 名(No1・2・3・5) 入っていた。このグループでは、旧友人を選択したのが 3 名（No1・

2・3）であった。3名とも旧友人と別々の大学生活を送っているが、大学時代の交流が多く、旧友人との関係に特別な気持ちを有していた。

No1・3・4・5は面接で選択した友人と1年時（特に前期）には、あまり交流がないか、別の友人関係も存在したことを報告している。第1回目の質問紙調査では、この4名は一番親しい友人として別の友人を選択していることはこの発話の状況を裏付ける結果である。

大学2-3年時になると、5名とも選択友人との関係が充実していることを報告している。4年時の現在は個々の活動が忙しく、付き合い頻度は減っている協力者は多いが、No2は一緒に過ごす時間が増えている。No4は忙しい生活の中でもメーリングリストでの付き合いがあること、No1・3・5は全体としての関係は難しいが、特に選択友人との個別関係があることを報告している。このグループの特徴は1年時の友人関係よりも2-3年時の友人関係が充実しており、4年時の現在においてもポジティブな認知が存在していることが特徴である。

Table6-4-3.現在の適応感得点高群（5名）の特徴

ID	SEX	現在の適応感得点	入学時の適応感得点	新旧友人選択	親密化過程の類型	新友人の所属	居住	現役・浪人	調査1～5回目の友人選択との一致状況 調査1	調査2	調査3	調査4	調査5
1	女性	7	2.33	旧	Ⅲ：二者中心グループ関係維持型	同学科・同サークル	親と同居	現役	×	×	×	—	×
2	男性	6.83	2.5	旧	Ⅲ：二者中心グループ関係維持型	同学科・同サークル	親と同居	浪人	○	○	○	○	—
3	男性	6.83	2.5	旧	Ⅲ：二者中心グループ関係維持型	同学科・同部活	親と同居→一人暮らし	浪人	×	×	○	—	—
4	女性	6.83	3.83	新	Ⅳ：グループ関係変動型	他学科	親と同居	現役	×	×	×	○	×
5	女性	6.83	3.5	新	Ⅴ：二者中心グループ関係変動型	他学科	親と同居	現役	×	×	×	×	×

—は調査データなしを示す　○は、面接調査時に選択した人物と同人物を示す。　×は、面接調査時に選択した人物とは別人物を示す。

(3)-3　入学時の適応感高群（第2グループ）上位5名における親密化過程の発話と適応感

入学時の適応感高群上位5名の親密化過程および大学生活への影響を述べた発話について抜粋し、記述したうえで、全体的特徴についてまとめていく（Table6-4-4参照）。

(3)-3-1　入学時の適応感高群上位5名の個人発話

No6（現在6.17点・入学時6.55点）女性

一番親しい友人として、同大学内他学部の友人（A）を選択している。Aは高校が同じく、受験の時に知り合っているが、高校時代の付き合いは顔を知っている程度である。入学後すぐに共通友人1名を含め、3人で仲良くなり同サークルに所属した。Aとは大学で初めての一人暮らしの家を一緒に探し、近くに居住した。ほとんど毎日どちらかの家にいて、泊まっている状況で、1人でいる時間がないほど頻繁な付き合いであった。2年生になっても、毎日の付き合い頻度は変化しなかった。また協力者には同学科内にも親しい関

係があり、学校生活では同学科内友人関係が充実していた。3年生になり、プライベートな付き合いはやや減り、ゼミ・実習等のつながりで学科内の友人との付き合いの方が多くなった。4年生現在でもプライベートな付き合いは3年生と変わらずに続いている。Aを選択した理由として、「一番の友人をAにするか、学科内の友人にするかを迷った」ことを報告した。Aに対しての特別の気持ちがあるが、友人それぞれに大切な気持ちがあったため、1名の選択が難しかったようだ。

大学生活に友人関係が及ぼす影響について、「友人関係がすなわち生活であり、友人関係がうまく行かなければ、生活すべてがダメになってしまうと感じた。非常に重要な存在であった」と報告している。No6の協力者は、質問紙調査全てに参加しており、Aは大学入学以前の旧友人として、全ての調査時点で選択していため、新友人については、A以外の同グループ内の友人を選択していた。

No7（現在 6.50 点・入学時 6.33 点）女性

一番親しい友人として、同大学内同学科の友人（A）を選択している。Aとは入学直前のオリエンテーションで知り合っている。2人とも1人暮らしであり、特に協力者は、一人暮らしのさみしさを1年の前期には強く感じており、土日はお互いの家に泊まるなど、付き合い頻度は非常に多く、他の友人関係とは違うものを初期から感じていた。大学2年生になり共通友人を含むグループ関係も多くなったようだが、そのグループ内での対人的な葛藤も経験した。Aとの付き合いでは、1年生ほどの頻繁さはなくなった。3年になり、アルバイトを増やしたことで友人関係の頻度が全般的に減ったが、夏休みの実習中には、Aや共通友人に頻繁に電話で相談していた。就職活動でもAに相談することが多く、就職活動が落ち着いてきた現在、少し遊ぶ回数は戻ってきたことを報告した。Aさんを選択した理由として、「家族みたいななんでも話せる関係であり、今は一番近いし、信頼している人である」と報告した。

大学生活に友人関係が及ぼす影響について、「一人暮らしで環境が変わったため、友人に精神的に頼っていた部分が多く、支えてもらったのが友達であった。楽しい時も、辛い時も一緒にいた存在」であることを報告した。No7の協力者は、質問紙調査全てに参加しており、Aは新友人として、全ての調査時点で選択されていた。

No8（現在 6.00 点・入学時 6.33 点）女性

一番親しい友人として高校時代の旧友人（A）を選択している。Aは同大学の他学科であり、高校時代のグループ関係（男女混合グループ）は大学入学後付き合いが減ってしまったが、Aとの個人の付

き合いは増えてきた。2 年生の時はアルバイト、恋愛、ファッションのような話題が中心だったが、3 年、4 年になると仕事、将来、家族関係の悩み等話す内容が変わっている。大学 2 年までは、同じ授業を取ることがなく学内では別行動であったが、3-4 年時には、科目を合わせて履修しており、現在では週 1 回の付き合い頻度である。

新友人（B）はオリエンテーションで知り合った同学科の友人を選択しているが、共通友人関係を含め、4 人で学内を行動するようになった。1 年生の時は、授業・学食で過ごし月に 1 回程度は学外でも遊んでいた。2 年生になり協力者がサークルやバイトで協力者の友人関係が広がったため、4 人で過ごす時間は減っている。3 年生になり、授業で一緒になることが少なくなったので、数か月に 1 回は予定を合わせて遊ぶようになった。この時期には B との個人的関係も増えてきた。4 年生になり、就職活動を B とすることもあるが、全体的な付き合いは減っている。旧友人 A を選択した理由として、「悩みとかを、共有できる、理解してくれる関係」であり、新友人 B に対しては、「授業で一緒だった手頃な存在」であると報告した。

大学生活に友人関係が及ぼす影響について、「アルバイトやサークルでは、同い年以外の人とも接する機会が会って、対人関係が広がったため影響は大きい」と報告した。No8 の協力者は、質問紙調査 1～4 回目に参加しており、B は新友人として、2・4 回目で選択されていた。

No9（現在 5.00 点・入学時 6.33 点）女性

新友人（A）は入学前のオリエンテーションで知り合った同学科の友人を選択しているが、「入学後数日で 10 名のグループ関係が成立した」と報告している。A とは、1 年生の時には特別な意識はなく、A は別のサークルや高校時代の付き合いが中心であったため、付き合いは少なく、同グループ内で一緒のサークルに所属しているメンバー数人との関係の方が深かった。また 1 年時には、協力者は、課外活動に参加しており、プライベートはその活動のメンバーと過ごすことが多かった。学科内の友人とのプライベートでは、グループ関係全体と同サークルに所属しているメンバーとの付き合いが中心である。2 年生になり、協力者は資格を目指し、友人関係でも授業で一緒に受けることが中心の生活になった。レポートを協力するなど、グループ関係が増えてきた。3 年生になり、A とゼミが一緒になり、一緒に過ごす時間も増えたが、個人的な付き合いは特になかった。3 年生の夏休み以降、協力者が A に恋愛相談をするようになり、4 年生になって個人的に A と遊ぶこともある。グループ全体

としては、3 年生以降授業もバラバラになり、付き合いも減ってきた。グループ全体としての付き合いの誘いもあるが、協力者自身の予定が合わず、最近は参加できていない。A を選択した理由として、「ゼミが一緒になり、一番相談している回数も多いし、話しやすい関係になったこと」を挙げている。

大学生活に友人関係が及ぼす影響について、「のんびりしている人が多くて、今までの友達とタイプが違った。平和な感じであった」と報告した。No9 の協力者は、質問紙調査全てに参加しており、一番親しい友人として、全ての調査時点で A 以外の友人（同グループ内）を選択していた。

No10（現在 6.00 点・入学時 6.17 点）女性

新友人（A）はオリエンテーションで知り合った同学科の友人を選択しているが、仲良くなったのは、2 年生以降、同じバイト先で働くことになったことである。協力者には、同学科内に別の 10 人グループの友人関係があり、1 年時の学校生活、プライベートの付き合いの中心はこの友人関係であった。A との付き合いはほとんどなく、A と共通する友人関係もない。2 年生になり、協力者の紹介で、同じ職場でアルバイトすることになったが、学校生活は別行動だった。夏休みには、ほぼ毎日アルバイトをしていたため、一緒に過ごす時間が増え、職場の同僚を含めて遊んだり、旅行に一緒に行くようなった。大学内の生活は、10 名の友人関係のうち、同じゼミのメンバーが中心であり、A と一緒ではない。A との関係では、一度同時にアルバイトを辞め、お互いの就職活動が落ち着いた 4 年生になってから、一緒に再度働いている。今後 2 人で旅行に行く計画も進めている。A を選択した理由として「仲良くなったのが急激であり、一緒にいて気が合うこと、楽なこと」を挙げている。一方学科内の友人関係 10 名については、「勉強していくうえで一緒に頑張った友人であり、人数が多くてクリスマス会とか、楽しい企画が多かったメンバーだ」と報告した。

大学生活に友人関係が及ぼす影響について、「A との関係については、アルバイトのしんどいことを共有する関係になり、2 人で旅行に行き始めてから、2 人の共通の趣味になったこと」を報告した。No10 の協力者は、質問紙調査全てに参加しており、一番親しい友人として、全ての調査時点で A 以外の友人（別友人関係）を選択していた。

(3)-3-2　入学時適応感高群における親密化過程における全体的特徴

入学時適応感高群の全体的特徴として、現在適応感得点と入学時の得点差が少なく、入学時の適応感の高さを維持していることである。入学時の友人関係状況は、事例により様々だが、全員、大学入学時から友人関係が充実している様子もしくは友人関係に不安感を持っていない様子がうかがえる。また、大学生活の中で不安やなじめない状況を報告した協力者がいなかった。

No6・7 の共通点は、大学進学で一人暮らしをするという環境の変化を経験している。入学当初に同じ境遇の新友人の存在がとても重要であり、1 年生の時に付き合い頻度、内的なつながりが非常に強く、学年が上がるについて落ち着いてきたため、付き合い頻度は減っている。また、No8 はこの群で唯一旧友人を一番の友人として選択しているが、この友人が同大学内（別学部）に在籍している。高校時代よりもその付き合いがより深くなっており、現在でも週 1 度は会っていることから、この友人の存在が入学時の適応感の高さにつながっている可能性がある。No9 は入学前のオリエンテーションから友人関係の形成がスタートし、入学数日で、10 人グループができたことを報告している。4 年間を通して、「平和的関係」であったと報告しており、安定した友人関係うかがえる。No10 は、同学科内で同じバイト先の友人との親密化過程を報告しているが、協力者には入学当時から他に学科内に 10 グループの友人関係が存在し、選択友人とは共通関係にはない。選択友人との関係では 2 年生以降、急激に親しくなっているが、学内では、10 人グループ関係が中心であり、同サークルに所属していたり、同じゼミに所属しているメンバーもいる。幅広い友人関係が、入学時からの安定した適応感につながっている可能性がある。

Table6-4-4.入学時の適応感得点高群(5名)の特徴

ID	SEX	現在の適応感得点	入学時の適応感得点	新旧友人選択	親密化過程の類型	新友人の所属	居住	現役・浪人	調査1〜5回目の友人選択との一致状況 調査1	調査2	調査3	調査4	調査5
6	女性	6.17	6.55	新	Ⅳ:グループ関係変動型	他学部	一人暮らし	現役	×	×	×	×	×
7	女性	6.5	6.33	新	Ⅵ:二者先行グループ関係変動型	同学科・同部活	一人暮らし	現役	○	○	○	○	○
8	女性	6	6.33	旧	Ⅲ:二者中心グループ関係維持型	同学科・同部活	親と同居	現役	×	○	×	○	−
9	女性	5	6.33	新	Ⅲ:二者中心グループ関係維持型	同学科・同部活	親と同居	現役	×	×	×	×	×
10	女性	6	6.17	新	Ⅰ:二者関係専心型	同学科・同アルバイト	親と同居	現役	×	×	×	×	×

—は調査データなしを示す　○は、面接調査時に選択した人物と同人物を示す。　×は、面接調査時に選択した人物とは別人物を示す。

(3)-4　現在の適応感低群上位 5 名における親密化過程の発話と適応感

現在の適応感低群上位 6 名の親密化過程および大学生活への影響を述べた発話について抜粋し、記述したうえで、全体的特徴についてまとめていく(Table6-4-5 参照)。

(3)-4-1　現在の適応感低群上位5名の個人発話

No11　（現在 2.50 点・入学時 1.67 点）女性

No11 の協力者は、現在および入学時の適応感が低く、両群に属する協力者であり、その変動のパターンも他の協力者とは異なっていた。

一番親しい友人として小学校時代の旧友人（A）を選択している。A は同市内の他大学に所属しており、大学 1-2 年時までは頻繁ではないが、会う機会があった。現在はお互いの活動が忙しく会えていないが、就職の相談をすることはある。

新友人として同学科内友人（B）を選択しているが、出会ったのは、オリエンテーションの時である。オリエンテーションの時に学科内には、すでにいくつかの友人関係が出来上がっていて、協力者はその関係に入れなかったことに不安を感じていた。そこに B も一人でいたために、友人関係に至った。2 年生までは、大学生活を 2 者関係のみで過ごしているがプライベートの付き合いはほとんどない。3 年生になり、同じ実習先に行き、交流の幅が少し広がった。また B とゼミも一緒だが、この 2 人の関係にもう 1 名ゼミの友人が加わった。就職活動は方向性が違うため、現在は週 1 回程大学で会う程度である。B を選択した理由としては、「4 年間を通して B 以外の友人ができなかった」ことを理由として述べている。

大学生活への影響として、「B に頼っていた大学生活であり、助けてもらったという思い」であることを報告した。No11 の協力者は、質問紙調査全てに参加しており、B は新友人として、全ての調査時点で選択されていた。

No12　（現在 3.17 点・入学時 4.67 点）女性

一番親しい友人として小学校時代の旧友人（A）を選択している。A は他県の他大学に所属しており、現在は、年に 1-2 回会う程度である。お互いの家に遊びに行くこともある。

新友人として、オリエンテーションで出会った同学科の友人（B）を選択した。協力者には同学科に高校時代の友人がおり、3 人の友人関係となった。大学の授業を一緒に受講し、同じサークルにも 3 人で所属した。1 年生が一番遊んでいたことを報告し、2 年生になり、協力者以外の 2 人はサークルに参加しなくなったため、共通の話題が少なくなったという変化が生じた。3 年生も授業は一緒に受講するが、実習や授業の内容はよく話すが相談事はしない。メールの内容も用事がある時しかしないという。B とはゼミが一緒だが、4 年生の現在では、週に 1 回程度しか会わない。B を選択した理由として、「大学内でずっと一緒にいたこと」を挙げている。

大学生活への影響として、「一緒に学校の中で過ごす存在がいてよ

かった」と述べている。No12 の協力者は、質問紙調査 5 回目に参加しており、B は新友人としてその調査時点で選択されていた。

No13（現在 3.83 点・入学時 5.00 点）女性

一番親しい友人として小学校時代の旧友人（A）を選択している。A は他県の他大学に所属しており、会う回数は年に数回、インターネット上の会話なら、月に 5 回にくらいは付き合いがある。

新友人として、同学科で同サークルの友人（B）を選択している。共通友人としてサークル内の同学年 10 名程度を挙げているが、協力者にとっては仲間、知り合いという感覚である。協力者は「大学入学後一人で行動することが増えた」と報告している。そのため、B ともいつも一緒にいる関係ではなく、プライベートは一緒ではない。サークルは自由参加であるため、毎日活動している。1、2 年のころは B と一緒に参加していたが、3、4 年はサークルに行く機会が減って、一緒に参加という感じではない。B とはゼミも一緒であり、同じ授業があれば一緒に受けるが、プライベートはサークル内のイベント程度に一緒に参加する程度である。相談をするような関係ではなく、その時の状況とかを報告する程度の関係にとどまっている。

B の選択理由として「同じ学科で一番話す機会が多かったこと」を挙げているが、「大学内だけの友達」という意識がある。大学生活への影響として「授業を休んだ時にプリントを見せてもらえる。助かったと思う」と述べている。No13 の協力者は、質問紙調査 1・2・3・5 回目に参加しており、B は新友人として、3・5 回目で選択されていた。

No14（現在 4.00 点・入学時 4.83 点）女性

一番親しい友人として、他大学のアルバイト先の友人（A）を選択している。A とは、大学入学後に始めたアルバイト先で知り合っている。出会いから 1 年間はアルバイト先での付き合いのみだが、2 年目にその他のバイト仲間も含めてプライベートで遊ぶ機会も増えてきてきた。3 年生には、その他のバイト仲間が辞めたり、新たなバイト仲間が増えるなど変化もあったが、A との関係では、よりメールの頻度も増え、付き合いは深まった。大学 4 年時の現在が一番付き合い頻度が多くなり、一緒にプライベートの時間を共有するバイト仲間も固定された。A と協力者はアルバイト先では、新人を指導する立場であり、その指導や教育について話し合うこともある。A を選択した理由として、「信頼できる相手であり、大学 1 年生の時から一緒だし、お互い真面目で、仕事に対する態度、考え方が近いこと」を挙げている。

大学生活への影響として、「一番楽しいのがアルバイトであり、特

に大学生活の後半は、アルバイトでの責任が重くなった分、その苦労を分かち合ったという点が大きい」ことを述べている。No14 の協力者は、質問紙調査 1・3・4・5 回目に参加しており、全ての調査時点で A 以外の友人（別友人関係；同大学内）を選択していた。

No15（現在 4.17 点・入学時 5.00 点）女性

一番親しい友人として高校時代の旧友人（A）を選択している。現在他県の大学に在籍しているため、付き合い頻度は年に 2－3 回であるが、家族ぐるみの付き合いもある。

新友人として同学科内・同サークル内の友人（B）を選択している。学科内には共通の友人関係として 6 人のグループだが、オリエンテーション後すぐできた関係であり、授業を一緒に受ける関係になった。B とはサークルに一緒に入り、前期と夏休みは活発にサークル活動に参加しているが､協力者は 9 月にサークルを辞めている。2 年生になり、協力者は別に所属しているサークルに参加することが多くなり、学科内の友人との付き合いが減った。3 年生になり、友人関係では、個人個人の付き合いの方が多く、B とプライベートの話をすることが増えた。4 年生になると、学科のメンバーとは、授業が減ってきたので会えない状況があるが、会えなくなったからこそ、頑張って時間を作るという意識を持っている。B を選択した理由として「一番プライベートの時間が長いこと、他のメンバーに比べて､話の内容が深いということ一番気を許せる友人であること」を挙げている。

大学生活への影響として､「楽しく過ごせたこと､自分が辛かった時に助けてもらったし、協力しあえた関係は大切だった」と述べている。No15 の協力者は、質問紙調査全てに参加しており、一番親しい友人として、全ての調査時点で B 以外の友人（同グループ内）を選択していた。

No16（現在 4.17 点・入学時 3.83 点）女性

一番親しい友人として同学科内の新友人（A）を選択している。A とは学科のオリエンテーションで知り合い、授業を一緒に受ける関係になった。サークルには 2 人とも所属していない。学内での付き合いはあるが、土日や長期休みの交流はない。2 年生なり、土日一緒に出かけることもあったが、2 年時までは、二者関係であった。3 年生になり、同じゼミで知り合った友人ができたが、3 年時はゼミの中だけでの関係だった。A との関係では、実習先も同じ場所になり､一緒に通うこととなり､外で会う機会も増えた。4 年生になり、ゼミの中で知り合った友人との関係も加わり、3 人で遊ぶようになった。A を選択した理由として「一番会っている相手であり、自分

の悩みを言える存在」と述べているが、プライベートな相談は高校時代の友人にすることが多いと述べている。

大学生活への影響として、「就職のこと、学校生活の悩みを言える存在として影響があった」と述べている。No16 の協力者は、質問紙調査全てに参加しており、A は新友人として、全ての調査時点で選択されていた。

(3)-4-2　現在の適応感低群における親密化過程における全体的特徴

入学時の適応感の方が現在の適応感より高い協力者が 6 人中 4 名含まれている。現在と入学時の変動得点を算出したところ、その変動（一方向への変動）が大きい上位 5 名の中にこのメンバーが 4 名(No12・13・14・15)入っていた。

No11 ・16 は大学内で過ごす友人が、大学生活の前半まで、選択友人だけであり、学外の付き合いも少ない。また No12 ・13 は新友人との付き合いが非常薄い印象を受ける。特に現在（大学 4 年時）は共通する授業やサークルに参加することが少なくなり、それに伴い付き合いも薄くなっている。No15 は、これらの事例に比べるとグループの友人関係も選択友人との関係も充実している様子だが、1 年次に活動が頻繁だったサークルを辞めており、後半の学生生活は、個々の友人関係が多い様子である。

No14 は一番親しい友人を学内の友人から選択していない。大学生活の中心はアルバイトであり、アルバイトで築いた友人関係の影響の大きさを報告している。学内の友人とは違う存在として捉えており、大学適応感が高まらなかった可能性がある。

Table6-4-5.現在の適応感得点低群(5名)の特徴

ID	SEX	現在の適応感得点	入学時の適応感得点	新旧友人選択	親密化過程の類型	新友人の所属	居住	現役・浪人	調査1～5回目の友人選択との一致状況 調査1	調査2	調査3	調査4	調査5
11	女性	2.5	1.67	旧	Ⅶ:二者先行中心グループ関係変動型	同学科	親と同居	現役	○	○	○	○	○
12	女性	3.17	4.67	旧	Ⅱ:グループ関係維持型	同学科・同サークル	親と同居	現役	—	—	—	—	○
13	女性	3.83	5	旧	Ⅱ:グループ関係維持型	同学科・同サークル	親と同居	現役	×	×	○	—	○
14	女性	4	4.83	新	Ⅶ:二者先行中心グループ関係変動型	他大学・同アルバイト	親と同居	現役	×	×	×	×	×
15	女性	4.17	5	旧	Ⅲ:二者中心グループ関係維持型	同学科・同サークル	親と同居	浪人	×	—	×	×	×
16	女性	4.17	3.83	新	Ⅶ:二者先行中心グループ関係変動型	同学科	親と同居	現役	○	○	○	○	○

—は調査データなしを示す　○は、面接調査時に選択した人物と同人物を示す。　×は、面接調査時に選択した人物とは別人物を示す。

(3)-5　入学時の適応感低群上位 5 名における親密化過程の発話と適応感

入学時の適応感低群上位 5 名の親密化過程および大学生活への影響を述べた発話について抜粋し、記述したうえで、全体的特徴についてまとめていく(Table6-4-6 参照)。

(3)-5-1　入学時の適応感低群上位5名の個人発話

No11　（現在 2.50 点・入学時 1.67 点）女性

現在の適応感低群の個人発話で記述済みであるため、詳細を割愛する。

No17　（現在 4.33 点・入学時 1.67 点）女性

一番親しい友人として同学科内の新友人（A）を選択している。Aとは学科のオリエンテーションで知り合いすぐに意気投合した。協力者とAは、別の大学を希望していていたため、大学入学に対する不満足感があったことで共感し合っている。オリエンテーションで共通の友人グループ5名も形成されたが、1年時の学外の付き合いは頻繁ではない。サークルには5人で一緒に一緒に入っている。2年生になり、5人のグループのうち2人がグループから自然に離脱し、3人の関係になり、特にAと二者関係が増えた。Aとは2日離れたらさみしいという感覚であった。3年生になりAとの関係はさらに深まり、2人で旅行にも行った。2人とも資格取得の方向性が同じであり、2人だけの授業も増えてきた。就職活動もAさんと一緒に協力した。Aを選択した理由として「感じ方、考え方が一致していて特別な存在」として認知している。

大学生活への影響について、Aの存在の大きさを述べている。「大学に来たことにも納得できたのはAの存在があり、大学生活へ納得できるものになった」と述べている。No17の協力者は、質問紙調査全てに参加しており、Aは新友人として、全ての調査時点で選択されていた。

No18　（現在 5.33 点・入学時 2.17 点）女性

一番親しい友人として、高校時代の旧友人（A）を選択している。現在、同市内の他大学に在籍しているが、付き合いは続いている。4年生になって急激に付き合いが増え、月に2-3回会っている状況である。お互いに相談する関係であり親友であると述べている。

新友人として入学直前のオリエンテーションで知り合った同学科の友人（B）を選択している。入学後グループ関係もすぐに成立し、サークルにも一緒に入っている。しかし、1年生の時期は「授業を受ける友達であり、遊ぶほどの仲ではないとお互いが考えていた」と報告している。長期の休みになると、連絡を取らない関係でありどちらかといえば「仲良くない感じ」だと認知していた。2年生以降は新たな友人も加わり、新たなサークルにも参加するようになり仲が深まっていった。Bとの学外の付き合いも増えた。3年生の付き合いも頻繁で後期にはメンバーの一人がメーリングリストを作って、連絡を取っていた。就職活動は協力者だけが方向性が違うが、

友人グループに様々な面で助けられたと報告している。Bを選択した理由として、「自分と似ている部分があること」を述べている。

大学生活への影響について、「1年には大学を辞めたいと考えていたほどだったが、2年以降に入ったサークルがきっかけとなり、今となっては、いい仲間に出会えたと思えている」という、意識の変化を述べている。No18の協力者は、質問紙調査全てに参加しており、一番親しい友人として、全ての調査時点でB以外の友人（同グループ内）を選択していた。

No19 （現在 5.17 点・入学時 2.17 点）女性

一番親しい友人として同学科内の新友人（A）を選択している。Aとは、友達の紹介で、1年の4月に出会っているが、1年間は挨拶する程度の関係であった。2年生の夏休み以降に、Aと同じサークルに所属するようになり、Aが仲良くしていたグループとも親密になった。3年生の始めくらいに資格の講座を一緒に受けた時にさらにAとの関係が深まったことを認知した。就職活動でもAとはよく行動していた。就職活動が忙しくて、Aともたまたま会って話す感じの付き合いであったが、最近は少しずつ付き合いが戻りつつある。Aを選択した理由として、「学校の中で一番仲がよいこと、2年生から今までの生活で遊んだ頻度も、話した内容も、一緒にいると楽しい人も一番である」と述べている。

大学生活への影響として「Aとの付き合いがきっかけで、私の友人関係がすごく広くなった」と述べている。No19の協力者は、質問紙調査4回目に参加し、この時点ではA以外の友人（別友人関係）を選択していた。

No20 （現在 5.00 点・入学時 2.17 点）女性

一番親しい友人として同学科内の新友人（A）を選択している。Aとは大学入学時のオリエンテーションで知り合い、共通友人を含めて友人グループになった。Aと協力者は、大学受験に失敗し、大学入学に対する不満足感があったことで、同じ境遇の人間がいることで親近感を感じたと述べている。1年生の時は5人グループであったがグループ関係はあまり合わないと初期のころから感じていた。2年生になり、グループの中の2人が離脱し、新たな友人も加わるなどの変化を経験したが、Aとの関係は安定していた。3年生になり、Aとの付き合いに加えて、2年時から仲良くなった友人も加えた3人の組み合わせが増えた。4年になり、最終学年となったことでグループ関係の大切も感じているが、Aに対する特別な気持ちも持っている。Aを選択した理由として「一緒にいたということや家に泊まれるような関係はAだけである」と述べている。

大学生活への影響として「サークル、ゼミ、取る授業、友達がいるとそういうものが決まってくる」と述べており、「Aとは相談をして決めたことから全ての生活に関わっている」と述べている。No20の協力者は、質問紙調査全てに参加しており、Aは新友人として、全ての調査時点で選択されていた。

No21（現在 4.33 点・入学時 2.17 点）女性

一番親しい友人として、高校時代から参加している課外活動の旧友人Aを選択している。大学2年以降活動を一緒にすることで、仲が深まっている。他大学の友人であるが、活動を通した付き合いが頻繁である。

新友人として同学科の友人（B）を選択している。グループ関係もあるが、その関係ができたのは3年以降であり、1‐2年生時は大学内では、ほぼBとの二者関係である。1年生の時からBとのプライベートの付き合いはあった。2年時には旧友人との関係が中心であったため、Bとの付き合いは減った。3年以降、資格取得の関係で、協力者とBは別の授業が増え、それぞれ、授業を受ける友人ができ、そのつながりから、グループ関係に移行した。4年生になって、卒業旅行の話をしていく中で、4人の友人関係になったことを意識している。Bを選択した理由として「最初に大学で仲良くなり、ずっと一緒にいたこと」を述べている。

大学生活への影響として「最初は友達ができなくて、私は人見知りがひどく、なじめなかったこが、グループ関係に発展したことで大学が非常に楽しくなった」と述べている。質問紙調査全てに参加しており、Bは新友人として、全ての調査時点で選択されていた。

(3)-5-2　入学時の適応感低群における親密化過程における全体的特徴

入学時の適応感低群の全体的な特徴として、入学時の適応感が非常に低い状態から、現在では全員の適応感が高まってはいるが、平均点よりも低い値にとどまっている。入学時の友人関係の状況は様々だが、協力者それぞれが1年時には大学生活に関する不満足感や友人関係での不安感がうかがえる。

No17・20は、大学入学への不満足感があり、その境遇を共感できる友人ができたことで最終的には、大学生活に満足している。共感できる友人はできたものの、入学時の適応感を低く認知していた。

No18・19・21は、大学1年時の友人関係が成立していないまたは不満足であった状況がうかがえる。No18は1年次には大学を辞めたいほど悩んでいる様子であったが、サークル内の新たな友人関係を得て、最終的には大学生活が楽しいものになったこと、No19

は、1年時には顔見知り程度の関係が、2年生以降サークルでの出会いをきっかけに友人関係が広がったこと、No21は、3年時に授業で知り合った別の友人ができたことで、二者関係からグループ関係に移行し、友人関係を楽しむように変化していった。3例では、大学生活の中で、友人関係の変動を経験し、適応感がやや高まる結果になったことがうかがえる。

Table6－4－6.入学時の適応感得点低群（5名）の特徴

									調査1～5回目の友人選択との				
ID	SEX	現在の適応感得点	入学時の適応感得点	新旧友人選択	親密化過程の類型	新友人の所属	居住	現役･浪人	調査1	調査2	調査3	調査4	調査5
※重	女性	2.5	1.67						○	○	○	○	○
17	女性	4.33	1.67	新	Ⅴ:二者中心グループ関係変動型	同学科	親と同居	現役	○	○	○	○	○
18	女性	5.33	2.17	旧	Ⅴ:二者中心グループ関係変動型	同学科・同サクル	親と同居	現役	×	×	×	×	×
19	女性	5.17	2.17	新	Ⅲ:二者中心グループ関係維持型	同学科・同サクル	親と同居	現役	—	—	—	×	—
20	女性	5	2.17	新	Ⅴ:二者中心グループ関係変動型	同学科	一人暮らし	現役	○	○	○	○	○
21	女性	4.33	2.17	旧	Ⅶ:二者先行中心グループ関係変動型	同学科	親と同居	現役	○	○	○	○	○

—は調査データなしを示す　○は、面接調査時に選択した人物と同　×は、面接調査時に選択した人物とは

(4) 考察

本節では、大学適応感得点について特徴あるグループ群を抽出し、個人の発話データから親密化過程と大学生活に及ぼす影響における内容を抜粋し、適応感との関連について検討した。

入学時の適応感と現在への適応感の変動との関連では、全体的傾向として、現在の適応感高群（第1グループ）と入学時の適応感低群（第4グループ；No11を除く）は同じ傾向を示していた。すなわち、入学時の適応感が低く現在への適応感が高まっていた。第1グループと第4グループでは、その変動に差異があり、現在の適応感高群（第1グループ）は入学時から現在への適応感をより大きく変動させていた。第1・4グループにおいて、入学時の適応感が低く認知されていた要因を個人発話から検討すると大きく2つの要因が推定される。第1に入学時の状況である。このグループでは、浪人の経験や大学入学への不満感があることを報告しており、この状況が入学時の適応感を低く評定していた可能性がある。第2に友人関係に関する要因である。第1グループと第4グループでは、新友人関係が入学当初には不満足であるか、不安感を抱いている協力者が多い。また旧友人との関係の充実さを報告している協力者は新友人に対する入学当初の抵抗感を報告していた。すなわち、入学当初にできた新友人との関係に違和感や不安感があること、また旧友人の存在が入学後も協力者の中で非常に重要である場合には、新友人関係の活発な形成を抑制し入学時の適応感を低く評定する可能性がある。また現在の適応感を高めた要因としては、「入学当初に比べ、新友人関係の充実感を感じていること」、また「入学当初の関係以外の幅広い友人関係ができたこと」、「大学4年時の現在においても充

実した関係が継続していること」等が発話から抽出され、友人関係の親密化過程が大きく関わっている可能性を示した。

入学時の適応感高群（第 2 グループ）では、現在の適応感が若干入学時よりも低くなった協力者が存在する。しかしながら、その変動幅は非常に小さく、入学時の適応感が高い場合、大学 4 年時にはその高さを維持するグループ群が抽出された。入学時の適応感が高かった要因を個人発話から検討すると、「一人暮らしを始めた時に同じ境遇の友人が存在したこと」「旧友人が同大学内に在籍し入学時に付き合いがあったこと」「入学直後にすでに新友人関係が形成されに不安感がないこと」が挙げられた。また現在の適応感については、1 年時の活発の友人関係を報告しているため、4 年時の現在では、「付き合いがやや減少していること」を報告する協力者もいるが、その付き合いの減少が大きく現在の適応感を低下させる要因とはなっていない。また、このグループ群では大学時代の友人関係について「安定感・平和な関係」であると報告している協力者が多く、入学時に高い適応感を認知している場合には、その後の友人関係も安定しており、現段階に至るまで同程度の適応感を維持していた可能性がある。

現在の適応感低群（第 3 グループ）の入学時の適応感は幅広く評定されていた。このグループの特徴としては、入学時の適応感よりも現在の適応感が低く認知されている傾向がある。1 年時から 4 年時の親密化過程において、1 年時ではやや活発な友人関係の相互作用が確認されたが、他グループと比較すると、全般的に友人関係の希薄な付き合いを報告する協力者が多かった。また、4 年時で個々人の活動が忙しいことで付き合いが減っていることや一番親しい友人として大学以外の友人関係を選択する協力者もいた。この群の新友人関係の希薄さや大学以外での付き合いが現在の適応感を低めていた可能性がある。

本節では、適応感の特徴的な得点群から、その親密化過程および大学生活に関する発話を検討し、適応感に関わる要因を質的に検討した。各群 5 名ずつの検討であるため、全体的な要因として一般化することは難しいが、大学生の友人関係の親密化過程と特徴のある適応感の変動の関連を抽出できたものと考える。

第 5 節　研究 4 の考察

第 2 節から第 4 節で得られた結果から研究 4 の考察を行う。

第 2 節では大学生活の適応感に関する先行研究から幅広く適応感に関する項目を収集し、本研究で使用する項目を選定した。本研究では、7 つの先行研究（東・浅川・古川・吉田,2002；藤井,1998；古市・玉木,1994；亀岡,2006；大久保・青柳,2003；坂田・佐久田・奥田・川上,2007；植村・小川・吉田,2001）から各 3 項目計 21 項目を使用した。これらの項目の因子構造の検討、信頼性・妥当性の検討をした上で、6 項目を選定する手続きを行った。21 項目の因子構造の検討の結果、当初想定していた 7 領域が、4 つの因子（「大学生活に関する満足感」・「大学生活に関する抑うつ感」・「学習に対する適応感」・「対人関係の満足感」）に集約されたが、解釈可能性から妥当な構造が得られたものと考えられる。また、信頼性（α 係数）の検討では、因子別の検討では、低い値も見られたが、全 21 項目では、高い信頼性が得られたため、適応感を示す全体の構造としては、安定した項目であることが明らかになった。また GHQ28 項目との関連から、適応感 21 項目とは、弱いものの有意な関連が見られたことから、妥当性も確認された。これらの検討の上、因子負荷量が高く、幅広い内容が集約された 6 項目を選定し、本章で扱う適応感項目とした。項目の選定については、各因子の因子負荷量から選定していることの課題が存在するが、6 項目の信頼性は、第 2 節および第 3 節の検討で変わらない値（.70 以上）を得ることができた。第 2 節の目的であった、大学適応感に関する幅広い領域を収集し、集約した項目を選定する目的は達成された。

次に、第 3 章及び第 4 章で明らかにされてきた大学生の友人関係の様相と第 5 章の回想的調査面接から得られた親密化過程の様相が大学適応感に及ぼす影響を検討した。

適応感の測定について、佐久間・柴原・村上（2010）は適応のプロセスが直線的ではないため、1 時点の測定ではなく継時的な計測の必要性を指摘している。第 3 節で、1-2 年時の質問紙調査による友人に対する各評定と 4 年時の面接時に測定した適応感との関連を検討したが、入学時の適応感と 1-2 年時の友人の評定にはいくつかの関連が示されたものの、大学 1-2 年時の友人に対する評定は、現在の適応感と関連は示さなかった。また、第 4 節では適応感に特徴がある群の発話について質的な検討と 1-2 年時の友人選択状況を確認したが、入学時と現在の適応感の高低は必ずしも一番親しい友人の選択過程により説明できるものではなかった。すなわち大学 1-2 年時の友人関係では、大学生活の最終段階の適応感を予測できないことが示されたことから、大学生活の最終段階に至るまでの友人関係

と適応感の過程を検討することの重要性が明確となった。本研究では、大学4年時のみの測定であるが、友人関係の親密化過程を回想させる調査の後で「現在」「入学時」「友人関係で辛い時」「友人関係で充実した時」の回答を求めた。時点毎の回答ではないものの親密化過程の回想との関連の検討が目的であるため、適応感の変動を取り扱う意義が存在するものであった。

量的指標での検討として以下の3点について第3節で検討した。

第1に大学4年生の大学生にとって一番親しい友人が､「新友人」もしくは「旧友人」の選択による大学適応感の影響を検討した。その結果、全体的傾向として、新友人を選択した群の適応感が高かった。田口・盛・大谷（2004）は友人関係の満足度が高いことは学校で過ごす安堵感を高め、孤独感を低めることを示し、Paul & Brier(2001)は大学入学後もなお旧友人を強く思う感情は大学入学後の孤独感を高めることを指摘しているが、本研究の結果もこれら知見を支持するものである。つまり、大学4年時の友人選択でいまだ、旧友人が一番であると選択した協力者にとって、大学入学後に知り合った新友人との関係が約3年半以上の学生生活を共有しても、旧友人との関係を上回らなかった結果を示すものである。大学生活の中で、新友人の存在が一番と選択した群では、新友人との関係について旧友人と同等以上の満足感を持っており、その結果大学生活の適応感を高める結果となったものと考えられる。

第2に追跡的調査から一番親しい友人の選択の変容が大学適応感に及ぼす影響を検討した。その結果全体的傾向として、一番親しい友人が約3年半以上の大学生活の中で変更した群の適応感が高かった。一度も友人を変更しなかった群は、大学入学当初の友人に対する印象がよく､友人関係が安定し推移した関係性の初期分化現象(山中,1994他)である可能性と、入学当初に知り合った友人を上回る親しい友人が大学生活3年半の間で出現しなかった可能性が考えられる。一方で､少なくとも一度以上一番親しい友人を変化したことは、入学当初に知り合った友人よりも親しい友人が出現した可能性と友人関係が多く変動した可能性がある。つまり過程の様相と同様に、大学生活の中で多様な友人関係の経験が大学適応感を高める結果として示された。

第3に回想的調査面接で抽出された親密化過程の様相が大学適応感に及ぼす影響を検討した。その結果、全体的傾向として、過程の中で友人関係が変動する出来事を経験していることや、一番親しい友人との特別な行動を認知していることが大学適応感を高めていた。関係変動の出来事は、ポジティブな出来事だけではなく、友人関係内のトラブルや考え方や価値観の違いから友人関係の変化を経験したことが回想されるなど、協力者にとって辛い出来事も含まれてい

る。しかしながら、関係変動の経験は、どのような出来事であったとしても、友人関係内での相互作用を活発にさせることが推測される。Hays(1984,1985)らの親密化過程に関する要因の検討では、行動面や感情面の相互作用が重要であることを指摘しているが、本研究の結果から友人関係での活発な相互作用が結果として、大学の適応感を高める結果になったと示唆された。また一番親しい友人の個別行動の有無も大学適応感に影響を与える要因であった。友人関係は複数の対人関係で構成されるものであるが、複数で推移する関係の中で、一番の友人を「特別であること」、「親友であること」といったような認知や2人だけで共有される行動を有していることが適応感を高める結果を示した。つまり大学生の友人関係の親密化過程が大学適応感に及ぼす要因として、複数対人関係での経験の豊富さと重要な友人に対する二者関係の認知の両側面が影響することを明らかにした。

第4節では適応感を高める（低める）要因を質的な発話から検討した。適応感に特徴がある群として、①入学時の適応感低く、現在への適応感が高まるグループ、②入学時から適応感が高く現在も高い適応感を維持しているグループ、③現在の適応感の低いグループが抽出された。

入学時に適応感が低い場合の要因には、大学生活への不満足感と新友人関係への不安感や不満足感があるが､初期の適応感の低さは、その後の友人関係の親密化過程によって高まることがこのグループ群の特徴から確認された。この群の発話から、現在の友人関係について満足感が報告され、大学生の友人関係の親密化過程が大学生活の適応感に影響することを裏付けるものとなった。また入学時に適応感が高い群では、入学当初から友人関係に不安感がないことがその要因として抽出された。また、潜在曲線モデルの検討でも入学時の回想による適応感が1-2年時に測定した友人に対するポジティブな評定に影響を与えることを示したことから、入学時の適応感と友人関係形成との関連が示された。坂田ら（2007）・佐久田ら(2008)は、大学入学後のオリエンテーションの重要性を指摘しているが、本研究の結果においても入学時の適応感の高さは、現在への適応感を維持させていることから、教育現場において、入学初期の大学行事を充実させ学生同士を出会う場を提供することにより、大学生の適応感を維持させる結果をもたらす可能性がある。また、現在の適応感が低いグループでは、全体として友人関係の親密化過程の希薄さが特徴であった。新しく形成された友人関係の希薄さは現在の適応感を低めることが本研究の結果から明らかになった。以上の結果から、友人関係の親密化過程が大学生活への適応感に影響を与えることを明らかにする目的は達成された。

第 6 節　本章のまとめ

本章では、大学生の友人関係の親密化過程の様相が大学適応感に及ぼす影響を検討した。

大学適応感の測定に際し、協力者の回答の負担を考慮し、大学適応感を集約された項目で測定できるように項目の選定を行った。その結果、21 項目での信頼性と妥当性を確認し、大学適応感を測定する 6 項目を選定した。

次に、第 3 章および第 4 章で明らかにされた友人関係の追跡的検討と第 5 章の回想的調査面接による友人関係の親密化過程の様相が大学適応感に及ぼす影響を検討した。その結果、全体的傾向として、大学 4 年生の時点で新友人が協力者にとって一番親しい友人であると報告した大学生は、旧友人を選択した者よりも、大学適応感を高く評定していた。この結果は、大学入学後に親友と呼べる人物が、大学生活の中でできたことが、大学生活の適応感を高めることを示唆するものである。また、友人の選択状況の推移では、一番親しい友人を大学生活の中で変更する群の適応感が、一貫して同じ友人を選択した群の適応感よりも高かった。さらに、友人関係の親密化過程において、友人関係が変化する出来事があることや、一番親しい友人と他の友人との差異を認知する行動や経験の共有があることが、大学適応感を高めていた。これらの結果は、友人関係内の様々な経験の結果、友人関係が変動すること、さらに複数の友人で構成される友人関係の中でも、「一番親しいと選択した友人」が明確に意識できる行動や経験を学生生活の中で認知することが大学生の適応感を高める要因として寄与することを明らかにするものであった。また適応感の得点と友人関係の親密化過程の発話による検討では、入学時に安定した友人関係が形成されることが高い適応感を維持すること、また、入学時の適応感は低くとも友人関係の親密化過程により適応感を十分に高めることが可能であることが明らかになった。

本章の検討により大学生の友人関係の親密化過程は、大学生活への適応感に影響を与えることが明らかにされた。

註）

1) この研究の一部は「渡辺舞・今川民雄(2010).大学生の 4 年間の友人選択が大学適応感に及ぼす影響,日本グループダイナミックス学会第 57 回」で発表した。

2) この研究の一部は「渡辺舞・今川民雄(2010).大学生の友人関係の親密化過程が大学適応感に及ぼす影響，日本社会心理学会第 51 回

大会」で発表した。

[3]既存の尺度では、「大学」「学校」「学部」「学科」の表現にばらつきがあったため、全て「大学」という表現に統一した。（例：No4 学校に行くのが好きだ→大学に行くのが好きだ）

第 7 章
総括と今後の課題

第 1 節　総括

本論文では、大学新入生に対する追跡的研究(質問紙調査)と回想的調査面接による 2 つ方法によるアプローチから青年期の中でも大学生の同性友人関係の複数友人関係に注目した。本論文の目的は大学入学時の新旧友人関係を追跡すること、また新友人の親密化過程を明らかにし、親密化過程が大学生活の適応感に及ぼす影響を検討することであった。

目的を達成するために、第 3 章～第 6 章(研究 1～4)では、実証的な調査を実施し、その方法、結果、考察を述べてきた。本節では 4 つの研究で得られた知見を整理し、総括していく。

(1)　大学生の新旧友人関係に関する追跡的検討

友人関係の発達的変化を明らかにしてきた研究(榎本,1999・2000；落合・佐藤,1996)では、同一協力者による縦断的研究による検討必要性が指摘されてきたが、サンプル確保の難しさ、手続きの煩雑さから、多くの友人関係研究では、横断的調査が主流であった。また大学生入学時の友人関係研究では、新しく出会う友人関係の形成について和田(2001)は、大学入学後に新たに形成される友人関係は、その以前に築いてきた友人関係の在り方が反映することを指摘してきた。本研究では、複数対人関係で構成される友人関係を追跡する試みとして、第 3 章において、新旧友人関係を同時進行的に追跡し、両者の関係の比較、および両者が相互に影響する過程を検討した。

第 3 章第 2 節では、同一協力者に対し、大学入学当初から大学入学後に知り合った新友人との関係と入学前に知り合った旧友人との関係を約 1 年間、追跡的に検討した。手続きとして各調査時点において協力者には一番親しい友人を選択してもらった。したがって本章の追跡的検討の意義は、時間の推移にしたがって、協力者の「一番親しい」という基準で選択された友人に対する親密さをはじめとした内的な感情・認知面や行動面の推移が明らかにされることであった。この一連の検討によって大学生が新しい友人と出会い、親密化していく過程を明らかにすると同時に、入学前に知り合った旧友

人との関係も追跡することで同時点及び推移を直接的比較することを可能とした。新旧友人の大学入学後約1年間の追跡的調査では、全体として旧友人に対する安定した親密さや関係認知、ポジティブな感情を確認した。その一方で、新友人に対しては、時間の経過とともに親密さ、深さや対等性の関係認知が高まり、親和的行動や主張的行動の頻度が増すという過程を明らかにした。5回の調査時点の推移と新旧友人に対する双方向の影響を探索的に検討した結果、付き合いの長い旧友人に対する評定が新友人に影響する側面だけでなく、新友人の評定が旧友人の評定に影響する側面が存在すること明らかにした。この結果は旧友人のあり方が新友人に反映される(和田,2001)だけではなく、双方に影響し合う関係であることを明らかにした。またその影響力はいずれの方向においても正の値を示していたことから、大学生の全体としての友人関係が充実するためには、新旧友人関係の双方が良好であることが重要である。

第3章第3節では、友人関係期待の比較から、新旧友人へのそれぞれの期待があることが示した。つまり、新旧友人の差異はその付き合い期間に応じた親しさのレベルの差異という観点だけではなく、それぞれ友人に対する期待や機能の認知構造にも差異があることを明らかにした。また、第5章第4節の大学4年時の調査時おいても約44%の協力者が、「一番親しい友人」として旧友人を選択していた。すなわち、大学生にとっての旧友人は、大学生活全般において、安定した重要な存在であることを実証した。新しく形成される友人関係の形成を検討する際に、旧友人との関係を同時に検討することの意義を提供した。

(2) 新友人の友人選択過程の追跡的検討

友人関係の親密化過程の研究(山中,1994ら)では、同一協力者と対象となる友人1名との関係を追跡的に検討することでその様相を明らかにしてきた。複数との友人で形成される友人関係の特徴を鑑みると親密化過程で、初期に選択した友人よりも親しくなる友人が出現する可能性が予測された。追跡的研究の中でこの検討課題を解決するために、本研究では各調査時点で対象となる友人を固定せず、「一番親しい新旧友人(各1名)」を毎回選択してもらう手続きを採用し、その選択過程を追跡し、また友人選択が親密さをはじめとした感情・認知・行動の各側面に及ぼす影響を検討した。

第4章第2節では、複数の対人関係の中から一番親しい友人が選択されている様相を捉えるために、新友人について、5回の調査時点で一番親しい友人を選択してもらう手続きによりその推移を検討した。初期に一番親しいと選択した新友人を一貫して、選択する協

力者が 25%程度存在し、第 4 章第 4 節の大学 4 年時の面接調査時点での検討でも約 23%の協力者が、大学 1 年・2 年・4 年の 3 回の調査時点で同じ友人を選択していた。これらの結果は山中(1994)らの指摘する関係の初期分化の存在を確認するのであるが、各評定の推移を検討した結果では、必ずしも、初期の印象の良さがその後の印象の良さを維持しているという結果が得られなかった。すなわち、同じ友人を変わらず選択することの意味には、初期分化現象による場合と最初に選択した友人以外に親しい友人が出現しなかったための場合の両方の選択が存在する可能性を明らかにした。またその一方で大学 1 年間の追跡的調査では少なくとも 1 回以上友人の選択が変化する協力者が約 75%存在した。この結果は、友人を各調査時点で一番親しい友人を選択してもらう手続きにより、親密化過程には初期分化現象または段階理論では明らかされてこなかった過程が存在することを示すものである。また友人選択は複数友人関係の中で友人が選択されていることを確認するものであった。さらに入学半年～入学 1 年後の友人選択においても、いまだ約 43%の協力者が友人を変更させている結果から、親密化過程研究において、長期的な追跡の必要性を明らかにするとともに、二者の友人関係を追跡するだけではなく、複数の対人関係を含め、友人がどのように選択され、親しくなっていくかの詳細を追跡する視点の意義を提供した。また、本論文で使用した各友人との関係性や友人に対する評定が友人選択に寄与する変数の検討(第 4 章第 3 節)では、判別率の推移について 1-2 回目調査時点では、約 68%だったが、4-5 回目調査時点では約 84%まで上昇し、時間の経過に従い本研究で採用した多く変数が友人選択に寄与する要因となり、判別に寄与することが明らかになった。この結果は、入学してから間もない段階での友人選択は、協力者の中で使用した指標の基準の中では行われていない可能性がある。また、入学半年後から入学 1 年後の友人選択では、それら指標がある程度、友人選択に関わる指標として寄与し、協力者の中でその友人個人に対する評定として分化されたものと考える。

また先に述べたように、親密化過程研究では、長期的な追跡的検討必要性が指摘されてきた。第 4 章第 4 節の協力者は、質問紙による追跡的調査に少なくとも 1 回以上参加した協力者である。したがって、大学 1 年時の 4 回の質問紙調査、大学 2 年時の 1 回の質問紙調査、大学 4 年時の面接の調査の約 3 年半の追跡的調査を実現した。「一番親しい友人」の選択の変容について、この回想的調査面接による質的データと質問紙による量的な追跡的データによる統合的な検討を行った。第 4 章第 4 節では「一番親しい友人」の変容の様相を明らかにするために、質問紙調査の中で記入した一番親しい友人のイニシャルについて大学 4 年生の面接時にイニシャルを確認させることで

実現した。その結果、大学3年半で一貫して同じ友人が一番親しいと報告した協力者は、23%程度であり、残りの協力者が、一番親しい友人が変化したことを報告した。この変化は大学1年時の初期の時期だけでなく、大学生活の後半においても起こることが確認されたことから、大学生の親密化過程の検討では、学生生活の大半を追跡する視点が重要である。また大学生の友人関係では、単に複数の友人関係が存在しているという事実だけではなく、大学生が複数の友人グループ関係に所属しその中で友人が選択されていた。これらの過程の抽出は面接調査の手続きと質問紙による追跡的調査の統合的検討により実現されたものであった。また、「一番親しい友人」の選択の変容を追跡することで、大学生が持つ友人関係ネットワークの多様性が確認された。

(3) 回想的調査面接による大学生の友人関係の親密化過程

複数の友人で形成される友人関係の特徴を親密化過程研究においても抽出する必要性、また第4章において明らかにされた初期に選択した友人よりも親しくなる友人が出現する結果を踏まえると、同一協力者に対する追跡的な質問紙調査だけでは、その詳細が明らかにされないという課題が残された。その課題を解決するために、第5章では、回想的調査面接の導入を試みた。回想的調査面接とは、「①協力者が選択した一番親しい同性友人について、出会いから現在の状況を、時間の推移に従い、友人関係における出来事を回想させる方法。②この際、選択友人と協力者を含む共通友人が確認された場合には、選択した友人との関係に加え、共通友人との関係も回想させる方法」であると定義し、その手続きと適用を検討した。この目的を達成するために3つのステップに分けてその有効性を検討した。

第1ステップは、上記の定義に従い、第5章第2節において、協力者にとって一番親しい友人を選択させ、その親密化過程を抽出する質問項目の選定を行った。この際、協力者と選択友人の共通する友人関係が存在するかを確認し、その複数の友人関係をも含めた親密化過程を抽出する手続きと質問項目を選定した。

第2ステップでは、第1ステップで検討した手続きにより、回想的調査面接から抽出された親密化過程の類型化を試みた。第5章第3節(1)では、親密化過程の分類について、①共通友人の有無、②選択友人と共通友人の関係スタート時期の差異、③選択友人及び共通友人との関係変化をもたらした出来事の有無、④グループ関係成立後における選択友人とだけの経験・行動の共有の有無の4点をチェック

項目とし、7 類型を確定させた。類型化の結果、多くの場合、複数の友人関係で構成されることを確認し、その共通する友人グループの存在にも注目しつつ、一番親しい友人との親密化過程においてどのような出来事を経験し、関係が形成される過程を明らかにすることを可能とした。しかしながら、分析事例が 31 事例のみであり、少数だったため、その適用に研究対象を拡大する課題が残された。

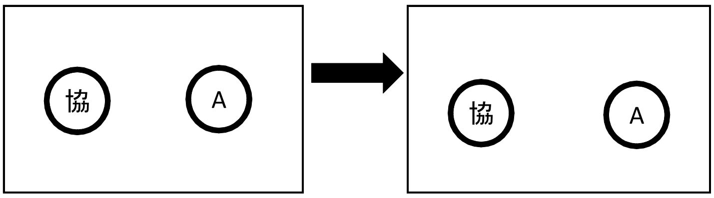
第 3 ステップでは、第 2 ステップで検討した類型化を第 5 章第 4 節において適用し、この手続きの有効性を検討した。第 2 ステップで課題となった研究対象の拡大も目的とし、104 名の協力者による発話を適用すること実現させた。その結果、回想的調査面接で得られた友人関係の親密化過程のほとんどが、選択された友人との二者関係で推移しているわけではなく、共通する複数の友人関係の中で親密化している様相を捉えることを可能とした。また、友人関係が変動する出来事の有無や、親密化過程で「一番親しい友人」との特別な関係が認知の確認により、親密化過程の類型化（7 類型）を実現した(Table7-1-1 参照)。この類型の意義は、大学生の友人関係は、二者関係を追跡的に調査する方法や、一時点の親密段階を基準にその様相を調査する方法では抽出が不可能な親密化過程が明らかにしたことである。また、104 事例中 4 事例のみで、その過程が二者関係だけで推移していたが、96％は共通友人が存在したことから、複数対人関係による親密化過程を研究する意義は実証された。これらの判定については、複数人数による独立した判定の中で検討することで、一定の一致した結果が得られることが確認されたことから、類型化はある程度客観的な基準の中で判定可能であることが示された。

本論文の目的である複数の対人関係を研究対象とした友人関係の親密化過程の詳細を明らかにする目的は達成された。

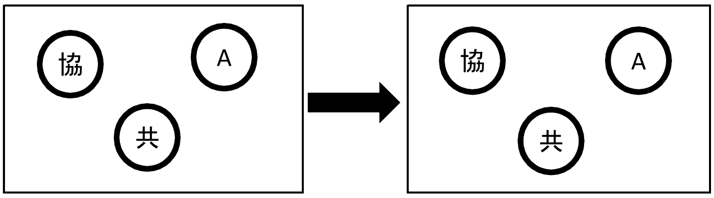
Table7-1-1.回想的調査面接で得られた親密化過程パターン

類型名　関係始まり　過程　現在

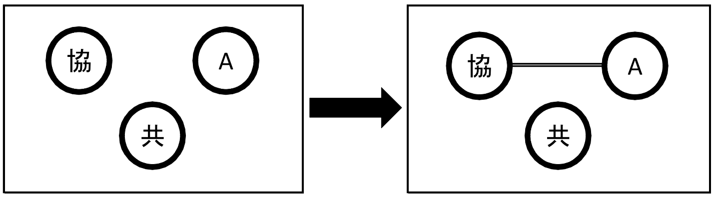
Ⅰ　二者関係専心型



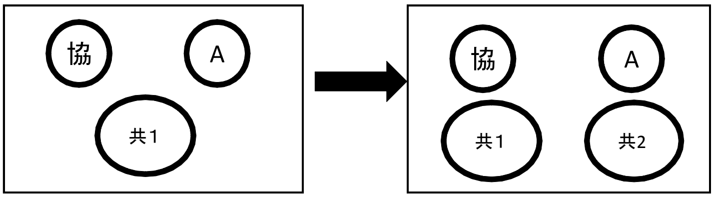
Ⅱ　グループ関係維持型



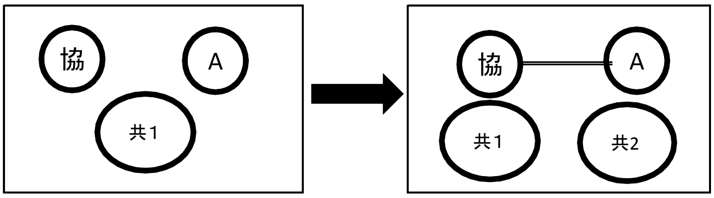
Ⅲ　二者中心グループ関係維持型



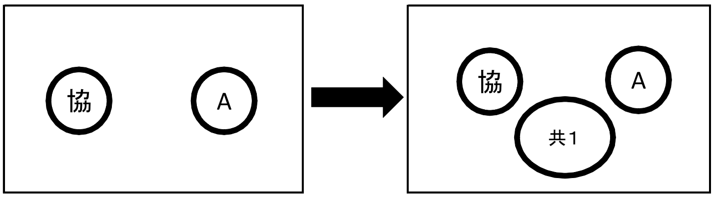
Ⅳ　グループ関係変動型



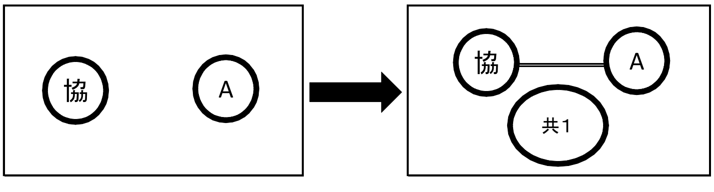
Ⅴ　二者中心グループ関係変動型



Ⅵ　二者先行グループ関係変動型



Ⅶ　二者先行中心グループ関係変動型



註1）関係変動については、最も単純なパターンで示した。変動には、「グループ関係の分裂」等様々なパターンが存在する。各事例では変動が複数回確認されう場合もある。

註2）═══は、二者関係に個別の行動・経験を有することを示す。

(4) 大学生の友人関係における親密化過程の様相が大学生活の適応感に及ぼす影響

近年大学生の不適応が、大きな問題となり、大学生活の適応感に対する関心は学校現場において高まっている。また大学生の悩みに関する調査(小塩・桐山・願興,2006；高井,2008)では、全体の 2 割から 3 割が、友人関係の悩みを報告していることを明らかにした。また、大学生活の適応については大学入学当初にとどまらず、学生生活全体における検討必要性が指摘されてきた。また、大学生の友人関係が大学適応感に影響を与える知見が明らかにされていることから、友人関係の親密化過程と適応感の関連を検討する視点が重要となると考えられた。第 5 章第 4 節の協力者(104 名)に回想調査的面接終了後に大学適応感の質問紙調査にも回答してもらうことで、大学生の親密化過程と適応感との関連が明らかにされることが期待された。

第 1 に適応感に関する質問紙調査について、協力者の回答に対する負担を極力減らす必要があった。また本論文では東・浅川・古川・吉田(2002)の「大学生の大学という環境が心理的調和にあって大学からの要請への適合と大学生の欲求や自発的・創造的な行動が、ともに実現される均衡状態」の定義を採用したが、この定義を網羅する項目を選定する必要があった。以上の検討課題を踏まえて、第 6 章第 2 節では、大学適応感の測定について、回答の負担を考慮し、大学適応感を集約された項目を選定することを目的とした。そのため、予備調査を実施し、先行研究から収集した 21 項目での信頼性と妥当性を確認した上で、大学適応感を測定する 6 項目を選定した。

第 2 に、第 3 章～第 5 章で明らかにされた友人関係の追跡的検討と回想的調査面接による友人関係の親密化過程の様相が大学適応感に及ぼす影響を検討した。第 6 章第 3 節の結果、全体的傾向として、大学 4 年生の時点で新友人が協力者にとって一番親しい友人であると報告した群は、旧友人を選択した群よりも、大学適応感を高く評定していた。つまり、大学入学後に親友と呼べる人物が、大学入学以後の生活の中でできたことが、大学生活の適応感を高めることを明らかにした。Paul & Brier(2001)が指摘する大学入学後もなお旧友人を強く思う感情は大学入学後の孤独感を高めるという先行研究と本論文の結果は一致しているものであり、大学生の適応感について、新しい友人の存在の重要性を確認した。

また、友人関係の親密化過程において、友人関係が変動する出来事があることや、一番親しい友人と他の友人との差異を認知する行動や経験の共有があることは、大学適応感を高めていた。さらに、一番親しい友人の選択状況の推移では、友人が大学生活の中で変化

する群の適応感が一度も友人を変化させなかった群の適応感よりも高かった。これらの結果から、友人関係内において様々な出来事を経験し、より親しい友人が出現すること、さらに複数の友人で構成される友人関係の中でも、「一番親しい」と選択した友人との行動や経験を学生生活の中で認知することが大学生の適応感を高める要因として寄与することを明らかにした。また第6章第4節では、大学入学適応感の特徴ある群の発話から、大学適応感に関わる要因を親密化過程の質的なデータから検討した。この結果、入学時の適応感の低さには、「大学入学時および友人関係の不満足感・不安感」の要因があるが、大学生活の中で、友人関係が充実することで、その適応感を高めることが可能であることを示した。さらに、入学時の適応感が高いことは、その後の友人関係を「安定・平和」であると評価し、高い適応感を維持することが可能であった。また、4年時の適応感が低い群では、全般的に大学内の友人関係の希薄さが報告された。

これらの結果から、第1に入学時のオリエンテーションといった友人関係作りのイベントやきっかけが重要であること、第2に入学時の適応感が低くとも、大学生の友人関係の親密化過程が適応感を高める要因として寄与することを示唆した。

回想的調査面接による親密化過程に関する調査および約4年間における追跡的調査と大学適応感の関連では、大学生の友人関係のあり方が、大学生活の適応感に影響することを明らかにした。大学生活の適応について、初期の様相にとどまらず、4年間における過程を縦断的に検討する必要性が指摘されてきたが（安藤・廣岡・小川・坂本・吉田,2001；吉田・橋本・安藤・植村,1999）、本論文で明らかにされた友人関係の親密化過程と大学適応感に関する関連が明らかにされたことから、この指摘を支持し、教育現場において大学生活全般で友人関係と適応感を捉える視点の重要性を提示した。

第2節　本論文の意義

第1節では、各研究で明らかにされた結果を踏まえ、本論文で得られた知見の整理と結論をまとめてきた。本節では、本論文の意義について、論じる。

複数対人関係で構成される友人関係の親密化過程の抽出

友人関係の親密化過程研究に複数の友人関係の中で捉える視点を提案し、実証したことに本論文の意義が存在する。従来の友人関係研究や親密化過程研究では、1時点における友人関係全般または1

名の特定友人に関する様相を明らかにする視点や 1 名の対象者に注目し、二者関係の友人関係を時間的推移に従って追跡する視点が主流であった。本論文では、質問紙調査において追跡的検討の中で、友人を固定せず、「一番親しい友人」を各時点で選択してもらう手続きにより、友人選択の変容を抽出することを可能とした。また回想的調査面接では、「一番親しい友人」を選択し、親密化過程を回想してもらう際に、協力者と選択した友人を含む共通の友人関係の有無を確認した。複数友人関係が確認された場合には、複数の友人関係のエピソードも回想してもらった。その結果、多くの大学生が複数友人関係との付き合いを報告し、また 1 つのネットワークにとどまらない多様な友人関係ネットワークの存在が確認された。複数の対人関係で構成される友人関係のありようを実証的に明らかにすることを可能とした。

量的データと質的データの統合的アプローチ

複数の友人関係の相互作用の中で、友人関係の親密化過程を捉える試みとして、回想的調査面接の手法を採用したことに本論文の意義が存在する。面接調査は、その手続きや分析の煩雑さがあり、またサンプル数の確保の問題から得られたデータの一般化の難しさがあるため、これまで、友人関係研究や親密化過程研究でも採用されることは少なかった。しかしながら、友人関係の親密化過程研究において、量的データによる追跡的検討のみでは、網羅しきれない過程があることを鑑みると、質的データでの検討が必要不可欠であると考えられた。本論文では、大学 4 年生 104 名に回想的調査面接を実施し、ある程度のサンプル数を確保した。また、親密化過程の類型化に際し、複数人数による判定を導入し、ある程度の一致した結果が得られたことを確認した。回想的調査面接が、研究手法と有効であることを示した。さらに、追跡的な質問紙調査におけるデータと回想的調査面接によるデータについて、同一協力者による協力をお願いすることで、大学入学当初からの約 3 年半以上の大学生活をほぼ網羅する過程を捉えることを可能とした。大学 4 年時の回想的調査面接終了後に、大学 1-2 年時の質問紙調査で、選択した友人のイニシャルを確認してもらうことで、友人選択の変容過程を確認するだけでなく、協力者と選択友人の関係に関するエピソード、面接調査で抽出された友人関係のとの関連等を確認し、大学生が所属する多様な友人関係を明らかにすることを可能とした。これらの結果は、量的な追跡的調査と質的な面接調査との統合的検討により実現したものであり、追跡的検討の中でも、2 つのアプローチによる検討を行うことの意義を示すことができた。

複数友人関係の親密化過程と適応感の関連に関する視点

これまで、多くの先行研究で、友人関係と適応感の密接な関連が明らかにされてきた。本研究で明らかにされた親密化過程は、1 時点の友人関係や特定の友人に対する過程ではなく、大学生が持つ複数の友人関係のプロセスであり、このプロセスと適応感の関連を検討可能としたことに本論文の意義が存在する。

友人関係の親密化過程は、資格・授業の選択、サークル・部活への参加、就職活動といった学校内での出来事を共有する中で変容していた。また、複数対人関係で構成されているだけでなく、複数の友人ネットワークを有していることも明らかにされ、全体としての友人関係での過程が適応感に関連していた。特に大学 4 年間の友人関係の親密化過程で、友人関係が変動する出来事を経験することや、初期に出現した人物よりも印象の良い親友ができるという経験が、全体としての適応感を高めていた結果を得たことは、複数対人関係が大学適応感に及ぼす影響を明らかにする本研究の目的を達成した。

大学生が抱える適応の維持・促進は大学にとっても重要な課題であり、積極的な予防的アプローチや心理教育プログラムを導入する試みが増加している現状を鑑みると、大学生における友人関係の親密化過程を学生生活全般の中で捉え、また学校内のカリキュラム・学生生活の時間的変容との関連を明らかにしたことは、青年期の友人関係の重要性と大学生の大学適応感を促進し、不適応の予防につながることを示す有用な視点を提供した。

第 3 節　今後の課題

第 1 節および第 2 節では、本論文で得られた知見整理し本論文の意義を概観した。本節では、本論文での検討できなかった点をまとめたうえで、今後検討するべき課題について述べる。

性差の検討

本論文の対象者は、大学生であった。青年期の友人関係ではその友人関係の付き合い方に性差が存在することが様々な研究から明らかになっている。和田(1993)によると、大学生を対象とした調査の中で、友人関係の中で友人に望むものには性を指摘し、社会で過ごす社会で適切とされる役割期待、例えば男性では達成、競争、独立が、女性では暖かさ、親密感、表情の豊かさが求められていることを指摘した。榎本（1999・2000）も、感情的側面や欲求面に性差があることを指摘した。さらに、中村（1999）は、欧米や本邦での先行研究から同性の友人関係にみられる性差の特徴を概観し、1）女

性では互いの価値の類似性が、男性では興味関心のある事柄や行動に対する類似性が友情形成において重要な意味を持っていること、２）友人間で交わされる会話の内容に関して、女性は対人関係にまつわる情緒的話題を、男性では趣味など活動にまつわる話題を重視すること、３）感情の表現について女性は男性に比べて肯定的・否定的にかかわらず感情を表現しやすいこと、４）対人サポートについて女性が男性よりも友人に対して悩みを聞く、励ますなどの情緒的サポートを多く行うことの 4 点に整理している。すなわち、本論文で明らかにした友人関係の親密化過程の様相にも性差が存在する可能性がある。本論文では、男性の調査協力者が少なく、この点についての検討が不可能であった。今後は、性差に焦点を絞り、過程を比較し、その差異を明らかにする視点が望まれる。

研究対象者の範囲拡大

本論文の対象者は、同一大学内における同一学部内の協力者による検討であった。本論文で明らかにされた友人関係の親密化過程は、大学内の友人を選択した者が大半であり、その過程では、大学内で実施されているオリエンテーションから、資格や将来の志向性に関わる授業選択、さらに大学 4 年時の卒業論文への取り組みに至るまで、大学生活全般がその過程に強く関わっていた。その過程での友人関係との経験の共有が友人関係の親密化過程に密接に関連しており、その結果、大学生の大学適応感に影響を及ぼすことを示した。これらの結果を鑑みると、サンプルの代表性の問題が残される。たとえば、本論文の協力者 115 名中（第 3 章分析対象者）、親と同居している協力者が 84 名であった。すなわち、地元での進学者が 73%占めているという特徴がある。第 3 章では、旧友人に対する安定した高い親密さが継続している結果を示したが、この結果についても居住状況が影響する可能性もあり、今後は他大学や別の地域による追加的な検討が望まれる。また、本論文の協力者が所属する学部では、資格の取得、就職の方向性（一般就職・専門職への就職）で、カリキュラムが大きく変わり、その選択が友人関係の親密化過程に大きく影響していた。学部の特徴が過程に影響する可能性があるため、今後の検討では、同大学内においても他学部を含めた対象を検討する視点が求められる。大学の特色や学部の特徴を踏まえた上で、大学生の友人関係の親密化過程を明らかにすることで、教育現場での大学適応感の促進や不適応の予期的予防に貢献できるものと考える。

質的データの多角的な検討

本論文では友人関係の親密化過程を明らかにする方法として、回

想的調査面接の適用を試みた。本章第 2 節では、この手続きの有効性と意義を述べてきたが、面接調査で抽出された発話について、質的データの多角的な分析方法については、課題が残されている。親密化過程の面接所要時間は、平均で 40 分であり、そのデータ量は膨大なものであった。本論文では、面接調査で得られた発話から逐語録を作成、さらに逐語から親密化過程に関連する逐語を抜粋し、その類型化を達成した。しかしながら本論文では、内容的な質的な検討が残されている。たとえば、類型化に際し、「友人関係が変動する出来事」の有無を抽出し、判定に使用したが、その内容についての質的な検討はなされていない。関係の変動のエピソードについては、授業の選択やサークル・部活内の行事、また友人関係内でのトラブル、恋愛関係等幅広く、多岐にわたる内容であった。これらの質的な内容の特徴を取り扱うことで、質的データの長所である現実に密着したいきいきとした様相をより詳細に明らかにすることが可能となると考える。質的な研究は、今後も注目される手法となりうるだろうが、いかに客観的な視点の中で質的データを扱い、データを生かしていけるのかが今後の課題となるであろう。

回想的調査面接の手続きの精緻化

質的研究では、常に協力者数の確保やその分析方法の煩雑さ、また結果における一般化や理論化の難しさという問題点を抱えている。今後の課題として、様々な研究分野で応用できるように、この手続きを精緻化し、その適用可能性を広げていく必要がある。本論文では調査協力者に対しても、研究に対する同意、研究の趣旨説明、面接調査、質問紙調査の一連の調査には、約 45 分から 90 分の時間的負担をお願いすることとなった。またデータ分析に際し、面接の録音、逐語録の作成、逐語録から親密化の分類に使用するマトリクスの作成という 3 段階の手続きを経た。これらの作業量は膨大なものであり、相当の時間を要するものであった。今後の課題として、第 1 に、協力者の負担を軽減するために調査の手続きの簡略化の可能性を検証すること、第 2 に、データの分析について、その分析方法の再検討と簡略化を検証することで様々な研究に応用可能な手続きと解析方法の精緻化が必要となる。

回想法による弊害と課題

本研究では、面接調査で友人との出会いの状況から、現在に至るまで協力者の回想に依存していた。回想に関する面接調査中は、実験者である著者がその回答を誘導しないように、質問項目は設けず、できるだけ協力者の自発的な発話を基調とした。しかしながら、回想における記憶の曖昧さや歪みがあることは否定できない。これら

の記憶の問題を確認できるような手続きも加えることも課題となる。また、この弊害を解消する一つの方法として、ペアデータによる回想データを扱い回想の歪みを検討することも今後の課題となるであろう。また本研究で分析に使用した適応感についても、「現在」を除く「入学時」・「辛かった時」・「充実していた時」の 3 時点については、回想による回答であったため、適応感の測定については、各時点での測定が望まれる。

第８章
要約

第１節　要約

(1)　青年期の友人関係における親密化過程研究の理論的背景

本論文の目的は、これまで主として明らかにされてきた二者関係の友人関係の親密化過程研究にについて、複数の対人関係で構成される友人関係の特徴を実証的に検討する手法を導入し、新たな視点における親密化過程を明らかにすることである。また大学生を対象とすることで、近年大学教育現場においても関心が高まっている大学適応感との関連を明らかにすることである。

第１章では、本論文の目的を達成するために、青年期にとって重要な対人関係の一つである友人関係の特徴､友人関係の親密化過程、さらに友人関係が適応感に及ぼす影響を明らかにした先行研究を概観した。

第１に､青年にとって重要な意味を持つ友人関係がどのように形成・維持されるかが重要であり、また友人との様々な相互作用の中で社会の中で生きていくルールを身につけ、自己の成長に寄与していることを先行研究(松井,1990 他)から示した。また、大学生の友人関係は大学入学という大きな環境変化が存在するため、友人関係のあり方が、大きく変化すること、また、友人関係研究では、関係の様相のみに注目するのではなく、大学生にとって生活の基盤となる大学進学時の生活状況や学校カリキュラム、入学以前の友人関係（和田,2001）も考慮する必要があることを確認した。

第２に､親密化過程における先行研究では､段階理論(下斗米,1990 他)や関係性の初期分化現象(山中,1994 他)の理論に基づき、主として二者関係の友人関係における過程の様相が明らかにされてきたことを概観した。新たに検討するべき視点として、２者択一的な議論よりも、両者の視点をそれぞれ取り入れつつ、友人関係の親密化過程を捉える研究の必要があると考える。また、入学以前に構築されていた友人関係が新しい友人関係に与える影響も考えられる。これらの観点から友人関係の親密化過程を検討する際には、留意すべき点がいくつか存在すると考える。第１に先述のとおり、友人関係の特徴である二者関係にとどまらない複数の対人関係を考慮する必要がある。例えば、初期の対象人物よりも好意を持てる人物の登場の可能性や先行の友人関係が新しく形成する後続の友人関係に及ぼす

影響の可能性を考慮しつつ、複数の友人関係を抽出し、中村（1989）・山中（1994）の実施したような実際の時間的推移を考慮した追跡的調査の方法は必要不可欠であろうと考える。第 2 にこれまでの友人関係研究および親密化過程研究における知見は、主に質問紙法による量的アプローチによってあきらかにされてきた。しかしながら質的アプローチも有用であることが指摘されていることから（やまだ,2004）、複数の対人関係をダイナミクスに捉える視点、時間的プロセスを考慮した上で､親密化過程を明らかにするために、量的アプローチと質的アプローチを組み合わせた試みの必要がある。

第 3 に、学校適応感に関する研究では、近年大学生の適応・不適応が、大きな問題となっており、大学生活の適応について、初期の様相にとどまらず、4 年間における過程を縦断的に検討する必要性が指摘されてきた（安藤・廣岡・小川・坂本・吉田,2001；吉田・橋本・安藤・植村,1999）。また、友人関係が大学適応感に影響を与える知見が明らかにされていることから、親密化過程と適応感の関連を検討する視点が重要となる。大学適応感についても、親密化過程同様に一時点の様相では、大学生活の一部分の適応感しか捉えられない。すなわち、大学生活全般の過程として捉え、本論文で明らかにされる親密化過程との関連を検討することで、教育・学校現場への有益な提言が可能となると考える。

(2)　本論文の目的・構成

第 2 章では、本論文の全体像について述べた。

第 1 に問題の所在として、現実場面の生き生きとした青年期の友人関係を明らかにするために、これまで検討されることが少なかった複数友人関係を研究対象とし、その親密化過程を検討する視点が必要であること、また、大学生活全般に渡る青年期の友人関係と大学生活への適応感を明らかにする視点が必要であることを指摘した。

本論文の目的は以下の 2 点であった。第 1 に、大学生の友人関係の親密化過程を複数の友人関係の過程として捉え、長期的な追跡的研究から既存の二者関係における親密化過程理論に囚われない過程を明らかにすることである。第 2 に第 1 の目的で明らかにされる複数友人関係で構成される親密化過程が、大学生活の適応感に及ぼす影響を明らかにすることである。上記の 2 点の目的を実証的に検討するために、本論文では、大学入学時から大学入学 1 年後までの 5 回の追跡的な質問紙調査、手法の確立を含めた 3 回の面接調査、学校の適応感の項目の収集と測定における 2 回の質問紙調査を行った。実証的検討として、第 1 の目的は第 3・4・5 章で、第 2 の目的は、第 3 章～5 章の結果を受け、第 6 章で明らかにされることを説明し

た。

(3) 研究 1 大学生の新旧友人関係に関する追跡的研究

第 3 章(研究 1)では、友人関係が複数対人関係で構成されることの背景の一つとして、大学入学する前の友人関係（旧友人）と大学に入学後に知り合った友人関係（新友人）が同時期に存在していることに注目し、入学当初から、両者の関係を追跡的に比較検討することから、大学生活での両者の関係の推移を明らかにすることを目的とした。

結果として明らかになったことは以下の通りである。大学入学という進学によって新友人関係がスタートする中で、少なくとも入学後約 1 年間は旧友人の存在は安定的かつ親密なものであり、また新友人とは異なる関係期待がある相手として大学生の友人関係で存在していることが明らかになった。また新友人の存在は、1 年間で旧友人を上回るような関係には発展しないが、ポジティブな認知や行動が増加する推移を明らかにした。また両者への親密度・感情・認知・行動は、一方が他方に影響するだけでなく、互いに影響しあうことを明らかにした。

(4) 研究 2 大学生の一番親しい友人選択に関する追跡的研究

第 4 章(研究 2)では、大学生における友人関係の親密化過程について、二者関係の過程のみならず、複数で構成される友人関係の過程を抽出する必要があることを確認するために、「一番親しい友人」が大学 4 年間の中で、どのように選択されていくのかの過程（「友人選択」と定義し、以下で使用）を明らかにすることを目的とした。また一番親しい友人が変化する場合には、「共通する親しい友人グループ内で変化した」ものであるのか、または「全く別の友人関係が存在し変化した」ものなのかを面接調査から抽出して検討することも目的とした。

結果として明らかになったことは以下の通りである。協力者のうち約 25%は、大学生活の過程において、一番親しい友人が一度も変化しないことを確認した。その一方で、約 75%の協力者が、一番親しい友人を大学生活の中で変えたことは、友人関係の親密化過程を複数対人関係の過程として捉える事の必要性を確認する目的を達成したものである。また、友人選択は、共通するグループ関係の中で変化したパターンと共通する友人グループとは別の友人関係から選択されるパターンを確認した。この結果は、大学生の友人関係の親

密化過程が、単に複数友人関係で構成されているという事実だけでなく、大学生の友人関係には複数の友人関係グループが存在し、多様な関係の中で一番親しい友人が選択されている過程が明らかにされたものである。

(5) 研究 3 回想的調査面接による大学生の友人関係の親密化過程に関する研究

第 4 章(研究 2)では、「一番親しい友人」を追跡的調査で毎回選択してもらう手続きを採用することにより、複数友人関係で親密化過程を抽出する必要性を確認した。また、大学生が、複数の友人関係グループを有し、その中で「友人選択」がなされている状況が確認されたことは、従来の質問紙調査の量的検討のみで、友人関係か進展していくことを抽出することへの限界が明らかになった。第 5 章(研究 3)では、複数対人関係の親密化過程を抽出するために、「回想的調査面接法」を採用し、手続きを確立すること目的とした。また複数友人関係の親密化過程のパターンを明らかにする類型化を提案するために探索的検討と適用を行うことを目的とした。

結果として明らかになったことは以下の通りである。回想的調査面接導入の意義は、複数の対人関係を同時的に抽出し、その推移を明らかにすることを可能としたことである。現時点での 1 番親しい友人を選択してもらったうえで、入学当初からのエピソードを、共通する友人のエピソードも含めて回想することでその過程を明らかにすることを実現した。第 1 に、手続きを確立する調査を実施し、質問項目の設定と手続きが有効であることを確認した。第 2 に複数友人関係の親密化過程のパターンを提案する試みとして発話の過程から類型化を探索的検討の上、類型化に使用する項目を決定し、適用する目的を達成した。回想的調査面接から得られた複数友人関係を対象とした親密化過程では、90%以上が複数友人関係で推移する状況が確認できるだけでなく、共通する友人グループ内の変動やグループ関係を認知しつつも、協力者が一番親しい友人との間だけで共有する特別な行動や経験があることを確認することが可能であり、最終的に 7 つの型で親密化過程のパターンが説明された。類型化の適用については、各事例で 3 者判定を導入することで、ある程度客観的基準の中で判定可能なことも確認した。

(6) 研究 4 大学生の友人関係における親密化過程の様相が大学生活の適応感に及ぼす影響に関する検討

第 3 章(研究 1)から第 5 章(研究 3)で明らかにされた知見は、大学生の友人関係が多くの場合に複数の友人関係の中で成立し、推移していく過程を抽出することの意義を提供するものであった。第 6 章(研究 4)では、これらの過程で抽出された大学生の友人関係が大学生活の適応感に及ぼす影響を検討することである。具体的には、複数友人関係の背景のひとつとして注目した新旧友人関係と適応感、新友人の友人選択と適応感、さらに複数友人関係の親密化過程と適応感との関連を明らかにしていくことを目的とした。

結果として明らかになったことは以下の通りである。第 1 に、大学入学後に知り合った親友と呼べる人物が、大学生活の中でできたことは、大学生活の適応感を高めることが明らかとなった。第 2 に大学入学後に知り合った「一番親しい友人」を大学生活の中で変更する群の適応感が、一貫して同じ友人を選択した群の適応感よりも高かった。第 3 に、複数友人関係の親密化過程において、友人関係が変動する出来事を経験することや、複数友人関係で推移している過程の中で、一番親しい友人と二者で共有する行動や経験があることが、大学適応感を高めていた。さらに質的な検討として、大学適応感の得点に特徴がある協力者を抽出し、面接調査で得られた発話から適応感に及ぼす影響を抽出した。その結果、入学直後の適応感が低く、友人関係の不安感を抱えていても大学生活で友人関係が充実していく過程で、適応感が高まることが確認され、また入学直後に入学時の適応感が高いことは、全体としての友人関係を「安定・平和」であると評価し、高い適応感を維持することが可能であった。

以上の結果から、大学生活の友人関係が複数友人関係で構成される中で、その関係が適応感に及ぼす影響を明らかにする目的を達成した。

(7) 総括と今後の課題

第 7 章では、第 3 章から第 6 章の 4 つの研究で得られた知見を整理し、結論を述べてきた。また、本論文の意義となる量的データと質的データを統合的に検討することの有効性、および回想的調査面接の手続きの有効性についても提言を行った。さらに、本論文で検討が不十分であった課題を整理し、今後の展望を結語としてまとめた。

第 2 節　おわりに

多くの大学生にとって、学生生活は大学という場が、最後のステージであり、その後、社会に出て出会う様々な対人関係と大学時代に形成される友人関係とは質的に異なるものなのではないだろうという漠然とした考えからスタートした研究であった。

大学生にとって、大学に入学し、新しい対人関係を築くことは、入学後の適応において最大の課題の一つであるといっても過言ではないだろう。また、大学時代に友人と知り合い、そのような過程をたどり、大学に適応していく様相は、青年がその後の人生を歩んでいく上で、対人関係の付き合い方の基盤となる可能性がある。

本論文では、青年期の友人関係および親密化過程研究の先行研究を踏まえ、大学生が大学入学後に形成していく親密化過程を 4 年間追跡する視点の中で、回想的な面接調査研究を使用し、明らかにすることを目的とした。回想的調査面接で得られた膨大な質的なデータは、その過程を生き生きと表現し、追跡的な質問紙調査で得られたデータとの統合を試みることでその目的を達成した。また大学生活の適応感を高める要因として、複数の友人関係での活発な相互作用、親友と呼べる人物に対する特別な認知が寄与しており、大学生にとって友人関係の親密化過程と大学適応感は密接に関連していた。

近年、4 年制大学への進学率が 50%を超え、今後も青年期を明らかにしようとする研究では、大学生を対象とした調査が重要視されていくだろう。本論文で明らかにした大学生の友人関係の親密化過程と大学適応感との結果は、青年の半数以上が進学する大学生の友人関係の実態と生活の状況を読み解く一助となり、青年が社会の中で適応していくことへの促進、不適応の予防へのきっかけと希望となるものである。

謝辞

最後に、本論文の計画・作成に至るまでの過程では、多くの方々にご協力およびご指導をいただきました。末筆ながらここに謝意を示したいと思います。

第 1 に、指導教官であり学位論文の副査であります北星学園大学大学院社会福祉学研究科今川民雄先生に心から感謝の意を表したいと思います。今川先生には修士課程から 6 年間にわたり、熱心にご指導いただきました。また、本研究の作成については、4 年間の長きにわたり追跡調査を行うこと、面接調査という新たな手続きを取りいれること等々、私が何度も挫折しそうな中、ここでは記しきれないほどのアイディア提供いただきました。また呑み込みの悪い私に丁寧に根気よくご指導いただいたこと、大学院生活・研究者とし

ての生活など全く無知だった私に、学会活動の大切さ、論文の添削など細かい点にまでご配慮いただき、言葉では言い尽くせいほど感謝の気持ちのいっぱいです。また、学位論文の主査であります豊村和真先生、副査であります栗林克匡先生、審査委員長であります杉岡直人先生には、本論文の審査に、貴重なご指導、新たな分析方法、研究の意義について、たくさんのご提案をいただきました。勉強不足の私の論文に丁寧にかつ細部に至るまでご指導いただいたことに対し心から御礼申し上げます。

第2に、この論文に協力いただいた調査協力者の皆様にもここに感謝の意を表したいと思います。4年間の追跡的調査では、最大6回の調査に協力していただきました。皆様の一つ一つの回答が本論文の貴重なデータとなりました。特に6回目の回想的調査面接については、就職活動や卒論執筆に忙しい学生の皆様に1時間以上のお時間をいただき協力いただきました。面接調査という時間的、心理的負担をおかけしたことは心苦しい限りでしたが、面接でその過程をお話いただいたデータは貴重なものであり、私の大切な財産となりました。また協力者の募集に関しましては、北星学園大学社会福祉学部福祉計画学科・福祉臨床学科・福祉心理学科のゼミ担当先生方にゼミの貴重なお時間をいただきました。合わせて感謝申し上げます。

第3に、私の大学院生活6年間では、多くの先輩・同期・後輩に恵まれました。様々な専門分野の学生が在籍する今川民雄先生のゼミでは、他分野の研究にも日常的に接することができました。他のゼミ生の研究発表、調査計画に関われましたことは、私自身の研究の刺激にもなりましたし、勉強になりました。また私の研究については、ゼミ生の皆様の協力がなくては完成しませんでした。特に面接調査の類型化については客観的な判断を必要としたため、ゼミ生に類型化の判定に協力いただきました。大学院社会福祉学研究科研究生の山口司さん、博士課程の吉田未来さん、修士課程の小島弓枝さん、多田周平さん、渡辺直巳さん、土本將貴さん、若林由希奈さん本当にありがとうございました。

最後になりましたが、6年間勤めた会社を退社し、勝手に大学に再入学することを決めてから、両親には生活面・勉強面等々、多大な迷惑と心配をかけてしましまいました。長い間私の研究生活をあたたかく見守ってくれた両親に心から感謝しています。

私の研究生活を支えてくださった皆様に・・「ありがとうございました。」

2010年12月20日　渡辺舞

引用文献：

青木多寿子(1993).　青年における身近な他者への役割期待の違いと性差　心理学研究,**64**, 140-146.

赤木里奈・石垣琢磨・井上果子(2009).　大学新入生の精神的健康度と対人不安傾向との関係　横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター研究論集,**9**,7-17.

Altman,I.,& Taylor,D.A.(1973). *Social penetration:The development of interpersonal relationships.* New York:Holt,Rinehart&Winston.（磯崎三喜年(1987).　社会的浸透理論　小川一夫（監）　社会心理学用語辞典　北大路書房　pp130-131.より引用）

天貝由美子(1996).　中・高校生における心理的距離と信頼感との関係　カウンセリング研究, **29**,130－134.

安藤直樹・廣岡秀一・小川一美・坂本剛・吉田俊和(2001).　大学生の適応過程に関する縦断的研究(3)-大学生の職業観に関する４年間の追跡調査－　名古屋大学教育学部紀要（心理学）,**48**,45-54.

浅川潔司・古川雅文・竹原加奈子(2005).　大学生の大学適応に及ぼす攻撃性と強迫性の影響　兵庫教育大学研究紀要, 27,29-35.

東紀美子・浅川潔司・古川雅文・吉田幸世(2002).　女子青年の大学適応に関する研究　神戸女子大学文学部紀要, 35,161-179.

Baker,R.W.,& Siyrk,B. (1984). Measuring adjustment to college. *Journal of Counseling Psychology* ,**31**,179-189.

Berg,J.H.(1984). Development of friendship between roommates. *Journal of Personality and Social Psychology,***46**,346-356.

Berg,J.H.,& Clark,M.S.(1986). Differences in social exchange between intimate and other relationships: gradually evolving or quickly apperent? In V.J.Derlega&B.A.Winstead(Eds) *Friendship and social interaction,* New York:Springer-Verlag,pp101-128.

Berg,J.H.,& McQuinn.R.D.(1986). Attraction and Exchange in Continuing and Noncontinuing Dating Relationships. *Journal of Personality and Social Psychology,* **50**,942-952.

Bohnert.A. M. , Aikins,J .W. & Edidin.J. (2007). The role of orgainized activities in facilitating social adaptation across the transition to college, *Journal of Adolescent Reserch,* **22**, 189-208.
Buote,V.M., Pancer,S.M., Pratt,M., Adams,G., Lefcovitch,S.B., Polivy,J. &Wintre,M.G.(2007). The importance of friends Friendship and adjustment among 1st-year university students *Journal of Adolescent Research,* **22**,665-689.
崔京姫・新井邦二郎(1998). ネガティブな感情表出と友人関係の満足感および精神的健康との関係 教育心理学研究,46,432-441.
Cole,T.,&Bradac,J.J.(1996). A lay theory of relational satisfaction with best friends *Journal of Social and Personal Relationships*, **13**,57-83.
榎本博明(1987). 青年期(大学生)における自己開示性とその性差について 心理学研究,58,91-97.
榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化 教育心理学研究,**47**,180-190.
榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究,**48**,444-453.
Frankel,K.A(1990). Girl's perceptions of peer relationship support and stress *Journal of Early Adolescence,* **10**,69-88.
藤井恭子(2001a).大学生の友人関係における心理的距離の取り方 茨城県立医療大学紀要,**6**,69-78.
藤井恭子(2001b). 青年期の友人関係における山アザラシ・ジレンマ分析 教育心理学研究,**49**,146-155.
藤井恭子(2004). 青年期の友人関係における心理的距離に関する研究動向と発達的意義 愛知教育大学教育実践総合センター紀要,**7**,279-288.
藤井義久(1998). 大学生活不安尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究,68,441-448.
深田博巳(1987). 対人感情 小川和夫(監) 社会心理学用語辞典 北大路書房 pp221 ‐ 222.
福岡欣治(2000). 大学生における家族および友人の知覚されたサポートと無気力傾向-達成動機を媒介要因とした検討- 静岡文化芸術大学短期大学部研究紀要,**14-3**,2-10.
福岡欣治(2007). 大学新入生のソーシャル・サポートと心理的適応-自己充実的達成動機の媒介的影響- 静岡文化芸術大学研

究紀要,8,69-77.
福岡欣治・橋本宰(1997). 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果,心理学研究,68,403-409.
福島章(1989). 性格と適応 本明寛・依田明・福島章・安藤宏・原野広太郎・星野命(編) 性格心理学講座 3：適応と不適応 金子書房 pp3-37.
古市祐一・玉木弘之(1994). 学校生活の楽しさとその規定要因 岡山大学教育学部研究集録,96,105-113.
古川雅文・藤原武弘・井上祢・石井眞治(1983).環境移行に伴う対人関係の認知についての微視発達的研究, 心理学研究, 53, 330-336.
Goldberg,D.P&Hillier,V.F.(1979). A scaled version of the General Health Questionnaire *Psychological Medicine*,pp139-145 (中川泰彬・大坊郁夫 (1985). 日本版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社)
半澤礼之(2002). 大学生活における意味付けの変容と適応の関連の研究-大学一年生を対象とした縦断的面接調査より- 中央大学大学院年報,31,361-372.
橋本剛(1997). 現代青年の対人関係についての探索的研究-女子学生の面接データから- 名古屋大学教育学研究科紀要,44,207-219.
橋本剛(2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究,48,94-102.
林文俊・今川民雄・津村俊充・大坊郁夫(1984). 対人的オリエンテーションの研究(2)－二者関係認知の構造について－ 日本心理学会第 48 回大会発表論文集,662.
林文俊・今川民雄・津村俊充・大坊郁夫(1985). 対人的オリエンテーションの研究(5)－Significant others に対する関係認知の構造について－ 日本心理学会第 49 回大会発表論文集,269.
Hays,R.B. (1984). The devolopment and maintenance of friendship. *Journal of Personal and Social Relationships*,1,75-98.
Hays,R. B. (1985). A longitudinal study of friendship development. *Journal of Personality and Social Psychology,*48,909-924.
Hays,R. B.,& Oxley,D(1986). Social network development and functioning during a life transition. *Journal of Personality and Social Psychology,*50,305-313.

Hays,R. B. (1989). The day-to-day functioning of close versus casual friendships. *Journal of Personal and Social Ralationships,***6** ,21-37.
廣岡秀一(1993). 対人認知 大坊郁夫(編著)わたしそしてわれわれ Ver.2 北大路書房 pp142-144.
本田周二(2007). 同性友人関係とのネガティブな出来事と現在の友人関係-大学生を対象として- 東洋大学人間科学総合研究所紀要,7,309-320.
本田周二(2008). 同性友人関係と異性友人関係の違い-友人関係機能による検討- 日本パーソナリティ心理学会第 17 回大会発表論文集,pp204-205.
堀匡・島津明人(2005). 大学新入生のソーシャルスキルが入学後の友人サポート、抑うつ、孤独感に及ぼす影響 ストレス科学,**19**,245-253.
五十嵐祐・吉田俊和(2003). 大学新入生の携帯メールの利用が入学後の孤独感に与える影響 心理学研究,**74**,379-385
飯島婦佐子・川口祐貴子・伊藤彩(1995). 大学新入生の適応に関する追跡的研究 性格心理学研究,**3**,37-50.
今川民雄・津村俊充・大坊郁夫・林文俊(1984). 対人的オリエンテーションの研究(3)－対人行動の構造について－ 日本心理学会第 48 回大会発表論文集,663.
今川民雄・津村俊充・大坊郁夫・林文俊(1985). 対人的オリエンテーションの研究(6)－対人行動の構造と対人感情の構造との対応関係について－ 日本心理学会第 49 回大会発表論文集,270.
石田靖彦(1998). 友人関係の親密化に及ぼすシャイネスの影響と孤独感 社会心理学研究,**14**,43-52.
石田靖彦(2003). 友人関係の形成過程におけるシャイネスの影響－大学新入生の縦断的研究－ 対人社会心理学研究,**3**,15-22.
石田靖彦(2009). 学校適応感尺度の作成と信頼性、妥当性の検討-生徒評定と教師評定を用いた他特性-他方法相関行列からの検討- 愛知教育大学教育実践総合センター紀要,**12**,287-292.
石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平(2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究,20,125-133.
Jones,D.C.(1991). Friendship satisfaction and gender: An examination of sex differences in contributors to friendship satisfaction. *Journal of Personality and*

Personal Relationships ,**8**,427 -436.
貝瀬栄子(1996). パーソナリティ認知の変容についての追跡的研究－印象変容がもたらす主観的要因の検討を中心として－ 北海道教育大学旭川校 卒業論文(未公刊).
亀岡聖朗(2006). 新大学への環境移行に関する心理学的研究－環境認知と愛着感の大学への適応との関連から－ 桐生短期大学紀要,17,151-158.
神山政仁・清水安夫(2005). 大学生の友人イメージに関する研究-友人イメージ法と大学適応感尺度との関連性- 学校メンタルヘルス,**8**,133-143.
糟谷知香江 (2005). 大学生の友人関係形成と友人からのサポート いわき明星大学人文学部研究紀要, **18**, 131-138.
河村壮一郎(2004). 精神健康調査票を用いた短期大学生の精神的健康にかかわる要因の検討 鳥取短期大学研究紀要,**50**,17-25.
川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮(2004). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響(3)-出身校、居住形態との関連から- 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要,**3**,57-68.
川上正浩(2006). 女子大学新入生の大学生活における不安について-3年度分データの比較検討- 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要,**5**,71-78.
加藤司(2006). 対人ストレス過程における友人関係目標 教育心理学研究,54,312-321.
木村巌弘(1987). 友人関係 小川和夫(監) 社会心理学用語辞典 北大路書房 pp334.
小林正幸(2003). 不登校児の理解と援助－問題解決と予防のコツ－ 金剛出版
小嶋明子(1998). 高校から大学へ 会沢勲・石川悦子・小嶋明子(編著) 移行期の心理学－こころと社会のライフイベント－ ブレーン出版 pp115-146.
久保真人(1993). 行動特性からみた関係の親密さ--RCI の妥当性と限界 実験者社会心理学研究, 33, 1-10.
La Gaipa(1979). A developmental study of the meaning of friendship in adolescence *Journal of Adolescence,* **2**,201-213.
Levinger,G., & Snoek,D.J(1972). Attraction in relationships:A new look at interpersonal attraction.Morristown, NJ.: *General Learning Press.* (和田実(1999). 出会いのコミュニケーション 諸井克英・中村雅彦(共著) 親しさが

伝わるコミュニケーション－出会い・深まり・別れ－　金子書房　pp8-13.)
Maeda,E. & Ritchie,L.D(2003). The concept of shinyuu in Japan:A Replication of and comparison to Cole and Bradac's study on U.S. friendship *Journal of Social and Personal Relationships,***20**, 579-598.
松井豊(1990). 友人関係の機能　齊藤耕二・菊池章夫（編著）社会化の心理学／ハンドブック　川島書店
松井豊(2005). 親密化過程　中島義明・繁桝算男・箱田祐司(編)　新・心理学の基礎知識　有斐閣ブックス　pp372-373.
松田美佐(2000). 若者の友人関係と携帯電話利用－関係希薄論から選択的関係論へ－　社会情報学研究,**4**,111‐122.
松田常美(2008). 青年期における理想の友人関係と対友人不安感情が現実の友人関係に及ぼす影響　甲南女子大学大学院論集,**6**,49-65.
松永真由美・岩元澄子(2008). 現代青年の友人関係に関する研究　久留米大学心理学研究,**7**,77-86.
松尾美耶・佐藤公代(2003). 大学生の対人関係認知及びストレス反応と学校享受感の関連　愛媛大学教育学部紀要　教育科学,**2**,49-55.
南博文・山口修司(1992). 大学生活への移行　山本多喜司・S. ワップナー(編著)　人生移行の発達心理学　北大路書房　pp179-204.
美山理香(2003). 大学生の友人との心理的距離に関する基礎的研究　九州大学心理学研究 4, 27-35.
宮下一博(1995). 青年期の同世代関係　落合良行・楠見孝(編)講座　生涯発達心理学第4巻　自己への問い直し：青年期　金子書房　pp155-184.
水子学・寺嵜正治・金光義弘(1998). 日常生活における対人相互作用と感情との関連－大学新入生の適応に関する追跡調査－　川崎医療福祉学会誌,**8**,65-72.
水野邦夫・田積徹・炭谷将史・多胡陽介(2007). 大学新入生の大学適応を促進する授業プログラムの検討　聖泉論叢,**15**,125-139.
水野将樹(2004). 青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか：グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成　教育心理学研究,**52**, 170-185.
諸井克英(1984). 孤独感とペットに関する態度　実験社会心理学研究,**24**,93-103.
諸井克英(1986). 大学新入生の生活事態変化に伴う孤独感　実験

社会心理学研究,**25**,115-125.
長沼恭子・落合良行(1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究,**10**, 35-47.
内藤伊都子(2007). 大学生の友人関係-親密度による検討- 日本大学国際関係研究,28,89-106.
中川泰彬・大坊郁夫 (1985). 日本版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社
中村雅彦(1989). 大学生の友人関係の発展過程に関する研究(Ⅰ)－関係性の初期差異化現象に関する検討－ 日本グループダイナミックス学会第 37 大会発表論文集,65-66.
中村佳子・浦光博(2000). ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について－対人関係の継続性の視点から－ 社会心理学研究,**15**,151-163.
中園尚武・野島和彦(2003). 現代大学生における友人関係への態度に関する研究-友人関係における「無関心群」に注目して-九州大学心理学研究,**4**,325-334.
難波久美子(2005). 青年にとって仲間とは何か : 対人関係における位置づけと友だち・親友との比較から 発達心理学研究,**16**, 276-285
Newcomb,T.M.(1961). *The acquaintance process* New York:Holt,Rinehart&Winston.
西河正行・坂本真士(2005). 大学における予防の実践・研究 坂本真士・丹野義彦・大野裕(編) 抑うつの臨床心理学 東京大学出版会,pp213-233.
西村昭徳・石崎一記(2008). リレーションを重視したオリエンテーションが新入生の大学生活適応感に及ぼす影響 東京成徳大学人文学部研究紀要,**15**,51-60.
丹羽智美(2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程,パーソナリティ研究,**13**,156-169.
落合良行・佐藤有耕(1996). 青年期における友人とのつきあい方の発達的変化 教育心理学研究,**44**,55-65.
岡田涼(2008a). 友人関係場面における感情経験と自律的な動機付けとの関連－友人関係イベントの分類－ パーソナリティ研究,**16**,247-249.
岡田涼(2008b). 親密な友人関係の形成・維持過程の動機付けモデルの構築 教育心理学研究,**56**,575-588.
岡田努(1993). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究,**5**,43-55.
岡田努(1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究,**43**,354-363.

岡田努(1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究,**47**,432-439.
岡田努(2002). 現代大学生の「ふれあい恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究,**10**,49-84.
奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子(2003). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響(2)-Personality との関連から- 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要,**2**,73-82.
奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子(2010). 大学 1 回生から 4 回生までの横断および縦断データから見た大学生活充実度の推移 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要,**9**,1-14.
及川恵・坂本真士(2007). 女子大学生を対象とした抑うつ予防のための心理教育プログラムの検討-抑うつ対処の自己効力感の変容を目指した認知行動的介入-,教育心理学研究,**55**,106-111.
及川恵・坂本真士(2008). 大学生の精神的不適応に対する予防的アプローチ-授業の場を活用した抑うつの一次予防プログラムの改訂と効果の検討- 京都大学高等教育研究,14,145-156.
大井由莉菜・宮本正一(2009). 青年期における異性と友人関係の発達 岐阜大学教育学部研究報告人文科学,58,177-186.
大久保智生・青柳肇(2003). 大学生用適応感尺度作成の試みー個人ー環境の適合性の視点からー パーソナリティ研究,**1**,38-39.
大久保智生(2005). 青年の学校への適応感とその規定要因ー青年用適応感尺度の作成と学校別の検討ー教育心理学研究,**53**,307-319.
大久保智生・青柳肇(2005). 大学新入生の適応に関する研究-社会的スキルは後の適応を予測するのか？- 早稲田大学人間科学研究,**2**,207-213.
大島啓利(2007). 2006 年度の学生相談界の動向 学生相談研究,**28**,62-72.
大島啓利・青木健次・駒米勝利・楡木満生・山口正二(2007). 2006 年度学生相談機関に関する調査報告 学生相談研究,**27**,238-272.
大嶽さと子(2007). 「ひとりぼっち回避規範」が中学女子の対人関係に及ぼす影響-面接データに基づく女子グループの事例的考察- カウンセリング研究,**3**,69-79.
小塩真司(1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究,**46**,280-290.

小塩真司(2002). 青年期の自己愛傾向と自己-友人イメージ,および友人選択理由 中部大学人文学部研究論集,**8**,1-22.

小塩真司(2005a). 自己愛傾向と大学生活不安の関連 中部大学人文学部研究論集,**12**,67-78.

小塩真司(2005b).研究事例で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ解析 東京図書,pp209-230.

小塩真司・桐山雅子・願興寺礼子(2006). 大学生新入生における悩みの有無および悩み内容の入学年度による変化 学生相談研究,27,138-148.

Oswald, D., & Clark, E.M. (2003). Best friends forever?: High school best friendships and the transition to college. *Personal Relationships,* **10**, 187-196.

Oswald,D., Clark.E.M. & Kelly.C.M(2004). Friendship Maintenance: An analysis of individual and dyad behaviors *Journal of social clinical psychology,* **23**,413-441.

Paul,E.L., & Brier,S.(2001). Friendsickness in the transition to college *Journal of Counseling and Development*, **79** ,77-89.

Rands,M.,& Levinger,G.(1979). Implicit theories of relationship : An intergenerational study *Journal of Personality and Social Psychology,* **37**,645-661.

齊藤勇(1985). 対人感情と情緒の人間関係的アプローチ 心理学研究,**56**,222-228.

齊藤勇(1990). 対人感情の心理学 誠信書房

齊藤茉莉絵・藤井恭子(2009). 「内面的関係」と「表面的関係」の2 側面による現代青年の友人関係の類型的特徴-賞賛獲得欲求・拒否回避欲求および充実感からの検討- 愛知教育大学研究報告,58,133-139.

坂本玲子・末木恵子・反町誠(2008). 新設大学におけるカウンセリング体制作りについて-その 3- 新入生への GHQ28 精神健康調査票を軸とした展開 山梨県立大学人間福祉学部紀要,**3**,75-80.

坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩(2007). 新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生活満足感との関連性について 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要,**6**,45-54.

佐久間祐子・柴原宜幸・村上千鶴子(2010). 大学生の学校適応過程に関する縦断的研究(1) - 大学入学時と大学 1 年前期の精神的健康度 日本橋学館大学紀要,**9**,63 - 70.

佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之(2003). 個人特性が心理

学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響（1)-オリエンテーションに対する態度の基礎データ- 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要,**2**,59-71.
佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之(2008). 新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生活満足度との関連について(2)-複数学科のデータに基づく分析- 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要,**7**,47-56.
佐野予理子・黒石憲洋(2006).現実場面における競争(2)：面接データに基づく競争概念の再検討 国際基督教大学教育学研究,48,143-149.
佐々木雅弘(1992). 適応の基礎 大貫敬一・佐々木雅弘編 心の健康と適応 福村出版,pp123-144.
佐藤静香・菊池奈緒子・畑山みさ子(2004). 大学への適応感における友人グループの役割 宮城学院女子大学発達科学研究,**4**,27-33.
嶋信弘(1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究,**39,**440-447.
清水裕士・大坊郁夫(2005). 恋愛関係における関係性認知が精神的健康に及ぼす影響 対人社会心理学研究,**5**,59-65.
清水裕士・金政祐司・谷口淳一(2006). 友人関係における相互作用が友人との関係性や個人の適応性に及ぼす影響－大学新入生の孤独感と精神的健康の変化に影響を及ぼす要因について(３)－ 日本グループダイナミックス学会第53回大会論文集,222-223.
下斗米淳(1990). 対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化 学習院大学文学部研究年報,**37**,269-287.
下斗米淳(1992a). 相互依存関係の予期と自尊感情レベルが自己開示・秘匿意向に及ぼす効果－対人関係の親密化過程における自己開示機能について－ 学習院大学文学部研究年報,**39**,281-304.
下斗米淳(1992b). 親しくなる 松井豊(編) 対人心理学の最前線 サイエンス社 pp30-39.
下斗米淳(1996). 「対人関係の親密化」研究の展望：理論的枠組みの検討 専修人文論集,**58**,23-49.
下斗米淳(1999). 対人関係の親密化過程における役割行動期待の変化に関する研究 専修人文論集,**64**,1-32.
下斗米淳(2000). 友人関係の親密過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究－役割期待と遂行とのズレからの検討－ 実験社会心理学研究,**40**,1-15.
鈴木素子・寺嵜正治・金光義弘(1998). 青年期における友人関係期

待と,現実の友人関係に関する研究　川崎医療福祉学会誌,**8**,55-64.
多川則子・吉田俊和(2002).　親密な人間関係が対人関係観に及ぼす影響－青年期の恋愛関係と友人関係－対人社会心理学研究,**2**,65-73.
多川則子(2006).　友人関係に対する行動的な親密度と役割行動期待遂行の影響　日本社会心理学会第47回大会論文集,pp696-697.
田口雅徳・森実紀・大谷哲朗(2004).　大学生・専門学校生の学校適応状況と学校にいるときの気分,授業態度との関連　志學館大学人間関係学部研究紀要,**25**,39-50.
高木浩人(2006).大学生の自己開示と孤独感の関係-開示者の性別、開示相手、開示側面の検討-　愛知学院大学心身科学部紀要,2,53-59.
高木麻未(2006). 友人関係の親密化過程における行動の探索的研究　関西大学大学院人間科学:社会学・心理学研究, **65**, 237-248.
高井範子(2008).　青年期における人間関係の悩みに関する検討　大成学院大学紀要,**10**,85-95.
髙坂康雅(2010). 大学生における同性友人，異性友人，恋人に対する期待の比較　パーソナリティ研究,**18**, 140-151.
高島直子・五十嵐靖博・平尾元尚・清水京子・中村延江(2004).　美容専門学校生の学校適応感・ゆとり感と心身の健康度　山野研究紀要,12,1-12.
高島直子・清水京子・五十嵐靖博・平尾元尚・中村延江(2003).　美容専門学校生の学校適応感・ゆとり感と心身の健康度　山野研究紀要,11,55-64.
田中存・菅千索(2007).　大学生活不安に関する心理学からのアプローチ-　和歌山大学教育学部紀要教育科学,**57**,15-22.
田中存・菅千索 (2009).　大学生の適応に関する研究-自己意識と対人関係の視点から-　和歌山大学教育学部紀要教育科学,**59**,1-7.
谷井淳一・上地安昭(1994).　高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係　教育心理学研究,**42**,185-192.
丹野宏昭・松井豊(2006).　大学生における友人関係機能の探索的検討　筑波心理学研究,32,21-30.
丹野宏昭・下斗米淳・松井豊(2005).　親密化過程における自己開示機能の探索的検討－自己開示に対する願望・義務感の分析から－対人社会心理学研究,**5**,67-75.
丹野宏昭(2007).　友人との接触頻度別にみた大学生の友人関係機

能　パーソナリティ研究,**16**,110-113.
遠矢幸子(1996).　友人関係の特性と展開　大坊郁夫・奥田秀宇(編)対人行動学研究シリーズ3　親密な対人関係の科学　誠信書房　pp89-116.
豊田秀樹(2003).共分散構造分析〈技術編〉-構造方程式モデリング　朝倉書店,pp198-200.
津村俊充・大坊郁夫・林文俊・今川民雄(1984).　対人的オリエンテーションの研究(4)－対人感情の構造について－　日本心理学会第48回大会発表論文集,664.
津村俊充・大坊郁夫・林文俊・今川民雄(1985).　対人的オリエンテーションの研究(8)－Significant othersに対する関係認知を対人感情の対応関係について－　日本心理学会第49回大会発表論文集,272.
鶴田和美(2002).　大学生とアイデンティティ形成の問題　特集青年期のアイデンティティ　臨床心理学,**2**,725-730.
植村善太郎・小川一美・吉田敏和　(2001).　大学生の適応過程に関する縦断的研究（2）－大学生の学習への取り組み、および大学生活満足感に関連する要因の検討　名古屋大学教育学部紀要（心理学）,**48**,29-43.
植村善太郎(2003).　中高一貫校への外部入学者の対人関係と学校適応感－ある国立大学付属高校における事例的検討－　カウンセリング研究,**36**,57-67.
梅本伸章(1988).　友人関係期待と現実の友人　盛岡大学紀要,**7**,71-80.
梅本伸章(1992).　大学新入生の適応について－自己の大学生活に対するイメージと友人関係との関連－　盛岡大学紀要,**11**,27-38.
上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護(1994).　青年期の交友関係における同調と心理的距離　教育心理学研究,**42**,21-28.
内田圭子(1990).青年の生活感情に関する一研究　教育心理学研究,**38**,117-125.
和田実(1992).　大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響　教育心理学研究,**40**,386-393.
和田実(1993).　同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異　社会心理学研究,**8**,67-75.
和田実(1996).　同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連　心理学研究,**67**,232-237.
和田実(1998).　大学生のストレスへの対処およびストレス,ソーシャルサポートと精神的健康の関係-性差の検討-　実験社会心理学研究,38,193-201.

和田実(2001). 性,物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響 心理学研究,**72**,186-194.
和田実・林文俊(2008). 大学生の同性友人関係-その変化と親密度との関連- 名城大学総合研究所総合学術研究論文集,**7**,89-101.
渡辺舞(2007a). 大学への進学が友人関係の在り方にどのような変化を与えるか?－高校 3 年生と大学 1 年生の比較から- 北星学園大学大学院論集,**10**,89-103.
渡辺舞(2007b). 大学新入生における同性友人の親密化過程に関する追跡的研究 北星学園大学大学院修士論文,(未公刊).
渡辺舞・今川民雄(2008a). 大学新入生の新旧友人関係に関する追跡的研究（3）－新旧友人の人物選択状況の違いが親密度得点の推移に及ぼす影響－ 日本心理学会第 72 回大会発表論文集,126.
渡辺舞・今川民雄(2008b). 大学生における友人関係の親密化過程に関する研究(１)－回想的調査面接による探索的検討－ 日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集,556-557.
渡辺舞(2009). 新旧友人への友人関係期待が友人関係に及ぼす影響 北星学園大学大学院論集,**12**,123-140.
渡辺舞(2010). 大学生における友人関係の親密化過程に関する研究－回想的調査面接による探索的検討－ 北星学園大学大学院論集,**1**（通巻第 13 号）,71-83.
渡辺舞・今川民雄(2009). 大学生の友人関係に関する追跡的研究－大学生活で「一番親しい友人」は変化するのか?－ 北海道心理学会第 56 回大会発表論文集,32.
山田ゆかり(2006). 大学新入生における適応感の検討 名古屋文理大学紀要,**6**,29-36.
やまだようこ(2004). 質的心理学：創造的に活用するコツ 無藤隆 やまだようこ 南博文 麻生武 サトウタツヤ（編） 第 1 章 2 質的研究の核心とは 新曜社 pp8‐13.
山口正二・土屋泰生・藤本尚文(1996). 生徒と教師の心理的距離の改善に望ましいと判断される行動・態度に関する研究 カウンセリング研究,**29**,169-179.
山本多喜司(1992). 人生移行とは何か 山本多喜司・S. ワップナー(編著)人生移行の発達心理学 北大路書房 pp2-24.
山中一英(1994). 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究,**34**,105-115.
山中一英・廣岡秀一(1994). 大学生の対人関係の親密化過程に関する研究(４) 日本社会心理学会第 35 回大会論文集,306-307.
山中一英 (1995). 対人関係の親密化過程に関する質的データに基

づく一考察 名古屋大学教育学部紀要, **42**, 127-134.
山中一英(1996). 大学生の友人関係の親密化過程に及ぼす個人差要因の影響 名古屋大学教育学部紀要,**43**,221-229.
山中一英(1998). 大学生の友人関係の親密化過程に関する事例分析的研究 社会心理学研究,**13**,93-102.
吉田俊和・橋本剛・安藤直樹・植村善太郎(1999). 大学生の適応過程に関する縦断的研究(1) 名古屋大学教育学部紀要（心理学）,**46**,75-98.
吉岡和子(2001). 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研究,**13**,13-30.
泰彩子(2000). 「心の居場所」と不登校の関連について 臨床教育心理学研究,**26,**97-106.

初出一覧：

渡辺舞・今川民雄(2008a). 大学新入生の新旧友人関係に関する追跡的研究（3）－新旧友人の人物選択状況の違いが親密度得点の推移に及ぼす影響－ 日本心理学会第 72 回大会発表論文集, 126.
渡辺舞・今川民雄(2008b). 大学生における友人関係の親密化過程に関する研究（１）－回想的調査面接による探索的検討－ 日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集, 556-557.
渡辺舞(2009). 新旧友人への友人関係期待が友人関係に及ぼす影響 北星学園大学大学院論集,**12**,123-140.
渡辺舞・今川民雄(2009). 大学生の友人関係に関する追跡的研究－大学生活で「一番親しい友人」は変化するのか？－ 北海道心理学会第 56 回大会発表論文集,32.
渡辺舞(2010). 大学生における友人関係の親密化過程に関する研究－回想的調査面接による探索的検討－ 北星学園大学大学院論集,**1**（通巻第 13 号）,71-83.
渡辺舞・今川民雄(2010). 大学生の 4 年間の友人選択が大学適応感に及ぼす影響,日本グループダイナミックス学会第 57 回大会発表論文集,182-183.
渡辺舞・今川民雄(2010). 大学生の友人関係の親密化過程が大学適応感に及ぼす影響, 日本社会心理学会第 51 回大会発表論文集,522-523.

大学生の友人関係に関するアンケート

本日は調査にご協力いただきありがとうございます。この調査は、大学生の友人関係のあり方を継続的な調査の中で明らかにすることは目的としております。そのため、みなさんには先回に引き続き調査のご協力をお願いいたします。質問にお答えいただいた内容は統計上の処理を行い、本研究のためにだけ使用しますので、記入していただいた内容が直接公表されることはありません。また、個人の情報については厳重に扱い、研究終了後この質問紙はシュレッダーで処理いたしますので、情報が外部に漏れることも一切ありません。質問には率直にお答えいただきますようお願いいたします。

北星学園大学大学院

社会福祉学研究科　修士課程2年　渡辺　舞

▼まず最初に、あなた自身についてお尋ねします。以下の性別の当てはまるものに○をつけ、学籍番号・年齢を記入してください。

性別　:　男　・　女

学籍番号　(　　　　　　　　　)

年齢　(　　　　)歳

▼あなたの現在と大学入学前の生活について、お聞きします。あなたはどのような形で生活していますか。**<u>現在と大学入学前についてそれぞれ</u>**当てはまる数字に○をつけ、「4. その他」の場合は具体的に記入してください。

現在:　1. 親と同居　2. 一人暮らし　3. 寮・下宿
4. その他　(　　　　　　　　　)

大学入学前:　1. 親と同居　2. 一人暮らし　3. 寮・下宿
4. その他　(　　　　　　　　　)

Ⅰ. 次に、あなたが**<u>大学に入学してから知り合った人</u>**で、**一番親しくなった同性の友人**を1人あげてください。そしてその人物の姓・名のイニシャルを下の 四 角 の欄に記入してください。このようなお願いをするのは具体的な人物を思い浮かべた上で回答していただきたいからです。あなたがあげた人物が誰なのか知るためではありません。

イニシャル　[　　]・[　　]さん（くん）　（例：.北海　太郎さん→**H・T**さん）
姓　名

＊ 上記で記入していただいた**「同性の友人」のイニシャル**は<u>先回の調査(4月24日～28日)</u>に記入していただいた人と同じ人物でしょうか。以下の以下の１～３の中から「当てはまる」項目に○をつけてください。

1. 同じ人物　2. 違う人物　3. 覚えていない

以下、上記の**<u>大学に入学してから知り合った同性友人</u>**を「Aさん（くん）」と呼ばせていただきます。それでは、次に「Aさん（くん）」とあなたとの関係について順にお答えください。

1 「Aさん（くん）」と出会ったのはどのようなところですか。以下の１～４の中から「当てはまる」項目に○をつけてください。「5. その他」の場合はどのような友人なのか具体的に記入してください。

1. 同じ大学の同じ学科　　2. 同じ大学のサークル・部活　　3. １、２以外の同大学内

4. 同じアルバイト先　　5. その他（　　　　　　　　　　）

2 あなたと「Aさん（くん）」は知り合ってからどれくらいですか。以下の1～6の中から「当てはまる」項目に○をつけてください。。

1. １～2週間未満　　2. ２～3週間未満　　3. ３週間～1ヶ月未満

4.1ヶ月以上2ヶ月未満　　5. 2ヶ月以上3ヶ月未満　　6. 3ヶ月以上

3 あなたと「Aさん（くん）」はどれくらいの頻度で会いますか？以下の１～5の中から「当てはまる」項目に○をつけてください。

1. ほとんど毎日　　2. 1週間に4日以上　　3. 1週間に2・3日以上

4. 1週間に1日程度　　5. ２週間に１日未満

4 あなたと「Aさん（くん）」はどれくらいの頻度で電話で話す、またはメールをしますか？以下の１～6の中から「当てはまる」項目に○をつけてください。

1. ほとんど毎日　　2. 1週間に4日以上　　3. 1週間に2・3日以上

4. 1週間に1日程度　　5. 1週間に1日未満　　6. 電話やメールはしない

5 あなたは「Aさん（くん）」についてどの程度好感をもっていますか。以下の数字でもっとも当てはまるものに○をつけてください。

全く好感が持てない　1　2　3　4　5　6　7　非常に好感が持てる

6 あなたは「Aさん（くん）」についてどの程度深く付き合っていますか。以下の数字でもっとも当てはまるものに○をつけてください。

非常に浅く付き合っている　1　2　3　4　5　6　7　非常に深く付き合っている

7 あなたは「Aさん（くん）」についてどのような関係だと思っていますか。以下の数字でもっとも当てはまるものに○をつけてください。

顔見知り		会えば話をする関係		ある程度親しい友人		非常に親しい友人
1	2	3	4	5	6	7

8 以下の項目は前ページでイニシャルを記入いただいた友人である**「Aさん(くん)」**に対してあなたは、次のような感情をどの程度感じていますか。それぞれの項目について、「1.決してそう感じない」から「7. とても強く感じる」のうち最もよく当てはまる番号を決め、数字を○で囲ってください。

		決してそう感じない						とても強く感じる
1	親しみを感じる	1	2	3	4	5	6	7
2	やさしくしたい	1	2	3	4	5	6	7
3	こわい	1	2	3	4	5	6	7
4	反発を感じる	1	2	3	4	5	6	7
5	甘えたい	1	2	3	4	5	6	7
6	尊敬したい	1	2	3	4	5	6	7
7	優越感を感じる	1	2	3	4	5	6	7
8	一体感がもてる	1	2	3	4	5	6	7
9	励ましたい	1	2	3	4	5	6	7
10	軽べつを感じる	1	2	3	4	5	6	7
11	信頼できる	1	2	3	4	5	6	7
12	かわいい	1	2	3	4	5	6	7
13	助けて欲しい	1	2	3	4	5	6	7
14	負けたくない	1	2	3	4	5	6	7
15	好き	1	2	3	4	5	6	7
16	義理を感じる	1	2	3	4	5	6	7

9 以下の項目は前ページでイニシャルを記入していただいた友人である**「Aさん(くん)」**とのつきあい方についてあなたはどのような関係だと感じていますか。それぞれの項目について、最もよく当てはまるところをを○で囲ってください。

※注:縦の目盛りの間には○をつけないでください。

		非常に	かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	非常に	
1	協同的な								競争的な
2	対等な								対等ではない
3	深い								浅い
4	永続的な								一時的な
5	敵対的な								友好的な
6	冷静な								情熱的な
7	誠意に満ちた								偽りのある
8	気楽な								落ち着かない
9	単純な								複雑な
10	快的な								不快な
11	感情的な								理性的な
12	安定した								不安定な
13	上下関係のある								上下関係のない
14	緊張に満ちた								リラックスした

10 以下の項目は前ページでイニシャルを記入いただいた友人である**「Aさん(くん)」**に対してあなたが、次のような行動をどの程度行なっていますか。それぞれの項目について、「1.めったにしない」から「5. いつもする」のうち最もよく当てはまる番号を決め、数字を〇で囲ってください。

		めったにしない	たまにする	時々する	しばしばする	いつもする
1	謝る	1	2	3	4	5
2	自慢する	1	2	3	4	5
3	頼りにする	1	2	3	4	5
4	命令する	1	2	3	4	5
5	不平を言う	1	2	3	4	5
6	他人行儀にふるまう	1	2	3	4	5
7	妥協する	1	2	3	4	5
8	仲良くする	1	2	3	4	5
9	協力する	1	2	3	4	5
10	軽べつする	1	2	3	4	5
11	甘える	1	2	3	4	5
12	忠告する	1	2	3	4	5
13	反抗する	1	2	3	4	5
14	無視する	1	2	3	4	5
15	服従する	1	2	3	4	5
16	一緒に遊ぶ	1	2	3	4	5
17	親切にする	1	2	3	4	5
18	自分のために利用する	1	2	3	4	5
19	助けをもとめる	1	2	3	4	5
20	指導する	1	2	3	4	5
21	意地をはる	1	2	3	4	5
22	避ける	1	2	3	4	5
23	うちとける	1	2	3	4	5
24	援助する	1	2	3	4	5

Ⅱ. 次に**大学に入学する前に知り合った人**で、**一番親しい同性の友人**を1人あげてください。そしてその人物の姓・名のイニシャルを下の 四 角 欄に記入してください。このようなお願いをするのは具体的な人物を思い浮かべた上で回答していただきたいからです。あなたがあげた人物が誰なのか知るためではありません。

イニシャル [　　] ・ [　　] さん(くん)　(例:.北海　太郎さん→**H・T**さん)
姓　名

＊ 上記で記入していただいた**「同性の友人」のイニシャル**は先回の調査(4月24日～28日)に記入していただいた人と同じ人物でしょうか。以下の以下の1～3の中から「当てはまる」項目をひとつ選びその番号を○で囲ってください。

1. 同じ人物　2. 違う人物　3. 覚えていない

以下、上記の**大学に入学する前に知り合った同性友人**を**「Bさん(くん)」**と呼ばせていただきます。
それでは次に「Bさん(くん)」についてお尋ねします。順に質問にお答えください。

1 **「Bさん(くん)」**と友人になったのはどのようなところですか。以下の1～4の中から「当てはまる」項目に○をつけてください。「4. その他」の場合はどこで仲良くなったのか具体的に記入してください。

1. 同じ高校　2. 同じ小・中学校　3. 同じアルバイト先
4. その他(　　　　　　　　　　　　)

2 **「Bさん(くん)」**は現在どのような環境で生活をしていますか。以下の1～6の中から「当てはまる」項目に○をつけてください。「6. その他」の場合は具体的に記入してください。

1. 他大学・専門学校にいる　2. 同じ大学・同じ学科にいる　3. 同じ大学・他学科にいる
4. 就職している(アルバイト含む)　5. 浪人している(予備校生)
6. その他(　　　　　　　　　　　　)

3 あなたと「Bさん（くん）」は友人となってからどれくらいの期間が経過していますか。以下の1～6の中から「当てはまる」項目に〇をつけてください。

1．3ヶ月未満　2．3ヶ月～6ヶ月未満　3．6ヶ月～1年未満

4．1年から3年未満　5．3年から6年未満　6．6年以上

4 あなたと「Bさん（くん）」はどれくらいの頻度で会いますか？以下の1～8の中から「当てはまる」項目に〇つけてください。

1．ほとんど毎日　2．1週間に4日以上　3．1週間に2･3日以上

4．1週間に1日程度　5．2週間に1日程度　6．1ヶ月に1日程度

7．1年に1日程度　8．ほとんど会うことはない

5 あなたと「Bさん（くん）」はどれくらいの頻度で電話で話す、またはメールをしますか？以下の1～6の中から「当てはまる」項目に〇をつけてください。

1．ほとんど毎日　2．1週間に4日以上　3．1週間に2･3日以上

4．1週間に1日程度　5．1週間に1日未満　6．電話やメールはしない

6 あなたは「Bさん（くん）」についてどの程度好感をもっていますか。以下の数字でもっとも当てはまるものに〇をつけてください。

全く好感が持てない　1　2　3　4　5　6　7　非常に好感が持てる

7 あなたは「Bさん（くん）」についてどの程度深く付き合っていますかをもっていますか。以下の数字でもっとも当てはまるものに〇をつけてください。

非常に浅く付き合っている　1　2　3　4　5　6　7　非常に深く付き合っている

8 あなたは「Bさん（くん）」についてどのような関係だと思っていますか。以下の数字でもっとも当てはまるものに〇をつけてください。

顔見知り		会えば話をする関係		ある程度親しい友人		非常に親しい友人
1	2	3	4	5	6	7

9 以下の項目は前ページでイニシャルを記入いただいた友人である**「Bさん（くん）」**に対してあなたは、次のような感情をどの程度感じていますか。それぞれの項目について、「1.決してそう感じない」から「7. とても強く感じる」のうち最もよく当てはまる番号を決め、数字を〇で囲ってください。

		決してそう感じない						とても強く感じる
1	親しみを感じる	1	2	3	4	5	6	7
2	やさしくしたい	1	2	3	4	5	6	7
3	こわい	1	2	3	4	5	6	7
4	反発を感じる	1	2	3	4	5	6	7
5	甘えたい	1	2	3	4	5	6	7
6	尊敬したい	1	2	3	4	5	6	7
7	優越感を感じる	1	2	3	4	5	6	7
8	一体感がもてる	1	2	3	4	5	6	7
9	励ましたい	1	2	3	4	5	6	7
10	軽べつを感じる	1	2	3	4	5	6	7
11	信頼できる	1	2	3	4	5	6	7
12	かわいい	1	2	3	4	5	6	7
13	助けて欲しい	1	2	3	4	5	6	7
14	負けたくない	1	2	3	4	5	6	7
15	好き	1	2	3	4	5	6	7
16	義理を感じる	1	2	3	4	5	6	7

10 以下の項目は前ページでイニシャルを記入していただいた友人である**「Bさん（くん）」**とのつきあい方についてあなたはどのような関係だと感じていますか。それぞれの項目について、最もよく当てはまるところを〇で囲ってください。

※注：縦の目盛りの間には〇をつけないでください。

		非常に	かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	非常に	
1	協同的な								競争的な
2	対等な								対等ではない
3	深い								浅い
4	永続的な								一時的な
5	敵対的な								友好的な
6	冷静な								情熱的な
7	誠意に満ちた								偽りのある
8	気楽な								落ち着かない
9	単純な								複雑な
10	快的な								不快な
11	感情的な								理性的な
12	安定した								不安定な
13	上下関係のある								上下関係のない
14	緊張に満ちた								リラックスした

11 以下の項目は前ページでイニシャルを記入いただいた友人である**「Bさん（くん）」**に対してあなたが、次のような行動をどの程度行なっていますか。それぞれの項目について、「1.めったにしない」から「5. いつもする」のうち最もよく当てはまる番号を決め、数字を〇で囲ってください。

		めったにしない	たまにする	時々する	しばしばする	いつもする
1	謝る	1	2	3	4	5
2	自慢する	1	2	3	4	5
3	頼りにする	1	2	3	4	5
4	命令する	1	2	3	4	5
5	不平を言う	1	2	3	4	5
6	他人行儀にふるまう	1	2	3	4	5
7	妥協する	1	2	3	4	5
8	仲良くする	1	2	3	4	5
9	協力する	1	2	3	4	5
10	軽べつする	1	2	3	4	5
11	甘える	1	2	3	4	5
12	忠告する	1	2	3	4	5
13	反抗する	1	2	3	4	5
14	無視する	1	2	3	4	5
15	服従する	1	2	3	4	5
16	一緒に遊ぶ	1	2	3	4	5
17	親切にする	1	2	3	4	5
18	自分のために利用する	1	2	3	4	5
19	助けをもとめる	1	2	3	4	5
20	指導する	1	2	3	4	5
21	意地をはる	1	2	3	4	5
22	避ける	1	2	3	4	5
23	うちとける	1	2	3	4	5
24	援助する	1	2	3	4	5

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

対人感情の因子構造

新友人（1回目調査時点）の対人感情の因子構造

0	I	Ⅱ	h^2
15好き	.773	−.154	.620
1親しみを感じる	.767	−.192	.625
2やさしくしたい	.737	−.129	.560
11信頼できる	.716	−.192	.549
6尊敬したい	.682	−.020	.465
12かわいい	.671	−.095	.460
8一体感がもてる	.663	.052	.443
5甘えたい	.623	.194	.426
9励ましたい	.477	.136	.246
13助けて欲しい	.444	.114	.210
4反発を感じる	−.142	.713	.528
7優越感を感じる	−.011	.710	.504
3こわい	.041	.520	.272
14負けたくない	−.035	.477	.229
10軽べつを感じる	.039	.456	.210
因子寄与	4.434	1.914	
寄与率（%）	29.558	12.757	
α	.839	.639	

削除項目　16 義理を感じる

旧友人（1回目調査時点）の対人感情の因子構造

	I	Ⅱ	h^2
15好き	.748	−.089	.567
2やさしくしたい	.738	−.115	.558
6尊敬したい	.726	.006	.527
11信頼できる	.681	−.280	.543
12かわいい	.674	.052	.456
5甘えたい	.611	.352	.498
13助けて欲しい	.594	.340	.469
1親しみを感じる	.493	−.215	.289
9励ましたい	.490	−.054	.243
8一体感がもてる	.382	−.219	.194
4反発を感じる	−.076	.679	.467
10軽べつを感じる	−.054	.565	.322
3こわい	−.112	.506	.268
14負けたくない	.032	.486	.237
7優越感を感じる	−.017	.399	.160
因子寄与	3.928	1.871	
寄与率（%）	26.187	12.472	
α	.839	.639	

削除項目　16 義理を感じる

新友人（2回目調査時点）の対人感情の因子構造

	I	Ⅱ	h^2
12かわいい	.769	−.049	.593
15好き	.756	−.213	.616
5甘えたい	.690	.313	.574
2やさしくしたい	.677	−.212	.504
9励ましたい	.645	−.069	.421
8一体感がもてる	.638	−.101	.417
13助けて欲しい	.621	.284	.466
11信頼できる	.594	−.297	.441
6尊敬したい	.557	−.073	.316
7優越感を感じる	−.107	.833	.706
10軽べつを感じる	−.232	.764	.637
4反発を感じる	−.212	.642	.456
14負けたくない	.057	.522	.276
16義理を感じる	.039	.442	.197
因子寄与	4.084	2.537	
寄与率（%）	29.168	18.123	
α	.870	.758	

削除項目　1 親しみを感じる
3 こわい

旧友人（2回目調査時点）の対人感情の因子構造

	I	Ⅱ	h^2
12かわいい	.722	.084	.528
2やさしくしたい	.696	−.028	.485
5甘えたい	.676	.297	.545
11信頼できる	.665	−.302	.534
9励ましたい	.651	−.216	.471
6尊敬したい	.614	−.136	.396
13助けて欲しい	.599	.306	.453
8一体感がもてる	.575	−.138	.349
1親しみを感じる	.508	−.192	.295
4反発を感じる	−.074	.909	.831
10軽べつを感じる	−.170	.830	.718
7優越感を感じる	−.089	.630	.405
3こわい	−.010	.435	.189
14負けたくない	.012	.398	.159
因子寄与	4.222	2.663	
寄与率（%）	28.145	17.754	
α	.868	.754	

削除項目　16 義理を感じる

新友人（3回目調査時点）の対人感情の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	h^2
15好き	.749	−.291	.645
2やさしくしたい	.746	−.259	.623
13助けて欲しい	.745	.233	.610
8一体感がもてる	.715	−.036	.513
1親しみを感じる	.701	−.353	.617
12かわいい	.692	−.148	.501
6尊敬したい	.682	−.270	.539
5甘えたい	.644	.102	.425
9励ましたい	.636	.121	.419
11信頼できる	.594	−.342	.470
4反発を感じる	−.285	.683	.548
7優越感を感じる	.017	.664	.441
10軽べつを感じる	−.245	.452	.264
14負けたくない	−.018	.421	.178
3こわい	−.095	.385	.158
16義理を感じる	.114	.362	.144
因子寄与	4.955	2.138	
寄与率(%)	30.970	13.361	
α	.897	.632	

旧友人（3回目調査時点）の対人感情の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	h^2
15好き	.810	−.101	.667
11信頼できる	.763	−.167	.610
2やさしくしたい	.759	−.080	.610
12かわいい	.698	−.031	.488
1親しみを感じる	.633	−.147	.422
8一体感がもてる	.614	.011	.377
9励ましたい	.603	.122	.379
5甘えたい	.602	.136	.381
13助けて欲しい	.559	.323	.417
6尊敬したい	.502	−.104	.263
4反発を感じる	−.013	.844	.712
3こわい	.017	.689	.475
10軽べつを感じる	−.217	.563	.365
14負けたくない	.039	.456	.210
7優越感を感じる	.002	.358	.128
因子寄与	4.419899	2.056	
寄与率(%)	29.466	13.709	
α	.869	.695	

削除項目　16 義理を感じる

新友人（4回目調査時点）の対人感情の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	h^2
2やさしくしたい	.797	−.260	.702
1親しみを感じる	.767	−.225	.639
8一体感がもてる	.764	−.035	.585
15好き	.748	−.171	.589
11信頼できる	.734	−.366	.672
12かわいい	.692	−.036	.480
6尊敬したい	.651	−.059	.428
9励ましたい	.633	−.074	.406
13助けて欲しい	.577	.273	.408
5甘えたい	.546	.207	.341
4反発を感じる	−.187	.834	.730
10軽べつを感じる	−.322	.733	.641
3こわい	−.299	.683	.555
14負けたくない	−.051	.486	.239
7優越感を感じる	.074	.471	.227
16義理を感じる	.156	.464	.239
因子寄与	5.100	2.781	
寄与率(%)	31.876	17.384	
α	.896	.679	

旧友人（4回目調査時点）の対人感情の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	h^2
15好き	.758	−.082	.582
9励ましたい	.754	.058	.571
2やさしくしたい	.744	−.245	.614
12かわいい	.710	.025	.504
11信頼できる	.671	−.336	.563
6尊敬したい	.614	−.177	.408
5甘えたい	.600	.111	.372
8一体感がもてる	.597	−.117	.370
1親しみを感じる	.566	−.417	.494
13助けて欲しい	.558	.174	.342
4反発を感じる	.012	.849	.721
3こわい	.012	.688	.474
10軽べつを感じる	−.016	.644	.414
14負けたくない	−.039	.487	.239
7優越感を感じる	−.113	.432	.200
因子寄与	4.39007	2.478	
寄与率(%)	29.267	16.521	
α	.879	.742	

削除項目　16 義理を感じる

新友人（5回目調査時点）の対人感情の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	h^2
2やさしくしたい	.847	−.210	.761
15好き	.777	−.204	.646
9励ましたい	.713	.009	.508
11信頼できる	.705	−.222	.546
6尊敬したい	.703	−.039	.495
8一体感がもてる	.665	.169	.470
5甘えたい	.643	.178	.445
12かわいい	.640	−.130	.427
1親しみを感じる	.618	−.326	.488
13助けて欲しい	.511	.186	.295
10軽べつを感じる	−.172	.768	.619
7優越感を感じる	−.066	.679	.466
4反発を感じる	−.029	.657	.433
3こわい	.077	.440	.199
14負けたくない	−.024	.435	.190
因子寄与	4.769	2.220	
寄与率（%）	31.795	14.799	
α	.869	.699	

削除項目　16 義理を感じる

旧友人（5回目調査時点）の対人感情の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	h^2
15好き	.809	−.109	.666
11信頼できる	.763	−.295	.670
9励ましたい	.706	−.033	.500
2やさしくしたい	.702	−.166	.521
12かわいい	.667	.032	.446
6尊敬したい	.664	−.002	.441
1親しみを感じる	.612	−.390	.527
5甘えたい	.584	.170	.370
8一体感がもてる	.584	−.087	.348
4反発を感じる	−.033	.808	.653
10軽べつを感じる	−.014	.672	.451
3こわい	.048	.637	.407
7優越感を感じる	−.213	.361	.175
因子寄与	4.219805	1.956	
寄与率（%）	32.460	15.045	
α	.873	.693	

削除項目　13 助けて欲しい
14 負けたくない
16 義理を感じる。

二者関係認知の因子構造

新友人(1回目調査時点)の二者関係認知の主成分分析

	第1主成分
10快的な-不快な	.808
4永続的な-一時的な	.776
3深い-浅い	.764
12安定した-不安定な	.764
8気楽な-落ち着かない	.727
7誠意に満ちた-偽りのある	.682
2対等な-対等ではない	.664
14緊張に満ちた-リラックスした	-.654
1協同的な-競争的な	.649
5敵対的な-友好的な	-.573
9単純な-複雑な	.398
6冷静な-情熱的な	-.389
累積寄与率(%)	44.539
α	.793

削除項目　11 感情的 - 理性的
13 上下関係のある - 上下関係のない

旧友人(1回目調査時点)の二者関係認知の主成分分析

	第1主成分
3深い-浅い	.806
8気楽な-落ち着かない	.770
10快的な-不快な	.767
5敵対的な-友好的な	-.724
14緊張に満ちた-リラックスした	-.698
2対等な-対等ではない	.665
12安定した-不安定な	.633
7誠意に満ちた-偽りのある	.617
4永続的な-一時的な	.614
1協同的な-競争的な	.519
13上下関係のある-上下関係のない	-.439
6冷静な-情熱的な	-.381
累積寄与率(%)	42.087
α	.856

削除項目　9 単純な - 複雑な
11 感情的 - 理性的

新友人(2回目調査時点)の二者関係認知の因子構造

	I	II	III
12安定した-不安定な	.867	-.072	-.135
3深い-浅い	.862	-.202	.083
10快的な-不快な	.841	-.015	.034
4永続的な-一時的な	.809	-.057	.129
8気楽な-落ち着かない	.614	.272	-.083
1協同的な-競争的な	.614	.146	.037
7誠意に満ちた-偽りのある	.568	.181	-.112
14緊張に満ちた-リラックスした	-.469	-.193	-.163
13上下関係のある-上下関係のない	.205	-.896	-.062
5敵対的な-友好的な	-.228	-.562	-.124
2対等な-対等ではない	.259	.502	-.220
11感情的な-理性的な	-.028	-.081	.631
6冷静な-情熱的な	-.053	-.114	-.543
因子寄与	5.506	3.826	1.818
α	.910	.739	.548
因子間相関	I	II	III
I		.654	.427
II			.244

削除項目　9 単純な - 複雑な

旧友人(2回目調査時点)の二者関係認知の主成分分析

	第1主成分
12安定した-不安定な	.781
5敵対的な-友好的な	-.780
10快的な-不快な	.780
14緊張に満ちた-リラックスした	-.768
4永続的な-一時的な	.765
2対等な-対等ではない	.747
3深い-浅い	.743
7誠意に満ちた-偽りのある	.674
8気楽な-落ち着かない	.612
1協同的な-競争的な	.543
13上下関係のある-上下関係のない	-.502
6冷静な-情熱的な	-.364
累積寄与率(%)	46.851
α	.881

削除項目　9 単純な - 複雑な
11 感情的 - 理性的

新友人(3回目調査時点)の二者関係認知の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
4永続的な-一時的な	.966	-.199	-.028
3深い-浅い	.830	-.068	.075
5敵対的な-友好的な	-.770	-.110	.018
1協同的な-競争的な	.669	.110	.086
2対等な-対等ではない	.586	.202	-.055
8気楽な-落ち着かない	.008	.886	-.064
9単純な-複雑な	-.229	.757	.101
14緊張に満ちた-リラックスした	-.043	-.703	-.069
10快的な-不快な	.113	.692	.081
12安定した-不安定な	.308	.531	-.100
13上下関係のある-上下関係のない	-.173	-.484	.122
6冷静な-情熱的な	-.078	-.029	-.791
11感情的な-理性的な	-.040	.025	.462
因子寄与	4.756	4.655	1.013
α	.887	.859	.546
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ		.653	.036
Ⅱ			.167

削除項目　7 誠意に満ちた - 偽りのある

旧友人(3回目調査時点)の二者関係認知の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
4永続的な-一時的な	.910	-.156	-.115
3深い-浅い	.904	-.156	-.092
12安定した-不安定な	.713	.113	.211
1協同的な-競争的な	.498	.286	.155
13上下関係のある-上下関係のない	.309	-.862	.029
2対等な-対等ではない	.174	.677	.107
14緊張に満ちた-リラックスした	-.204	-.543	.065
5敵対的な-友好的な	-.174	-.504	.203
8気楽な-落ち着かない	.384	.443	-.041
7誠意に満ちた-偽りのある	.272	.358	-.034
6冷静な-情熱的な	-.042	-.042	.583
11感情的な-理性的な	-.037	.047	-.575
因子寄与	4.172	3.830	.994
α	.833	.824	.512
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ		.659	-.172
Ⅱ			-.150

削除項目　9 単純な - 複雑な
10 快的な - 不快な

新友人(4回目調査時点)の二者関係認知の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
13上下関係のある-上下関係のない	-.826	.334	-.057
5敵対的な-友好的な	-.780	-.028	.060
2対等な-対等ではない	.755	.037	-.077
10快的な-不快な	.618	.179	.158
14緊張に満ちた-リラックスした	-.602	-.066	.037
8気楽な-落ち着かない	.600	.235	-.022
7誠意に満ちた-偽りのある	.558	.292	-.005
12安定した-不安定な	.548	.299	.002
4永続的な-一時的な	-.122	.990	-.056
3深い-浅い	-.023	.847	.077
11感情的な-理性的な	-.151	.025	.851
6冷静な-情熱的な	-.252	.029	-.496
因子寄与	5.145	4.406	1.563
α	.777	.870	.601
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ		.711	.260
Ⅱ			.342

削除項目　9 単純な - 複雑な
1 協同的な
- 競争的な

旧友人(4回目調査時点)の二者関係認知の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
1協同的な-競争的な	.932	-.209	-.067
5敵対的な-友好的な	-.854	.137	-.032
2対等な-対等ではない	.782	.153	-.191
7誠意に満ちた-偽りのある	.555	.141	.231
12安定した-不安定な	.403	.320	.045
8気楽な-落ち着かない	.092	.711	.008
9単純な-複雑な	-.316	.684	.037
10快的な-不快な	.231	.600	.038
14緊張に満ちた-リラックスした	-.234	-.584	.114
4永続的な-一時的な	.217	.451	.303
13上下関係のある-上下関係のない	-.240	-.435	.200
6冷静な-情熱的な	-.165	.191	-.654
11感情的な-理性的な	-.273	.162	.408
因子寄与	4.732	4.381	1.620
α	.858	.797	.516
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ		.710	.357
Ⅱ			.385

削除項目　3 深い - 浅い

新友人(5回目調査時点)の二者関係認知の主成分分析

	第1主成分
12安定した−不安定な	.781
10快的な−不快な	.774
4永続的な−一時的な	.758
14緊張に満ちた−リラックスした	−.754
3深い−浅い	.751
7誠意に満ちた−偽りのある	.741
8気楽な−落ち着かない	.691
1協同的な−競争的な	.634
5敵対的な−友好的な	−.628
2対等な−対等ではない	.624
13上下関係のある−上下関係のない	−.516
6冷静な−情熱的な	−.360
累積寄与率(%)	46.035
α	.890

削除項目　6 冷静な - 情熱的な
9 単純な - 複雑な
11 感情的 - 理性的

旧友人(5回目調査時点)の二者関係認知の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
4永続的な−一時的な	.980	−.205	−.037
3深い−浅い	.891	−.181	.094
8気楽な−落ち着かない	.852	−.028	.016
12安定した−不安定な	.826	.054	−.108
14緊張に満ちた−リラックスした	−.618	−.181	−.110
10快的な−不快な	.547	.294	−.018
5敵対的な−友好的な	−.479	−.356	−.057
7誠意に満ちた−偽りのある	.472	.126	.009
1協同的な−競争的な	.439	.205	−.054
13上下関係のある−上下関係のない	.168	−.850	−.016
2対等な−対等ではない	.220	.632	−.052
6冷静な−情熱的な	.055	−.062	−.797
11感情的な−理性的な	.054	−.074	.630
因子寄与	5.597	3.551	1.997
α	.897	.732	.633
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ		.604	.405
Ⅱ			.270

削除項目　9 単純な - 複雑な

対人行動の因子構造

新友人（1回目調査時点）の対人行動の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	h^2
8仲良くする	.761	-.102	.590
23うちとける	.719	-.081	.523
9協力する	.648	.032	.421
3頼りにする	.587	-.031	.345
24援助する	.562	.323	.420
19助けをもとめる	.558	.271	.385
17親切にする	.555	.185	.342
16一緒に遊ぶ	.462	.307	.308
22避ける	-.391	.029	.154
4命令する	.142	.766	.607
21意地をはる	.074	.610	.378
13反抗する	.174	.564	.349
12忠告する	.196	.557	.349
6他人行儀にふるまう	-.322	.501	.354
2自慢する	.121	.492	.256
14無視する	.001	.463	.214
20指導する	.185	.462	.248
5不平を言う	-.078	.431	.191
7妥協する	-.180	.327	.139
因子寄与	3.446	3.126	
寄与率(%)	18.138	16.454	
α	.811	.735	

削除項目　1謝る　10軽蔑する

11甘える　15服従する

18自分のために利用する

旧友人（1回目調査時点）の対人行動の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	h2
14無視する	.608	-.303	.461
2自慢する	.576	.139	.351
13反抗する	.569	.157	.348
15服従する	.555	-.054	.311
4命令する	.538	.104	.301
10軽べつする	.535	-.172	.316
21意地をはる	.534	.192	.322
20指導する	.532	.181	.316
7妥協する	.472	-.023	.223
6他人行儀にふるまう	.442	-.213	.240
18自分のために利用する	.427	.005	.183
5不平を言う	.414	.127	.187
12忠告する	.412	.235	.225
9協力する	-.135	.659	.453
23うちとける	.029	.650	.424
17親切にする	.026	.644	.415
8仲良くする	-.361	.632	.530
19助けをもとめる	.284	.535	.367
24援助する	.298	.516	.355
3頼りにする	.070	.427	.187
11甘える	.254	.415	.237
22避ける	.251	-.382	.209
16一緒に遊ぶ	.059	.320	.106
因子寄与	3.875	3.193	
寄与率(%)	20.208	16.227	
α	.801	.764	

削除項目　1謝る

15服従する

16一緒に遊ぶ

18自分のために利用する

新友人（2回目調査時点）の対人行動の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
8仲良くする	.705	-.299	.028
17親切にする	.689	-.140	.022
9協力する	.676	-.152	.060
11甘える	.630	.186	.070
19助けをもとめる	.577	.223	.054
23うちとける	.566	-.127	-.101
24援助する	.559	.103	.040
3頼りにする	.540	.234	-.126
16一緒に遊ぶ	.504	.152	.018
4命令する	-.120	.735	-.149
20指導する	.050	.719	.002
12忠告する	.220	.697	-.103
13反抗する	.044	.663	.107
5不平を言う	-.173	.581	-.024
21意地をはる	.095	.541	.211
2自慢する	.059	.504	.100
10軽べつする	.074	-.043	.881
14無視する	.000	-.178	.826
6他人行儀にふるまう	-.183	.110	.595
18自分のために利用する	.099	-.011	.553
22避ける	-.211	.249	.540
7妥協する	.142	.072	.409
因子寄与	3.676	4.282	3.835
α	.822	.825	.772
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ		.133	-.141
Ⅱ			.546

削除項目　1謝る

15服従する

旧友人（2回目調査時点）の対人行動の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
13反抗する	.824	.073	-.132
12忠告する	.716	.206	-.002
20指導する	.711	.136	-.229
10軽べつする	.654	-.005	.018
4命令する	.639	-.110	-.050
7妥協する	.538	.192	-.076
2自慢する	.529	-.045	.186
14無視する	.503	-.234	-.025
5不平を言う	.480	.069	.037
21意地をはる	.474	-.138	.329
18自分のために利用する	.367	-.181	.100
15服従する	.357	-.231	.043
8仲良くする	.073	.796	-.020
23うちとける	.171	.683	.139
9協力する	.035	.644	.099
22避ける	.249	-.466	.080
17親切にする	.111	.418	.301
6他人行儀にふるまう	.256	-.414	.126
3頼りにする	-.138	.209	.755
19助けをもとめる	-.062	.108	.744
11甘える	-.039	-.007	.706
1謝る	.145	-.162	.456
因子寄与	4.568	2.994	2.831
α	.846	.742	.764
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ		-.238	.276
Ⅱ			.280

削除項目　16一緒に遊ぶ

24援助する

新友人(3回目調査時点)の対人行動の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
19助けをもとめる	.813	.022	.132
17親切にする	.733	-.062	-.175
3頼りにする	.682	.055	-.141
23うちとける	.678	-.138	-.010
9協力する	.661	-.011	-.196
11甘える	.650	.055	.173
16一緒に遊ぶ	.594	.013	.101
24援助する	.550	.100	.061
4命令する	-.118	.756	-.128
20指導する	.060	.699	-.036
21意地をはる	.042	.669	.062
5不平を言う	-.102	.622	-.031
13反抗する	.092	.558	.192
12忠告する	.236	.538	-.042
14無視する	.028	-.222	.929
10軽べつする	.038	-.022	.636
22避ける	-.070	.142	.605
6他人行儀にふるまう	-.209	.279	.389
15服従する	.257	.097	.356
因子寄与	4.296	3.431	2.789
α	.864	.802	.710
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ		.316	-.264
Ⅱ			.381

削除項目　1 謝る　2 自慢する
7 妥協する　8 仲よくする
18 自分のために利用する

新友人(4回目調査時点)の対人行動の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
14無視する	.979	-.002	-.085
22避ける	.978	.020	-.150
10軽べつする	.670	-.082	.149
15服従する	.666	.206	.021
18自分のために利用する	.534	.134	.171
6他人行儀にふるまう	.512	-.110	.150
17親切にする	.227	.882	-.197
23うちとける	.026	.729	-.034
9協力する	-.084	.704	-.039
8仲良くする	-.290	.662	-.039
16一緒に遊ぶ	.126	.614	.030
3頼りにする	.036	.605	.068
19助けをもとめる	-.069	.522	.331
24援助する	-.044	.491	.317
12忠告する	-.004	.087	.755
21意地をはる	-.021	-.004	.680
20指導する	.018	-.022	.635
4命令する	.366	-.134	.555
2自慢する	.066	.118	.489
5不平を言う	.269	-.038	.409
因子寄与	4.930	3.932	4.075
α	.867	.856	.814
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ		-.255	.525
Ⅱ			.181

削除項目 1 謝る　7 妥協する
11 甘える　13 反抗する

旧友人(3回目調査時点)の対人行動の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
12忠告する	.848	.090	-.217
20指導する	.816	-.146	-.049
13反抗する	.748	-.063	.052
5不平を言う	.561	-.034	-.017
4命令する	.511	-.093	.129
21意地をはる	.511	.124	.226
18自分のために利用する	.453	.015	.135
2自慢する	.397	.154	.114
7妥協する	.363	.028	.238
9協力する	-.018	.770	-.123
17親切にする	-.092	.716	.044
19助けをもとめる	.001	.686	.214
3頼りにする	-.007	.673	.156
8仲良くする	-.010	.627	-.341
11甘える	-.051	.551	.274
23うちとける	-.095	.534	-.253
24援助する	.249	.476	.004
16一緒に遊ぶ	.139	.363	-.232
14無視する	-.011	-.081	.796
6他人行儀にふるまう	.040	.006	.731
22避ける	.084	-.089	.662
15服従する	.075	.095	.397
1謝る	.180	.222	.362
因子寄与	4.619	3.918	3.663
α	.830	.826	.717
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ		.310	.468
Ⅱ			-.155

削除項目　10 軽蔑する

旧友人(4回目調査時点)の対人行動の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
22避ける	.838	.004	-.113
14無視する	.836	.005	.003
6他人行儀にふるまう	.654	.041	-.013
18自分のために利用する	.609	-.013	.080
15服従する	.556	.061	.003
10軽べつする	.555	-.075	.270
19助けをもとめる	.164	.761	-.077
3頼りにする	-.044	.730	-.140
24援助する	-.050	.698	.188
11甘える	.171	.695	-.074
17親切にする	-.153	.621	.042
9協力する	-.189	.577	.100
1謝る	.204	.482	.119
12忠告する	-.196	.010	.880
4命令する	.202	-.143	.607
20指導する	-.063	.126	.596
13反抗する	.211	-.020	.542
2自慢する	-.003	.177	.488
21意地をはる	.166	-.072	.430
5不平を言う	.127	-.010	.418
因子寄与	4.020	3.422	3.960
α	.834	.841	.787
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ		-.006	.502
Ⅱ			.316

削除項目　7 妥協する　8 仲よくする
16 遊びに行く
23 うちとける

新友人（5回目調査時点）の対人行動の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	h^2
23うちとける	.754	−.118	.590
17親切にする	.710	−.096	.454
19助けをもとめる	.677	.268	.486
9協力する	.677	−.042	.562
8仲良くする	.642	−.199	.556
3頼りにする	.632	−.083	.396
16一緒に遊ぶ	.548	.200	.165
11甘える	.526	.230	.380
24援助する	.510	.191	.373
1謝る	.385	−.030	.140
13反抗する	.005	.701	.348
10軽べつする	−.149	.680	.216
18自分のために利用する	.110	.606	.133
20指導する	.155	.604	.288
21意地をはる	.208	.556	.416
4命令する	−.039	.555	.378
12忠告する	.347	.518	.348
15服従する	.061	.507	.083
5不平を言う	.240	.460	.201
7妥協する	−.115	.413	.163
6他人行儀にふるまう	−.302	.412	.299
14無視する	−.111	.397	.497
2自慢する	.246	.384	.361
22避ける	−.212	.355	.534
因子寄与	4.293	4.084	
寄与率（%）	17.889	17.015	
α	.840	.815	

旧友人（5回目調査時点）の対人行動の因子構造

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
3頼りにする	.805	−.162	.225
9協力する	.799	−.075	.014
17親切にする	.757	−.188	.039
19助けをもとめる	.707	.117	.123
23うちとける	.629	.044	−.282
11甘える	.595	.127	.105
8仲良くする	.586	.063	−.293
24援助する	.547	.144	−.052
12忠告する	.073	.721	−.143
20指導する	.041	.650	−.123
21意地をはる	−.008	.596	.148
4命令する	−.057	.572	.155
13反抗する	−.130	.507	.185
5不平を言う	.056	.490	−.047
7妥協する	−.112	.482	−.025
10軽べつする	−.055	.476	.027
2自慢する	.245	.464	.043
22避ける	.024	.062	.878
14無視する	.034	.046	.852
6他人行儀にふるまう	.065	−.062	.726
因子寄与	4.149	3.488	3.038
α	.862	.793	.834
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ		.231	−.263
Ⅱ			.347

削除項目 1 謝る
15 服従する
16 一緒に遊ぶ
18 自分のために利用する

友 人 関 係 期 待 の 測 定

11 以下の項目は前ページでイニシャルを記入いただいた友人である<u>「Aさん（くん）」との関係において次の10項目がどの程度重要だと考えているか</u>を問うものです。重要だと思う順に下の空欄に<u>**項目番号**</u>を記入してください

項目番号	1	互いに協力し合える。困ったとき助けてくれる。
	2	話題が豊富で楽しい。自分の知らないことを教えてくれる。
	3	趣味や好みが一致している。性格が似ている。
	4	いろいろな面で刺激を与えてくれる。自分を向上させてくれる。
	5	よく気がつく。自分の気持ちを察してくれる。
	6	何かにつけ、一緒に行動できる。いつも一緒にいる。
	7	言いたいことが言い合える。利害関係なく付き合える。
	8	悩みをうちあけることができる。何でも話してくれる。
	9	自分を必要としてくれる。互いの個性を尊重しあえる。
	10	互いに役に立つことができる。甘えられる。

最も重要→

1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位

12 以下の項目は前ページでイニシャルを記入いただいた友人である<u>「Bさん（くん）」との関係において次の10項目がどの程度重要だと考えているか</u>を問うものです。重要だと思う順に下の空欄に<u>**項目番号**</u>を記入してください

項目番号	1	互いに協力し合える。困ったとき助けてくれる。
	2	話題が豊富で楽しい。自分の知らないことを教えてくれる。
	3	趣味や好みが一致している。性格が似ている。
	4	いろいろな面で刺激を与えてくれる。自分を向上させてくれる。
	5	よく気がつく。自分の気持ちを察してくれる。
	6	何かにつけ、一緒に行動できる。いつも一緒にいる。
	7	言いたいことが言い合える。利害関係なく付き合える。
	8	悩みをうちあけることができる。何でも話してくれる。
	9	自分を必要としてくれる。互いの個性を尊重しあえる。
	10	互いに役に立つことができる。甘えられる。

最も重要→

1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位

資料F グループ関係維持型（Ⅱ型）の事例 （女性：自宅生）

質問内容	協力者の発話	判定項目
出会いの時期	オリエンテーションの時	
友人属性	同学科内	
出会った時の出来事・言葉	最初は何も話していません。	
出会った時の印象	活発な感じの印象	
出会いの直後状況	宿泊オリエンテーションでした。それで、話す機会があって仲良くなりました。	
現在の共通友人の有無	私とAさん以外に3人（B/C/D）います。 ➡	判定1：共通友人あり
出会い以後（1年生）の共通の友人関係状況	Aさんに限らず5人で授業を受けるようになりました。 ➡	判定2：選択友人と共通友人との関係が同時期にスタート
Aさんと2人で行動することは？	5人ですね。誕生日に御飯を食べに行ったりですね。 ➡	判定4：選択友人と共通友人との行動や経験の差異はない。
2年生	レポートなんかはチーム分けがされていて、それでバラバラになることはあるんですが、その前後で実験の情報交換をしたりということがありました。 体育大会・・球技大会に参加したり、学祭も参加し、親睦会という感じで一泊したことがありました。	
3年生	福祉に進んだのが3人、取らなかった人が2人で・・そこで、ちょっと別れた感じがあります。 5人の付き合いというのは続いていました。結構、月に1回とかは必ずみんなで集まって遊ぶ機会をつくっていました。 ➡	判定3：関係変化の出来事なし
4年生（現在）	あまり、（変化は）ないですね。3年生からの流れで・・より授業で顔を合わす機会や学校に来る機会がなくなって、3年生の時は食堂に集まって、ご飯を食べていましたが、今はそういうことがなくなりました。 少し頻度は減ってしまっていますが、でも、結構みんなで集まろうという意識がみんな強いかなと思います。	
卒業後の付き合い予測について	バラバラになるかなと思います。今までは、誕生日とか、試験終わりとか集まっていたけど。これからはみんなが休める時、お盆とかお正月とかになってしまうのかな	

註）親密化過程の分類に関連する発話のみを一部抜粋

資料G 二者先行中心グループ関係変動型（Ⅶ型）の事例 （女性：自宅生）

質問内容	協力者の発話	判定項目
出会いの時期	オリエンテーション	
新	同学科内	
出会った時の出来事・言葉	隣に座ってもいいですかと私から声をかけました。	
出会った時の印象	かわいい人	
出会いの直後状況	同じ学科の人だということがわかったので、それから移動するときも一緒にいるようになりました。そこからすごく仲良くなりました。	
現在の共通友人	たくさんいます。8人のグループなんです。	➡ 判定1：共通友人あり
出会い以後（1年生）の共通の友人関係状況	Aさんと出会ってから、しばらくは2人でいました。そのうちに英語で一緒の子だったり、他の授業で一緒だったり、個々につながっていって、各自が仲良くなっていったので、いつのかにか、大きなグループになった感じで（後略）	➡ 判定2：選択友人との二者関係が先行
1年生	（Aさんと）ほとんどが一緒でした。一緒に履修を考えたりもしたので。サークルも一緒に入って、バイトも一緒です。生活も学校生活も一緒のことが多い。	
出会い時以外の共通の友人関係状況	完全に（グループが）友人関係だなと認識したのは2年生。一緒に行動するようになったのは2年生以降だと思います、	➡ 判定3：関係変化の出来事あり（左の3項目）
2年生	Aさんとは、特に変わったことはない。サークルは2年生の時にやめてしまいましたが、バイトは今でも一緒に続けています。その他のメンバーとは1年生の時に、共通の授業で一緒だったりというつながりはあったんですが、このメンバーがグループで仲がいいなと思ったのが、心理の必修や実験演習のレポートを一緒にやったことがきっかけかもしれません。みんなで、見せ合ったり、情報交換をしていたので。 Aさんとの付き合いが中心でしたが、みんなに飲みに行く回数やみんなの誕生日にお祝いすることも増えました。	
3年生	Aさんとはゼミが違う。（中略）Aさんとの付き合いは、バイトが一緒だったこともあり、バイトもバイトの中で、またとても仲がいい仲間がいます。だからAさんとの関係はあまり変化がない。一番仲がいいのはAさん。	➡ 判定4：選択友人と共通友人との行動や経験の差異がある。
4年生（現在）	Aさんと話すことが減ってしまった。Aさんは一般就職なので、就職活動が忙しかった。なかなか会えなくなったことで、さみしくなったという気持ちはある。でもたまに2人で時間をつくって遊ぶこともある。みんなとも基本は会うことはない（後略）。	
未来予測	Aさんとはこれからも変わることがないと思っています。今でも、時間が合わなくて、連絡を取らなくなってしまっていてもつながっているという感覚・・自信がある。Aさんもそう感じてくれているように思う。これからも連絡を取っていく関係だと思います。グループは、なかなか会えなくなるのかな・・と思っています。	

註）親密化過程の分類に関連する発話のみを一部抜粋

研究協力への同意書

甲　北星学園大学大学院　社会福祉学研究科
渡辺舞

乙 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

甲は乙に対し、調査について以下の通り約束するものである。
乙は下記の内容を十分に理解し、承知した上で、本研究に協力することを同意するものである。

☐この調査は乙の友人関係についてお尋ねするものです。具体的に友人を思い浮かべてもらいながら回答していただきますが、友人の個人を特定するものではなく、友人をイニシャル（例：A さん）でお話していただきます。
☐面接の内容は録音いたしますが、甲以外の人物がこの録音を聞くことはありません。録音の内容は甲の指導教官、および共同研究者である大学院生が研究のため確認をする場合がありますが、甲は乙の個人情報、個人名を特定する情報は開示しません。
☐甲は、乙の 2006 年及び 2007 年の質問紙調査の内容について質問することがありますが、乙の個人情報または、乙の友人を特定する内容には触れません。
☐この調査の録音・質問紙は甲の責任において厳重に管理し、乙の個人情報が外部に漏れることはありません。また調査結果は、論文作成、及び学会研究活動のみ使用し、調査終了後は、甲の責任において、録音・質問紙を破棄いたします。
☐乙は面接調査前または面接調査中に、この調査への協力を中止した場合には、その旨を甲に申し出ることができます。調査はいつでも中止することができます。

以上

本書は 2 通作成し甲乙 1 通保有する。

平成 21 年　　　月　　　日

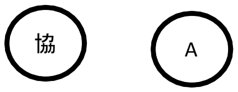
甲　北星学園大学大学院　社会福祉学研究科
渡辺舞
連絡先　g07502@hokusei.ac.jp
携帯電話　090-3774-5791

乙 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

二者専心型（Ⅰ型）の事例

調査日・一番（新OR旧）	NO38（2009年9月30日）・旧
性	女性
居住	自宅生
友人と初めて会った場所	英語の授業
友人と初めて会った時期	大学1年生
最初の出会い	最初は英語の授業でペアになって自己紹介をしたと思う。
第1印象	おとなしいイメージ。派手な感じはない
現在の共通の友人関係	なし

現在の友人関係図



1年生	講義	英語の中でも、私にも彼女にも別の友達がいて、（常に）一緒に近くに座っていたわけでもない。私は大学では、男の子の友達といるか、仲良くしていたグループがあったけど、窮屈な感じがしてあわなかった。なので、男の子と一緒にいた。Aとすぐに仲良くなったわけではなく、（後期になって）別の授業が一緒になって、（その授業が）英語と続いていた時間帯だったので、一緒に移動するようになった。
	学内	お互い、べったりという感じではなく、授業の時間だったり、学食を食べたり、その時その時の付き合いです。
	学外	学外の付き合いはないメアドを交換したのも、後期になってからだと思います。

2年生	講義	2年生になって英語の授業でも一緒に座るようになって。私も福祉の科目を取っていたので、男友達がいればその子と一緒に受けるし、Aとも時々ですね。
	学内	
	学外	彼女はサークルに入っていて、私は授業が終わったら帰るという生活スタイル。Aは学校までの友達と区切っていた感じ。

3年生	講義	同じ授業はなかったと思います。私は実習もいかなかなかったし。
	学内	週に1回とかは学食を食べたと思います。あまり学校で会う頻度が少ないので、メールや交換ノートで近況報告をしている。
	学外	2年生の感覚と変わった。3年生の後期には遊ぶようになっていた。（前期から）メールはしていた。Aにも彼氏がいて、それが別れて。そこから電話も増えたと思います。Aとの関係では、私が話を聞いてもらえる関係。（より仲良くなったきっかけは、）3年生の冬休みくらいでした。映画に行って、ご飯を食べて、そのままうちに連れてきて、そのあとつながりが増えた。家に遊びに来ることも増えた。

4年生	講義	4年になっても彼女は実習に行ってるけど、今だったら実習中でも連絡は取ってる。大学に行く時には、必ず連絡を入れるようにしている。
	学内	
	学外	（3-4年生になって）将来の話をする。秋とか冬とかに話し始めて、春になったら、具体的な希望とか、結婚とかそういう話題も出ている。3年より（4年になっての付き合いが）も増えている。意外と、家が近いということも知ってからは、よく会っている。夜ちょっと遊びに来たり、私は実家ですけど、仲良くなった子は実家に連れていくので。

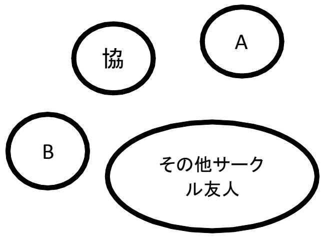
将来予測	忙しくなって、会えなくなって電話をたまにするとか、続いていくと思います。

Aさんの選択理由	Aは私という個人の付き合いを大切にしてくれたから、そういう面でとても気が楽。女の子グループ的な縛り方がない。2人で仲良くてもサバサバしている。私の行動とか付き合い方も理解してくれたから。

グループ関係維持型（Ⅱ型）の事例

調査日・一番(新OR旧)	NO20(2009年7月25日)・新
性	男性
居住	一人暮らし
友人と初めて会った場所	サークルの新歓
友人と初めて会った時期	大学1年、4月
最初の出会い	僕は、同じ学科の人と行動していた。Aさんが一人で歓迎会に参加してきて、一緒に入れてほしいと言われました。
第1印象	かっこいい子だと思います。
現在の共通の友人関係	20人くらいのサークル全体。よく遊ぶのは3人

現在の友人関係図



1年生	講義	サークルでの交流は少ない。体育の授業が一緒だったことが、仲良くなった要因だと思う。
	学内	サークルは2週間1回、ちょっとした集まりがあって。ボランティア、必ず行くのは2週間に1回にAさんといっている。1年の後期あたりから部室にいくようになって同期も当時はもっと部員がいたけど、だんだん少なくなってきてから仲良くなってきた。
	学外	飲みに行ったり、カラオケに行ったり。頻度は、1か月に1回くらい。3人の時もあれば、先輩とかも含めて、20人ということもある。

2年生	講義	
	学内	1年生よりも部員が減って、顔と名前が一致するようになって、そこから仲良くなった感じがする。2年生になって、20名位になった。部室でご飯を食べたり、部室の中の付き合いが増えた。毎日通っていました。
	学外	2年生の夏休み前。僕が彼女と別れてその時に、AさんとBさんにお世話になった。プライベートな相談に乗ってもらった。Bも同時期に彼女と別れたということもある。そこで意気投合して。それで夏休みにはよく遊んだ。ほぼ毎日あそんだ。3人のことが多くなったと思います。

3年生	講義	実習に行っていたので、遊ぶ感じではなかった。Bも実習。夏休みは会っていない。
	学内	サークルのメンバーは全員続いていた。B君が役員になって、その愚痴をAと僕でよく聞いていた。
	学外	3人でよく遊びます。(サークル全体は)結構減ったと思う。月に2回くらい。忙しかったのもあるし、2年生の時より落ち着いた。遊び方は変わらない。3年生になって後輩と遊びに行くようになった。仲の良い後輩を連れて、10人くらいで飲む遊び方が増えた。

4年生	講義	
	学内	ボランティアはやめて、在籍しているだけ。Bも役員をやめた。A君は通っている。(部室には)ほぼ毎日通う。他のメンバーもいる
	学外	やはり3年生と一緒で頻度は減ってる。(3人で遊んだのは)3回くらい、僕は卒論が忙しくて、B君はまだ実習が残っている。予定が合わない。3人で遊ぶよりも、最後の年だから後輩を誘って遊ぼうという意識に変わっている。

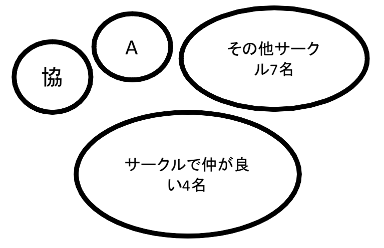
将来予測	期待としては、会える時が会ったら続けていきたい。20名で会えたらいいなと思います。でも最初に連絡するのはAかBだと思う。

Aさんの選択理由	2年生の夏休みに話を聞いてもらって、そこから助けられたという気持ちがあったこと。正直な気持ち、最初、一番の友人を選ぶのにAかBか迷いました。決め手はA君の方が人間として尊敬できるということです。自分の話をよくするのはAとB、学科の友人が少ないので。学科の友人と話すことは勉強のことだけ、卒論のことは相談するけど。プライベートの話をするのはサークルの友人。友人といえるのはサークルの人です。

二者中心グループ関係維持型（Ⅲ型）の事例

調査日・一番（新OR旧）	NO33（2009年9月24日）・新
性	男性
居住	自宅生
友人と初めて会った場所	同じ部活の友人、グランドで練習していた時ですね
友人と初めて会った時期	大学1年
最初の出会い	ぼくの方が先に入部していて、10日後にAさんが入ってきた。
第1印象	話し方、楽しい、面白い人だったので仲良くなりたいと思った。
現在の共通の友人関係	部員の仲間・・・マネージャーも含めると13名

現在の友人関係図



1年生	講義	（Aは他学部だけど）同じ授業は1-2年生の時はあったので、同じ授業なら一緒に受けます。
	学内	練習は、週に5日。1年生の時から部室には行く。1-2年生の時は学科の友達と一緒に食べていたけど、学年が上になると、部室でご飯を食べたり、学食でも部活のメンバーと食べていた。Aさんは僕よりも（競技）がうまいんだけど、僕もAさんもなかなか試合に出してもらえなくて、遠征行ってもメンバーから外されてとても悔しい気持ちを共有していた。なので、練習が終わっても2人でバットを振ったり、筋力トレーニングをして、なんとかこの状況を打破したいと2人で頑張っていた。
	学外	全員というのは、年に数回だけど、特に仲のいい人（自分含めて6人）とはよく焼肉を食べに行ったりする。大体このメンバーで行く。その中で仲がいいというか、学年が上がるにつれて、辞める人も多くて、今在籍しているのが同期13名で、その中心になっているのが、さっきの6人のメンバー。仲間意識がある。練習にはちゃんと参加するメンバーです。

2年生	講義	（部員と）勉強の話はしないですが、自分は、レポートが大変で、みんなと同じ時間で練習できないこともあったから、そういう事情は話して、理解してもらっていた。
	学内	練習は欠かさず出ていた。夜の付き合いは結構参加していたけど、部活が終わった後の自主練習に参加できないこともあった。
	学外	1年生の方が多いかもしれない。1年生の方が、時間に余裕もあったし、高校から出たばかりで、遊びたいという気持ちも強かったと思う。2年生の時はどちらかというと、みんな（サークル全体）で遊ぶ方が多かった。

3年生	講義	
	学内	部活の中では3年生が中心。メンバーを決めたり、スケジュールを決めたり。この6人のメンバーが部の中でも結構中心になっていた。
	学外	（Aと）2人という関係だと3年生以降だと思う。2人で話す機会が増えた。2人で話しているのは楽しいと感じていたので、時間があるときに2人でご飯を食べるようになった。とにかく話すことが楽しかったので、気が合う。頻度は多くないけど、タイミングが合えば。もちろんグループの遊びもあります。たまに飲み会はあったけど、後半は就職活動がメイン。話の内容も変わってきたと思う。会社で働くこととか、将来のことも多くなった。

4年生	講義	1個だけAさんと同じ授業を取っている。たまたまですが。一緒に受けています。
	学内	就職活動は落ち着いて、チームとしては部活の頻度は変わらないけど、就職活動をしている場合には、そちらが優先。僕も前半は練習に参加できないこともあった。（引退後）Aさんは、これからも野球を続けたいということで部活に参加している。僕は、卒論はあるから練習は行かない。でも、今度の学校祭も4年生で店を出す予定なので時間が会えば会う機会はある。部室に行くことはある。昼は部室がいるので。
	学外	僕とAさんが内定が出るまで時間がかかった。そのあとから、（6人で）ご飯を食べに行くこともある。4年生になってもAさんと2人ということはあります。自分は教育実習もあって、卒論もあって、正直部活を辞めようかと考えたこともある。それでも、Aさんを含めて、この6人メンバーがいて、状況を話してそれでも続けようと言ってもらってきたので、ここまで来れた。

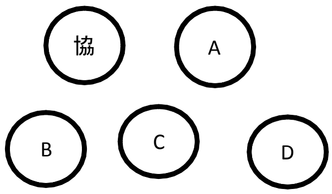
将来予測	4年間過ごして来て大切な仲間。頻度は減ってしまっても1年に1回は会いたいという話をしている。定期的に会って、関係を継続させていきたい。

Aさんの選択理由	競技の話もそうですが、将来的な仕事の話とか、自分の欠点とかを理解してくれる、そういうところを指摘してくれて自分は変わることができた。他の人の影響もあったけど、Aさんは僕の人生を変えてくれた。他の人とは違うものがある。大学は人間関係が全て。知り合った友人や先輩は、深い話ができるなと思った。

グループ関係変動型（Ⅳ型）の事例

調査日・一番（新OR旧）	NO9（2009年7月16日）・新
性	女性
居住	自宅生
友人と初めて会った場所	英語の授業
友人と初めて会った時期	大学1年4月
最初の出会い	BさんとAさんが隣同士で、英語の授業の時に話していたようです。それで、2人で話していて、そこに私が加わったような記憶があります。
第1印象	かわいい女の子
現在の共通の友人関係	5人です（他：B・C・D）

現在の友人関係図



1年生	講義	AとBは別学科。英語の授業だけで一緒で。週に4日でしたね。その時は一緒でした。1年生の時は（他の授業は）私は同学科の友達と一緒にいることが多かった。
	学内	
	学外	（付き合いが）あってもAとBで遊んだのは数回くらい感じだと思います。

2年生	講義	英語（の授業）は続いていました。週に2回くらい。同学科の一緒にいた友達は福祉士を目指さなくなったので、それで、資格関係の授業を一緒に受ける人がいなかったので、Aさんたちと他の授業も一緒に受けるようになった。
	学内	その3人（A・B・C）が私の入っていたサークルに入りました。サークルの活動や部室で会うこともあったので、付き合いとしては増えたと思います。私は、その当時部長をしていたので、毎日、部室に行きました。活動自体はAさんしか来ていなかったかな・・BさんやCさんは飲み会には参加していました。Dさんも後期になって一緒のサークルに入りました。
	学外	Cさんは（あるアーティスト）が好きで、私も好きなんです。それをAさんがお互いのことを知っていて、紹介をしてくれた。たぶん2年生の前半だったかな・・6月くらい。（Dさんとの出会いは）Cさんより後なので2年生の後期だと思う。Dさんは他の友達と一緒にいたり、転々としていた感じだったと思う。いつの間にか遊ぶようになったのが、2年生の10月くらい私以外の4人は同じ学科です。たぶんみんな顔見知りだったと思う。

3年生	講義	3年生が一番多かった。一緒の授業も多かったし。お昼御飯も一緒に食べていた。何かしら一緒に行動していた時期。この5人の中の誰かとは必ず一緒にいた記憶がある。実習の話も多かったし、3年の後半になると、就職の話も多かった。
	学内	（サークルは）続けていました。部室に行く頻度も増えた。荷物を部室を置いていたので、ちょくちょく顔を出していた。
	学外	5人で遊ぶようになりました。季節ごとに、集まることが多かったんですが、クリスマス会をしたこともあります。3年生のころからか、全員の誕生日を祝うようになった。それで、誕生日以外の4人が、サプライズでケーキとプレゼントを用意することを決めていたので、それが5回あるということ。恋愛の話もするし家族の話もする。なんでも話せるメンバーです。ドライブに行ったり、メガスポに行ったり、そういうこともした。

4年生	講義	あんまり会えなくなった。授業が減って、みんなが学校に来るタイミングがばらばらになった。就活もあるし、臨床の3人（A/B/D）は4年生になっても実習もあった。卒論もあって忙しい。一緒にご飯（学食）食べるのが精いっぱい。
	学内	サークルも所属はしていますが、サークルで会うことはない。
	学外	会えなくなってメールでやりとりすることが増えたんですが、メーリングリストを5人で作っている。1回メールを流せば、全員に伝わるし、会えなくなって、それを利用することがほとんどなので、Aさんだけに話をするとか、そういうことはない。誕生日会は続けている。後期になったら福祉士の対策講座があって全員受けるので、そうしたら、また付き合いが増えるかもしれない。

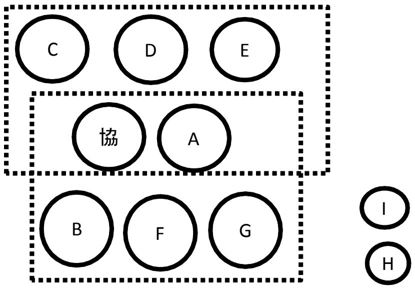
将来予測	続くと思います。5人で続いていきたい。

Aさんの選択理由	何だろう。私の中では（一番の友人は）BさんでもCさんでもDさんでもよかった。でもAさんはその中でも一番直接一緒に会ってるからかな・・Aさんに特別という気持ちはないですね・・会えなくなってメールでやりとりすることが増えたんですが、メーリングリストで全員に伝わるし、会えなくなって、それを利用することがほとんどなので、Aさんだけに話をするとか、そういうことはない。大学生活の思い出の大半を占めているのがこの友人関係だった。サークル、勉強、実習全部に関わっていた。

二者中心グループ関係変動型（V型）の事例

調査日・一番(新OR旧)	83(2009年11月5日)・新
性	女性
居住	一人暮らし
友人と初めて会った場所	大学(オルアラ)
友人と初めて会った時期	入学2週間前
最初の出会い	最初に出会ったのは大学です。大学に入る前の、オルアラで同じグループになった。その後入学後のオリエンテーションで私は友達がいなくて、オルアラでのグループに集まることになっていたので、そこで話しかけた。Aさんは友達(B)とオルアラも参加していて、オリエンテーションも2人で座っていたので、一緒に座った。
第1印象	すごい、かわいい子、おとなしそう。
現在の共通の友人関係	サークルが一緒の5人。学科で授業を受けるAとBとあと2人

現在の友人関係図



1年生	講義	CとDは同じ学科で、Eさんは別学科です。CとDと授業は一緒に受けない。授業を受けるメンバーはA、B、F、Gともう2人(H/I)一緒にいて、そのうちHは同じ学科、Iは別学科だけど私と同じ高校でその関係で、最初は一緒にいた。授業も一緒に受けていた。授業や学食の学校生活は学科を中心とした7 人で一緒にいて、放課後は、サークルのメンバーと一緒に過ごす。唯一重なっているがAさん。
	学内	最初はAとBとでサークルに見学する計画を立てていた。その時に、学科が同じ(F・G)さんが一緒に行くことになって。そういう話をしているうちに、Aさんとは、やりたいことが一緒で、意見があって、3つのサークルに一緒に入った。最初に入ったサークルは今も続いて共通友人(C/D/E)がいるサークルを続けている.
	学外	学科の方は本当になくて。学校が終わったら別。サークルの方がすごい遊んでいた。サークルの子のうち、別学科のEさんとAさんが同じマンションに住んでいて、一人暮らしの3人で、お互いの家に行ったり、泊りあったり。1年生の時が一番一緒にいた。1年生の時は、自分の中でAさんと一緒にいるという意識が非常に高かった。

2年生	講義	1年生の最後の方になると、自分と同じ高校で他学科のIさんが自分の学科で、友達ができて、だんだん、自分の学科の友達と一緒にいるようになった。Hさんは残った。資格は取っていた。皆、同じ方向。私とAさんは精神を取っていた。授業はすごく忙しかった。2年生になると、同じ資格は目指していても、自分の興味関心が出てきて、それで授業が重らないことが出てきた。
	学内	2年生はサークルの行事の幹事的な存在になった。私たちは1年生の初期からずっと入っているメンバーなので、行事があるたびに5人がしっかりしなければ意識ができたと思う。5人で相談することがすごく多くなった。充実していた。
	学外	学科の友人関係のプライベートはない。サークルは増えましたね。3人というより5人で遊ぶ方が増えたと思う。一人暮らしのAさんとEさんとの関係は続いていた。けど頻度は減った..あの・・私1年生の時に恋人ができて、2年生になって友達の時間が減った。

3年生	講義	一緒のことがあまりなかった。必修科目位。それからメンバーの一人(H)が休学して仲間から離れた。
	学内	サークルの方の友達でDさんが部長になって、立場が変わった。Dさんはサークルの運営に厳しい態度をとるようになって、近寄りがたい存在になった。友達としてもぎくしゃくすることが合った。Dさんの顔にも機嫌が顔に出るようになって・・付き合いが難しくなった。3対2(協とA)という形になった。形としては表面的には5人という形だったけど
	学外	学科の友達で遊んだことがないということが、みんなの話題になって、それで、3年生になる前に旅行に行った。AとBとFとGと計画して、Aさんが実習でいけなくて、Gさんが金銭面でいけなくて、3人とサークルの一人(D)を誘って行きました。

4年生	講義	週に1回会うか会わない。偶然に会う感じ
	学内	4年生になって、役職から外れて、元に戻ったとは思うけど、やはり3年の時のトラウマみたいな感じでまだ、戸惑いも残っていた。
	学外	学科のメンバーで1回皆で、5人で飲みに行った。Aと2人はご飯を食べに行ったりする回数は多いけど、1年生ほどのべっとりな関係ではない。お互い恋人もいたし、どのメンバーよりも2人の関係が多い。

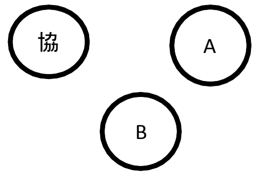
将来予測	学科の方は、何かしらの関わりが残りそう。学内にいる時から頻度が高くなかったけどそういうペースで続きそうな気がする。サークルの方は、Dさんが結構仕切っていて、Dさん次第だと思う。続くと思う。(Aとは就職の)分野も一緒で、勤務地は離れてしまいそう。分野の共通性があるので、相談はあるかと思う。

Aさんの選択理由	(Aと)一番一緒にいる時間が多かった。授業を合わせたわけではなかったけど、興味関心が似ていて、結果履修も一緒が多かった。考え方も似ていた。サークルも学科の友達も共通していたから、悩みも共有できた。恋人のこともお互い相談してきた。Aさんだけに話す内容もある。自分の内面というか、コンプレックスというか、理想とか何か似ている部分が多い。考え方が似ている。感じ方が似ているのかな・・Dさんとかも考え方は理解できるんだけど、表出の仕方が違うなということがある。

二者先行グループ関係変動型（Ⅵ型）の事例

調査日・一番（新OR旧）	NO32（2009年9月24日）・新
性	女性
居住	一人暮らし
友人と初めて会った場所	大学・・教室、1年生の授業
友人と初めて会った時期	1年、最初の段階
最初の出会い	皆で、初めての授業だったので、集団で話していたというか騒いでいた。
第1印象	普通に明るい子、ノリがいい。
現在の共通の友人関係	もう一人います。（B）

現在の友人関係図



1年生	講義	3人が仲良くなったのは結構遅い、2年生くらいなんです。1年生の時に皆、出会っていたけど、友人グループとしては皆、別だったんです。
	学内	
	学外	3人という組み合わせはない。大勢で遊んだことはあるけれど。AやBと個人的な関係はない。

2年生	講義	きっかけはAさんが一緒にいたグループで仲が悪くなって、その時にたまたま私という存在がいたということ。私のグループは6人グループ・・そのうち1人がいなくなり、他の2人とは合わないというか話すけど、それほど仲良くない。それで、私のグループもなんとなく分かれた感じになった。Aさんと同じ授業の時には一緒に取ったりしているうちに自然に、仲良くなった。これが2年生の前半。Bさんはもともと1年生の時に、個人的には仲が良かった。Bさんは1年生の時のグループが同じというわけではないけど・なんとなく近くにはいた。席に近くに座ることが元々多かった。
	学内	Aさんと私が一緒にいるようになって・・Bさんがあまり学校に来ない子。たまに来た時に、私たちが座っているところに遅れて座るようになってだんだんですね。3人になった感覚がある。
	学外	よく飲みに行くようになりましたね。私たち3人ということもあり、3人に誰かが加わることもある。個人的にAとかBとか2人で遊ぶこともある。1回後期あたりにBさんが離れた感じがする。Bは部活中心の子だった。

3年生	講義	Bさんと同じゼミ・Aは別。授業自体が減った。（授業が）重なっているのは前期は多かった。あわせるということはないけど、履修の相談はしていた。
	学内	
	学外	3年生以降になったら私の一人暮らしの家に（2人が）遊びに来ることもあった。だんだん多くなりました。2年生よりも多いですね。3人は不思議なんですが仲はよくて、旅行に行く時は絶対に3人なんだけど、（3人の関係は）べったりしてなくてフワフワした感じ。遊んだのもの1番多いは3年生か今が多い。

4年生	講義	
	学内	
	学外	Bさんと1回亀裂が入った・・プライベートなことでちょっと、旅行のこと、出発1週間前になっていけないと言いだしたり、それでも、授業が楽になって3年後期以降今までは、3人でかなり遊んでいる。月に1回くらいは飲みに行く。卒業旅行は行くと思います。そこは3人だと思います。

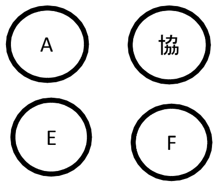
将来予測	全員の勤務地がバラバラ。札幌にいれるわけではない。会う頻度は減っていくと思う。私とAさんはつながっているかなと思います。Bさんは帰ってきて、みんなで飲もうという時には声をかけると思います。

Aさんの選択理由	今一番時間を共有している人を選びました。Aさんが話やすいからというのもあるし、Bはあまり相談に乗ってもらうタイプではないということもある。Aは面白い。ノリがいい。楽しい。自分よりはしっかりしているし、助けてもらった事もあるから。

二者先行中心グループ化関係変動型（Ⅶ型）の事例

調査日・一番(新OR旧)	NO101（2009年11月17日）・旧
性	女性
居住	自宅生
友人と初めて会った場所	宿泊オリエンテーション
友人と初めて会った時期	大学1年
最初の出会い	お互いで声をかけようと思っていた。私のほうから話かけたと思います。
第1印象	かわいい・・話が合いそうだと思った。
現在の共通の友人関係	もう2人(E/F)います

現在の友人関係図



1年生	講義	1年生の時に授業を一緒に受けていたのは、Aさんだけ、全部(の生活が)2人だった。
	学内	サークルにもAさんと入ってます
	学外	2人で遊ぶことがありました。Aさんは一人暮らしなので、その家に遊びに行ったりもあります。

2年生	講義	Eさんは2年生の後期レポートの時に仲良くなった。私は、資格を取っていなくて、AさんとFさんが資格を取っていた。それで3年生で私とE、AとFという関係がそれぞれできた。まだ4人の関係という感じではない。
	学内	
	学外	Aさんと2人はありました。頻度は、学外の趣味活動のメンバーとの付き合いが増えた時期だったので、Aさんとの付き合いは少し減った。学校の中ではずっと(Aとずっと)一緒。Eさんとプライベートはない。

3年生	講義	Eさんとは3年生の時にずっと2人で授業をうけていた。資格の関係で、私とEが一緒で、AとFが一緒の授業を受けるようになった。ゼミはEとAと一緒になった。
	学内	Aさんとの付き合いはお昼を食べるのは誘ったりしてた。それくらいしか会わなくなった
	学外	プライベートはなかった。

4年生	講義	卒論を一緒にやったりとか、4人でやっている。
	学内	
	学外	卒業が近くて、卒業旅行の話をしていく中で、もう最後の年だから遊ぼうという話になった。もともとAとFがつながりがあったから、だったら4人で遊ぼうという話になった。4年生になって増えたと思う。

将来予測	これからは、この関係が増えそうかなと思っています。同時期に社会人になるわけだし、なんか共有できるかなと思います。

Aさんの選択理由	Aとは、一番最初に仲良よくなったこと。ずっと一緒にいたことですね。 最初は友達ができなくて、私は人見知りで。Aさんとはずっと2人で、もっと大学の友達を作ろうと言うことで、Eさん、Fさんとも仲良くなれた。すごい大学が楽しくなった。